

アイデンティティの社会学

担当者：横山 寿世理

開講期：春学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

1.内容

自己アイデンティティ(=自我・自分とは何か)を理解するのに役立つ事例をドキュメンタリー番組や新聞記事、エッセイなどを確認しながら、どのような解説が可能かを考える。この解説として、社会学で扱われる種々の自我論を講義で紹介して、事例の考察を深めていく。

2.カリキュラム上の位置づけ

この科目は政治経済学科社会学系の専門科目であり、政治経済学科の学生がこの科目を履修するには、専門基礎科目の「社会学」を修得しておかなければならない(他学科の学生も、社会学を修得しておくことが望ましい)。

2.学びの意義と目標

この講義では、人びとがどんな自分になることを要求されてきたのか、その要求がどのように変化してきたのかを、さまざまなアイデンティティ論を通じて模索する。その上で、自分という人間の形成(変容)やアイデンティティの構造がどのように説明されてきたのかを社会的自我論を通して、現代社会や社会的事実を理解することを目標とする。

準備学習(予習)

講義中の板書を参照しながらノートを作成すること。

準備学習(復習)

ノートを見直し・作り直すという復習作業を絶えず行うことを勧める。

授業計画

1. アイデンティティとは何か
2. いろんなアイデンティティ
3. 現代若者を考える～友だち編～
4. 現代若者を考える～友だち編～
5. 交友関係とアイデンティティ(教科書第2章)
6. 交友関係とアイデンティティ(教科書第2章)
7. 現代若者を考える～教育編～
8. 現代若者を考える～教育編～
9. 多元的世界～社会を認識する方法～(プリント配布)
10. 多元的世界～社会を認識する方法～(プリント配布)
11. 現代若者を考える～メディア編～
12. 現代若者を考える～メディア編～(教科書第10章)
13. 役割と複数化するアイデンティティ(教科書第5章)
14. 役割と複数化するアイデンティティ(教科書第7章・16章)
15. 現代若者を考える～家族編～(第6章)
16. 現代若者を考える～ライフコース編～
17. 印象操作とアイデンティティ(教科書第10章)
18. 印象操作とアイデンティティ(教科書第10章)
19. 前半のまとめ
20. 中間試験
21. 中間試験返却と期末レポートの書き方
22. 現代若者を考える～労働編～(教科書第12～13章)
23. 現代若者を考える～労働編～(教科書第12～13章)
24. 消費社会とアイデンティティ
25. 消費社会とアイデンティティ
26. 流動化するアイデンティティ
27. 集合的記憶とアイデンティティ
28. 持続するアイデンティティ(プリント配布)
29. 持続するアイデンティティ(プリント配布)
30. まとめ

教科書

船津 衛 『自分とは何か 「自我の社会学」入門』(恒星社厚生閣)

評価方法

- (1)講義内課題:30%:講義に関するコメント。
- (2)中間試験:30%:授業計画1～18回までで扱った「理論」に関する試験
- (3)期末レポート:40%
期末レポートは、講義の内容を参考にして、アイデンティティに関して社会的な問いを立てて論じる(2000字程度)というものになる。

逸脱行為論

担当者：鮎田 実

開講期：秋学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1. 内容

本講義は、社会学の一分野をなす逸脱行為もしくは逸脱行動について、とりわけ犯罪を取り上げ、犯罪はどうして起こるのかという原因を探ることとする。具体的には、アメリカにおける犯罪学を中心に、社会解体理論から修復的司法や破れ窓理論まで扱う予定である。

2. 学びの意義と目標

本講義は、社会学の一分野であるが、それに留まらない。犯罪を扱うことでは法学と、また犯罪をどのように対処すべきかということでは政治や経済とも関連してくる。したがって、社会学の応用編である。

本講義の目的は、新聞・テレビ・インターネット等を通じて報道される犯罪について、学問的視野から分析・考察を可能にすることである。つまり、犯罪は、人が単に感情的に行うものではなく、その背景には様々な社会的問題があることを理解できるようになる。

準備学習(予習)

本講義を受講するにあたって、受講生は、まず項目ごとに教科書を事前に一読してもらいたい。とくに各学説の定義とされる部分は確認しておく。

準備学習(復習)

本講義後は、教科書の該当部分を再読し、授業時間のノートを元に整理しておく。とくに各学説のキーワードがあるので、それをしっかりと整理しておくことが大切である。

授業計画

1. 開講にあたって:年間の講義内容の概要・説明等
2. 犯罪学の基礎(1):隣接科学としての刑法学、刑事政策学、被害者学
3. 犯罪学の基礎(2):各種統計と暗数
4. 犯罪学の歴史(1):初期の古典的犯罪学
5. 犯罪学の歴史(2):19世紀の社会学的犯罪学・生物学的犯罪学
6. 犯罪学の歴史(3):20世紀の折衷的犯罪学・社会学的犯罪学
7. 文化地域を中心とする理論(1):社会解体理論、文化伝播理論
8. 文化地域を中心とする理論(2):異質の接触理論
9. 文化地域を中心とする理論(3):異質の同一化理論
10. 文化葛藤を中心とする理論(1):文化葛藤理論
11. 文化葛藤を中心とする理論(2):下層階級文化理論
12. 社会構造を中心とする理論(1):アノミー理論
13. 社会構造を中心とする理論(2):非行副次文化理論
14. 社会構造を中心とする理論(3):異質の機会理論
15. 社会統制を中心とする理論(1):非行漂流理論
16. 社会統制を中心とする理論(2):非行中和技術理論
17. 社会統制を中心とする理論(3):潜在的価値理論
18. 社会統制を中心とする理論(4):自己観念理論
19. 社会的相互作用を中心とする理論(1):ラベリング理論の基礎
20. 社会的相互作用を中心とする理論(2):ラベリング理論の系譜
21. 社会的実体を中心とする理論(1):新犯罪学理論
22. 社会的実体を中心とする理論(2):批判的犯罪学
23. 社会的実体を中心とする理論(3):急進的犯罪学
24. 社会的絆を中心とする理論(1):社会的紐帯理論の基礎
25. 社会的絆を中心とする理論(2):社会的紐帯理論の実証的妥当性
26. 被害者を中心とする理論(1):合理的選択理論、日常活動理論
27. 被害者を中心とする理論(2):修復的司法
28. 被害者を中心とする理論(3):破れ窓理論
29. 犯罪学の実証的検討としての少年非行(1):我が国における少年非行の特徴
30. 犯罪学の実証的検討としての少年非行(2):我が国の非行少年に対する保護手続

教科書

藤本哲也 『犯罪学原論』(日本加除出版)

評価方法

(1)筆記試験:100%
成績評価の補助的資料として、2000字程度の感想文の提出を認める。B評価以上のレポートを提出した者には、素点10点を加算して成績を評価する。なお、感想文の課題図書は開講時に教示する。

異文化間コミュニケーション（経営）

担当者：T. アサモア

開講期：春学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1. 内容

国の国際化は、社会、組織、企業、人の中でより多くの相互依存につながった。国際化を実行するに当たって、文化的環境の理解が不可欠である。文化的環境とは、政治的環境、経済的環境、国際金融の潮流、あるいは企業の政策や戦略の理解などのことである。このことを理解することが、この授業の重要な目的のひとつである。従来の異文化間コミュニケーション学習では、文化的変数とコミュニケーション機能の重要性を通り一遍に説くものであった。この授業は、文化やコミュニケーション機能の専門領域に深く踏み込むものではなく、包括的に異文化間コミュニケーションとビジネスの関係に焦点を当てている。この授業は、国際的な企業や組織に興味がある学生だけでなく、これから社会にでる多くの学生に対して有意義なものである。なぜなら、ますます相互依存が強まる世界では、国内ビジネスマンと国際ビジネスマンの区別がなくなっているからである。

2. 学びの意義と目標

インターネットの普及により、距離を意識せずに外国に住む家族や友人とのコミュニケーションが24時間可能となった。実際に外国を訪れることも、一生に一度の出来事ではなく仕事や休暇のために頻繁に起こりうる出来事となりつつある。しかし、異文化との接触機会が増えることが、自動的に異文化理解を深めることに繋がると考えるのはあまりに短絡的である。異文化を理解し、それとうまく付き合うためには、異文化コミュニケーション、異文化コミュニケーション能力に関する知識とスキルの習得が不可欠である。授業では、異文化間コミュニケーションの基本的な考え方について、理論的、実践的に学習し、異文化間のスキルを高めることを目的とする。

準備学習(予習)

(1)経営についての基本的な知識。(2)コミュニケーション論の履修又は、関連する文献を読む。(3)企業経営についての授業の履修又は、関連する本を読む。

準備学習(復習)

授業後の課題の提出。

授業計画

1. 異文化間コミュニケーションの背景
2. 異文化コミュニケーションの範囲
3. 異文化間コミュニケーションの課題
4. ケース 1
5. 現代社会と異文化間コミュニケーション
6. 異文化間コミュニケーションの主要理論
7. コミュニケーションの仕組みと働き
8. コミュニケーションスタイル
9. ケース 2
10. 異文化間コミュニケーションとしての言語活動
11. 異文化間コミュニケーションとしての非言語活動
12. 文化価値の比較
13. 文化と国際ビジネス
14. ケース 3
15. 国境を越えて流れるヒト
16. 国境を越えて流れるモノ
17. 国境を越えて流れるカネ
18. 国境を越えて流れる情報
19. ケース 4
20. 経済的・文化的「従属」・「依存」
21. 経営的・文化的「従属」・「依存」
22. 政治的・文化的「従属」・「依存」
23. ケース 5
24. 国際コミュニケーション戦略
25. 国際広報
26. 国際広告
27. ケース 6
28. ニュースの国際流通
29. インターネットの異文化間コミュニケーション
30. ケース 7

教科書

授業の中で指示する

評価方法

(1)授業中の課題:40% (2)レポート:20% (3)期末試験:40%

インターンシップ (事前学習)

担当者：酒井 俊行

開講期：春学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週1回 単位数：2単位

講義概要

1.内容

この講義では、基本的にインターンシップ実習に出るための事前準備を行います。しかしながら3年生のこの時期、わずか4ヶ月の座学で、全ての準備が可能になるなどとは思わないで下さい。ここでは皆さん1人1人のこれまでの集大成がまず問われます。

例えばビジネスマナーやビジネス上の言葉づかいなどを考えてみましょう。社会人としてのマナーや言葉遣いは、決して大学で学ぶものではないはずです。これまで皆さんが生活して来た過程、即ち学校生活、家庭生活、社会生活の中で自然に身に付いているものでなければなりません。

いずれにしても、20年分の学習をたった4ヶ月間で修得することなど、端から無理な相談です。無理な話を先刻承知のうえで開講するのがこの講義ということです。その大変さを予めよく理解して受講するよう心掛けて欲しいと思います。

2.学びの意義と目標

この講義の最終目標は、皆さんをインターンシップ実習に出せるか出せないかの見極めと、社会人として活躍するために足りない能力の自覚を促すことです。

したがって本講義において単位を無事取得出来た場合には、一応社会人としてのスタートラインに着くことが認められると理解して下さい。ただ言うまでもなく、ここで単位を取ったからと言ってこれで免許皆伝ということにはなりません。社会に出しても大丈夫であるとの最低限の見極めが出来たということにすぎないわけです。

インターンシップは飽くまでも教育の一環です。完璧なパフォーマンスはそもそもインターンシップに出る必要などないわけです。企業やお役所での実習を通じてしっかり鍛えてもらうことこそが、その目的です。そうした意味で、本講義はそのための助走路を提供するというにすぎません。

準備学習(予習)

格別の準備は必要ありません。ただこれまでの学生生活において何をしてきたかは、折に触れて整理しておいて下さい。また就活を意識すれば、長髪や茶髪などはそろそろ卒業した方がよいと思います。

準備学習(復習)

この授業で学んだことはインターンシップ実習に出た時に、有形無形に有効です。その都度、しっかりノートを取り、学んだことをしっかり自分のものにして下さい。

授業計画

1. オリエンテーション
2. 最近の就活の仕組み
3. 大学生での学びを活かす
4. 自分を分析してみよう
5. S P Iは大丈夫ですか？
6. 自己分析と将来設計：作業
7. 簡単なビジネスマナー(1)
8. 簡単なビジネスマナー(2)
9. 簡単なビジネスマナー(3)
10. ビジネス言語入門～語感トレーニングを中心に(1)
11. ビジネス言語入門～語感トレーニングを中心に(2)
12. ビジネス言語入門～語感トレーニングを中心に(3)
13. 大学生から社会人へ
14. 大学生と就活
15. まとめ：インターンシップを楽しもう！

教科書

塚谷正彦 『大学生の生き方・考え方』(実教出版)

評価方法

- (1)レポート:60%:3～4回レポートを提出
- (2)授業への貢献:40%:社会に出るための積極性を評価

インターンシップ (事前学習)

担当者：藤井 重隆

開講期：春学期/秋学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週1回 単位数：2単位

講義概要

1.内容

1.内容

インターンシップとは、在学中に就業体験を行うこと。企業などの組織に自分を置き、その組織がかかげる理念や目標に向かって日々の様な活動をしているかを実感することを目的としている。この機会を通じて、自ら社会が求める人材像を理解し、より良いキャリア選択を目指す姿勢を知ることが望ましい。就職活動にも役立つよう「模擬企画プロジェクト」のグループワークや、ビジネスマナーを理解する講座も設けている。

2.カリキュラム上の位置づけ

夏休み・春休みなどに、民間企業、自治体、特定非営利活動法人(NPO)などでインターンシップとして働くことを希望する学生を対象とする。すなわち、インターンシップII(実習)受講のために必要な講義である。

2.学びの意義と目標

就職に際して職場をイメージできることや仕事観を持っていること、また就業体験を通じて自己の気づきへの機会を持ち自己紹介や志望動機を述べられることは有利である。経済のグローバル化やICTの発展により産業構造は近年大きく変わっている。また雇用情勢や働き方も変化している。職場の一員として働いてみて「就業力」を理解し、これを育成していくことの大切さを理解すること。

準備学習(予習)

講義のポイントを講義中に理解するよう努めること。

準備学習(復習)

講義中に理解できなかったことや、納得できなかった点などあれば質問して解決すること。復習により理解を定着させていくこと。

授業計画

- 1.プログラム紹介 : 就活の前段階としてのインターンシップ
- 2.インターンシップの目的とその効果/「就業力」育成に向けて
- 3.「就業力」や「社会人基礎力」が必要とされるバックグラウンド
- 4.自ら「就業力」を高め、それを実感できること
- 5.社会に出て働く時、知っておくべきこと、心得ておくべきこと
- 6.ビジネスマナー演習(1)対面の場合
- 7.ビジネスマナー演習(2)文書の場合
- 8.ビジネスの現場におけるICT
- 9.模擬企画プロジェクト(1)
- 10.企業の「理念」、ビジネス・モラル、「信用」の大切さ
- 11.模擬企画プロジェクト(2)
- 12.実業家による講演
- 13.インターンシップに向けての心構え(4年生の体験談)
- 14.インターンシップに向けての心構え(事前学習のまとめ)
- 15.提出レポートへのコメントと講師からのフィードバック

教科書

授業の中で指示する

評価方法

(1)出席点:50% (2)レポート点:40% (3)受講態度:10%
社会人並みの自己管理を求める。15回で完結する内容を組んでいるため、全講座出席のこと。遅刻3回で一回欠席扱いとする。

インターンシップ (実習)

担当者：酒井 俊行, 藤井 重隆

開講期：秋学期集中 必修・選択：選択科目 授業回数：週1回 単位数：2単位

講義概要

1.内容

本講義は民間企業、自治体等において正味10日の実務実習を行うプログラムです。この講義を選択する場合は、インターンシップ（事前学習）の単位取得が前提となります。

2.学びの意義と目標

インターンシップ実習を受けた結果として、就活に際しての業界・企業を選択の判断力が養われます。

準備学習(予習)

インターンシップ（事前学習）を受講して単位を取得することが必須条件です。

準備学習(復習)

実習終了後に学んだことをよく反芻し、就活本番での業界・企業選択に役立てるようにして下さい。

授業計画

- 1.各自インターンシップ先での実習・・・実習先での所定の書式での実習ノート作成
- 2.各自インターンシップ先での実習・・・実習先での所定の書式での実習ノート作成
- 3.各自インターンシップ先での実習・・・実習先での所定の書式での実習ノート作成
- 4.各自インターンシップ先での実習・・・実習先での所定の書式での実習ノート作成
- 5.各自インターンシップ先での実習・・・実習先での所定の書式での実習ノート作成
- 6./各自インターンシップ先での実習・・・実習先での所定の書式での実習ノート作成
- 7.各自インターンシップ先での実習・・・実習先での所定の書式での実習ノート作成
- 8.各自インターンシップ先での実習・・・実習先での所定の書式での実習ノート作成
- 9.各自インターンシップ先での実習・・・実習先での所定の書式での実習ノート作成
- 10.各自インターンシップ先での実習・・・実習先での所定の書式での実習ノート作成
- 11.各自インターンシップ先での実習・・・実習先での所定の書式での実習ノート作成
- 12.各自インターンシップ先での実習・・・実習先での所定の書式での実習ノート作成
- 13.実習のまとめレポート作成
- 14.実習のまとめレポート作成
- 15.実習に関するレポート作成

教科書

授業の中で指示する

評価方法

(1)実習報告:100%:日報と実習のまとめ報告で評価

オペレーションズ・マネジメント

担当者：柴田 武男

開講期：秋学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1. 内容

生産現場などの現業現場のマネジメント及び、生産性改善の手法を、理論面と実践面から講義する。理論においては、業種による手法の相違を学び、実践面においては経済グローバル化の中で顕在化する国内外におけるマネジメントや手法の相違、さらには国境を超えた手法の移転の実践を学ぶ。その目的に適用される科学的手法については、数学的な講義は省き、理論の概念的な説明にとどめる。

講義は、4名の実業界出身の講師による、オムニバス方式を採用。第1回から7回までは、化学産業に勤務した講師が、その実務経験を踏まえて講義する。第8回から15回までは、電子・機械産業に勤務した講師が、グローバルオペレーションに伴う技術移転を主題とする生産管理について講義する。第16回から22回までは、食品産業に勤務した講師が、その実務経験を踏まえて講義する。23回から30回までは、情報産業に勤務した講師が、その実務経験を踏まえて講義する。

2. 学びの意義と目標

現業の現場を如何に管理するか、また現場操業の効率化と生産力アップを如何に達成するかを実践的に学ぶ。講師の勤務した各産業界の違いは何か、そして共通するものは何かを探求して欲しい。またグローバル化の中で欠かせない海外での操業においては、果たして国内での手法が適用可能なのか。どのような点に留意すべきかなど、製造等現業拠点の海外移転に求められる基礎的な知識や情報を身に付けて欲しい。

準備学習(予習)

次回講義テーマに関する関心事項を一つでもあらかじめ調べて、講義に臨むこと。

準備学習(復習)

講義内容をレビューして、不明な点、疑問点などを次回の講義で質問する。また特に関心ある事項があれば、講義内容の枠を超えた領域をも含めて知識や情報を掘り下げて欲しい。

授業計画

1. 日本経済が置かれた現状の理解と対処の方法 講師：宇高昇
2. 企業戦略とオペレーションズマネジメント 講師：宇高昇
3. マーケティング（プロダクト・アウト、マーケット・イン他） 講師：宇高昇
4. 品質管理（日本企業と欧米企業の品質管理他） 講師：宇高昇
5. 設備投資と設備保全（最高の効率の上げ方他） 講師：宇高昇
6. 損益管理（損益分岐点演習他） 講師：宇高昇
7. グローバルに活躍するには（異文化共棲でのマネジメント） 講師：宇高昇
8. グローバルオペレーションズと技術移転各論1（グローバルオペレーションズとは） 講師：肥後照雄
9. グローバルオペレーションズと技術移転各論2（技術移転とは） 講師：肥後照雄
10. グローバルオペレーションズと技術移転各論3（南米での技術移転・アルゼンチン） 講師：肥後照雄
11. グローバルオペレーションズと技術移転各論4（アフリカでの技術移転・ガーナ） 講師：肥後照雄
12. グローバルオペレーションズと技術移転各論5（東欧・中欧での技術移転・モルドバほか） 講師：肥後照雄
13. グローバルオペレーションズと技術移転各論6（アジアでの技術移転・ベトナムほか） 講師：肥後照雄
14. グローバルオペレーションズと技術移転各論7（海外への技術の伝え方、まとめなど） 講師：肥後照雄
15. グローバルオペレーションズと技術移転各論7（ゲストスピーカー・現役国際ビジネスマンによる発表・討論など） 講師：肥後照雄
16. オペレーションズマネジメントとマネジメントシステム＝食品産業の現場での取組みを中心にした講義 講師：本多靖明
17. 食品産業での製品設計・開発と生産準備 講師：本多靖明
18. 製品の製造と生産管理 講師：本多靖明
19. 生産管理に関連した各部門及び顧客（消費者）対応 講師：本多靖明
20. 外国でのオペレーション（準備段階） 講師：本多靖明
21. 外国でのオペレーション（具体的業務） 講師：本多靖明
22. 食品産業の経営面から見た生産管理と、再びオペレーションズマネジメントとは 講師：本多靖明
23. 情報産業関連企業の現場経験による実践的観点より、オペレーション・マネジメントの目的、歴史等を講義する。 講師：田中啓二
24. オペレーション・マネジメントの要素と管理項目 講師：田中啓二
25. いろいろな製品と管理システム 講師：田中啓二
26. 具体的なマネジメントシステム（トヨタ生産方式を例として） 講師：田中啓二
27. マネジメントに必要な管理データとは 講師：田中啓二
28. 企業のグローバル化とマネジメント 講師：田中啓二
29. 新しいオペレーションズマネジメント（SCMなど） 講師：田中啓二
30. これからのオペレーションズマネジメント 講師：田中啓二

教科書

プリントを配布する

評価方法

- (1)出席日数による加点減点:10%
- (2)課題レポート提出:90%:4人の講師がレポート課題を提示する出席日数がコマ数の2/3未満は評価対象外

会計学

担当者：成川 正晃

開講期：秋学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

会計情報は、受託責任を明らかにしたり、意思決定に役立つ情報を提供したり、様々な利害関係者の利害を調整するのに用いられます。このような会計情報の作成原理や、利用方法を学ぶのが会計学です。講義では、なるべく具体的な例を用い、絶えず現実の経済事象を意識できるように工夫して進めていきます。

2.学びの意義と目標

会計学では、会計情報の作成原理を理解するとともに、その利用方法を学習していきます。したがって、会計学の一端を学習することで、企業人としての基礎を身に付けたことになります。具体的には、企業の各種財務資料の作成から、分析方法まで学習していきます。このことにより、「企業を見る目を養う」というのが会計学を学ぶ目標となります。

準備学習(予習)

授業計画を参照し、テキストの該当箇所を読み、疑問点等をまとめておくこと。

準備学習(復習)

授業内の課題を復習し、各項目について次回までに説明できるようにしておくこと。

授業計画

1. オリエンテーション/授業の狙い・到達目標/会計情報の役割を理解する
2. 会計情報の果たす役割に影響を与える(法)制度を理解する
3. 企業の財政状態を示す「貸借対照表」を理解する
4. 企業利益の測定と貸借対照表の関係を理解する
5. 企業の経営成績を示す「損益計算書」を理解する
6. 企業のタイプにより貸借対照表の構造が大きく異なることを理解する
7. 商品とは/製品とは/企業の在庫とは
8. 棚卸資産の評価/回転率
9. 有形固定資産とは/減価償却とは
10. 減価償却方法とは/減損処理とは
11. 金融資産の種類/現金とは/預金とは
12. 売上債権とは/売上債権の評価額とは
13. 有価証券の種類/有価証券の評価額とは/保有目的による違いは
14. 負債とは/資本とは
15. まとめ
16. 財務諸表の概要を理解する
17. 損益計算書の構造を理解する
18. 収益認識の基本原則を理解する
19. 営業活動の成果を把握する
20. 会計情報の比較/趨勢分析とは
21. 収益性の分析とは/ROEとは
22. ROEの3分解
23. 個別具体的企業にみるROEの3分解
24. 安全性の分析/流動比率とは
25. 個別具体的企業にみる安全性の分析
26. 企業の利益構造とは/損益分岐点とは
27. 損益分岐図表の2つのタイプとは
28. 外部分析としての損益分岐図表の応用
29. 経営管理のための会計情報の役割
30. まとめ

教科書

谷 武幸, 桜井 久勝 『1からの会計』(碩学舎)

評価方法

(1)試験:60% (2)課題:40%

環境学

担当者：村上 公久

開講期：春学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

君たちが生まれた頃から現在まで、つまり君たちの平均年齢に相当する約20年間の間に私たちの地球の生命圏の環境は、急速に悪化し、この間日本列島の約6倍の面積の熱帯の森林が失われ、中国の耕地面積に相当する陸地が砂漠化した。

今日、世界的規模での最大の問題は、環境の急激な悪化による生命圏(生態圏)の全的壊滅の危険、すなわち地球環境問題である。この科目では「ヒトと環境」が相互に影響し呼応し合うシステム〔人間-環境〕系を理解し、「ヒトと森林の関係」を例にとって考える。かつては環境問題の問題意識の中心は産業公害だったが、現在ではこの問題は国境を突破した生命圏全体の存続を懸けた「地球環境問題」として捉えられており、いわゆる公害問題はその一部として意識されている。

2.学びの意義と目標

専門科目「環境保全論」履修の準備となる科目でもあるので学びを進めて「環境保全論」を履修する予定の者は予めこの科目を学んでおくことが望ましい。

NGOの果たす大きな役割を含め、私たちと生き物たちのこの世界を全体的な壊滅から救うほとんど唯一の戦略「保続的開発」の可能性を探る。

準備学習(予習)

岩波ジュニア新書の中で環境をテーマとしている、「地球をこわさない生き方の本」「世界の環境都市に行く」などを読んでおくこと。

準備学習(復習)

各回の講義内容について、関係する情報・資料を探して参考にし、講義を受けて自分で考えたことを含めて講義記録のノートに記録する。

授業計画

- 1.地球環境問題(1) - 自然破壊の実態 砂漠化
- 2.地球環境問題(2) - 自然破壊の実態 森林破壊
- 3.地球環境問題(3) - 地球温暖化問題
- 4.自然の中の人間 - 「自然の支配」か「自然と共存」か
- 5.自然と環境
- 6.〔人間-環境〕系(1)
- 7.〔人間-環境〕系(2)
- 8.「自然」が「環境」に変わるとき - 主体(ヒト)が帯びている生命圏への責任
- 9.ガイアGaia仮説 - 地球も宇宙も生きている
- 10.さまざまな自然観と風土(1) - 温度・降水量と植生区
- 11.さまざまな自然観と風土(2) - 世界各地の自然と「風土」
- 12.わが国の自然、風土の特徴
- 13.水文循環
- 14.エコロジーに関する概念 生命圏(生態圏)の理解
- 15.「命」とは - エントロピーの概念
- 16.人口問題(1) - 人口増加と環境容量
- 17.人口問題(2) - 人口増加と、環境・天然資源
- 18.森と人間(1)
- 19.森と人間(2) - 森と人と文化、森林の科学、木の文化の復権
- 20.「破壊」と「保護」の対立から「保全」へ - 第三の立場「環境保全」
- 21.環境関連法と制度 - わが国の「環境基本法」と「環境基本計画」
- 22.地球環境問題の課題『アジェンダ21』の検討
- 23.新しい課題「保続(持続)可能な開発」(1)
- 24.新しい課題「保続(持続)可能な開発」(2)
- 25.NGOの役割 - 「お団子」が、未来を担う(お団子=ODA+NGO)
- 26.環境NGOの事例(1)
- 27.環境NGOの事例(2)
- 28.「宇宙船地球号」から「地球村」へ Spaceship Earth Global Village
- 29.〔人間-環境〕系を保つための課題
- 30.まとめ

教科書

授業の中で指示する

評価方法

(1)出席:40% (2)2回以上の試験と期末試験:60%
欠席回数が講義回数の3分の1を超える者には、単位を認定しない。

環境保全論

担当者：村上 公久

開講期：秋学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

私たちの世界の滅亡を人の死に例えて「核戦争による滅亡を心臓発作による死、環境破壊による滅亡をガンの進行による死」とすれば、今日全面核戦争の脅威は軽減されつつあるが、自然・環境破壊は急速に進行中である。心臓発作の急死の危険はやや遠のいたが、ガンが進行し体のあちこちに転移して拡大していることがはっきりしてきた。

現在、国際機構、各国、自治体、地域の環境問題における最大の政策課題は、「経済成長か、環境か」のディレンマをめぐる合意形成とその妥当性の検討である。この科目では、まず環境史を学び、次に産業革命以後の環境問題を省みた上で、保続可能な(持続可能な)開発(Sustainable Development)を考える。

2.学びの意義と目標

教養・総合科目「環境学」の内容を基礎として展開する内容を扱う専門科目。

この科目は総合科目「環境学」、基礎科目「聖書の中の環境問題」の講義内容と関連したテーマをさらにより深く扱っているため、準備としてこれらの科目を予め履修しておくことが望ましい。

準備学習(予習)

講義の各回については、事前に配布する講義資料をよく学び考えておくこと。

この科目は総合科目「環境学」、基礎科目「聖書の中の環境問題」の講義内容と関連したテーマをさらにより深く扱っているため、準備としてこれらの科目を予め履修しておくことが望ましい。「環境学」「聖書の中の環境問題」履修済みの者は、よく復習しておくこと。

準備学習(復習)

各回の講義内容について、関係する情報・資料を探して参考にし、講義を受けて自分で考えたことを含めて講義記録のノートに記録する。

授業計画

- 1.体系的認識の重要性(「何故 大学で学ぶのか」)
- 2.自然と環境
- 3.エコロジーの重要ないくつかの概念(1)
- 4.エコロジーの重要ないくつかの概念(2)
- 5.自然観の変遷(1)
- 6.自然観の変遷(2)
- 7.「3つの文化型」man-in-natureの文化(1)
- 8.「3つの文化型」man-in-natureの文化(2)
- 9.〔人間-環境〕系(1)
- 10.〔人間-環境〕系(2)
- 11.21世紀の環境問題 生命圏の全的壊滅の危機「突然」はあるか
- 12.環境史(1)
- 13.環境史(2)
- 14.環境問題の歴史
- 15.自然保護運動の歴史
- 16.無思慮な悲観論とセンチメンタリズムの危険
- 17.個体群生態学と環境容量
- 18.「地球温暖化問題」(1)
- 19.「地球温暖化問題」(2)
- 20.「地球温暖化問題」(3)
- 21.自然保護と環境保全 「自然破壊」と「自然保護」の対立、第三の立場「環境保全」
- 22.保続的(持続的)社会 Sustainable Societyを考える
- 23.再生産可能な資源と枯渇性資源(1)
- 24.再生産可能な資源と枯渇性資源(2)
- 25.保続的(持続的)発展Sustainable Development(1)
- 26.保続的(持続的)発展Sustainable Development(2)
- 27.保続する〔人間-環境〕系をめざして
- 28.全球化globalizationの中の環境問題
- 29.「我々の家」としての地球
- 30.まとめ

教科書

授業の中で指示する

評価方法

(1)出席:40% (2)2回以上の試験と期末試験:60%
欠席回数が講義回数の3分の1を超える者には、単位を認定しない。
資料の探索と資料の理解、プレゼンテーション等のための加工、複数の個人・チームによるプレゼンテーション、討論、ゼミ参加態度、ゼミへの熱意と貢献等を総合的に評価する。

企業経済論 B

担当者：柴田 武男

開講期：秋学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週1回 単位数：2単位

講義概要

1.内容

企業経済論は、企業活動をその資金調達、資金運用を中心に論ずるものであるが、現在の企業を取り巻く経営環境は資金の調達・運用にとどまらず、法制度でも中小企業金融円滑法など企業と金融機関を巡る社会環境は大きく変容している。

企業経済論ではこの問題の解明に必要な基本的知識を解説したい。とはいえ、理論的・歴史的説明に終始するのではなく、できるだけ現在生じている経済現象から企業経済の本質を講義する。同時に、幅広く企業経営そのものの問題を考察していく。ビデオ教材および経済雑誌等を活用して、初学者にも理解しやすい講義を心がけるが、かなり専門的な内容になるので補助教材等の配布で理解を助けたい。

2.学びの意義と目標

本講義を履修することによって現代企業をとりまく課題を幅広く理解でき、それはそのまま就職活動等での活かした知識として活用できる。さらに、就職策企業を選択する上での知的ツールとなりうる。

準備学習(予習)

一般的に、新聞・経済誌・またテレビの経済情報番組から提供される最新ニュースは把握すること。

講義中に配布する講義資料は事前に必ず読んでくること

準備学習(復習)

講義中に課題を出し、翌週の講義で回収する。

授業計画

- 1.現在の企業組織
- 2.企業の資金調達・・・株式
- 3.企業の資金調達・・・社債
- 4.信用情報と格付け
- 5.金融検査マニュアルの役割と課題
- 6.企業金融を巡る統計データ(1)経済白書
- 7.企業金融を巡る統計データ(2)中小企業白書
- 8.企業金融を巡る統計データ(3)ジェトロ世界貿易投資報告
- 9.企業経営とコンプライアンス問題
- 10.企業経営における労働問題・・・人材派遣法
- 11.日本企業と海外企業(1)日本企業の対外進出
- 12.日本企業と海外企業(2)外国企業の参入
- 13.日本企業と女性労働
- 14.現代の企業経営の課題(1)
- 15.現代の企業経営の課題(2)

教科書

プリントを配布する

資料は PDF ファイル形式でストレージに保存するので、各自インターネット環境を整備してダウンロードすること。

評価方法

(1)出席点:30% (2)講義中レポート:30% (3)定期末試験:40%

キャリアデザインA

担当者：萬年山 啓

開講期：春学期 必修・選択：必修科目 授業回数：週1回 単位数：1単位

講義概要

1.内容

この科目では、学生が、自分の生き方、働き方、学び方を設計できるようになることを目的として、自分自身のキャリアをデザインする際に必要となる考え方と思考方法について学びます。

この科目で扱う自己の興味関心や適性に対する理解、日本の社会構造や職業に対する理解、社会が求める能力や技能に対する理解などのテーマは、大学卒業後に社会で活躍するために必要とされている基礎的な事柄です。

2.学びの意義と目標

この科目で学ぶことは、学生が自分の将来を見据えて大学生活を有意義に過ごすための起点となり、大学（教育）から職場（社会）への円滑なキャリアチェンジを実現するための基点にもなります。

この科目は、「キャリア」を経歴や職業だけでなく、個人の家庭生活や社会生活なども含む人間の生き方を表現する「ライフキャリア」と捉えて、そうしたキャリアを「デザイン」するという未来志向であることを特長とします。

多くの学生が大学を最終学歴として社会へ移行することを前提に、社会への移行をスムーズに行うことができるように、大学時代に教養科目・専門科目で得た知識を活用し、社会で活躍するために必要な考え方や技法・能力を身につけていきます。

授業では、個人ワークやグループワーク・発表をふんだんに採り入れ、学生が主体的に行動する形態で実施します。個人ワークでは、与えられた課題について集中して取り組む訓練を積み上げることで、論理的に結論を導く方法を学んでいきます。グループワークでは、普段あまり接しない人との交流を通じて、コミュニケーションのとり方を学びます。

準備学習(予習)

授業計画を参照して、それぞれのテーマに関し、用語の意味や概要を理解しておくこと

準備学習(復習)

配布され、授業で記述したプリントを再読し、授業の理解度を再確認するだけでなく、その後の大学生活に活用すること

授業計画

- 1.はじめに（授業の目的や進め方、履修上の注意点、アイスブレイキング）
- 2.キャリアを知る（キャリアの捉え方と基本的な知識を理解する）
- 3.自分を知る（1） 性格分析（アセスメントツールを用いて、自分を客観的に見つめる）
- 4.自分を知る（2） 自己分析（これまでの経験や体験を分析して、自分のことを理解する）
- 5.自分を知る（3） 能力分析（社会が求める人材像・能力像を理解し、具体的な習得方法を考える）
- 6.自分を知る（4） 適応分析（社会で活躍するための条件を考え、キャリア挫折をなくす方策を考える）
- 7.社会と職業を知る（1） 社会を知る（社会や企業の仕組みを理解し、果たすべき役割を考える）
- 8.社会と職業を知る（2） 産業を知る（1）（日本の産業構造の変化を理解し、将来動向を予測する）
- 9.社会と職業を知る（3） 産業を知る（2）（現在の日本の産業構造や雇用構造を理解する）
- 10.社会と職業を知る（4） 職業を知る（業種や職種などを理解し、自己の興味関心を考える）
- 11.社会と職業を知る（5） 雇用を知る（多様な働き方や社会保障・雇用関係法を理解する）
- 12.社会人基礎力を高める（1） コミュニケーション力など
- 13.社会人基礎力を高める（2） 意思決定力など
- 14.社会人基礎力を高める（3） プレゼンテーション力など
- 15.自己のキャリアデザインを考える（大学におけるキャリア形成を考える）

教科書

プリントを配布する
毎回、プリントを配布します。課題レポートも、それを基礎にして作成します。

評価方法

(1)出席:50% (2)授業への取組:25%:個人ワークとグループワーク
(3)課題レポート:25%
この授業では、学生間・教員と学生のコミュニケーションを重視します。キャリア形成の観点から、授業中の私語や受講態度などには厳しく対応します。理由のない遅刻や欠席は認めません。

キャリアデザインB

担当者：萬年山 啓

開講期：秋学期 必修・選択：必修科目 授業回数：週1回 単位数：1単位

講義概要

1.内容

後期に配賦されるこの科目は、前期で学んだ自己理解・職業理解・ビジネスシーンに必要な基礎的能力などの理解を踏まえながら、内容を一步深めていきます。さらに、大学（教育）から職場（社会）へのキャリアアチェンジに向けた準備活動というキャリア教育の観点も加味し、より実践的な内容を学んでいきます。社会で行われていることと大学で学んでいることを関連づけて考えるための方策を示し、社会を視る目を養成します。

2.学びの意義と目標

この科目では、社会的活動が協働の場であることを理解し、学生がこれまで体験してきた競争の場とは異なる考え方や能力が求められることを意識します。21世紀の「知識基盤社会」において働くとはどういう意義を持ち、どのような人間的資質が求められており、評価されるのかを理解していくのが主眼です。

この科目では、日々活動している社会の中で自分を位置付けること、業種・企業・職種を自分の適性や興味・関心と結びつけて理解すること、社会にでてから活動するために必要な能力を具体的にイメージすること、社会や組織で協働することの重要性を理解することなどを目標にしています。

この授業でも、個人ワークやグループワークを採り入れます。他人が発する情報をどのように受けとめ、理解するか、さらにそれをどのように伝えていくかを意識しながら、授業を進めます。授業中での行動を通じて、学生の「ジェネリックスキル」を育成していきます。この授業に主体的に参加する学生が、自分の「キャリアデザイン」を自分自身の言葉で語り、構築ができるようになることを目指します。

準備学習(予習)

授業計画を参照して、それぞれのテーマに関し、用語の意味や概要を理解しておくこと

準備学習(復習)

配布され、授業で記述したプリントを再読し、授業の理解度を再確認するだけでなく、その後の大学生活に活用すること

授業計画

- 働く意味について考える（仕事や働き方を選ぶ基準について理解する）
- なりたい自分を創る（自分が大切にしていることが何かを把握する）
- 学生と社会人の違いを認識する（大学で求められることと社会が必要としていることを理解する）
- 業種と企業について理解する（1） 人に対するサービスを中心に
- 業種と企業について理解する（2） 事物に対するサービスを中心に
- 職種について理解する（1） 自分の生活との関わりから職種を理解する
- 職種について理解する（2） 職業の意味と多様性について理解する
- 社会に出てから必要な力を養う（1） 読んで理解する力
- 社会に出てから必要な力を養う（2） 聴いて理解する力
- 社会に出てから必要な力を養う（3） 話して自分を伝える力
- 社会に出てから必要な力を養う（4） 書いて自分を伝える力
- ゲスト・スピーチから学ぶ（キャリア・コンサルタントによる講演）
- 協働するために必要な能力を養う（1） 言葉だけの意思疎通
- 協働するために必要な能力を養う（2） コミュニケーション力
- 協働するために必要な能力を養う（3） 論理的思考と表現

教科書

プリントを配布する
毎回、プリントを配布します。課題レポートも、それを基礎にして作成します。

評価方法

(1)出席:50% (2)授業への取組:25%:個人ワークとグループワーク
(3)課題レポート:25%
この授業では、学生間・教員と学生のコミュニケーションを重視します。キャリア形成の観点から、授業中の私語や受講態度などには厳しく対応します。理由のない遅刻や欠席は認めません。

行政学

担当者：鈴木 潔

開講期：秋学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

本講義では、これまでの行政学の蓄積を利用し、現代日本における行政の仕組みと行政の理論を中心に説明する。

本講義は、政治学、憲法（統治）、政治過程論、地方自治論、公共政策論などを学習するうえで重要なポイントとなる行政の仕組みに関する知識を提供している。

2.学びの意義と目標

行政の活動が複雑・多様化するのに伴って、市民が行政を的確に評価し、コントロールすることが一層重要になってきている。

本講義では、受講者が(1)行政の主要な仕組みを理解できるようになること、(2)抽象的な行政の理論を用いて具体的な行政の活動を説明できるようになること、(3)行政を評価し、コントロールするために必要な事柄について考察できるようになることを目標とする。

準備学習(予習)

受講者は、政治・行政に関するテーマについて、書籍、新聞、ニュースなどを利用して情報を収集し、自分が問題意識をもつテーマについて説明できるようにしておくこと。

準備学習(復習)

毎回の講義で実施する小テストの内容を十分に確認しておくこと。

授業計画

1. 行政学の範囲と学習方法
2. 国家公務員の採用
3. 国家公務員の昇進
4. 国家公務員の退職と天下り
5. 内閣制度（1）
6. 内閣制度（2）
7. 中央省庁（1）
8. 中央省庁（2）
9. 政官関係
10. 行政ネットワーク（特殊法人、業界団体）（1）
11. 行政ネットワーク（NPO、諮問機関）（2）
12. 行政管理と行政改革
13. 官民関係（民営化、規制緩和）（1）
14. 官民関係（民間委託、NPM）（2）
15. レポート報告会
16. 中央省庁の意思決定方式
17. 予算編成過程
18. 決算と会計検査院
19. 行政責任（1）
20. 行政責任（2）
21. 行政学説史
22. 政策決定論
23. 政策実施論
24. 政策評価論
25. 官僚制論
26. 官僚制批判
27. 官僚制の演繹モデルと帰納モデル
28. レポート報告会
29. 日本の行政システム（2）
30. 学期末試験

教科書

評価方法

(1)試験:50% (2)レポート:40% (3)平常点:10%:授業貢献度、出席状況

行政法

担当者：仲田 孝仁

開講期：春学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

(講義の内容)本講義は、行政法の入門的な知識・考え方の修得を主目的とする。講義では、各種行政活動に共通する通則的な理論である「行政法総論」と、違法な行政活動に対する事後的な権利・利益の救済制度である「行政救済法」とを学ぶ。公務員として任用された場合は、実際に法律や条例を運用し、また民間企業であれば、行政の規制を受けない業種・業界はないといっても過言ではない。さらに、市民としても、運転免許や営業許可の取得、各種申請・届出、ゴミ収集、年金の給付等行政との関わりは生涯切っても切れないといえる。よって、公務員希望者に限らず、企業に就職し或いは一市民として社会生活を営む上でも「行政法」を学ぶ重要性は極めて高い。

(カリキュラム上の位置づけ)本科目は法律学であり、法学概論や憲法、民法などの基幹科目との対比では、応用科目に位置する。とはいえ、法学の基礎についても適宜ふれる。諸君の将来の進路とのかかわりでは、各種国家試験や資格試験対策としても必要性がある科目である(むろん、民間企業への就職希望や自営業者でもニーズはある。)。

2.学びの意義と目標

本講義を履修することにより、私たちが一市民としていかに「行政」との法的かかわりが切っても切れないものであるかを認識し、その上で望ましい「行政」とのかかわり方を諸君自身で考えたり、問題提起することができる。社会に生起する諸問題を法的に考えることができる。

準備学習(予習)

「日本国憲法」の教科書をひもとく(手元がない場合は図書館で調べる)、 「内閣」の章を読みその内容を400字程度で初回の授業までにまとめ、提出できるように用意しておくこと。なぜこの授業を履修するのか、理由を述べられるように準備しておくこと。

準備学習(復習)

概ね2週分の内容について、その翌週に小テストを行うので、講義内容について、十分復習しておくこと。1回目の範囲は初回の講義時に指示する。

授業計画

1. ガイダンス(「行政法」とは?学習する意義。)
2. 行政法の基本構造(法律による行政の原理、公法・私法二元論)
3. 行政の仕組(1) - 行政組織法概説(「行政主体」・「行政機関」概念、内閣、「国家行政組織法」概説)
4. 行政の仕組(2) - 地方自治法概説
5. 公務員法(国家公務員と地方公務員、人事院、人事委員会、公務員の内定、公務員の任用から退職まで、懲戒・分限処分)
6. 行政立法と行政計画(法規命令と行政規則、浜松市土地区画整理事業計画)
7. 行政裁量(日光太郎杉事件、伊方原発訴訟、マクリーン事件)
8. 行政手続(1)(行政手続法、申請に対する処分、不利益処分)
9. 行政手続(2)(個人タクシー事件、パブリック・コメント制度)
10. 情報公開・個人情報保護
11. 行政行為(1) - 行政行為の概念・類型
12. 行政行為(2) - 行政行為の効力・無効と取消(公定力、重大・明白説とは?)
13. 行政行為(3) - 取消と撤回・附款(実子あっせん事件、菊田医師事件)
14. 行政の実効性確保の手段(1) (行政代執行法、違法建築物の除去)
15. 行政の実効性確保の手段(2) (レッカー移動)
16. 行政契約・行政指導
17. 行政救済法総説
18. 損失補償
19. 国家賠償(1) - 総説・1条責任
20. 国家賠償(2) - 2条責任・賠償と補償の谷間
21. 行政不服申立て(1) (行政不服審査法の概要について)
22. 行政不服申立て(2) (審査請求について)
23. 行政事件訴訟(1) - 総論(行政事件訴訟法、抗告訴訟、取消訴訟)
24. 行政事件訴訟(2) - 取消訴訟の対象(取消訴訟の対象となる「処分」とは?)
25. 行政事件訴訟(3) - 訴えの利益
26. 行政事件訴訟(4) - 取消訴訟の審理手続
27. 行政事件訴訟(5) - 取消訴訟以外の抗告訴訟
28. 行政事件訴訟(6) - 客観訴訟
29. 行政救済法事例式問題演習
30. これまでの講義のまとめ

教科書

プリントを配布する

評価方法

(1)期末試験:80% (2)小テスト:10% (3)レポート:10%

キリスト教社会倫理 A

担当者：山口 博

開講期：秋学期 必修・選択：必修科目 授業回数：週1回 単位数：2単位

講義概要

1.内容

本講義は、「人間実存の神秘への導入」(inducting)を重視しつつ聖書を学び、複雑な現代社会の諸問題を、キリスト教社会倫理学の領域で考察したい。

2.学びの意義と目標

それは、キリスト教の立場から社会問題に即答や解答を与える倫理的な宣言(ethical pronouncement)としてではなく、人間のおかれている倫理的状況を、キリスト教の啓示の下に分析・洞察(analysis reflection)を加えるものである。

準備学習(予習)

毎回の講義で、聖書の文章と英文と邦文で読みます。あらかじめ該当箇所を通読しておいてください。

準備学習(復習)

配布プリントとノートをまとめてください。

授業計画

- 1.序
- 2.聖書解釈の歴史(1)原始教会 - マタイ13章31節マタイ5章13-14節
- 3.聖書解釈の歴史(2)古代教会 - ルカ10章30-35節
- 4.聖書解釈の歴史(3)中世カトリック教会 - ロマ3章9-18節
- 5.聖書解釈の歴史(4)宗教改革 - ロマ3章21-31節
- 6.聖書解釈の歴史(5)正統主義 - ヨハネ1章1-13節
- 7.聖書解釈の歴史(6)啓蒙主義 - 創世記6章11-22節
- 8.聖書解釈の歴史(7)歴史哲学的解釈・宗教史学派 - ビリピ2章6-11節
- 9.聖書解釈の歴史(8)本文批評・文献批評・様式史・編集史 - ヨブ記1章20-22節
- 10.生き方に学ぶ(1)ペテロの召命 - マタイ16章16節
- 11.生き方に学ぶ(2)パウロの回心 - コリ2章1-2節
- 12.生き方に学ぶ(3)アウグスティヌス - ロマ13章13-14節
- 13.生き方に学ぶ(4)宗教改革者ルターとカルヴァン - ロマ5章5節
- 14.生き方に学ぶ(5)聖学院と関わった宣教師達へブル11章8節
- 15.まとめ

教科書

授業の中で指示する

評価方法

- (1)出席:30%
- (2)プリント問題への回答:20%
- (3)全学礼拝と教会レポート:30%
- (4)ノートおよびプリント提出:20%

キリスト教社会倫理 B

担当者：山口 博

開講期：春学期 必修・選択：必修科目 授業回数：週1回 単位数：2単位

講義概要

1.内容

本講義は、「人間実存の神秘への導入」(inducting)を重視しつつ聖書を学び、複雑な現代社会の諸問題を、キリスト教社会倫理学の領域で考察したい。

2.学びの意義と目標

それは、キリスト教の立場から社会問題に即答や解答を与える倫理的な宣言(ethical pronouncement)としてではなく、人間のおかれている倫理的状況を、キリスト教の啓示の下に分析・洞察(analysis reflection)を加えるものである。

準備学習(予習)

毎回の講義で、聖書の文章と英文と邦文で読みます。あらかじめ該当箇所を通読しておいてください。

準備学習(復習)

配布プリントとノートをまとめてください。

授業計画

1. 序
2. キリスト教人間観(1) - 神を知り、人間を知る - 創世記1章27節
3. キリスト教人間観(2) - アダムとふざわしい助け手 - 創世記2章7節
4. キリスト教人間観(3) - 愛の表現としての契約 - 創世記12章1 - 2節
5. キリスト教人間観(4) - 罪について - 創世記3章9 - 12節
6. キリスト教人間観(5) - 救いについて - ローマ8章28節
7. 労働と職業 - 創世記2章15節 -
8. 結婚 - マタイ19章6節 -
9. 家族 - エペソ5章33 - 6章1節 -
10. 死 - ペリピ3章10 - 11節 -
11. キリスト教と文学 - ヨハネ1章1 - 14節 -
12. キリスト教と科学 - ヨハネ8章32節 -
13. キリスト教と政治 - マルコ12章13 - 17節 -
14. 個人と共同体 - エペソ4章14 - 16節 -
15. まとめ

教科書

授業の中で指示する

評価方法

- (1)出席:30% (2)プリント問題への回答:20%
(3)全学礼拝と教会レポート:30% (4)ノートおよびプリント提出:20%

担当者：鈴木 真実哉

開講期：春学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

<p>講義概要</p> <p>1.内容</p> <p>金融に関する基礎概念の修得に力点を置く。その上で、日本における金融現象を中心に、理論、政策、トピックスについて解説する。とくに、1990年代から現在に至るまでの日本金融史上でも稀である大変革期について、その本質と今後の方向性について解説する。たとえば、金融ビッグ・バン、大蔵省の改組、日本銀行法改正、郵便貯金の民営化、不良債権問題、などである。</p>	<p>授業計画</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 金融とは何か 2. 金融とは何か 3. 金融とは何か 4. 金融システム 5. 金融システム 6. 金融市場 7. 金融市場 8. 金融構造 9. 金融構造 10. 貨幣とは何か？ 11. 貨幣とは何か？ 12. 貨幣とは何か？ 13. 貨幣の供給 14. 貨幣の供給 15. 貨幣の供給 16. 貨幣の需要 17. 貨幣の需要 18. 貨幣と利子 19. 貨幣と利子 20. 日本の金融機関 21. 日本の金融市場 22. 日本の金融政策 23. 金融の自由化・国際化 24. 金融の自由化・国際化 25. 不良債権問題 26. 円高 27. 金融界の未来 28. 金融界の未来 29. まとめ 30. まとめ
<p>2.学びの意義と目標</p> <p>「金融」に無縁で生活できない現代において、すべての学生に学んでもらいたい科目である。社会科学系統の科目として、政治経済学部における両学科学生にとって共通専門科目となっている。現代の人間として知っておくべき知識を提示している。</p> <p>現代に生きる人間として知っておくべき「金融」に関する基礎知識を修得できる。難解な金融現象の理解が深まる。</p>	
<p>準備学習(予習)</p> <p>指定する教科書の講義予定箇所をレポート用紙1枚にまとめておくこと。シラバスの講義予定テーマについてテキスト(第1回講義において指定する)の相当箇所をよく読んでおくこと。</p>	<p>教科書</p> <p>授業の中で指示する</p>
<p>準備学習(復習)</p> <p>テキストの講義箇所、板書をまとめて、清書ノートを作成しておくこと。</p>	<p>評価方法</p> <p>(1)定期試験:90% (2)出席状況:10% 定期試験90%には、レポートによる評価を含むこともある。</p>

担当者：酒井 祐太郎

開講期：秋学期/春学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

1 目的:当科目は、企業の経営・管理の体系的知識を基本的レベルから学ぶことを目的とします。現代は企業の時代と呼ぶことができるほど、我々の生活は企業活動なしには成り立ちません。我々は消費者や労働者という意味でも企業に深くかかわっています。その意味で、企業という組織を多面的に考察することは、社会の構成員としても必須の事と言えます。

実際の講義では、まず我々と企業が基本的などのようなかかわりを持つか、企業が社会の中でどのような役割を持って存在しているか、また企業が社会の様々な要因変化にどのように対応してゆくべきかを考える。

2 カリキュラム上の位置づけ:入門レベルの授業を考えています。経営学のより専門的な内容の導入としての科目として捉えて頂きたい。

2.学びの意義と目標

当授業の到達目標は、経営学の基礎としての専門用語を理解できるようにすること、経済・経営に関する新聞記事等を理解し、読めるようにすること、経営学の中の各専門分野をさらに深く学ぶための基礎力と身につけること、経営学上の財務分析の基礎が自分でできるようにすることである。

準備学習(予習)

授業時に次回の学習内容を告知するので、その内容を参考書等を利用して学習すること。

準備学習(復習)

テーマごとに課題を課すので、それを復習として行い、理解を深めること。

授業計画

- 1.履修上の注意、企業の役割、環境変化に対する企業の対応(1)
- 2.環境変化に対する企業の対応(2) (特に国際関係に関して)
- 3.企業内の階層と経営者 (水平的分業と垂直的分業 1)
- 4.企業内の階層と経営者 (水平的分業と垂直的分業 2)
- 5.経営組織について(1) ライン組織、ラインアンドスタッフ組織
- 6.経営組織について(2) 事業部制組織 1
- 7.経営組織について(3) 事業部制組織 2、その他の組織の応用形態
- 8.人的資源管理(1) 労働条件(1)
- 9.人的資源管理(2) 労働条件(2)
- 10.人的資源管理(3) 人事制度(1)
- 11.人的資源管理(4) 人事制度(2)
- 12.企業形態(1) 合名会社、合資会社
- 13.企業形態(2) 株式会社(1)
- 14.企業形態(3) 株式会社(2)
- 15.企業形態(4) 株式会社(3)
- 16.企業形態(5) 株式会社(4)
- 17.所有と経営の分離・一致とは?
- 18.所有と経営の分離・一致のケーススタディ
- 19.財務管理の基礎(1) 財務管理とは?
- 20.財務管理の基礎(2) 貸借対照表の内容
- 21.財務管理の基礎(3) 損益計算書の内容
- 22.経営分析の基礎
- 23.経営分析の基礎 実例分析
- 24.経営分析の基礎(2)
- 25.マーケティングの基礎 (1) 製品戦略 (2) 価格戦略
- 26.マーケティングの基礎 (3) 広告戦略 (4) 流通戦略
- 27.マーケティングの基礎 (5) 消費のパターン等
- 28.経営戦略の考え方(1)
- 29.経営戦略の考え方(2)
- 30.まとめ

教科書

プリントを配布する

評価方法

- (1)定期試験:70%:中間試験および期末試験を実施予定
- (2)課題レポート:30%

担当者：後藤 兼一

開講期：春学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

本講義では、前半を理論を中心に後半を実務を中心に学ぶ。前半の理論では、経営管理の意義役割から始まり、管理対象、モデル構築、管理指標などについて、又後半の実務では、経営管理の改革改善から始まり、調査分析、目的目標、組織運営などについて学ぶ。

授業計画

1. ガイダンス
2. 意義役割から見た切り口
3. 意義役割から見た切り口
4. 管理対象から見た切り口
5. 管理対象から見た切り口
6. モデル構築から見た切り口
7. モデル構築から見た切り口
8. 管理指標から見た切り口
9. 管理指標から見た切り口
10. Q C Dから見た切り口
11. Q C Dから見た切り口
12. 効率化から見た切り口
13. 効率化から見た切り口
14. レベルアップから見た切り口
15. レベルアップから見た切り口
16. 心理的側面から見た切り口
17. 心理的側面から見た切り口
18. 基本概念から見た切り口
19. 基本概念から見た切り口
20. 行動から見た切り口
21. 行動から見た切り口
22. 改革改善から見た切り口
23. 改革改善から見た切り口
24. 調査分析から見た切り口
25. 調査分析から見た切り口
26. 目的目標から見た切り口
27. 目的目標から見た切り口
28. 作業工数から見た切り口
29. 組織運営から見た切り口
30. まとめ

2.学びの意義と目標

会社の経営管理に関心のある人、及び将来、会社を起業したいと思っている人、親の会社を継ぐかも知れないと思っている人を対象とする。本講義では経営管理とは何かとか、効率化とは何かについてカレー屋やそば屋、及び大手の企業の経営管理を例に実務的に学ぶ。本年度のねらいは経営管理の基本である『マネジメントの切り口』を理解することである。将来実際に企業に入って役に立つと思われる。

準備学習(予習)

コンビニ、ファミレスなどに行った時、経営管理及びマネジメントという観点から観察してみること。

教科書

プリントを配布する

準備学習(復習)

授業で学習した内容をコンビニ、ファミレスなどの経営管理に照らし合わせて考えてみることに。

評価方法

(1)出席:50% (2)試験:50%

担当者：後藤 兼一

開講期：春学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週1回 単位数：2単位

講義概要

1.内容

講義と実習をまぜて行う。講義では『オフィス業務改革』を用い、日本のオフィス業務の問題と課題を話す。実習ではオフィス業務プロセス分析のコンピュータ・ツールである『KMP (KAISHA Modeler Pro)』を使って行う。

授業計画

1. ガイダンス
2. オフィス業務の改革改善の必要性
3. オフィス業務の改革改善の突破口
4. オフィス業務の改革改善とBPRの役割
5. オフィス業務の改革改善に関する用語
6. 実習:オフィス業務プロセス分析
7. 実習:オフィス業務プロセス分析
8. 実習:オフィス業務プロセス分析
9. 実習:オフィス業務プロセス分析
10. 実習:医療業務プロセス分析
11. 実習:医療業務プロセス分析
12. まとめ
13. まとめ
14. レポート
15. レポート

2.学びの意義と目標

今、オフィス業務の改革改善が求められている。日本の工場の生産性と創造性は世界でトップクラスである。しかし、日本のオフィスにおける生産性と創造性は世界的に見たらトップクラスとは言いがたい。本講義では、何故そうなのかを考えた上で、オフィス業務の改革改善の進め方を講義と実習により進める。

準備学習(予習)

コンビニ、ファミレスなどに行った時、『どうして、こういうサービスができるのか』、『その仕組みはどうなっているのだろうか』などについて関心を持つこと。

教科書

後藤 兼一 『オフィス業務改革』(聖学院大学出版会)

準備学習(復習)

授業で学習した内容をコンビニ、ファミレスなどの経営管理的な仕組みに照らし合わせて考えてみる。

評価方法

(1)出席:40% (2)レポート:30% (3)試験:30%

経営情報

担当者：後藤 兼一

開講期：秋学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

講義と実習をまぜて行う予定。講義ではテキスト又はプリントを使い、情報とは何か、加工の方法、情報の使い方を話す。実習では“そば屋つるつる亭”の事例を取り上げ、経営情報を入力し、加工し、情報の使い方を検討する。

2.学びの意義と目標

企業は多くの情報に囲まれている。企業にとって情報とは何か、経営に必要な情報にはどのようなものがあるか、どのように集め、どのように加工し、どのように使えばよいかなどを実務的に学ぶ。将来企業に入って役に立つと思われる。

準備学習(予習)

コンビニ、ファミレスなどに行った時、『このお店にはどんな情報であふれているか』、『その情報は何に使われているのだろうか』などに関心を持つこと。

準備学習(復習)

授業で学習した内容をコンビニ、ファミレスなどの経営情報に照らし合わせて考えてみる。

授業計画

1. ガイダンス
2. 情報化社会と経営情報
3. 情報化社会と経営情報
4. 市場情報と製品情報
5. 市場情報と製品情報
6. 売上情報と利益情報
7. 売上情報と利益情報
8. 購買情報と製造情報
9. 購買情報と製造情報
10. 平均値と標準偏差
11. 平均値と標準偏差
12. 回帰分析と相関分析 etc
13. 回帰分析と相関分析 etc
14. “つるつる亭” 販売価数情報
15. “つるつる亭” 販売価数情報
16. “つるつる亭” 売上関連情報
17. “つるつる亭” 売上関連情報
18. “つるつる亭” 顧客層別情報
19. “つるつる亭” 顧客層別情報
20. “つるつる亭” 製品製造情報
21. “つるつる亭” 製品製造情報
22. “つるつる亭” 損益分岐点管理
23. “つるつる亭” 損益分岐点管理
24. “つるつる亭” 需要予測管理 etc
25. “つるつる亭” 需要予測管理 etc
26. まとめ
27. まとめ
28. レポート
29. レポート
30. レポート

教科書

プリントを配布する

評価方法

(1)出席:30% (2)レポート:40% (3)試験:30%

担当者：後藤 兼一

開講期：秋学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週1回 単位数：2単位

講義概要

1.内容

経営管理を行う際の倫理観にはどのようなものがあるかを学ぶ。倫理観がなくなると、どのような問題が起きるのか、又問題が起きないようにするためにはどうすればよいかを、実例をまじえて話す。

2.学びの意義と目標

経営の社会的役割は何なのか、経営を行うに当たって何を一番大切にしなければならないか。経営のあるべき姿はどのようなものなのかなどを前提におき。経営で許されることは何なのか、許されないことは何なのか、を検討する。本講義では、経営管理を行う際の倫理観などについて、その基本的な考え方を学ぶ。

準備学習(予習)

新聞・テレビで報道される経営倫理的な内容に関心を持つこと。

準備学習(復習)

授業で学習した内容を新聞・テレビの報道に照らし合わせて考えてみる
こと。

授業計画

1. ガイダンス
2. 主義に関する倫理
3. 人に関わる倫理
4. 運営に関わる倫理
5. 金に関わる倫理
6. 情報に関わる倫理
7. 販売に関わる倫理
8. 製品に関わる倫理
9. 環境に関わる倫理
10. 労働に関わる倫理
11. 評価に関わる倫理
12. 公平に関わる倫理
13. 官民に関わる倫理
14. まとめ
15. レポート

教科書

プリントを配布する

評価方法

(1)出席:50% (2)試験:50%

担当者：鈴木 真実哉

開講期：春学期 必修・選択：必修科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

経済学の特徴の考え方、理論の構成のし方に力点を置く。なぜ経済学が必要なのか、現実を経済学的にどのように理解できるか、経済社会はどのようにあるべきか、経済的意思決定主体はどのような行動すべきか、などについて解説する。

2.学びの意義と目標

政治経済学科1年生の必修専門科目であり、他学部の学生にとっては教養科目である。「経済」に無縁ではられない現代人にとって「生活必須」科目でもあろう。

経済学的思考によって、学習以前とは異なる次元から現実をみることができるようになる。また、合理性の経済学的意味が理解できるようになる。

参考文献 福岡正夫 『経済学入門』（日本経済新聞社）

授業計画

1. 経済学とは何か
2. 資源の稀少性と解決（1）
3. 資源の稀少性と解決（2）
4. 生産可能性フロンティア
5. 機会費用（1）
6. 機会費用（2）
7. 消費者の行動（1） 効用と無差別曲線
8. 消費者の行動（2） 予算制約と消費可能領域
9. 消費者の行動（3） 効用最大化
10. 消費者の行動（4） 需要曲線
11. 生産者の行動（1） 生産関数と収入
12. 生産者の行動（2） 費用と費用関数
13. 生産者の行動（3） 利潤最大化
14. 供給曲線
15. 需要と供給 市場（1）
16. 需要と供給 市場（2）
17. マクロ経済学1（生産物市場） 45°線モデル
18. マクロ経済学2（乗数理論）
19. マクロ経済学3（貨幣市場）
20. マクロ経済学4（労働市場）
21. IS曲線
22. LM曲線
23. 総需要曲線
24. 総供給曲線
25. オープンマクロ（1）
26. オープンマクロ（2）
27. オープンマクロ（3）
28. オープンマクロ（4）
29. 経済変動と景気循環
30. まとめ

準備学習(予習)

シラバスの講義予定テーマについてメモを作成しておくこと。

教科書

授業の中で指示する

準備学習(復習)

板書を中心にノートを整理し、関連書籍によって補充しながら毎回清書ノートをまとめておくこと。

評価方法

(1)定期試験:90% (2)出席状況:10%
定期試験の一部を補充する目的のレポートを課する場合もある。

経済学

担当者：正上 常雄

開講期：秋学期 必修・選択：必修科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

カリキュラム上の位置づけ

政治経済学科の学生は1年次必修科目であり、本科目の単位修得は各種の経済学系選択科目を履修するための必須条件である。尚、本科目は教養科目として他学科の学生にも開放されている。

内容

経済学とは、個人、企業、政府などさまざまな組織が、どのように選択を行い、その選択によって社会の資源がどのように使われるかを研究する学問のことである。経済学について学ぶ前に、トレードオフ、インセンティブ、交換、情報、分配、といった概念を知っておく必要があり、まずは経済学で使われる概念と経済学的な思考をきちんと身に付け、教科書に沿って、経済学の基礎を学んでゆく。

2.学びの意義と目標

学びの意義と目標

経済学の基礎をきちんと理解し、基本的な知識を身に付けることが、本講義の目標である。経済学にはミクロ経済学とマクロ経済学がある。本講義では、経済学を学ぶために、トレードオフ、インセンティブ、交換、情報、分配などの概念を使って、様々な経済的問題を考えてゆく。経済全体を構成する要素は、家計（消費者）、企業、金融、政府、貿易の5つである。企業は他の4つと密接に関係している。企業のあり方について学ぶことで、経済全体についての考察も深まってゆく。社会に出て、企業で働くときの準備として経済学を学んで欲しい。

準備学習(予習)

予習としては、教科書の内容を一読しておいて下さい。細かいことは初回の授業で学生の皆さんと相談して決めます。

準備学習(復習)

復習は、ノートやプリントなどを活用して、自分が理解できている点や理解できていない点をきちんと整理して、次回の授業に活かして下さい。

授業計画

1. 大学で履修する経済学の考え方 1
2. 大学で履修する経済学の考え方 2
3. 家計の目的 1
4. 家計の目的 2
5. 企業の目的 1
6. 企業の目的 2
7. 政府の目的 1
8. 政府の目的 2
9. 需要と供給の話 1
10. 需要と供給の話 2
11. 不完全競争市場 1
12. 不完全競争市場 2
13. ミクロ経済学の復習
14. 中間試験
15. マクロ経済学って何？ 1
16. マクロ経済学って何？ 2
17. 短期の経済 1
18. 短期の経済 2
19. 貨幣の影響 1
20. 貨幣の影響 2
21. なぜ国民所得をコントロールするのか？ 1
22. なぜ国民所得をコントロールするのか？ 2
23. IS-LM分析 1
24. IS-LM分析 2
25. 長期の経済 1
26. 長期の経済 2
27. 長期の経済における失業 1
28. 長期の経済における失業 2
29. 長期の経済における政策 1
30. 長期の経済における政策 2 および期末試験

教科書

木暮 太一 『大学で履修する入門経済学が1日でつかめる本 絶対わかりやすい経済学の教科書』(マトマ出版)

評価方法

(1)中間試験:40% (2)期末試験:40% (3)平常点:20%
大学の規定に従い、出席率60%以上を単位取得の条件とします。
基本的には中間試験と期末試験の成績で評価します。

担当者：高橋 聡

開講期：春学期 必修・選択：必修科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

私たちの日々の経済活動をふりかえると、誰にも強制されず、一人一人が自由に行動しているか見える。しかしよくよく観察してみると、経済には自分の思いや努力とは別の客観的な法則があり、その力が人々を動かしていることがわかる。この法則を知ることが講義の第一のテーマとなる。これに続くテーマは、経済法則の力を生かして、様々な問題(貧困と格差、失業、財政危機、環境問題、貿易自由化など)の処方せんを描いてみることである。これらを行う際、歴史の知恵に学ぶことは有効な学習法といえる。そこで、私たちより先に以上の諸問題に立ち向かった経済学者の思考に学ぶことを通じて、受講者が経済と社会を見る目を養えるような内容とする。

なお、福祉や欧米の歴史・社会に興味のある人でも経済学になじんでもらえる内容とするので、他学部履修も歓迎する。

2.学びの意義と目標

経済の法則を理解する。 法則を適用した政策論を理解する。 経済社会の様々な制度(税・社会保障・雇用・貿易)のしくみを理解する。

準備学習(予習)

教科書の該当する章を読むこと。 新聞やインターネット記事を収集すること。

準備学習(復習)

配布したプリントの問題を解くこと。 授業で紹介する本(新書)を読むこと。

授業計画

1. 経済学の基本用語 市場と政府
2. 経済学の基本用語 家計と企業
3. アダム・スミスと経済成長
4. アダム・スミスと経済倫理
5. ベンサムと国民の幸福 / 福祉
6. ベンサムと自由放任政策
7. マルサス・リカードウと貧困問題
8. マルサス・リカードウと自由貿易論争
9. J.S.ミルと自由主義経済
10. J.S.ミルと女性の労働
11. ワルラスとミクロ経済学(一般均衡分析)
12. ワルラスと市場・制度・共済
13. マーシャルとミクロ経済学(余剰分析)
14. マーシャルと人間開発
15. ピグーとミクロ経済学(厚生経済学)
16. ピグーと環境問題
17. ウエップ夫妻と労働市場政策
18. ウエップ夫妻と競争政策
19. ケインズとマクロ経済学の誕生
20. ケインズとベバレッジの社会保障政策
21. シュンペーターとイノベーション
22. シュンペーターと経済体制
23. ミュルダールと人口減少問題
24. ミュルダールと北欧福祉国家
25. ハイエクと自由主義経済
26. ハイエクと貨幣改革
27. フリードマンとケインジアン批判
28. フリードマンと税制改革
29. センとロールズ 正義論と人間発展
30. センとロールズ 格差と豊かさ / 幸福

教科書

小峯敦編 『福祉の経済思想家たち』(ナカニシヤ出版)

評価方法

(1)中間(レポート)・期末試験:80% (2)出席:20%

担当者：中野 宏

開講期：春学期 必修・選択：必修科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

モノを作る・買う、モノの価格が上がる・下がる、景気が良くなる・悪くなる、為替レートが円高になる・円安になる等々、学生諸君の身の回りで日々生じている経済的行動や経済現象にはすべて理屈や法則がある。これらの理屈や法則を明らかにし、社会全体を最も望ましい状態に導くにはどうすればよいかを考えるのが経済学である。本講義は「経済学入門」として、経済学的方法論を習得し、今後学生諸君が経済学系の科目を履修するための基礎付けを行うとともに、それらを用いて現在の日本経済が抱える諸問題についての理論的な理解を試みる。経済を見る目を養うとともに、経済学が現実の社会の中でどのように機能しているのか、学生諸君には存分に知ってもらいたい。

2.学びの意義と目標

将来学生諸君がどのような職業に就こうと、社会に出れば「経済」と付き合わずに済ますことは出来ない。景気の動向や、金利・物価・為替レートの動きなどから必要なことを読み取り、あるいはそれらの動きを予想し、仕事に反映させていくことになる。また、少子高齢化・人口減少社会に突入した我が国においては、これまでのような年金に依存にした老後は期待すべきもなく、諸君は投資により自らの手腕において老後のための資産形成を行っていかねばならない。今後必要となるのは、テレビや新聞、ネットなどのマスコミ報道を鵜呑みにするのではなく、自分の目で見て自分の考えで決定を行えるような知性と分析道具である。それらを身に付けるために本講義が少しでも役に立てばと願う。

準備学習(予習)

現実の経済の動きに関心を持たなければ、この授業はよほどつまらないものとなるであろう。まずは指示されたキーワードを自分の手で調べることからは始めてみよう。

準備学習(復習)

経済学の講義は積み重ねで進んでいくため、一度わからなくなるとその後が続かなくなる恐れがある。毎回講義の復習プリントを配布するので、次の講義日までに各自仕上げてくること。

授業計画

1. 経済学とは何か
2. 景気循環と経済成長(1)
3. 景気循環と経済成長(2)
4. 景気循環と経済成長(3)
5. GDP統計(1)
6. GDP統計(2)
7. GDPの決定(1)
8. GDPの決定(2)
9. 乗数理論
10. 財政の機能(1)
11. 財政の機能(2)
12. 貨幣とは何か(1)
13. 貨幣とは何か(2)
14. 金利と経済
15. 中央銀行と金融政策
16. 為替レートと経済
17. 市場の分類
18. 需要と供給(1)
19. 需要と供給(2)
20. 需要と供給(3)
21. 需要と供給(4)
22. 需要と供給(5)
23. 消費者行動(1)
24. 消費者行動(2)
25. 生産者行動(1)
26. 生産者行動(2)
27. 政府の市場介入(1)
28. 政府の市場介入(2)
29. 講義のまとめ(1)
30. 講義のまとめ(2)

教科書

プリントを配布する

評価方法

(1)出席:30% (2)レポート:30%:講義期間半ばに1回課題を出す。
 (3)期末試験:40%
 上記評価のほか、質問等授業に積極的に参加しようとする態度や意欲は加点対象となる。自分の存在をアピールして欲しい。

担当者：由川 稔

開講期：春学期 必修・選択：必修科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

経済学は抽象化や理論化という科学的な方法に拠っています。日常生活の中で、しばしば「感情」や「常識」に埋没して見えなくなりがちな経済現象の「本質」を暴き、そこから新しい経済や人間のあり方などを構想するためです。しかしやり方を間違えると、かえって現実を見る目を曇らせてしまいます。授業では、このバランスを重視したいと思います。

2.学びの意義と目標

本来、「経済が人間のためにあるのであって、人間が経済のためにあるのではない」はずです。しかし現実の経済は、人間を奴隷化する恐ろしい面も持っています。究極的には、私たちが英知と勇気を持って、少なくとも経済の面で明るい未来を築いていくことが、経済学を学ぶ意義であり、目標であると言えるでしょう。

準備学習(予習)

教科書の予習ポイントは毎回指示します。国内外の政治経済動向に十分注意する姿勢を持ち続けてください。

準備学習(復習)

復習は絶対に必要です。何度でも、読んで、書いて...、「頭で」というよりもむしろ「身体で」覚えるくらいの意識で臨んでください。

授業計画

1. 経済学とマネーの暴走 (1)
2. 経済学とマネーの暴走 (2)
3. 経済学とマネーの暴走 (3)
4. 経済学とマネーの暴走 (4)
5. 経済と法 (1)
6. 経済と法 (2)
7. 租税と財政の問題 (1)
8. 租税と財政の問題 (2)
9. 租税と財政の問題 (3)
10. 租税と財政の問題 (4)
11. 新自由主義 (1)
12. 新自由主義 (2)
13. ケインズ理論をめぐって (1)
14. ケインズ理論をめぐって (2)
15. ケインズ理論をめぐって (3)
16. ケインズ理論をめぐって (4)
17. ケインズ理論をめぐって (5)
18. ケインズ理論をめぐって (6)
19. 国際経済 (1)
20. 国際経済 (2)
21. 国際経済 (3)
22. 国際経済 (4)
23. 消費者行動 (1)
24. 消費者行動 (2)
25. 消費者行動 (3)
26. 消費者行動 (4)
27. 生産者行動 (1)
28. 生産者行動 (2)
29. 生産者行動 (3)
30. 生産者行動 (4)

教科書

伊藤元重 『はじめての経済学「上」』 (日本経済新聞出版社)
伊藤元重 『はじめての経済学「下」』 (日本経済新聞出版社)

評価方法

(1)受講態度:30%:授業内小テストを含む (2)レポート等:20%:諸提出物
(3)試験:50%

担当者：鈴木 真実哉

開講期：秋学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

現代の経済学の教科書は、過去の経済学の偉人たちの業績の集大成である。これを分解して、個々の経済学者の生き方と理論について解説する。現代では、あまり触れられないことのない経済学の碩学についてもできるだけとりあげる。時代的には、「経済学」が独立した学問となったとされるアダム・スミスの時代以降である。

2.学びの意義と目標

様々な経済理論や政策、制度の背景を理解する科目である。選択専門科目ではあるが、多くの学生に受講してもらいたい。経済思想の歴史を学ぶ科目である。

現代の経済的発展は多くの過去の偉大な経済学者の努力の上に成り立っている。この科目はこの事実を具体的に理解できるようになっている。その生き方と思想は多大な感銘をもたらすであろう。

準備学習(予習)

毎回ミニテーマを示すので次回までにレポート用紙 1 枚程度にまとめておくこと。

シラバスの講義予定テーマについて、全体的なサーベイをして簡単なメモを作成しておくこと。

準備学習(復習)

舞香の板書を整理し、関連書籍を用いて項目ごとに清書ノートを作成しておくこと。

授業計画

1. 序論
2. アダム・スミスと「導徳感情論」
3. アダム・スミスと「国富論」
4. 限界革命と近代経済学の成立
5. 限界革命と近代経済学の成立
6. ジェヴォンズの経済学
7. ジェヴォンズの経済学
8. メンガーの経済学
9. メンガーの経済学
10. ワルラスの経済学
11. ワルラスの経済学
12. 限界革命の展開
13. 限界革命の展開
14. 限界革命の展開
15. 限界革命の展開
16. ケンブリッジ学派
17. ケンブリッジ学派
18. ケンブリッジ学派
19. 不完全競争理論
20. 貨幣理論と物価の変動
21. ケインズの経済学
22. ケインズの経済学
23. ケインズの経済学
24. シュムペーターの経済学
25. シュムペーターの経済学
26. シュムペーターの経済学
27. ハイエクの政治経済学
28. ハイエクの政治経済学
29. ハイエクの政治経済学
30. まとめ

教科書

授業の中で指示する

評価方法

(1)定期試験:90% (2)出席状況:10%
この評価対象は、授業日数の2/3以上の出席回数をクリアしている受講者に限る。

担当者：倉西 雅子

開講期：春学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

市場経済が円滑に機能するためには、公的な機関による市場秩序の維持が必要です。本講義では、この公的な市場の秩序維持の役割を、市場のメカニズムの理解を基礎としながら、自由な経済活動を競争ルールの面から律する競争法を中心に見て行きます。

2.学びの意義と目標

市場経済と法との関係を学ぶことは、自らが身を置いているシステムの基本的なメカニズムと仕組みを知ることでもあります。

準備学習(予習)

新聞、テレビ、インターネット、雑誌などを通して、競争法に関連する事件やニュースを見聞きし、日常においても、競争法の世界に親しむようにしてください。

準備学習(復習)

講義後は、過去の講義で配布されたプリントをよく読み、次回の講義に備えるために、内容の理解を深めるようにしてください。

授業計画

1. ガイダンス
2. 経済と経済法
3. 市場の基本的な仕組み
4. 市場の自律的発展
5. 市場秩序の維持のための公的役割
6. 市場と法
7. 市場の共通ルール
8. 私的独占の禁止
9. カルテルの禁止
10. 合併規制
11. 不正な取引方法 その1
12. 不正な取引方法 その2
13. 競争法の適用除外 その1
14. 競争法の適用除外 その2
15. 知的財産権の保障
16. 日本国の独占禁止法 その1
17. 日本国の独占禁止法 その2
18. 日本国の独占禁止法 その3
19. 日本国の独占禁止法 その4
20. 日本国の競争政策の課題
21. アメリカの競争法 その1
22. アメリカの競争法 その2
23. アメリカの競争法 その3
24. EUの競争法 その1
25. EUの競争法 その2
26. EUの競争法 その3
27. 新興国の競争法と問題点 その1
28. 新興国の競争法と問題点 その2
29. 競争法と市場のグローバル化
30. 理解度の確認

教科書

プリントを配布する
毎回配布するプリントには、その日の講義内容が纏めてあります。

評価方法

(1)出席:50%:点数化 (2)レポート:50%
本講義では、パワーポイントを使用しているため、出席に対する評価を高めに設定しています。

現代政治理論

担当者：森 達也

開講期：秋学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

<テーマ> 政治的自由論の歴史と現在
政治の存在理由はしばしば自由の達成と保全にあると言われる。歴史上、数多くの人々がこの「自由」の旗印の下に集い、議論し、政府に異議申し立てを行い、時に武器を手に革命を遂行した。自由はきわめて強力な政治的理念である。だが、一見、誰の目にも明らかと思えるこの言葉が実際に何を意味しているのかと問えば、その答えは一様ではない。本講義では政治理論および政治思想史の観点から、自由論の伝統とその現在について考察する。自由は欧米の政治的伝統の中心を占める理念であり、自由をめぐる多様な議論を辿ることは、西洋政治思想の全体像を知ることに等しい。政治学の古典を読み解き、基本的な政治的理念について考えることを通じて、混迷する現代社会における個と共同体のあり方を理解し、進むべき道を見出す一助としたい。

2.学びの意義と目標

政治学の規範的側面に関する理解を深める。政治思想の歴史から現代社会を見通し、そこにおけるわれわれ自身の生活様式を批判的に吟味する。

準備学習(予習)

教科書の次回講義に関連する部分を読んでおくこと。

準備学習(復習)

授業で扱った文献を実際に(図書館などで)手に取り、可能な限り読むこと。

授業計画

1. イントロダクションおよびアンケート
2. 政治的自由とは何か
3. 自由意志と決定論
4. 自由、権力および責任
5. 自由概念の複数性
6. 自由と自由主義(1) 自由主義の歴史と類型
7. 自由と自由主義(2) 映像で学ぶピューリタン革命
8. 自由と自由主義(3) ホップズ『リヴァイアサン』
9. 自由と自由主義(4) ロック『統治二論』
10. 自由と自由主義(5) スミス『国富論』
11. 自由と自由主義(6) ミル『自由論』
12. 自由と自由主義(7) 古典的自由主義の修正
13. 自由と自由主義(8) ハイエク『隷従への道』
14. 自由と自由主義(9) ロールズ『正義論』
15. 中間試験
16. 自由と共和主義(1) 映像で学ぶ古代ローマ世界
17. 自由と共和主義(2) アリストテレス『政治学』
18. 自由と共和主義(3) マキアヴェリ『ディスコルシ』
19. 自由と共和主義(4) モンテスキュー『法の精神』
20. 自由と共和主義(5) ルソー『社会契約論』
21. 自由と共和主義(6) アーレント『人間の条件』
22. 自由と共和主義(7) ハーバーマス『公共性の構造転換』
23. 自由と共和主義(8) サンデル『民主政の不满』
24. 自由と保守主義(1) ヒューム『原始契約について』
25. 自由と保守主義(2) パーク『フランス革命の省察』
26. 自由と保守主義(3) フィヒテ『ドイツ国民に告ぐ』
27. 自由と社会主義(1) マルクス・エンゲルス『共産党宣言』
28. 自由と社会主義(2) レーニン『帝国主義』
29. 現代社会における自由(1) アイデンティティ
30. 現代社会における自由(2) ライフ・ポリティクス

教科書

岡崎晴輝・木村俊道編『はじめて学ぶ政治学』(ミネルヴァ書房)

評価方法

- (1) 中間試験:35%:論述式
- (2) 最終試験:35%:論述式
- (3) 授業内課題:30%:コメントシートの提出

憲法(人権)

担当者：石川 裕一郎

開講期：秋学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1. 内容

講義内容を「人権」（日本国憲法でいえば第3章「国民の権利及び義務」）に絞られている分、法解釈に重点を置いた、密度の高い講義を行います。とはいえ、その背景にある政治的・経済的・社会的・文化的諸要素にも相当言及する内容になる予定です。

具体的には、内容的に入りやすい刑事手続き上の人権保障（身体的自由）に始まり、人権の一般原則、精神的自由、経済的自由、社会権、参政権、マイノリティの権利等を丁寧に論じてゆくことを考えています。

なお、できるだけアクチュアルな問題を取り上げたいので、内容は多少変更される可能性があります。また、法学に関する講演会または映像作品の鑑賞も2～3回ほど実施する予定です。

2. 学びの意義と目標

憲法の一義的目標たる人権保障について学び、人権という視点から政治・経済・社会を考察する能力を身に付けることをめざします。

ところで、本講義では第一にオーソドックスな日本国憲法の通説・判例理解をめざしますが、（公務員試験の予備校ではない）大学の講義ですから、それに留まらず、ポストモダニズム、ネオリベリズム、フェミニズム、マルキシズム、マルチカルチャリズム等から挑戦を受ける「近代」の象徴としての立憲主義の意義を検討する、語本来の意味におけるcritiqueな講義としたいと考えています。

準備学習(予習)

原則として事前にレジュメを配布するので、必ず目を通しておくことを求めます。毎回かなりの分量なので、ある程度の時間と集中力を必要とします。

準備学習(復習)

毎回の講義の後で、習得した知識の確認と講義への主体的な取り組み姿勢を評価することを目的としたリアクションペーパーの作成および提出を課しますので、それを踏まえて次回までに講義内容の理解を定着させることを求めます。

授業計画

1. オリエンテーション
2. 刑事手続上の人権保障(1)
3. 刑事手続上の人権保障(2)
4. 刑事手続上の人権保障(3)
5. 刑事手続上の人権保障(4)
6. 刑事手続上の人権保障(5)
7. 個人の尊重
8. 幸福追求権(1):自己決定権
9. 幸福追求権(2):プライバシー権
10. 公共の福祉
11. 平等原則(1)
12. 平等原則(2)
13. 思想・良心の自由
14. 表現の自由(1)
15. 表現の自由(2)
16. 信教の自由と政教分離原則(1)
17. 信教の自由と政教分離原則(2)
18. 生存権(1)
19. 生存権(2)
20. 労働権(1)
21. 労働権(2)
22. 教育権(1)
23. 教育権(2)
24. 学問の自由と大学自治
25. セクシュアリティ・家族と人権
26. 集団・マイノリティの権利
27. 天皇・皇族と人権
28. 参政権
29. ポストモダンと人権
30. まとめ

教科書

プリントを配布する

評価方法

(1)平常点:80%::リアクションペーパーの記述内容によって評価します。
(2)期末試験:20%:場合によっては期末レポートに変更する可能性もあります。

単なる出席（物理的に教室内に存在すること）だけでは何ら評価の対象となりません。

公共政策論

担当者：鈴木 潔

開講期：春学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

本講義では、これまでの公共政策学の蓄積を利用し、公共政策がどのように決定され、実施され、評価されているかという公共政策のプロセスを中心に説明する。

本講義は、まちづくり学、環境政策論、社会保障論、リスク対策論、社会福祉行政論、公的扶助論、児童福祉論などの個別政策の学習を進めていくうえで、その共通基盤となる公共政策の知識を提供するものである。また、政治学、行政学、地方自治論の知識が、どのように公共政策と関連するかを理解するうえでも役に立つ。

2.学びの意義と目標

社会問題を解決するための手段である公共政策が、どのように決定され、実施され、評価されているかを理解し、国や自治体の公共政策の適否を総合的に判断できる能力を身につけることを目標とする。

準備学習(予習)

受講者は、事前に指示される教科書の当該箇所を読み、用語などを調べておくこと。

また、公共政策は現実の社会問題の解決に寄与することを志す実践的学問であるから、日ごろから時事問題に関心を払っておくことが求められる。

準備学習(復習)

毎回の講義で実施する小テストの内容を十分に確認しておくこと。

授業計画

1. イントロダクション
2. 公共政策とは何か(1) 公共政策の基本構造
3. 公共政策とは何か(2) 公共政策へのアプローチ
4. 公共政策学の系譜(1) 第1期・第2期
5. 公共政策学の系譜(2) 第3期
6. アジェンダ設定(1) アジェンダ設定理論
7. アジェンダ設定(2) 政策決定
8. 政策問題の構造化
9. 公共政策の手段(1) 直接供給と直接規制
10. 公共政策の手段(2) 誘因およびその他の手段
11. 規範的判断(1) 公平、効率性、安全・安心、自由
12. 規範的判断(2) 価値の対立と政策の判断基準
13. 政策決定と合理性(1) 政策決定の合理化への試み
14. 政策決定と合理性(2) 合理的意思決定の限界
15. 政策決定と利益(1) 利益調整としての政策決定過程
16. 政策決定と利益(2) 利益と政治
17. 政策決定と制度
18. レポート報告会
19. 政策決定とアイデア(1) アイディアの概念、アイデアによる影響
20. 政策決定とアイデア(2) 政策へのプロセス
21. 公共政策の実施(1) 位置づけと構造、実施の現場
22. 公共政策の実施(2) 実施研究のアプローチ
23. 公共政策の評価(1) 評価のロジック、政策評価の種類と機能
24. 公共政策の評価(2) 政策評価の政治性と参加
25. 公共政策管理のシステム(1) 市場メカニズムの活用
26. 公共政策管理のシステム(2) 地方分権とガバナンス
27. レポート報告会
28. 応用問題(1) 国際紛争
29. 応用問題(2) 社会保障と税負担
30. 期末試験

教科書

秋吉 貴雄、伊藤 修一郎、北山 俊哉 『公共政策学の基礎(有斐閣ブックス)』(有斐閣)

評価方法

(1)試験:50% (2)レポート:40% (3)平常点:10%:授業貢献度、出席状況

公的扶助論

担当者：宮寺 良光

開講期：春学期集中 必修・選択：選択科目 授業回数：週1回 単位数：2単位

講義概要

1.内容

- ・公的扶助の概念
- ・貧困・低所得者問題と社会的排除
- ・公的扶助の歴史
- ・生活保護制度の仕組み
- ・生活保護の運営実施体制と関係機関
- ・生活保護の動向
- ・低所得者対策とホームレス対策
- ・自立支援プログラムの意義と実際

2.学びの意義と目標

- ・低所得階層の生活実態とこれを取り巻く社会情勢、福祉ニーズとこの実際について理解する。
- ・相談援助活動において必要となる生活保護制度や生活保護制度に係る他の法制度について理解する。
- ・自立支援プログラムの意義とその実際について理解する。

準備学習(予習)

- (1)講義内容の予習 毎回配付する資料を読解してくる

準備学習(復習)

- (1)講義内容の復習
毎回出題する課題に対して、400文字程度のレポートを提出する

授業計画

1. 公的扶助の概念
2. 貧困・低所得者問題と社会的排除
3. 公的扶助の歴史 (1) 海外の歴史
4. 公的扶助の歴史 (2) 日本の歴史
5. 生活保護制度の仕組み (1) 生活保護法の目的・原理
6. 生活保護制度の仕組み (2) 生活保護法の原則
7. 生活保護制度の仕組み (3) 生活保護の種類と内容
8. 生活保護制度の仕組み (4) 生活保護基準と実施要領
9. 生活保護制度の仕組み (5) 保護施設
10. 生活保護制度の仕組み (6) 被保護者の権利と義務・不服申立てと訴訟
11. 生活保護の運営実施体制と関係機関
12. 生活保護の動向
13. 低所得者対策とホームレス対策
14. 自立支援プログラムの意義と実際
15. 貧困・低所得者に対する相談援助活動

教科書

プリントを配布する

評価方法

- (1)出席:30% (2)小レポート:30% (3)試験:40%

国際機構論

担当者：中村 文子

開講期：秋学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1. 内容

国際機構の定義と国際機構が誕生した歴史的経緯を解説したうえで、最も包括的であり普遍的な国際組織である国際連合を例として挙げ、その組織構造・意思決定などについて学ぶ。さらに、国際社会が直面する問題として、安全保障、人道・軍縮分野、人権分野などを取り上げ、この諸問題に対する国際連合の具体的な活動を検証することで、現代世界における国際組織の役割を考える。

2. 学びの意義と目標

現代の国際社会は、戦争、核兵器と軍拡、貧困、難民といった地球規模の諸問題に直面している。これらの多くが国家の領域を超えた問題であり、国家が単独で解決することは難しい。例えば、武力紛争地域から数十万人の難民が一度に流出した場合、受入国は難民に対し居住環境を迅速に提供しなければならない。しかし経済的に貧しい受入国ではそのような難民支援が不可能となる。この場合、国連難民高等弁務官事務所が世界各国に資金提供を呼びかけ、難民の保護と援助を行う。つまり、国際機構は国家が単独で解決できない問題に対し資源・情報・規範を提供することで問題解決を促すことを目的とした組織である。講義では、現代の国際社会の諸問題を説明し、それを対処している国際組織の目的と機能、活動に焦点を当てる。

準備学習(予習)

新聞等メディアで近日の国際記事に目を通しておくこと。

準備学習(復習)

授業で学んだ内容について、さらに新聞等メディアや文献に触れ、理解を深めておくこと。

授業計画

1. 国際機構の定義
2. 国際機構の形成と発展（歴史的経緯）
3. 国際機構の形成と発展（国際連盟）
4. 国際機構の形成と発展（国際連合）
5. 国際連合の組織構造（原則と総会）
6. 国際連合の組織構造（理事会）
7. 国際連合の組織構造（事務局・補助機関・司法機関）
8. 国家と国際連合（加盟・代表権）
9. 国家と国際連合（加盟国の権利義務）
10. 国家と国際連合（加盟国の主権）
11. 国際連合の意思決定（手続き）
12. 国際連合の意思決定（歴史的経緯）
13. 国際連合の意思決定（法的効果）
14. 国際の平和と安全の維持（現実主義的国際関係論）
15. 国際の平和と安全の維持（国際連盟）
16. 国際の平和と安全の維持（国際連合）
17. 紛争の平和的解決（国連憲章第6章）
18. 紛争の平和的解決（国連憲章第7章）
19. 冷戦時代における国際社会の状況
20. 冷戦時代と国際連合による集団安全保障（朝鮮戦争）
21. 冷戦時代における平和維持機能（平和維持活動の誕生）
22. 冷戦時代における集団安全保障（パレスティナ問題等）
23. 冷戦終焉後の安全保障理事会の活動
24. 安全保障理事会と人道危機への対応
25. 人道的介入（ソマリア、ボスニア）
26. 人道的介入（ルワンダ、コソヴォ）
27. 非政府組織（NGO）と国際機構
28. 軍備管理・軍縮・不拡散と国際機構
29. 人権・人道と国際機構（人権諸条約、人道支援）
30. その他の国際組織とその活動

教科書

授業の中で指示する
参考文献等は授業のなかで指示する。

評価方法

(1)レポート:80%:レポート課題は授業中に通知する。(2)出席:20%
3分の1以上欠席した場合、不可とする。授業態度の悪い者は、出席回数を満たし、レポートが単位取得に必要な水準に達していても、授業中に退席させ、単位は与えない。

国際人権・人道法

担当者：小松崎 利明

開講期：春学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

本講義では、世界各地に見られる、基本的人権が保障されない状況、あるいは武力紛争によって人々の生活や生命が脅かされる状況に対して、国際法の一分野である国際人権法や国際人道法がどのように取り組んできたのかを学習し、それらの現代世界における意義と問題点を考える。

2.学びの意義と目標

人権とは何か、なぜ人権尊重が重要なのか、人権の保護はどうすれば確保できるのか、さらに、現代世界において武力の行使はどのように規制されるのか、武力紛争下において人間の生命や基本的権利はどのように保護されるのかといった問題を、法的な視点から考察する能力を養う。

準備学習(予習)

配布資料を読んでおく。

準備学習(復習)

授業で配布されたレジュメや資料の内容をおさらいし、疑問点や理解が不十分な点を整理する。

授業計画

1. 講義概要説明
2. 現代国際社会における人権・人道規範
3. 法的なものの見方と考え方(1)
4. 法的なものの見方と考え方(2)
5. 国際法概論(1)
6. 国際法概論(2)
7. 国際人権法の歴史的展開(1)
8. 国際人権法の歴史的展開(2)
9. 国連システムにおける人権規範 世界人権宣言(1)
10. 国連システムにおける人権規範 世界人権宣言(2)
11. 国連システムにおける人権規範 国際人権規約(1)
12. 国連システムにおける人権規範 国際人権規約(2)
13. 国連システムにおける国際人権法の実施措置(1)
14. 国連システムにおける国際人権法の実施措置(2)
15. 地域的国際機構による人権の保護(1)
16. 地域的国際機構による人権の保護(2)
17. 国際人道法の歴史的展開(1)
18. 国際人道法の歴史的展開(2)
19. 戦闘の手段・方法に関する規則(1)
20. 戦闘の手段・方法に関する規則(2)
21. 紛争犠牲者の保護に関する規則(1)
22. 紛争犠牲者の保護に関する規則(2)
23. 「テロとの戦い」と人権・人道法(1)
24. 「テロとの戦い」と人権・人道法(2)
25. 国際刑事裁判制度 戦争犯罪人の処罰(1)
26. 国際刑事裁判制度 戦争犯罪人の処罰(2)
27. 真実和解委員会 紛争後の和解を求めて(1)
28. 真実和解委員会 紛争後の和解を求めて(2)
29. 人権・人道をめぐる法と政治との相克(1)
30. 人権・人道をめぐる法と政治との相克(2)

教科書

プリントを配布する

評価方法

(1)平常点:20% (2)リアクション・ペーパー:30% (3)期末試験:50%

国際政治論

担当者：小島 かおる

開講期：春学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

まず、国際政治の基本概念や理論についての基礎知識を学び、次に、第二次世界大戦後の国際政治の流れを解説します。また、今日私たちが直面している国際政治上の諸問題について考察します。

2.学びの意義と目標

今日、国際世界は激動の中にあり、たくさんの解決すべき問題を抱えています。しかし私たちの周囲には多くの情報が氾濫しているため、かえって、様々な現象の基底にある本質をつかむ視点や判断基準を持つことが難しくなっています。本講義の目標は、第一に、国際政治の基礎知識を習得すること。第二に、それらの基礎知識に基づいて、国際政治の諸問題をより深く理解し、自ら考える能力を養うこと。

準備学習(予習)

授業計画を参照し、扱われるテーマについて情報を集めておくこと。

準備学習(復習)

ノートや配布プリントを再読し、各テーマについて次回までに説明できるようにすること。

授業計画

1. 国際政治論とは何か
2. 国際政治における諸概念
3. 国際政治の諸要因
4. 理想主義と現実主義
5. 国際システム論の展開
6. 国際社会における平和と安全
7. 国際連合
8. 第二次世界大戦後の国際経済体制
9. 冷戦の開始
10. 対外援助
11. 同盟
12. 軍拡
13. 核抑止
14. 第三世界
15. 理解度の確認
16. 国際経済の自由化
17. ヨーロッパ共同体の拡大
18. デタント
19. ドル危機 / ニクソン・ショック
20. 石油危機 / 国際経済戦争
21. サミット
22. 軍縮
23. 第三世界をめぐる諸問題
24. 冷戦の終焉とソ連の解体
25. 民族問題
26. 環境問題
27. 原子力問題
28. テロリズム
29. 相互依存
30. 試験とその解説

教科書

プリントを配布する

評価方法

(1)期末試験:70% (2)小テスト:30%

国際地域開発論

担当者：飯島 康夫

開講期：春学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1. 内容

日本や海外の地域開発にかかわる諸問題に親しみ、歴史を通して都市化に対する対処の教訓等を学ぶことである。経済活動の国際化と地方分権化が望まれるなか、地方行政や地域産業の関係者が独自に地域振興の戦略的プランをもち、海外との経済・文化交流に直接関わるが増えるかもしれない。本講義はそのような将来の開発プランナーへの道に興味を持って頂くための一助にもなればと願って開講されるものである。

2. 学びの意義と目標

地域開発のあらましを、概説したものであり、欧米、アジア・アフリカの途上国、旧社会主義圏などを、概観する。選択必修の科目であり、経済学、政治学など、ある程度の、基礎的な科目を履修した後の方が理解しやすいと思われる。

学びの意義と目標については、将来、自治体、NGO、JICAや青年海外協力隊で国内、海外の開発プロジェクト、あるいは、身近かなまちづくりを考え、実践していく上での必要な知識を積む一助とする。

準備学習(予習)

小論は場合によって書き直しをお願いします。
指示する基本文献を通読して、基礎的知識を養うこと。

準備学習(復習)

前回の授業をノートを見ながら、簡潔にまとめていただくこと。

授業計画

- 1.1 導入
- 2.2 都市・地域開発研究と経済・社会への視点
- 3.3 世界経済と地域主義
- 4.4 産業集積と都市・地域の発展
- 5.5 流通業の集積
- 6.6 経済のサービス化と国際労働力移動
- 7.7 情報通信技術と産業
- 8.8 欧米の都市化
- 9.9 途上国の都市化
- 10.10 旧共産圏(ソ連・東欧)の都市化
- 11.11 中国の都市化
- 12.12 アジア太平洋地域と日本の地域関係史
- 13.13 日本の地域開発史(戦前)
- 14.14 日本の地域開発史(戦後)
- 15.15 高度経済成長と公害
- 16.16 国土計画と地域間格差
- 17.17 プラザ合意(1985年)と空間の再編
- 18.18 構造調整と大都市
- 19.19 構造調整と地方圏
- 20.20 官から民のまちづくり
- 21.21 地域調査の方法まとめ
- 22.22-6 小論文・レポートの作成方法
- 23.文献調査とフィールド
- 24.質的調査と量的調査
- 25.添削指導、アドバイス
- 26.レポートのまとめ方
- 27.ユーラシアランドブリッジと地域開発
- 28.中露国境地帯の歴史と開発
- 29.豆満江流域の地域開発と安全保障
- 30.総まとめ

教科書

水岡不二雄編 『経済・社会の地理学』(有斐閣アルマ)

評価方法

(1)出席:50% (2)レポート・テスト:30% (3)発表:20%

国際ビジネスの現場 A

担当者：吉田 博司

開講期：春学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週1回 単位数：2単位

講義概要

1. 内容

春学期開講、15コマを複数の講師が講義する、オムニバス方式の講座である。講師はいずれも、戦後の日本経済を牽引した各種基幹産業に勤務し、主に国際ビジネスの現場で活躍した元ビジネスマンである。講義の内容は、講師たちの実務体験に基づいた生々しい仕事の現場の状況や、各講師の勤務した各産業における全体構造の変遷、現状、そしてそれぞれの産業が抱える問題点や、将来の課題などを語る。

また、将来実業界を目指す学生たちに対して、実社会で働く心構えや、ビジネスに対する基本的な考え方など、社会人の先輩としての各講師からのメッセージが送られる。

本講座の続編として、秋学期開講の「国際ビジネスの現場 B」がある。日本の産業界の実像を把握するために、両講座を継続して受講することが望ましい。

2. 学びの意義と目標

本講座で講師たちの語る内容は、分かりやすい現実論である。実社会とはいかなるところか。仕事の現場では、どのようなことが行われているのか。また海外のビジネスの現場は、国内とどのように違うのか。そこで求められるものとは何か。

複数の講師たちが語る様々なメッセージを注意深く聴き、自ら咀嚼し、理解できないところは講師に質問する。講義に対するそのような積極的な態度をとることを通じて、必ずや将来の糧となるものが得られるはずである。

本講座を受講することで、世界に向ける目を養って欲しい。世界は広く、そこには多様、多彩な活躍の場が待っていることを、学んで欲しい。

準備学習(予習)

次回講師の講義テーマに関連し、関心ある事項を調べておくこと。また、講師への質問を準備しておくこと。

準備学習(復習)

初講を除き、各講師は2コマずつ担当する。各講師の1コマ目の講義内容を復習し、疑問点を2コマ目の講義の際に講師に対して質問すること。

授業計画

1. 国際ビジネスを楽しむ。 講師：佐治洋一（元日立製作所）
2. 日本のエネルギー供給を確保する現場1 講師：隈元泰弘（元三菱商事）
3. 日本のエネルギー供給を確保する現場2 講師：隈元泰弘（元三菱商事）
4. 日本製品を世界に売り込む～鉄鋼輸出の場合～1 講師：高崎浩敏（元JFEスチール）
5. 日本製品を世界に売り込む～鉄鋼輸出の場合～2 講師：高崎浩敏（元JFEスチール）
6. 貿易摩擦を乗り越えて～日本の自動車産業が世界をリードするまで～1 講師：佐藤貞義（元本田技研工業）
7. 貿易摩擦を乗り越えて～日本の自動車産業が世界をリードするまで～2 講師：佐藤貞義（元本田技研工業）
8. 国際市場における日本の製造業の特徴1～最大市場中国での競争を中心事例として～ 講師：奥信彦（元コマツ）
9. 国際市場における日本の製造業の特徴2～最大市場中国での競争を中心事例として～ 講師：奥信彦（元コマツ）
10. 消費財・日用品・雑貨のビジネス現場から、国際交流へのヒント1 講師：富田俊彦（元三井物産）
11. 消費財・日用品・雑貨のビジネス現場から、国際交流へのヒント2 講師：富田俊彦（元三井物産）
12. グローバルビジネスのさきがけ～世界を駆ける石油化学製品のトレード～1 講師：眞弓博司（元丸紅）
13. グローバルビジネスのさきがけ～世界を駆ける石油化学製品のトレード～2 講師：眞弓博司（元丸紅）
14. 日本の食糧供給を確保する現場1 世界の食糧需給と諸問題 商社の開発輸入戦略と課題 講師：田内裕（元三井物産）
15. 日本の食糧供給を確保する現場2 世界の食糧需給と諸問題 商社の開発輸入戦略と課題 講師：田内裕（元三井物産）

教科書

プリントを配布する

評価方法

- (1)出席日数による加点減点:10%
- (2)課題レポート提出:90%:7人の講師が、レポート課題提示出席日数がコマ数の2/3未満は評価対象外

国際ビジネスの現場B

担当者：柴田 武男

開講期：秋学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週1回 単位数：2単位

講義概要

1. 内容

秋学期開講、15コマを複数の講師が講義する、オムニバス方式の講座である。講師はいずれも、現在の日本経済を牽引する各種基幹産業に勤務し、主に国際ビジネスの現場で活躍した元ビジネスマンである。講義の内容は、講師たちの実務体験に基づいた生々しい仕事の現場の状況や、各講師の勤務した各産業における全体構造の変遷、現状、そしてそれぞれの産業が抱える問題点や、将来の課題などを語る。

また、将来実業界を目指す学生たちに対して、実社会で働く心構えや、ビジネスに対する基本的な考え方など、社会人の先輩としての各講師からのメッセージが送られる。

本講座は、春学期開講の「国際ビジネスの現場A」の続編である。春学期は主に、戦後経済成長を担った主力産業を取り上げるが、秋学期は比較的新しく台頭し、変貌の只中にある産業を中心に取り上げる。春学期「国際ビジネスの現場A」と本講座を、継続して受講することが望ましい。

2. 学びの意義と目標

本講座で講師たちの語る内容は、分かりやすい現実論である。実社会とはいかなるところか。仕事の現場では、どのようなことが行われているのか。また海外のビジネスの現場は、国内とどのように違うのか。そこで求められるものとは何か。

複数の講師たちが語る様々なメッセージを注意深く聴き、自ら咀嚼し、理解できないところは講師に質問する。講義に対するそのような積極的な態度をとることを通じて、必ずや将来の糧となるものが得られるはずである。

本講座を受講することで、世界に向ける目を養って欲しい。世界は広く、そこには多様、多彩な活躍の場が待っていることを、学んで欲しい。

準備学習(予習)

次回講師の講義テーマに関連し、関心ある事項を調べておくこと。また、講師への質問を準備しておくこと。

準備学習(復習)

初講を除き、各講師は2コマずつ担当する。各講師の1コマ目の講義内容を復習し、疑問点を2コマ目の講義の際に講師に対して質問すること。

授業計画

1. 国際ビジネスに生きる 講師：佐治洋一（元日立製作所）
2. 商社食料ビジネスの現場1 講師：川村勝司（元双日）
3. 商社食料ビジネスの現場2 講師：川村勝司（元双日）
4. 世界を疾走するマネービジネスの現場1 講師：原正則（元三井住友信託銀行）
5. 世界を疾走するマネービジネスの現場2 講師：原正則（元三井住友信託銀行）
6. 地球環境を守るビジネスとは1 講師：村野隆一（元三井物産）
7. 地球環境を守るビジネスとは2 講師：村野隆一（元三井物産）
8. ある消費財メーカーの事業構造大転換1～生き残りを賭けたデジタル革命下における企業戦略とは～講師：坂部正治（元富士フィルム）
9. ある消費財メーカーの事業構造大転換2～生き残りを賭けたデジタル革命下における企業戦略とは～講師：坂部正治（元富士フィルム）
10. グローバルビジネスを下支えする世界物流1 講師：児玉正博（元日本通運）
11. グローバルビジネスを下支えする世界物流2 講師：児玉正博（元日本通運）
12. 日々進化するネットビジネスの現場1 講師：鷹取功（元野村総合研究所）
13. 日々進化するネットビジネスの現場2 講師：鷹取功（元野村総合研究所）
14. グローバル時代の電機メーカーの経営戦略1 講師：木村行裕（元東芝）
15. グローバル時代の電機メーカーの経営戦略2 講師：木村行裕（元東芝）

教科書

授業の中で指示する

評価方法

- (1)出席日数により加点減点:10%
- (2)課題レポート提出:90%:7人の講師が、レポート課題提示出席日数がコマ数の2/3未満は評価対象外

国際法

担当者：山村 恒雄

開講期：秋学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

私たちが生活している社会には、秩序を維持するためにルール（法）が存在する。国内においては、国家の統治機構が特定の目的をもって憲法や民法、刑法などの国内法を制定し執行している。国際社会には国内社会にあるような全体を統治する機構（政府）は存在しないが、国際社会にも、秩序を維持するためのルールが存在する。それが国際法である。

2.学びの意義と目標

この科目では、(1)国際法の基本構造について、(2)国家に関する国際法の規則について、(3)国家の領域に関する基本的な事柄とそれに対する国際法の取り組みについて、などの国際法の基本構造を中心に国際法に対する理解を深めていくことを、目的とする。

準備学習(予習)

初回の講義の際に配布される授業予定表に記載された教科書の該当ページを読むこと。なお、時事問題を解説に利用するので、新聞などによく目を通しておくこと。

準備学習(復習)

授業終了後に配布される復習プリントを完成させ、次回授業時に提出できるようにしておくこと。

授業計画

1. ガイダンスおよび国際社会について
2. 国際法の成立について
3. 国際法の発展について
4. 国際法の位置づけ
5. 国際法の法源について
6. 国際慣習法とは何か
7. 条約とは何か
8. 条約の締結について
9. 国際法の主体は何か
10. 国際法の主体としての国家の成立について
11. 国家の基本的権利について
12. 国家の基本的義務について
13. 国家承継について
14. 国家の領域について
15. 国家の領域に対する権限について
16. 海の制度について
17. 国家の権限が及ばない領域について
18. 宇宙空間の法的地位について
19. 国家の外交関係について
20. 国家の領事関係について
21. 外交使節の特権免除について
22. 領事機関の特権免除について
23. 国際犯罪について
24. 国家責任について
25. 国家責任の成立要件について
26. 国家責任の解除について
27. 戦争と法について(1)
28. 戦争と法について(2)
29. 人権と人道について(1)
30. 人権と人道について(2)

教科書

横田洋三編 『国際法入門 [第2版]』 (有斐閣)

評価方法

(1)期末試験:80% (2)出席平常点:20%

財政学

担当者：正上 常雄

開講期：春学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

カリキュラム上の位置づけ

専門選択科目であり、経済学を履修後、1年次秋～2年次に履修するのが望ましい。

目的

財政は我々の税金にかかわる事柄です。我々はなぜ税金を納めなくてはならないのか、財政は何に使われているのか、財政赤字があると何が起きるのかなど、様々な疑問があると思います。我々にとって身近なようでよくわからない財政、新聞では、ギリシャの財政危機とか日本の税と社会保障の一体改革など財政にまつわる様々なトピックが取り上げられています。現実を理解するには、財政の仕組みと本質を理解しなくてはなりません。

2.学びの意義と目標

この授業ではわかりやすいテキストを使って財政を基礎から学んでいこうと思います。教科書に書いてあることを学ぶだけでなく、現在の財政に関する現実の問題についても色々と議論してみたいと思います。

財政学は公務員試験などでも出題されますので、過去問題などを使いながら、どのような形で出題されているのか学びます。

準備学習(予習)

教科書は初心者向けのやさしいものを選びましたが、もっと詳しい財政についての知識も授業で補完していくつもりです。難しい話はちょっと苦手という人も、まずは教科書を一読してみてください。

準備学習(復習)

授業では教科書に書かれていることだけでなく、公務員試験などにも対応できるように、専門用語の解説なども行うので、ノートやプリントでしっかり復習して下さい。

授業計画

1. 財政とは何か
2. 市場経済と財政
3. 財政の役割
4. 予算と何か
5. 予算のルール
6. わが国の予算の現状
7. 租税とは何か
8. 租税で行うこと、市場で行うこと
9. 公共財
10. 租税のあり方
11. 租税の種類と公平性
12. 社会保障
13. 公共サービス
14. 財政投融资
15. 財政と民主主義
16. 財政と借金
17. 景気と借金
18. 誰から借金しているのか
19. 公債負担論
20. 財政規律
21. 国と地方の財政関係
22. 自治体の財政赤字
23. 自主再建か財政再建団体か
24. 地方分権
25. 社会保険
26. 年金
27. 公的扶助
28. 財政と所得分配
29. これからの財政のあり方
30. 財政と意思決定

教科書

神野 直彦 『財政のしくみがわかる本(岩波ジュニア新書)』(岩波書店)

評価方法

(1)中間試験:40% (2)期末試験:40% (3)平常点:20%
大学の規定に従い、出席率60%以上を単位取得の条件とします。基本的に中間試験と期末試験で評価します。

ジェンダー論(男性学)

担当者：加藤 敦也

開講期：秋学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週1回 単位数：2単位

講義概要

1.内容

女/男という区分は、生物学や医学、脳科学などの説明に還元しきれものではなく、社会的な文脈に応じて意味が変わると考えるのがジェンダー論である。本講義では主に男性のあり方が構築される社会的文脈に焦点を当て、男性ジェンダーの問題について、労働、恋愛/性愛、家族、服装や美の基準といったテーマを事例としながら説明していく。

2.学びの意義と目標

授業の意義と目標は、受講者がジェンダー論を学ぶことにより、性別に関するステレオタイプの発想で生じる諸問題について理解できるようになることである。受講者には、自らが経験している日常生活の様々な場面にジェンダーの問題が深く関わっていることを理解してもらいたい。

準備学習(予習)

ジェンダー研究に関する入門書を読んでおくことよい。また、授業時にも授業を理解する上で参考となる文献を紹介する。

準備学習(復習)

授業時に紹介するジェンダー論、男性学に関連する文献を読み、内容理解を深めて欲しい。

授業計画

1. イントロダクション：ジェンダーとは何か？
2. 性別役割分業：家族、労働の現場における女/男の区分
3. メンズリブ・男性学
4. 「フリーター」、「ニート」、「ひきこもり」と男性性（就労規範と男らしさの関係性）
5. 「肉食系」男子と「草食系」男子：恋愛に関する意識の変化
6. セクシュアリティのあり方（性の二重基準、男性のポルノ消費について）
7. ゲイ/クィアスタディーズ
8. 結婚と男性（お金がないと結婚できない？）
9. 父親としての男性（男性の家事・育児参加について）
10. 男性と暴力その（DV）
11. 男性と暴力その（男男間暴力：教育空間における暴力を中心に）
12. 男らしさの快楽？：向上的理想としての男性性
13. 美しさとジェンダー：美の二重基準とその変化について
14. 女らしさ、男らしさのゆくえ
15. まとめ

教科書

プリントを配布する

評価方法

(1)出席:30% (2)学期末試験:70%
毎回、授業の終わりにコメントペーパーを提出してもらう。優れたコメントペーパーを書いたものには加点して評価する。

自然地理学概説

担当者：秋山 秀一

開講期：春学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週1回 単位数：2単位

講義概要

1.内容

世界の各地ではいろいろな人々が生活基盤となるその土地の自然環境を理解し、土地に根ざして工夫しながら暮らしています。この授業では、日本、アメリカ、そしてスイスを中心としたヨーロッパ諸国における自然を自然地理学の視点から具体的にに取り上げ、学びます。

2.学びの意義と目標

自然地理学の知識を身につけることは、とても大切なことであり、国際理解度を高めることにも大きく寄与します。そのことは卒業後どのような仕事に就こうと、意義があり重要なことです。実際に海外でのフィールドワークを通して得た自然地理の映像、資料、それに書籍、雑誌、テレビ・ラジオ等のメディアとのかかわりの中から、具体的な話をしていきます。

準備学習(予習)

授業内容に関する復習の小レポート、テキストの次回の授業に関する項目を予習し、関連する情報を集めておくこと。

準備学習(復習)

配布プリント、テキストの中で授業中に解説したところを再読し、各トピックについて次回までに説明できるようにすること。

授業計画

1. 導入
2. 地形図を読む
3. 地形を読む
4. 自然地理学と暮らし
5. 地震と暮らし
6. 日本の温泉
7. 世界の温泉
8. 世界の温泉
9. 海岸の地形
10. 砂漠
11. スイスの自然
12. スイスの自然
13. 世界の自然遺産
14. 世界の自然遺産
15. まとめ

教科書

秋山 秀一 『スイス道紀行』(芦書房)

評価方法

- (1)日頃の授業への貢献度:30% (2)出席状況:30%
(3)小レポート、それにまとめとしてのレポート:40%

社会学

担当者：加藤 敦也

開講期：秋学期 必修・選択：必修科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

本講義は社会問題を解釈するための方法論ないし理論枠組みとしての社会学の内容を概観していく。授業では、教科書の内容を、雑誌記事や、テレビドラマ、映画、ニュース番組などの映像を補助資料として用い、日常生活における身近な現象がいかに社会学のテーマとして取り上げられ、どのように社会学の対象領域として説明されるかについて解説していく。また、授業中にテーマに応じて小レポート作成やディスカッションを課すことで、社会学の取り扱う問題を自ら考えることを促す。

2.学びの意義と目標

受講者自身が社会問題を解釈する認知枠組みとして社会的な視点を身につけてもらうことを目標とする。受講者各自はそれぞれ成長してきた過程で問題を解釈する認知の枠組みを身につけてきたはずである。本講義は、その認知のあり方を一つの価値観と見なしながら、その価値観に従うだけでなく、ものごとを社会通念にとらわれず、社会的に理解するための基礎的な知識を身につけてもらいたいと思っている。

準備学習(予習)

授業前の予習としては教科書の該当箇所を読んでおくことが望ましい。

準備学習(復習)

授業後の復習としては講義をまとめた自筆ノートを教科書とあわせて見直すことをすすめる。

授業計画

- 1.社会学とは何か(1)
- 2.社会学とは何か(2)
- 3.社会調査の方法
- 4.家族社会学(1)
- 5.家族社会学(2)
- 6.家族社会学(3)
- 7.地域社会学(1)
- 8.地域社会学(2)
- 9.メディア社会学(1)
- 10.メディア社会学(2)
- 11.階級・階層の社会学(1)
- 12.階級・階層の社会学(2)
- 13.アイデンティティと社会学(1)
- 14.アイデンティティと社会学(2)
- 15.ジェンダーの社会学(1)
- 16.ジェンダーの社会学(2)
- 17.セクシュアリティの社会学
- 18.エスニシティの社会学
- 19.社会運動の社会学(1)
- 20.社会運動の社会学(2)
- 21.教育社会学(1)
- 22.教育社会学(2)
- 23.政治社会学
- 24.相互行為論、社会構築主義
- 25.社会学の歴史：ヴェーバーとデュルケム
- 26.ヨーロッパの現代：ルーマン、ギデンズ、ブルデュー
- 27.日本の社会学史：意味社会学と統合理論
- 28.近代と脱近代(1)
- 29.近代と脱近代(2)
- 30.社会学のまとめ

教科書

宇都宮京子 『よくわかる社会学(第2版)』(ミネルヴァ書房)

評価方法

(1)出席:30% (2)小レポート:30%:授業中に課す (3)定期試験:40%

社会学

担当者：寺田 征也

開講期：春学期 必修・選択：必修科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

この講義では、日常生活で見られる身近な出来事を題材にして、「社会学」という分野について概観します。「自己」「相互行為」「家族」「メディア」などをテーマに、現代社会の問題にたいして「社会学」がどのようにアプローチしているのか、考えていきます。

教科書を中心に、新聞記事や映像作品などをもちいて、社会学的なものの見方、考え方、問いの立て方について講義していきます。また、講義は板書にておこない、授業レポートをとおして講義内容の定着具合をはかります。

2.学びの意義と目標

「社会学」という分野は、自分たちが生きている社会を対象に、その成り立ちや仕組みを関係の視線から明らかにしていくことを目的としています。そこには、特有の概念やものの見方、考え方があります。この講義を通じて、受講生自身が自分の生活について、社会学的な見方と考え方を通じて見直すことができ、社会的な問いを自ら立てることができるようになることが目標となります。

そうした社会的な思考力は、受講生が今後専門科目を学び進めていく上での基本力となります。また、一人の人間として生きていくときの、周囲との関係づくりや仕事を共同的に進めていくときの助けとなります。普段と少し違った見方、考え方を身につけられることが、社会学を学ぶ意義です。講義をつうじて、「社会学」を楽しく学んでください。

準備学習(予習)

教科書の該当箇所をあらかじめ読んで来てください。

準備学習(復習)

教科書、講義ノート、配布資料を読み直してください。

授業計画

- 1.社会学入門
- 2.社会学の考え方
- 3.社会学の歴史(1)
- 4.社会学の歴史(2)
- 5.社会学の理論(1)
- 6.社会学の理論(2)
- 7.自己とアイデンティティの社会学(1)
- 8.自己とアイデンティティの社会学(2)
- 9.相互行為の社会学(1)
- 10.相互行為の社会学(2)
- 11.家族の社会学(1)
- 12.家族の社会学(2)
- 13.地域の社会学(1)
- 14.地域の社会学(2)
- 15.情報とメディアの社会学(1)
- 16.情報とメディアの社会学(2)
- 17.ジェンダーの社会学(1)
- 18.ジェンダーの社会学(2)
- 19.感情の社会学
- 20.医療の社会学
- 21.グローバル化の社会学(1)
- 22.グローバル化の社会学(2)
- 23.階級・階層の社会学(1)
- 24.階級・階層の社会学(2)
- 25.政治の社会学
- 26.社会運動の社会学
- 27.社会調査方法論(1)
- 28.社会調査方法論(2)
- 29.社会調査方法論(3)
- 30.まとめ

教科書

宇都宮京子 『よくわかる社会学』(ミネルヴァ書房)

評価方法

(1)出席:20% (2)授業レポート:20% (3)学期末試験:60%

社会学

担当者：寺田 征也

開講期：春学期 必修・選択：必修科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

この講義では、日常生活で見られる身近な出来事を題材にして、「社会学」という分野について概観します。「自己」「相互行為」「家族」「メディア」などをテーマに、現代社会の問題にたいして「社会学」がどのようにアプローチしているのか、考えていきます。

教科書を中心に、新聞記事や映像作品などをもちいて、社会的なものの方の見方、考え方、問いの立て方について講義していきます。また、講義は板書にておこない、授業レポートをとおして講義内容の定着具合をはかります。

2.学びの意義と目標

「社会学」という分野は、自分たちが生きている社会を対象に、その成り立ちや仕組みを関係の視線から明らかにしていくことを目的としています。そこには、特有の概念やものの見方、考え方があります。この講義を通じて、受講生自身が自分の生活について、社会的な見方と考え方を通じて見直すことができ、社会的な問いを自ら立てることができるようになることが目標となります。

そうした社会的な思考力は、受講生が今後専門科目を学び進めていく上での基本力となります。また、一人の人間として生きていくときの、周囲との関係づくりや仕事を共同的に進めていくときの助けとなります。普段と少し違った見方、考え方を身につけられることが、社会学を学ぶ意義です。講義をつうじて、「社会学」を楽しく学んでください。

準備学習(予習)

教科書の該当箇所をあらかじめ読んで来てください。

準備学習(復習)

教科書、講義ノート、配布資料を読み直してください。

授業計画

- 1.社会学入門
- 2.社会学の考え方
- 3.社会学の歴史(1)
- 4.社会学の歴史(2)
- 5.社会学の理論(1)
- 6.社会学の理論(2)
- 7.自己とアイデンティティの社会学(1)
- 8.自己とアイデンティティの社会学(2)
- 9.相互行為の社会学(1)
- 10.相互行為の社会学(2)
- 11.家族の社会学(1)
- 12.家族の社会学(2)
- 13.地域の社会学(1)
- 14.地域の社会学(2)
- 15.情報とメディアの社会学(1)
- 16.情報とメディアの社会学(2)
- 17.ジェンダーの社会学(1)
- 18.ジェンダーの社会学(2)
- 19.感情の社会学
- 20.医療の社会学
- 21.グローバル化の社会学(1)
- 22.グローバル化の社会学(2)
- 23.階級・階層の社会学(1)
- 24.階級・階層の社会学(2)
- 25.政治の社会学
- 26.社会運動の社会学
- 27.社会調査方法論(1)
- 28.社会調査方法論(2)
- 29.社会調査方法論(3)
- 30.まとめ

教科書

宇都宮京子 『よくわかる社会学』(ミネルヴァ書房)

評価方法

(1)出席:20% (2)授業レポート:20% (3)学期末試験:60%

社会学

担当者：新倉 貴仁

開講期：春学期 必修・選択：必修科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

社会学は、私たちが生きる社会を考える学問である。そのため、自らを問うこと＝反省が要請される。本講義では、受講者が置かれた状況を反省することからはじめたい。すなわち、第一に、大学といった制度、学生という身分、書物というメディアから考えることから出発し、社会学を学ぶための準備をおこなっていく。第二に、社会学の思考の系譜を学び、その思考に込められた方法と、それぞれの思考が生み出された背景となる社会について考察していく(学説史)。第三に、宮沢賢治の童話「銀河鉄道の夜」を素材として、さまざまな社会学の主題群を拾い出し、その内容について、ともに、考えていきたい(概論)。

2.学びの意義と目標

社会学の概要を把握するとともに、社会学的想像力を養う。また、読む、考える、書くことを身につける。

準備学習(予習)

適宜、教科書の該当箇所を指示する。各自にて、読んでおく。

準備学習(復習)

配布したレジュメの内容を確認し、要点について、各自の視点で論じる。

授業計画

1. イントロダクション
2. 社会とはいうけれども
3. 大学とはいかなる制度か
4. 学生とはいかなる存在か
5. 本との出会い方 書物と出版
6. 読むことを学ぶ 書評を書いてみるために
7. 社会学学説史(1) 近代社会の成立
8. 社会学学説史(2) マルクス
9. 社会学学説史(3) デュルケムとヴェーバー
10. 社会学学説史(4) 形式化と反省 文化社会学と知識社会学
11. 社会学学説史(5) 移民と大衆 アメリカ社会学
12. 社会学学説史(6) 福祉国家と多文化社会 カルチュラル・スタディーズ
13. 社会学学説史(7) 消費社会 構造主義とそれ以後
14. 社会学学説史(8) 現代日本社会と社会学
15. 知と権力 「午後の授業」より
16. 複製技術と労働 「活版所」より
17. 家庭、家族、家 「家」より
18. 共同体と疎外 「ケンタウルス祭の夜」より
19. 都市と田舎 「天気輪の柱」より
20. 空間と時間 「銀河ステーション」「北十字とプリオシン海岸」より
21. アイデンティティ 「鳥を捕る人」より
22. 宗教 「ジョバンニの切符」より
23. 贈与 「ジョバンニの切符」より
24. 自己と他者 「ジョバンニの切符」より
25. 子どもと大人 「ジョバンニの切符」より
26. 現実 「ジョバンニの切符」より
27. ジェンダーの社会学
28. 現代社会の社会学
29. 試験
30. 総括討論、レポート講評

教科書

宇都宮京子編 『よくわかる社会学 第二版』(ミネルヴァ書房)

評価方法

(1)出席:40% (2)レポート:30% (3)試験:30%
出席点は、20点を基礎とし、残り20点について、各コマで指示した課題について書いてもらい、その内容によって加点する。

社会学

担当者：新津 尚子

開講期：秋学期 必修・選択：必修科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

この講義は「家族」「地域」「ジェンダー」などについて、社会学的に学ぶことを目的とする。また後半（19回目以降）は社会学の歴史についても学ぶ。授業では教科書を用いて講義を行うほか、小レポート作成など、履修者が自分自身で考える機会を設け、確実に知識を身につけることを目指す。

2.学びの意義と目標

この講義の目標は、毎回の授業を通じて「社会学的な思考を身につける」ことにある。この思考を身につけることによって、「個人的」と思われる問題の中にある社会的な要素や、「社会的」と思われる問題の中にある個人的な要素を理解できるようになる。これにより将来、履修生がさまざまな問題に直面した際、その問題を多角的に考えられるようになるだろう。

準備学習(予習)

予習として教科書の当該箇所を読み、概要をつかんでおくこと。

準備学習(復習)

復習として教科書と講義ノートを見直すこと。不明な点があれば自分で調べたり、質問するなどして解決すること。

授業計画

- 1.社会学とは何か(1)
- 2.社会学とは何か(2)
- 3.家族社会学(1)
- 4.家族社会学(2)
- 5.地域社会学(1)
- 6.地域社会学(2)
- 7.メディア社会学(1)
- 8.メディア社会学(2)
- 9.階級・階層と社会(1)
- 10.階級・階層と社会(2)
- 11.アイデンティティと社会(1)
- 12.アイデンティティと社会(2)
- 13.ジェンダーと社会(1)
- 14.ジェンダーと社会(2)
- 15.国際社会(1)
- 16.国際社会(2)
- 17.社会運動(1)
- 18.社会運動(2)
- 19.社会学の歴史とさまざまな研究:社会学の始まり(1)
- 20.社会学の歴史とさまざまな研究:社会学の始まり(2)
- 21.社会学の歴史とさまざまな研究:デュルケム(1)
- 22.社会学の歴史とさまざまな研究:デュルケム(2)
- 23.社会学の歴史とさまざまな研究:ヴェーバー(1)
- 24.社会学の歴史とさまざまな研究:ヴェーバー(2)
- 25.社会学の歴史とさまざまな研究:マートン
- 26.社会学の歴史とさまざまな研究:パーソンズ
- 27.社会学の歴史とさまざまな研究:シュッツ
- 28.社会学の歴史とさまざまな研究:ブルデュー
- 29.社会学的想像力
- 30.まとめ

教科書

宇都宮京子編 『よくわかる社会学』(ミネルヴァ書房)

評価方法

(1)出席:30% (2)講義内に課す提出物など:30% (3)学期末試験:40%

社会学

担当者：横山 寿世理

開講期：春学期 必修・選択：必修科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

1.内容

教科書、雑誌や新聞の記事、ドキュメンタリー番組を補足資料として用いながら、社会学を広く概観する。講義内容を板書でまとめる形で講義を展開する。また、講義内容の定着を図るため、簡単なコメント・シートの提出を課す。

2.カリキュラム上の位置づけ

この授業は1年次に配当される政治経済学科の専門基礎科目（必修）であり、上位の社会学系専門科目を履修するにはこの科目を修得しておく必要がある。また、コミュニティ政策学科の学生にとっては共通専門科目、他学部の学生にとっては教養科目となる。

2.学びの意義と目標

この講義は、社会学的な視点を身につけることを目標とする。社会学的な視点とは、社会において起きている現象を個人的な問題ではなく、「社会問題」として認識する能力である。良い/悪いといった判断から離れて、常識を疑うという姿勢を身につければ、普段意識されない「社会」「社会の仕組み」を受講者自身が実感できるようになるだろう。

準備学習(予習)

授業前の予習としては教科書の該当箇所を読んでおくことよ。

準備学習(復習)

講義の板書ノートを見直し・作り直すという復習作業を絶えず行うことを勧める。

授業計画

1. 社会学的な視点:予言の自己成就
2. 社会学の誕生
3. 産業社会学(1)
4. 産業社会学(2)
5. 産業社会学(3)
6. 階級・階層の社会学(1)
7. 階級・階層の社会学(2)
8. 階級・階層の社会学(3)
9. メディア社会学(1)
10. メディア社会学(2)
11. メディア社会学(3)
12. 社会調査論(1)
13. 社会調査論(2)
14. 社会調査論(3)
15. 家族社会学(1)
16. 家族社会学(2)
17. 家族社会学(3)
18. ジェンダーの社会学
19. セクシュアリティの社会学
20. 行為論
21. 相互行為論
22. アイデンティティの社会学(1)
23. アイデンティティの社会学(2)
24. アイデンティティの社会学(3)
25. 歴史の社会学:マルクス
26. 歴史の社会学(1):ヴェーバー
27. 歴史の社会学(2):ヴェーバー
28. 記憶の社会学
29. 理論社会学
30. まとめ

教科書

宇都宮京子『よくわかる社会学(やわらかアカデミズム・わかるシリーズ)(第二版)』(ミネルヴァ書房)

評価方法

- (1)期末試験:40%
- (2)講義内課題:60%:各テーマごとにコメントの提出を課す。

社会思想

担当者：土方 透

開講期：秋学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

社会とはいかなるものか。それは個人といかなる関係にあるか。本講義では、社会を定式化する諸説の紹介とともに、それらを可能にする学問的基盤を反省的に問う。さらに、このようにして定式化された見地によって、アクチュアルな問題がいかに取り扱われるか、現実の社会問題に言及しつつ、その様態を描出する。

2.学びの意義と目標

受講生の批判的推察力と、自ら社会を構成する主体としての意識を惹起したい。

準備学習(予習)

講義の進行がその積み重ねを前提としているため、毎回の講義で確認された事項を、受講者において次回の講義までに確認してくる作業が予習として求められる。

準備学習(復習)

講義で展開された議論を、身近なところに応用し、教室での学びを自分の問題として受け取る訓練をすること。

授業計画

1. 社会を観る目
2. 社会を観る目
3. 定式化の諸前提
4. 定式化の諸前提
5. 個と全体
6. 個と全体
7. 根拠
8. 根拠
9. 弁証法
10. 弁証法
11. 国家と個人
12. 国家と個人
13. 組織と個人
14. 組織と個人
15. 官僚制
16. 官僚制
17. 形式合理性
18. 形式合理性
19. 多元主義
20. 多元主義
21. 対話の理論
22. 対話の理論
23. ポストモダン
24. ポストモダン
25. 時事問題の検討1:国内
26. 時事問題の検討2:国内
27. 時事問題の検討1:国際
28. 時事問題の検討2:国際
29. 総括 1
30. 総括 2

教科書

授業の中で指示する
適宜、指示ないし配布する。

評価方法

(1)出席:30% (2)テスト:40% (3)レポート:30%

社会政策

担当者：金子 良事

開講期：春学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

社会政策は治安政策という性格からスタートし、徐々に福祉政策という性格を加えていきました。治安政策とは社会を安定的に維持させるという意味です。福祉とは「しあわせ」という意味で、福祉政策は多くの人の幸せを実現するための手伝いをするという意味がありました。この講義では、歴史的な社会政策の展開を学びながら、現代の日本社会が抱える問題、あるいはこれからどういう方向に向かっていけばいいのか、ということとそれぞれが考えるきっかけを作って行きたいと思います。

2.学びの意義と目標

歴史というのは古いことを知るだけでなく、現在を知る手段です。本講義ではいろいろな考える材料やその方法を提供しますので、そういうものを少しでも自分のものにして、考える習慣を身につけることを目標とします。

準備学習(予習)

予習を課すことはしません。自分の求めるものを行ってください。勉強方法についての相談があれば、講義の後に質問したり、メール等を利用してください。

準備学習(復習)

復習を課すこともしません。理由は予習と同様です。

授業計画

1. イントロダクション
2. 社会政策とは何か
3. 国家と社会
4. 国家と社会
5. ジェンダー
6. ジェンダー
7. 日本における社会政策の黎明
8. 日本における社会政策の黎明
9. 日本における社会政策の黎明
10. 日本における社会政策の黎明
11. 戦間期における労資関係
12. 戦間期における労資関係
13. 戦時社会政策
14. 戦時社会政策
15. 戦時国家と福祉国家
16. 戦時国家と福祉国家
17. 協調的な労使関係の成立
18. 協調的な労使関係の成立
19. 戦後の社会保障
20. 戦後の社会保障
21. 福祉国家の諸類型
22. 福祉国家の危機
23. 医療制度
24. 医療制度
25. ボランティア
26. ボランティア
27. 社会哲学
28. 問題演習とその解説
29. 社会哲学
30. 試験

教科書

プリントを配布する

評価方法

(1)テスト:100%
持ち込み不可です。ただし、事前に問題演習をやりませ

社会調査の実際

担当者：古谷野 亘

開講期：秋学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週1回 単位数：2単位

講義概要

1.内容

高齢者に関する調査研究の実例を用いながら、社会調査を行うにあたって必要な技術の説明と、社会科学研究方法としての調査の意義と限界について論じる。

2.学びの意義と目標

調査の意義と技術について理解する。

準備学習(予習)

授業はおおむね教科書の通り進むので、次回の部分を読んでおくとうい。

準備学習(復習)

科目の性格から積み重ねが特に必要なので、休まずに授業に出席し、復習することが必要。

授業計画

1. 社会現象の法則性
2. モデル
3. 変数
4. 測定と尺度
5. サンプリング
6. データ収集の方法
7. 調査票の作成と質問文 (1)
8. 調査票の作成と質問文 (2)
9. 統計処理の目的
10. 1変数の分析
11. クロス表と関連度の係数
12. 相関係数, 回帰係数
13. 推定
14. 検定
15. 調査結果のまとめ方

教科書

古谷野 亘, 長田 久雄 『実証研究の手引き 調査と実験の進め方・まとめ方』(ワールドプランニング)

評価方法

(1)筆記試験:50% (2)レポート:20% (3)出席点:30%

社会調査論

担当者：横山 寿世理

開講期：秋学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

1. 講義の内容

社会調査とは、社会現象を明らかにすることを目指した手段であり、この科目ではその方法を学ぶ。数的なデータを中心的に使うことになるが、私たちの日常も多くの調査（世論調査や意識調査など）に覆われている。それらの調査の問題点を知っておくことは重要だろう。具体的には、量的調査（アンケート調査）の実施方法とその集計・分析方法を習得することを目指す。また、ただ調査手法を学ぶだけでなく、受講者を調査対象者として、実際に社会調査を模擬的に実施して、集計・分析もしてみたい。

2. カリキュラム上の位置づけ

この授業は、全学年の学生を対象とした政治経済学科の専門科目である。政治経済学科の学生がこの科目を履修するには、社会学を修得している必要がある。

2. 学びの意義と目標

卒業研究や卒業論文執筆のために、アンケート調査を実施できるようにすることを目標とする。また、社会調査はたった一人で行うものではなく、他のメンバーと協力することが必要となるため、他者との協調性を身につけるという意義もあるだろう。

準備学習(予習)

本講義全体が1つの社会調査実習でもあるため、今日の講義で求められること、今日の講義が全体の中のどの位置にあるのかを予想してこることが必要となる。

準備学習(復習)

講義内で課された課題は、次回までにもう一度取り組んでおく必要がある。

授業計画

1. 導入
2. 社会調査とは何か
3. 調査結果の解釈（1）：いろんな社会調査の例を知る
4. 調査結果の解釈（2）：謝意調査の意義を知る
5. 社会学と社会調査（1）：客観的な論証とは？
6. 社会学と社会調査（2）：『自殺論』から社会調査を考える
7. 社会学と社会調査（3）：社会調査の戦略
8. 社会調査にできること（1）：調査結果から仮説を考える
9. 社会調査にできること（2）：検証できる仮説とは？
10. 社会調査にできること（3）：仮説と調査結果のまとめ
11. 社会調査にできること（4）：仮説と変数との関係
12. 社会調査にできること（5）：変数と質問文との関係
13. 社会調査にできること（6）：質問文の作り方
14. 調査票を作る：調査テーマと仮説を考える【グループ】
15. 調査票を作る：仮説と質問文・回答を考える【グループ】
16. 調査票を作る：プリテストの完成（宿題あり）
17. 集計方法を学ぶ：エディティングとコーディング
18. プリテスト結果の確認と調査票の修正【グループ】
19. 実査
20. エディティングとコーディング【グループ】
21. 実査結果の集計（転記）【グループ】
22. 単純集計
23. クロス集計
24. 集計結果の分析（1）
25. 集計結果の分析（2）
26. 集計結果の分析（3）
27. 集計結果分析の講評とここまでの復習
28. 標本抽出の方法と問題点
29. もう少し深い分析をするための方法
30. まとめ

教科書

プリントを配布する

評価方法

(1)講義内課題:60% (2)期末試験:40%
講義内での課題の結果によって、評価を行う。このため、出席点は設けない。ただし、課題提出日にだけ出席しても課題はできないため、恒常的な出席が重要になる。詳細な配点については、講義およびmoodleで確認して欲しい。

情報メディア史

担当者：若松 昭子

開講期：秋学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週1回 単位数：2単位

講義概要

1.内容

情報メディアの変遷と歴史を概観し、それらの変化が人々の知的活動や社会の状況にどのような影響を与えてきたかを考える。また、知識の体系化を担う図書館が、「知識は一部の人の所有物」という考え方から、「知識は万人の公共財産」という理念に向かって、どのような展開をとげてきたのかを各時代の社会的状況や文化的役割との関わりで考察する。

2.学びの意義と目標

情報メディアの歴史と変遷は人間の思考パターンやコミュニケーションのあり様をどのように変化させたのか、また様々なメディアを収集・保存し、利用に供する市民のための図書館はどのような発展を経たのかなどに注目し、メディアと人間のかかわりについて理解を深める。

準備学習(予習)

教科書に目を通し、課題をきちんとこなすこと。

準備学習(復習)

授業内容の理解に努め、与えられた課題をきちんとこなすこと。

授業計画

1. 情報メディア史の意義
2. 文字・記録のはじまり
3. 粘土板と古代の図書館
4. パピルスからパーチメントへ
5. 中世の書物文化と修道院図書館
6. 大学の誕生と書物
7. 印刷術の発明と普及
8. 読書様式の変化
9. 国家形成と国立図書館
10. コーヒーハウスと貸本屋
11. 公共図書館の誕生
12. コンピュータと図書館
13. 日本の図書館と書物文化(1)
14. 日本の図書館と書物文化(2)
15. まとめとディスカッション

教科書

ブリュノ ブラセル, 荒俣 宏, Bruno Blasselle, 木村 恵一 『本の歴史(「知の再発見」双書)』(創元社)

評価方法

(1)試験:50%:試験に代わるレポートあり(2)小課題:20%(3)授業参加状況:30%:授業態度、授業への取り組みや、ディスカッション時の積極性など
毎回の出席は前提であり、遅刻や欠席は大幅な原点となる

人文地理学概説

担当者：飯島 康夫

開講期：春学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週1回 単位数：2単位

講義概要

1.内容

人文地理学の基本的な考え方を紹介し幅広い分析の視角を提供する。一般に地理学は総合的な科目といわれる。ある地域のことを理解するためにはその地域の自然地形、気候・風土とそれらから派生する生活様式、また政治や経済の制度、歴史や文化という知識を総動員させなければその実態が理解できない。

この講義は地理学に関係する隣接科学の諸分野（経済や政治、歴史など）をバランスよく配分することに配慮したが、特に世界経済の進展のなかで諸地域がいかなる空間の形成を伴って発展するのかという問題に関心を置いた。本講義は人文地理学の発展過程とそれに伴って生じた諸問題を紹介したうえで制度や歴史、文化的背景の違いのなかで生じる諸都市・地域の発展形態の違いに焦点をあてる。本講義の参加者が諸都市・地域の現象面に埋没することなくその背後にひそむ、より本質的な空間形成の仕組みと地域ごとの差異について理解するよう工夫してみた。

2.学びの意義と目標

地理学の基礎を学び、現実の地域の調査ができるようになることが望ましい。既存の文献ではなく、自分で判断、分析できるようになること。

準備学習(予習)

教科書に書かれていることを指定したところを事前に読んで理解しておくこと。

準備学習(復習)

前の講義のノートを見て、学んだことを簡潔にまとめること。

授業計画

1. 地理学の発展史
2. 地理学と隣接科学との関係
3. 新古典派地理学のアプローチ
4. 行動・組織論、人文主義のアプローチ
5. マルクス主義的地理学のアプローチ
6. 人文地理の思想
7. 情報ネットワークと空間編成
8. 地域間格差
9. 政治経済システムと都市の空間編成
10. 製造業の空洞化と都市・地域経営
11. 経済のサービス化と都市・地域の空間編成
12. グローバリゼーションと都市・地域政策
13. レポートの添削・指導
14. レポートの書き方、伝え方、プレゼンテーションの方法
15. 総まとめ

教科書

ピーター・ディッケンほか『立地と空間 上』(古今書院)

評価方法

- (1)出席:50% (2)レポート・小テスト:30% (3)発表:20%
- 1.基準に満たない提出物は再提出させる場合がある
 - 2.調べ方、書き方を学んでください
 - 3.極端に出席回数が少ない場合、評価対象外とする
 - 4.基本文献を指示するので、基礎知識を養うこと

担当者：小畑 俊太郎

開講期：秋学期 必修・選択：必修科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要**1.内容**

日本では現在、社会構造が大きく変化するなかで、意志決定システムとしての政治制度のあり方も根底から問い直されてきている。日本を含めて現代の多くの国で採用されている政治体制は、一般的に「自由民主主義」と言われる。それは、制度の体系であると同時に理念の体系でもある。本講義では、その思想的基盤と制度的構造を検討することによって、「自由民主主義」についての理解を様々な角度から深めていく。

2.学びの意義と目標

政治学の基礎的な理論や概念を理解することで、最終的には、政治をめぐって自分なりの課題を発見し、主体的に判断することの出来る教養を身につけることを目標としている。

準備学習(予習)

授業で扱う予定のテーマについて、事前に新聞や著作などでよく調べておくこと。

準備学習(復習)

配布したプリントと授業中にとったノートをよく再読すること。

授業計画

1. 政治とは何か(1):権力
2. 政治とは何か(2):公共善
3. 自由主義(1):生命と財産の自由
4. 自由主義(2):思想と信仰の自由
5. 自由主義(3):権力の分立
6. 直接民主主義(1):民主主義の起源
7. 直接民主主義(2):ポリスの政治
8. 直接民主主義(3):人民主権論
9. 代表制民主主義(1):二つの代表観
10. 代表制民主主義(2):保守主義
11. 代表制民主主義(3):功利主義
12. 自由民主主義(1):大衆社会の自由
13. 自由民主主義(2):自由と陶冶
14. 現代の自由民主主義
15. 中間試験
16. 政治制度(1):大統領制
17. 政治制度(2):議院内閣制
18. 政治制度(3):日本の議院内閣制
19. 官僚制(1):官僚制の合理性と非合理性
20. 官僚制(2):公務員任用制度
21. 官僚制(3):日本の行政改革
22. 政党制(1):政党の構造
23. 政党制(2):政党制の諸類型
24. 政党制(3):日本の政党政治
25. 利益団体(1):利益団体の意義と限界
26. 利益団体(2):利益団体政治の条件
27. マス・メディア(1):メディアの影響力
28. マス・メディア(2):テレビ報道と政治
29. マス・メディア(3):インターネットと政治
30. まとめ

教科書

プリントを配布する

評価方法

(1)出席:30% (2)中間試験:30% (3)期末試験:40%

政治学

担当者：高橋 愛子

開講期：春学期 必修・選択：必修科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

現実の政治的な課題、諸現象について、歴史的に捉える視座（座標軸）、自分で考える基本的な力を身につけることを目的とする講義である。今日の歴史的な位置としては、1945年の「敗戦」から始まった「戦後政治」が国際社会における「冷戦終結」、国内における「政界再編」という転換点を経て新たな国際秩序、国内秩序を模索する過渡期であると同時に、21世紀という新たな時代の方向付けをめぐる分岐点でもある。こうした「現在（についての）認識」に立ち、現代の「文脈」（コンテキスト）の中でさまざまな政治課題・現象を「政治学的に」考察するとはどのようなことを学ぶことを目的とする。つまり、「政治学」の概念、理論を学ぶだけでなく、「政治現象」を「週刊誌的に」「ワイドショー的に」取り上げるのとは異なる「政治学的な考察」とは何か、という点を、できる限りリアルタイムな時事問題を素材としてつつ考えてゆく。

<カリキュラム上の位置づけ>政治学を学ぶための入門的な講座であり、かつそのための基礎的な概念、理論を学ぶ講座である。

2.学びの意義と目標

- 1) 政治学とはどのような学問であるかを理解する。
- 2) 基本的な概念、「権力」「合法性」「正当性」「公益」などの概念を理解する。
- 3) 現実の政治現象について、「政治学的に」考察する資質を学ぶ。

準備学習(予習)

各回の授業の際に配布されるペーパーを予めよく読んでくること。

準備学習(復習)

授業で取り上げた課題についてのコメントシートに記入し、各回の授業の基本概念をよく理解する。

授業計画

1. 導入:政治学とは何か(1)
2. 導入:政治学とは何か(2)
3. 現代における政治:全面的政治化の時代(1)
4. 現代における政治:全面的政治化の時代(2)
5. 政治にとっての文脈としての歴史(1)
6. 政治にとっての文脈としての歴史(2)
7. 政治にとっての文脈としての歴史(3)
8. 政治にとっての文脈としての歴史(4)
9. 政治にとっての文脈としての歴史(5)
10. 政治にとっての文脈としての歴史(6)
11. 政治の場としての国会(1)
12. 政治の場としての国会(2)
13. 政治の場としての自治体(1)
14. 政治の場としての自治体(2)
15. 政治における主体(1)
16. 政治における主体(2)
17. 合法性と正当性(1)
18. 合法性と正当性(2)
19. 公益とは何か(1)
20. 公益とは何か(2)
21. 公益とは何か(3)
22. メディアリテラシー(1)
23. メディアリテラシー(2)
24. メディアリテラシー(3)
25. 民主主義と選挙(1)
26. 民主主義と選挙(2)
27. 民主主義と教育(1)
28. 民主主義と教育(2)
29. 一学期間のまとめ:復習
30. 一学期間のまとめ:今後の政治学の学びに向けて

教科書

授業の中で指示する

評価方法

(1)出席:40% (2)新聞レポートの提出:30% (3)ブックレポート:30%

政治学

担当者：松尾 秀哉

開講期：春学期 必修・選択：必修科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

1)内容
政治学の基本的な概念を理解する授業です。
後半は色々な具体的な問題を取り上げ、政治の課題を考えます。

2)カリキュラム上の位置づけ
国際政治学、比較政治学などより専門的な授業を理解するために必要な概念を理解する基礎的授業。
具体的な社会・政治の問題を政治学的に分析する力を養う。

2.学びの意義と目標

・公務員試験の「政治学」の問題集に(基礎的な解説を読むことなく、問題解答に)入ることができる。
・レポートなどを通じて自分の考えを他者に発信することができる。

準備学習(予習)

特に後半は、指定された参考文献、教科書の部分を予め読んで質問をはっきりさせること。配布したプリントは復習すること(単元ごとに小テストを行う)。

準備学習(復習)

前半はwebを通じて、毎回の単元について復習を行い提出する。詳しくは授業で説明する。

授業計画

1. 導入
2. 基本理念(1) 政治(学)とは
3. 基本理念(2) 政治と権力
4. 基本理念(3) デモクラシーとは
5. 基本理念(4) リベラリズムとデモクラシー
6. 基本理念(5) ファシズムと社会主義
7. 基本理念(6) 他の重要理念
8. 基本理念(7) エリート理論とリーダーシップ論
9. 基本理念(8) 国民国家とは何か
10. 政治の場(1) 三権分立の諸制度
11. 政治の場(2) 各国の基本政治制度
12. 政治の場(3) 日本の政治制度
13. 政治の主体(1) 政党
14. 政治の主体(2) 政党システム
15. 政治の主体(3) マスコミと利益団体
16. 政治過程(1) 選挙とは
17. 政治過程(2) 選挙制度の相違
18. 政治過程(3) 官僚と地方自治
19. 福祉国家を考える(1) 福祉国家とは
20. 福祉国家を考える(2) その変化
21. 民主主義の変容(1) 多数決は正しい?
22. 民主主義の変容(2) 決定か熟議か?
23. 国民国家の変容 ベルギー(1)
24. 国民国家の変容 ベルギー(2)
25. 和解の政治学へ(1) 政治学と和解
26. 和解の政治学へ(2) 民族問題と和解
27. 和解の政治学へ(3) 民族問題と和解
28. 和解の政治学へ(4) 福祉国家と和解
29. 和解の政治学へ(5) 歴史認識と和解
30. まとめ

教科書

松尾・臼井 『紛争と和解の政治学』(ナカニシヤ出版)

評価方法

(1)リアクションペーパー:20% (2)Web 復習:30% (3)レポート:20%
(4)期末試験:30%
授業への積極的な参加で加点する

政治学

担当者：森 達也

開講期：春学期 必修・選択：必修科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

<テーマ> 政治の基礎知識 / 政治学の基礎
政治という言葉は、私たち自身が当事者であるところの多様な問題を認識し、討議し、意思決定する営みを意味します。そして政治学は、私たちが日々の政治問題を理性的に考え、解決し、判断するのに役立つ道具箱であると同時に、政治という営みそれ自体を批判的に理解するための手段であると言えます。本講義ではまず政治学の基本的な考え方を学び、現代政治の基礎知識を習得しながら、政治学内部の各テーマを順に考察していきます。

2.学びの意義と目標

政治学がどのような学問領域であるのかを理解すること。身近な問題を政治(学)的に捉え、それに意見を表明し、他者と議論することができるようになること。

準備学習(予習)

配布プリントを各自でできるかぎり完成させ、次回の講義に備えること。

準備学習(復習)

授業で扱った範囲の教科書・プリントの内容を習得して小テストに備えること。

授業計画

1. 講義の概要と趣旨の説明
2. 政治学とは何か(教科書序章)
3. 民主主義の基本原則(プリント)
4. 政治とは何か(教科書第1章)
5. 各国の政治体制(プリント)
6. 政治体制・比較政治制度論(教科書第2章)
7. 国会の仕組み(プリント)
8. 現代政治学の歴史(教科書第11章)
9. 内閣と行政機構(プリント)
10. 政治過程論(教科書第4章)
11. 現代政治の特質と政党(プリント)
12. 政党・圧力団体・メディア(教科書4・6章)
13. 財政と税(プリント)
14. 政策決定論(教科書第5章)
15. 貨幣・金融と日銀の役割(プリント)
16. 中間試験
17. 映像で見る政治(1)
18. 映像で見る政治(2)
19. 資本主義 / 社会主義経済(プリント)
20. 政治と経済(教科書第3章)
21. 日本の社会保障制度(プリント)
22. 福祉資本主義レジーム論(教科書第3章)
23. 労働問題と労働市場の変化(プリント)
24. 福祉国家の危機と再編(教科書第3章)
25. 国際社会と国際法(プリント、教科書第9章)
26. 国際機関(プリント)
27. 冷戦と核兵器の問題(プリント、教科書第9・10章)
28. ナショナリズムと民族問題(プリント、映像)
29. 地球環境問題(プリント、教科書第10章)
30. 総括

教科書

加茂利男ほか著 『現代政治学 第4版』(有斐閣)

評価方法

(1)中間試験:35%:論述問題を含む (2)最終試験:35%:論述問題を含む
(3)授業内課題:30%:小テスト・コメントシート

政治学

担当者：森分 大輔

開講期：秋学期/春学期 必修・選択：必修科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

1.内容

本コースでは、政治的論議において用いられる基本的な概念および、用語の検討を行う。時には、概念的に、時には分析的に、さらには特定の理論家の検討もそこには含まれる。

2.カリキュラム上の位置づけ

政治学の入門講座として政治学を学ぶ上での基本的な知識を提供する。

2.学びの意義と目標

転換期に生きる我々にとって、これらの概念の再検討は避けては通れない。なぜなら、多くの重要な政治的決定が、これらの用語を用いて説明されるからである。したがってコース参加者にはこれら概念を用いた議論が可能になることが目指される。

準備学習(予習)

政治学に対する専門的な知識を必要とはしないが、それらに関する積極的な関心を抱いていることが望ましい。1日15分~1時間程度のニュースの視聴が必要である。

準備学習(復習)

講義後1時間程度の復習をすることを求める。加えて、授業内で示された関連テーマに関する書籍を購読することが望ましい。

授業計画

1. 政治学とは何か1
2. 政治学とは何か2
3. 人間の権利と民主主義について1
4. 人間の権利と民主主義について2
5. 国家の機能1
6. 国家の機能2
7. 国家の機能3
8. 政党1
9. 政党2
10. 政党3
11. 圧力団体1
12. 圧力団体2
13. 圧力団体3
14. 官僚制1
15. 官僚制2
16. 官僚制3
17. 政治的リーダーシップ1
18. 政治的リーダーシップ2
19. 政治的リーダーシップ3
20. 地方自治と政治構造1
21. 地方自治と政治構造2
22. 地方自治と政治構造3
23. 住民参加と参加型民主主義1
24. 住民参加と参加型民主主義2
25. 住民参加と参加型民主主義3
26. 政治の担い手に関する考察1----世論
27. 政治の担い手に関する考察1----ジャーナリズム
28. グローバル化と政治1
29. グローバル化と政治2
30. まとめ

教科書

授業の中で指示する

評価方法

(1)出席:40% (2)中間レポート:30% (3)期末テスト:30%

政治過程論

担当者：高橋 愛子

開講期：秋学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

政治学の学問史のなかにおける「政治過程論」の史的位置づけ・特徴について考察し、その後、各論をテキストを参考にしながら学んでいく。基本的なテキストとして下記の教科書を使い、必要に応じて資料を配布する。リアルな政治現象への認識を得るため新聞やニュース映像を適宜使用する。受講者は、政治にかかわる新聞記事のスクラップに各自のコメントを付したコメント・シートの提出が課せられる。<カリキュラム上の位置づけ>必修の専門基礎科目「政治学」修得済みの学生が、政治過程に」についてより専門的に学ぶための科目である。

2.学びの意義と目標

本講義の狙いは以下の三点である。第一に、政治現象の分析や考察において不可欠かつ主要な位置を占める「権力（power）」概念の多面的な学びを通して、政治プロセスの各局面で「権力」がどのように作用しているかを考察すること、第二に、政策決定過程の全体像についての概観を得ること、そして第三に、政策決定の各プロセスの中に潜む様々な問題が私達にとってどのような「意味」を持っているかを考えることである。

準備学習(予習)

予め配布するペーパーあるいは教科書の該当箇所を読んでくること。

準備学習(復習)

授業のポイントについてのコメント・シートの作成、提出。

授業計画

1. 導入:講義計画の説明
2. 導入:政治過程論とはどのような学問か
3. 大衆社会の登場
4. 大衆社会における人間
5. 大衆社会の帰結
6. 大衆社会における人間観の変化
7. E . フロム『自由からの逃走』
8. さまざまな権力観（1）
9. さまざまな権力観（2）
10. さまざまな権力観（3）
11. 政策決定過程と課題設定過程（1）
12. 政策決定過程と課題設定過程（2）
13. 政治システム論（1）
14. 政治システム論（2）
15. 中間テストまでのまとめ
16. 中間テスト
17. 政治文化論（1）
18. 政治文化論（2）
19. 政治的社会化
20. 脱物質主義的価値観
21. 人間関係資本
22. 組織による決定（1）
23. 組織による決定（2）
24. 議会と立法過程（1）
25. 議会と立法過程（2）
26. 利益集団とNGO（1）
27. 利益集団とNGO（2）
28. 選挙制度と政治参加（1）
29. 選挙制度と政治参加（2）
30. 一学期間のまとめ

教科書

伊藤光利・田中愛治・真淵勝『政治過程論』（有斐閣）

評価方法

(1)出席:40% (2)中間テスト:30% (3)期末テスト:30%

政治経済学特論 A(企業経営を考える)

担当者：金子 毅

開講期：秋学期集中 必修・選択：選択科目 授業回数：週1回 単位数：2単位

講義概要

1.内容

経営とは「人、モノ（金を含む）、情報の効果的活用のための技術とこれが実践される市場の適切な管理」を指し、ことに平成不況に加え、3.11以後の過酷な状況にあえぐ今日ほど創発的な知を有する人間像が企業社会において求められている時代はなかるう。これには日本という対象地と企業の考え方の源を、経営者たちの視点のみならず、彼らを取り巻く時代と「文化」の在り方を通して知る、すなわち「経営文化論」の視点が不可欠となるう。したがって講義は机上に限らず、街にも出て、経営者たちの生き残り戦略の様相を学生自らの目で捉えるべくフィールドワークを実施することにしたい。

2.学びの意義と目標

本講義は「経営学の可能性」と連動したものであり、先行き不透明な世界情勢を透視し、自らの生き抜きのための実践的な学知を養う問題解決型の科目である。

準備学習(予習)

事前に配布プリントを「音読」しておくこと。自分で「読みながら聞く」作業が理解の早道である。

準備学習(復習)

配布プリントの下線など強調部分を講義時の説明の事例に照合しながら読むことが、疑問点を整理する早道です。

授業計画

1. プロローグ：フィールドワークでビジネスチャンスを見出そう
2. 経営学で「文化」を学ぶのはなぜ？
3. 文化に見る企業の原理とは？
4. 企業経営者たちはなぜ司馬遼太郎の小説にはまるの？
5. 社会人になるってどういうこと？
6. スーツに身を固め満員電車で耐えながら通勤するのはなぜ？
7. 社員が給料や地位にこだわるのはなぜ？
8. 経営者がスポーツを奨励するのはなぜ？
9. 社員が企業に献身的な奉仕をしてきたのはなぜ？
10. 街に出かける前に：サイレントフィールドワークって？
11. さあ、街に出かけよう：フィールドワーク 1
12. フィールドワーク 2
13. フィールドワーク 3
14. フィールドワーク 4
15. エピローグ：討議より考える企業経営の新たな可能性

教科書

プリントを配布する
プリントは毎回配布。A 3で2枚程度の分量。

評価方法

(1)レポート:70% (2)出席点:10% (3)参加姿勢:20%

担当者：金子 毅

開講期：春学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週1回 単位数：2単位

講義概要**1.内容**

1：内容

一般に、経営とは「人、物（金を含む）、情報の効率的な活用に向けた技術とそれが行なわれる場（市場）の適正な管理」とされるが、平成不況下で実施されてきた強引なリストラや派遣切り、これに追い打ちをかけるかのように発生した3・11以後の過酷な現状ほど、人間という本質の立脚点へと立ち返らせる学としての可能性を秘めた経営学の意義を露わにしたのはかつてなかったといえよう。講義では学生たちがやがて直面する「就職」を念頭に置き、「経営管理」と「労務管理」をテーマに幾つかの事例を取り上げることにはしたい。創発的な知性を秘めた人間開発の学としての「可能性」はその延長上にこそ存在すると考えられるからである。

2.学びの意義と目標

本講義は「企業で働く、仕事をする」未来の自己が必ず対面するであろう立ち位置を理解し、そこから今後の不透明な世界情勢を透視し、かつ生き抜く上での学知を獲得させることを目標とするもので、「企業経営を考える」と連動する科目である

準備学習(予習)

事前に配布プリントを「音読」し、「読みながら聞く」ことの反復を通して、主体的に学ぶ姿勢をつくっておくことが望ましい。

準備学習(復習)

下線などの強調部分と関連部の説明の際に触れた事例との関連を頭に入れながら再度「音読」するとともに授業時に挙げた参考文献をあわせて読むと理解が深まる。

授業計画

1. プロローグ:「経営学」の考え方
2. 経営管理 1:企業経営の形態 1 (仕事観の相違)
3. 経営管理 2:企業経営の形態 2 (欧米的な資本主義)
4. 経営管理 3:企業経営の形態 3 (日本の資本主義)
5. 経営管理 4:企業戦略とその立て方 1 (企業戦略とは?)
6. 経営管理 5:企業戦略とその立て方 2 (環境を踏まえた戦略)
7. 経営管理 6:消費者志向のマーケティング(売れるものを作れ)
8. 経営管理 7:イノベーション(継続性のあるものを発明せよ)
9. 労務管理 1:社員教育 1 (OJT, Off J TとQC管理)
10. 労務管理 2:社員教育 2 (仕事における三面等価)
11. 労務管理 3:安全活動 1 (労災へのリスク管理)
12. 労務管理 4:安全活動 2 (ヒヤリハットとKY, KYT)
13. 労務管理 5:安全活動 3 (リスク・センスを鍛える)
14. 労務管理 6:キャリア・デザイン (働く将来像を設計してみよう)
15. エピローグ:先輩の就職活動から、および総括としての可能性

教科書

授業の中で指示する
プリントは毎回配布。A3形式で2枚程度の分量。

評価方法

(1)レポート:70% (2)出席点:10% (3)参加姿勢:20%

政治経済学特論 A (地方財政の探究)

担当者：谷 達彦

開講期：春学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週1回 単位数：2単位

講義概要

1.内容

学校教育、道路、警察、消防、ゴミの回収など、地域住民の暮らしに身近な公共サービスは地方財政を通じて供給されている。地方財政は日々の暮らしに密接に関わっているが、中央集権的な財政システムの下で地方自治体の財政運営に住民のニーズが反映されにくいなどの課題も抱えており、地方分権改革が求められている。

少人数ゼミ形式で行う本授業では、地方財政に関する文献の輪読・議論を通じて、日本の地方財政のしくみや特徴、直面する課題、改革の方向性などについて学習する（輪読文献は受講者と相談のうえ決定する）。また、地方財政に関するテーマを自分で設定し、レポートを作成する。レポートの作成方法や発表の仕方についても学んでいく。

2.学びの意義と目標

地方財政のあり方は住民の暮らしに深く関わっている。そのため、地域社会を支える住民の1人として、自分の住んでいる自治体の財政状況を知り、そのあり方を考察する能力を身につけることは重要である。本授業では地方財政に関する文献の輪読を通じて、地方自治体の財政のしくみや直面している課題などについての理解を深め、自分なりの問題意識を持てるようになることを目標とする。

また、本授業は少人数のゼミ形式で行われ、文献の読み方やレジュメの作り方、プレゼンテーションや議論の仕方、レポートの作成方法についても身につけることを目標としている。これらの能力は大学での学習において必須であるだけでなく、社会に出てからも様々な場面で活かすことができる。

授業計画

1. 導入:授業内容の説明など
2. レジュメ・レポートの作成方法
3. 地方財政の基礎
4. 文献の輪読（報告・議論）（1）
5. 文献の輪読（報告・議論）（2）
6. 文献の輪読（報告・議論）（3）
7. 文献の輪読（報告・議論）（4）
8. 文献の輪読（報告・議論）（5）
9. レポート中間発表
10. 文献の輪読（報告・議論）（6）
11. 文献の輪読（報告・議論）（7）
12. 文献の輪読（報告・議論）（8）
13. 文献の輪読（報告・議論）（9）
14. 文献の輪読（報告・議論）（10）
15. レポート最終発表

準備学習(予習)

毎回、文献の指定された範囲を読んでくること。

教科書

授業の中で指示する

準備学習(復習)

扱われたテーマについての理解を深めるために関連文献や新聞記事等を読むこと。

評価方法

- (1)出席及び授業への参加:60%:発表内容や議論での発言を重視する
- (2)レポート:40%

政治経済学特論 A (日本の裁判を考える)

担当者：石川 裕一郎

開講期：春学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週1回 単位数：2単位

講義概要

1.内容

法律学の基礎知識があることを前提に、裁判に関する様々な著作、あるいは判例を丁寧に読解・解釈してゆきます。法解釈の難しさと面白さを存分に味わってください。また、裁判傍聴等のイベント実施も考えています。

取り上げる事件・判例は、担当教員の専門との関係上、憲法裁判が多くなります。しかし、「憲法裁判」といっても、元々は種々雑多な民事事件、刑事事件、行政事件です。丁寧に読んでゆけば、堅苦しい日本語で書かれている判決文に記されている事実、当事者の主張、裁判官の判断を通して、生き生きとした人間世界の営みが垣間見える...はずです。

なお、本講義は少人数のゼミ形式をとることから定員制とし、希望者多数の場合は、希望者の過去の単位修得状況等を参考に選抜を行います。履修希望者は、必ず事前に担当教員に連絡を取るようになしてください。

2.学びの意義と目標

日本の裁判制度の基本を理解し、あわせてそれが抱える諸問題を考察することにより、日本の政治・経済・社会の諸問題を法的に考える視座を獲得することをめざします。

準備学習(予習)

毎回の講義に臨むに当たっては、事前のテキストの読み込みは必須です。また、レジュメの担当が定期的に回ってきます。相応の予習量になります。

準備学習(復習)

毎回の講義の後の討論内容を踏まえ、自分が準備したプレゼンテーションの内容を補訂し、後に提出することを求めます。

授業計画

1. 導入:授業の進め方・担当分担
2. テキスト輪読・報告・議論
3. テキスト輪読・報告・議論
4. テキスト輪読・報告・議論
5. テキスト輪読・報告・議論
6. テキスト輪読・報告・議論
7. テキスト輪読・報告・議論
8. テキスト輪読・報告・議論
9. テキスト輪読・報告・議論
10. テキスト輪読・報告・議論
11. テキスト輪読・報告・議論
12. テキスト輪読・報告・議論
13. テキスト輪読・報告・議論
14. テキスト輪読・報告・議論
15. まとめ

教科書

授業の中で指示する

評価方法

(1)平常点:80%:プレゼンテーションの内容と討議への参加状況から評価します。(2)期末レポート:20%

単なる出席(物理的に教室内に存在すること)だけでは何ら評価の対象となりません。

政治経済学特講(西洋政治思想講読 A)

担当者：高橋 愛子

開講期：春学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週1回 単位数：2単位

講義概要

1. 内容

本講座では、西洋の政治思想に関する高度の専門性をもつ文献を講読する。受講者がそれぞれ分担のうえ、レジュメに基づくプレゼン及び議論を行っていく。卒論執筆指導を伴う。

<カリキュラム上の位置づけ> 3年次必修の「専門演習」「卒業研究」を修得済みである4年次生が、さらに自らの研究テーマを掘り下げて学ぼうとする際に高度の専門性を身につけるための場として提供される。予め「西洋政治思想史」を履修していることが望ましい。

2. 学びの意義と目標

西洋政治思想の諸概念について掘り下げた理解を得、一層掘り下げた議論ができるようになること。特に、大学院進学希望者にとって不可欠となる文献の読解力および論文執筆に必要とされる基礎的な能力を養成することを狙いとする。

<受講の条件> 3年次に「専門演習」「卒業研究」を修得済みであること、卒論執筆予定であること(講義担当者の「専門演習」「卒業研究」履修者には限らないが、それ以外の演習履修者の場合には事前にコンタクトをとること)。

準備学習(予習)

自らの研究テーマについての明確な問題意識をもつこと。

準備学習(復習)

議論で指摘された点についてのレポート作成。

授業計画

1. 導入:一学期間の進め方のオリエンテーション、分担の決定
2. 共通テキストの講読・議論
3. 共通テキストの講読・議論
4. 共通テキストの講読・議論
5. 共通テキストの講読・議論
6. 共通テキストの講読・議論
7. 共通テキストの講読・議論
8. 各自の研究テーマのプレゼン・議論
9. 各自の研究テーマのプレゼン・議論
10. 各自の研究テーマのプレゼン・議論
11. 各自の研究テーマのプレゼン・議論
12. 各自の研究テーマのプレゼン・議論
13. 各自の研究テーマのプレゼン・議論
14. 各自の研究テーマのプレゼン・議論
15. 一学期間のまとめ

教科書

授業の中で指示する

評価方法

(1)出席:40% (2)プレゼン:30% (3)小論文:30%

政治経済学特講(西洋政治思想講読 B)

担当者：高橋 愛子

開講期：秋学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週1回 単位数：2単位

講義概要

1.内容

本講座では、西洋の政治思想に関する高度の専門性をもつ文献を講読する。受講者がそれぞれ分担の上、レジュメに基づくプレゼン及び議論を行ってゆく。卒論執筆指導を伴う。

<カリキュラム上の位置づけ> 3年次必修の「専門演習」「卒業研究」を修得済みである4年次生が、さらに自らの研究テーマを掘り下げて学ぼうとする際に高度の専門性を身につけるための場として提供される。予め「西洋政治思想史」を履修していることが望ましい。

受講の条件: 3年次に「専門演習」「卒業研究」を修得済みであること(講義担当者の「専門演習」「卒業研究」履修者には限らないが、講義担当者以外の演習履修者の場合には事前にコンタクトすること)。

2.学びの意義と目標

西洋政治思想の諸概念についての掘り下げた理解を得、議論を通して自らの見解を鍛えること。特に、大学院進学希望者にとって不可欠な諸論文の読解力養成、及び、論文執筆に必要とされる基礎的な能力を養成することを狙いとする。卒論完成を目指す。

準備学習(予習)

共通テキストのプレゼンのための準備、レジュメ作成、各自の研究テーマについてのプレゼンの準備レジュメ作成。

準備学習(復習)

議論の中で指摘されたポイントについてのレポート作成。

授業計画

1. オリエンテーション
2. 共通テキストの講読、議論
3. 共通テキストの講読、議論
4. 共通テキストの講読、議論
5. 共通テキストの講読、議論
6. 共通テキストの講読、議論
7. 共通テキストの講読、議論
8. 共通テキストの講読、議論
9. 各自の研究テーマのプレゼン、議論
10. 各自の研究テーマのプレゼン、議論
11. 各自の研究テーマのプレゼン、議論
12. 各自の研究テーマのプレゼン、議論
13. 各自の研究テーマのプレゼン、議論
14. 各自の研究テーマのプレゼン、議論
15. 1学期間の総括

教科書

授業の中で指示する

評価方法

(1)出席:40% (2)プレゼン:30% (3)各論の執筆:30%

政治経済学特講(デュルケームを読む)

担当者：横山 寿世理

開講期：秋学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週1回 単位数：2単位

講義概要

1.内容

1.内容

ゼミ形式で、文献講読を行う。デュルケーム (Emile Durkheim) の著作を共通文献を決めて、ゼミ形式で講読する。したがって、受講者は自分が担当した箇所のテキストをレジюмеにまとめて、報告、質問に対して応答を行う。

2.カリキュラム上の位置づけ

政治経済学科の3年生以上対象の科目で、専門演習および卒業研究の修得者が卒業論文執筆に向けた準備を行う。卒業論文執筆のための取り組みにもなる。

2.学びの意義と目標

卒業論文を執筆できるだけの文献読解能力と、論文を執筆するためのスキルと身につけることを目標とする。

準備学習(予習)

担当課題への取り組みだけでなく、事前に次回テキストを必ず読み、質問や意見・コメントを用意してこることが求められる。

準備学習(復習)

報告レジюмеやテキストを見直して、講義内容を整理しておくことが重要になる。

授業計画

- 1.オリエンテーション
- 2.講読/報告・討論(1)
- 3.講読/報告・討論(2)
- 4.講読/報告・討論(3)
- 5.講読/報告・討論(4)
- 6.講読/報告・討論(5)
- 7.講読/報告・討論(6)
- 8.講読/報告・討論(7)
- 9.講読/報告・討論(8)
- 10.講読/報告・討論(9)
- 11.講読/報告・討論(10)
- 12.講読/報告・討論(11)
- 13.講読/報告・討論(12)
- 14.講読/報告・討論(13)
- 15.総括

教科書

授業の中で指示する

評価方法

(1)報告への取り組み:50%:担当した箇所の報告内容(レジюмеを含む)により評価する。(2)質疑応答:50%:講義への貢献度により評価する。

政治経済学特講(比較政治学)

担当者：松尾 秀哉

開講期：春学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週1回 単位数：2単位

講義概要

1.内容

原則、卒業演習（比較政治学）の履修者を対象とする。
より発展的な事例研究を行う授業。ゼミ形式とし、自身の研究の報告と参加者による討論を中心とする。

2.学びの意義と目標

論理的思考力と文章の書き方を身につけること、またそれをプレゼンテーションする実践力を身につける。

準備学習(予習)

自身の研究の進捗状況は毎回チェックされるので、報告できるようにしておくこと。また、他の報告者の内容について、質問ができるように予習しておくことも必要となる。

準備学習(復習)

毎回質疑応答で答えられなかった問いについては、Web上で次回授業までに回答することで復習されたとみなす。

授業計画

1. 授業の進め方（講義）
2. 卒業論文の書き方（講義）
3. 報告と討論
4. 報告と討論
5. 報告と討論
6. 報告と討論
7. 報告と討論
8. 中間総括（講義）
9. 報告と討論
10. 報告と討論
11. 報告と討論
12. 報告と討論
13. 報告と討論
14. 報告と討論
15. 報告と討論

教科書

授業の中で指示する

評価方法

(1)平常点:50% (2)報告:50%
平常点は、普段の議論への参加態度による。

政治経済学特講(法学)

担当者：石川 裕一郎

開講期：春学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週1回 単位数：2単位

講義概要

1.内容

法律学および憲法学の基礎知識があることを前提に、憲法判断を含む様々な事件の判例を丁寧に読解・解釈してゆきます。法解釈の難しさと面白さを存分に味わってください。また、裁判傍聴等のイベント実施も考えています。

取り上げる事件・判例は、担当教員の専門との関係上、憲法裁判が多くなります。しかし、「憲法裁判」といっても、元々は種々雑多な民事事件、刑事事件、行政事件です。丁寧に読んでゆけば、堅苦しい日本語で書かれている判決文に記されている事実、当事者の主張、裁判官の判断を通して、生き生きとした人間世界の営みが垣間見える...はずです。

なお、本講義は少人数のゼミ形式をとることから定員制とし、希望者多数の場合は、希望者の過去の単位修得状況等を参考に選抜を行います。履修希望者は、必ず事前に担当教員に連絡を取るようになしてください。

2.学びの意義と目標

法律に対する理解の深化を通じ、日本の政治・経済・社会の諸問題を法的に考える視座を獲得すること、あわせて卒業論文執筆の前提となる調査執筆能力の涵養を目標とします。

準備学習(予習)

毎回の講義に臨むに当たっては、事前のテキストの読み込みは必須です。また、レジュメの担当が定期的に回ってきます。相応の予習量になります。

準備学習(復習)

毎回の講義の後の討論内容を踏まえ、自分が準備したプレゼンテーションの内容を補訂し、後に提出することを求めます。

授業計画

1. 導入:授業の進め方・担当分担
2. テキスト輪読・報告・議論
3. テキスト輪読・報告・議論
4. テキスト輪読・報告・議論
5. テキスト輪読・報告・議論
6. テキスト輪読・報告・議論
7. テキスト輪読・報告・議論
8. テキスト輪読・報告・議論
9. テキスト輪読・報告・議論
10. テキスト輪読・報告・議論
11. テキスト輪読・報告・議論
12. テキスト輪読・報告・議論
13. テキスト輪読・報告・議論
14. テキスト輪読・報告・議論
15. まとめ

教科書

授業の中で指示する

評価方法

(1)平常点:80%:プレゼンテーションの内容と討議への参加状況から評価します。(2)期末レポート:20%:単なる出席(物理的に教室内に存在すること)だけでは何ら評価の対象となりません。単なる出席(物理的に教室内に存在すること)だけでは何ら評価の対象となりません。

政治哲学

担当者：森分 大輔

開講期：秋学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

政治学の専門単位として、現代政治を考察する際に手助けとなる、様々な政治哲学、政治理論について取り扱う。とりわけ、20世紀以降の政治理論家の議論を参照することで、現代に通ずる政治認識の一端を紹介することを目的とする。

2.学びの意義と目標

必修の専門基礎科目「政治学」の知識を踏まえて、より専門的、抽象的な議論を学ぶことを目的とする。

準備学習(予習)

必修の政治学を履修していることを前提にしておるため、基本的な政治学の用語は習得済みであると見なして講義を進める。各テーマに関する簡単な用語の確認をしておくことが望ましい。

準備学習(復習)

講義後にノートをまとめるなど、1時間程度の復習をすること、および関連する書籍に目を通すことが望ましい。

授業計画

1. 政治学と政治哲学
2. 政治学と政治哲学
3. 近代政治哲学の課題(功利主義)
4. 近代政治哲学の課題(功利主義)
5. 近代政治哲学の課題(功利主義)
6. 政治学における近代と現代(産業社会)
7. 政治学における近代と現代(産業社会)
8. 政治学における近代と現代(産業社会)
9. 帝国主義と国民国家
10. 帝国主義と国民国家
11. 国家機能と代表制民主主義の課題(ラスキ)
12. 国家機能と代表制民主主義の課題(ラスキ)
13. 政治的なる物の概念と現代国家(シュミット)
14. 政治的なる物の概念と現代国家(シュミット)
15. 統治構造とイデオロギー(マンハイム)
16. 統治構造とイデオロギー(マンハイム)
17. 政治理論と専門職業人(ヴェーバー)
18. 政治理論と専門職業人(ヴェーバー)
19. 共和主義とデモクラシーの伝統
20. 共和主義とデモクラシーの伝統
21. 共和主義とデモクラシーの伝統
22. 共和主義とデモクラシーの伝統
23. 公正としての正義
24. 公正としての正義
25. 全体主義とナショナリズム
26. 全体主義とナショナリズム
27. 日本における公共哲学の問題
28. 日本における公共哲学の問題
29. まとめ
30. まとめ

教科書

授業の中で指示する

評価方法

(1)出席:40% (2)中間レポート:20% (3)期末テスト:40%

税務・会計入門

担当者：山田 ひとみ

開講期：春学期/秋学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

企業は日々の取引を複式簿記で記録して会計情報を作成して決算を行い、その決算に基づいて所得を計算して納税申告をします。ですから、企業会計の一連の手続を学ぶには、会計と税務の両方について理解することが重要です。会計分野は、「簿記とは何か」からスタートし、企業の会計情報の意義や種類について学びます。税務分野は、わが国の「税金とは何か」からスタートし、主として企業の所得に対して課税される法人税の理論と計算について学びます。

2.学びの意義と目標

企業会計の一巡を理解し、企業の所得の計算プロセスや法人課税の基礎を理解することができる。「簿記（初級）」を履修するための基礎的知識を身につけることができる。また、会計学・経営学関連科目を学ぶ上でも必要な基礎知識が身に付きます。

準備学習(予習)

講義中に指示します。推薦図書 (1)『現代会計学(第12版)』(新井清光 著、中央経済社、2011年) (2)『現代税法の基礎知識』(岸田貞夫、柳裕治、他 著、ぎょうせい、2011年)

準備学習(復習)

講義中に指示します。

授業計画

1. ガイダンス (授業の進め方、採点方法について)
2. くらしと会計
3. くらしと租税
4. 株式会社の仕組みと税務・会計(1)
5. 株式会社の仕組みと税務・会計(2)
6. 会計の意義と会計学の研究対象
7. 複式簿記の仕組み (1) 仕訳
8. 複式簿記の仕組み (2) 貸借対照表
9. 複式簿記の仕組み (3) 損益計算書
10. 複式簿記の仕組み (4) 簿記一巡
11. 企業会計の仕組み (1) 財産法と損益法
12. 企業会計の仕組み (2) 棚卸法と誘導法
13. 企業会計の仕組み (3) 会計基準
14. 企業会計の仕組み (4) 会計原則
15. 企業会計制度 (1) 会社法
16. 企業会計制度 (2) 金融商品取引法
17. 企業会計制度 (3) 法人税法
18. 国際会計基準の取り扱い
19. 租税および租税法の意義
20. 租税法関係の特色
21. 租税法の基本原則 (1) 租税法主義
22. 租税法の基本原則 (2) 租税公平主義
23. 租税法について
24. 納税義務について
25. 法人と法人税の意義
26. 法人税の課税根拠
27. 課税所得の計算 (1) 基礎構造
28. 課税所得の計算 (2) 益金の額
29. 課税所得の計算 (3) 損金の額
30. まとめ

教科書

授業の中で指示する

評価方法

(1)提出課題:25% (2)定期試験:25% (3)出席:50%

西洋史概説 A

担当者：小田原 琳

開講期：春学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週1回 単位数：2単位

講義概要

1.内容

西洋史を研究する上で必要不可欠な基礎的知識を学びます。西洋世界の変化を、事象相互の関連や現代とのつながりを意識しながら学んでいきます。西洋史概説Aでは、19世紀までの西洋史を学びます。毎回の授業で提出していただくレスポンスシート（講義内容の要約、疑問点等をまとめていただきます）および期末テストが課題となります。

2.学びの意義と目標

現代社会に生きる私たちは、さまざまな点で西洋文化から多大な影響を受けています。西洋史を学ぶことによって現代社会についての理解を深めることができます。そのための歴史的な基礎知識を着実に身につけることが目標です。

準備学習(予習)

関心のある歴史的なできごとや人物に関して、積極的に本を読むなどして調べてください。

準備学習(復習)

各回の講義は、前回の講義との関連性をもって位置づけられています。前回の講義内容を踏まえて、各回の講義にのぞんでください。

授業計画

1. ガイダンス
2. 古代地中海世界 ギリシャとローマ
3. 海から陸へ 西ヨーロッパ世界と東ヨーロッパ世界
4. キリスト教の発展
5. ふたたび海へ（1） 十字軍と都市の発展
6. ふたたび海へ（2） ルネサンスと宗教改革
7. ふたたび海へ（3） 大航海時代
8. 近代世界システム（1） 近代国家と主権国家体制の成立
9. 近代世界システム（2） ヨーロッパの海外進出
10. 二重革命の時代（1） 産業革命と労働者階級の形成
11. 二重革命の時代（2） アメリカ独立とフランス革命
12. 二重革命の時代（3） ナショナリズム
13. 帝国主義の時代（1） 世界分割
14. 帝国主義の時代（2） 帝国主義勢力の衝突
15. まとめ

教科書

成瀬 治, 佐藤 次高, 木村 靖二, 岸本 美緒, 桑島 良平 『山川世界史総合図録』 (山川出版社)

評価方法

(1)平常点:40%:受講態度およびレスポンスシート (2)期末テスト:60%

西洋史概説 B

担当者：小田原 琳

開講期：秋学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週1回 単位数：2単位

講義概要

1.内容

西洋史を研究する上で必要不可欠な基礎的知識を学びます。西洋世界の変化を、事象相互の関連や現代とのつながりを意識しながら学んでいきます。西洋史概説Bでは、19世紀～現代までの西洋史を学びます。毎回の授業で提出していただくレスポンスシート（講義内容の要約、疑問点等をまとめていただきます）および期末テストが課題となります。

2.学びの意義と目標

現代社会に生きる私たちは、さまざまな点で西洋文化から多大な影響を受けています。西洋史を学ぶことによって現代社会についての理解を深めることができます。そのための歴史的な基礎知識を着実に身につけることが目標です。

準備学習(予習)

関心のある歴史的なできごとや人物に関して、積極的に本を読むなどして調べてください。

準備学習(復習)

各回の講義は、前回の講義との関連性をもって位置づけられています。前回の講義内容を踏まえて、各回の講義にのぞんでください。

授業計画

1. ガイダンス
2. 第一次世界大戦（1） 大戦の勃発
3. 第一次世界大戦（2） 革命と大戦の終結
4. 第一次世界大戦（3） ヴェルサイユ体制
5. 第二次世界大戦（1） 世界恐慌とファシズム
6. 第二次世界大戦（2） 大戦の経緯
7. 冷戦（1） 大戦の終結と東西分裂
8. 冷戦（2） 冷戦の激化
9. 冷戦（3） 東西両陣営の経済と社会
10. 第三世界（1） 独立と非同盟中立
11. 第三世界（2） 代理戦争としての地域問題
12. グローバル化のもとで（1） 冷戦終結と多極化
13. グローバル化のもとで（2） 世界経済の一体化
14. グローバル化のもとで（3） 開発と貧困
15. まとめ

教科書

成瀬 治, 佐藤 次高, 木村 靖二, 岸本 美緒, 桑島 良平 『山川世界史総合図録』 (山川出版社)

評価方法

(1)平常点:40%:受講態度およびレスポンスシート (2)期末テスト:60%

専門演習(アイデンティティの社会学)

担当者：横山 寿世理

開講期：春学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週2回 単位数：2単位

講義概要

1.内容

1.内容

テキスト

を読み込み社会学の基本を理解することと、**社会調査**

によって社会現象を理解することとの2つの課題によってゼミを進める。

。テキスト講読中心のゼミは、2年生と合同で行う。取り扱う内容は、自己アイデンティティについての社会意識を中心とする。より具体的には、その社会的意識についての課題文をわかりやすくまとめ直して、他の学生の前で報告して、質問を受け、回答するというゼミ形式で進める。

。2つ目の課題である社会調査を行うゼミは、3年生のみで行う。受講生が、自ら社会調査の企画、調査票の設計、実査、集計、そして分析、調査結果の報告を実践する。

2.カリキュラム上の位置づけ

政治経済学科3年次春学期開講の演習科目であり、この演習を修得しないと秋学期の卒業研究(アイデンティティの社会学)が履修できない。

2.学びの意義と目標

この演習では、自己アイデンティティに関する社会意識について社会的に考察することを目標とする。アイデンティティという概念と、これらの概念が社会的にどのように扱われるかを理解することは異なる。このゼミでは、アイデンティティ概念が社会においてどのように評価され、位置づけられるかを明らかにすることを目指したい。そして、その評価や位置づけを予想するためにテキスト講読を行い、その予想を検証するために、社会調査を実施する。

準備学習(予習)

指定された専門書を購入して、課題となった箇所は必ず事前に読んで、質問を用意して参加すること。

準備学習(復習)

社会調査論とゼミの内容とを結びつけることを常に意識して、次の課題を予想しておくこと。

授業計画

- 1.オリエンテーションと課題提示
- 2.社会調査に関するオリエンテーション
- 3.評論文講読・討論の練習
- 4.社会調査概論(講義形式)
- 5.評論文講読・討論のまとめとゼミ報告準備のグループ分け
- 6.社会調査の企画を立てる(実習)
- 7.グループ別ゼミ報告・討論(1)
- 8.先行研究を調べる(実習)
- 9.グループ別ゼミ報告・討論(2)
- 10.調査企画の決定とグループ分け(実習)
- 11.グループ別ゼミ報告・討論(3)
- 12.仮説を立てる(グループごとの実習)
- 13.グループ別ゼミ報告・討論(4)
- 14.仮説を立てる(グループごとの実習)
- 15.グループ別ゼミ報告・討論(5)
- 16.中間報告と仮説の決定(グループごとの実習)
- 17.グループ別ゼミ報告・討論(6)
- 18.調査設計
- 19.報告者順ゼミ報告・討論(1)
- 20.仮説と質問文・回答(グループごとの実習)
- 21.報告者順ゼミ報告・討論(2)
- 22.仮説と質問文・回答(グループごとの実習)
- 23.報告者順ゼミ報告・討論(3)
- 24.プリテスト用調査票の完成
- 25.報告者順ゼミ報告・討論(4)
- 26.プリテスト結果の集計と分析・調査票の修正
- 27.報告者順ゼミ報告・討論(5)
- 28.調査票の完成
- 29.報告者順ゼミ報告・討論(6)とまとめ
- 30.まとめ・秋学期の予定確認

教科書

矢田部圭介、山下玲子『アイデンティティと社会意識 私の中の社会/社会の中の私(叢書現代の社会学とメディア研究)』(北嶺出版)

評価方法

- (1)報告への取り組み:50%:課題の報告内容(レジュメを含む)
- (2)質疑応答:50%:ゼミへの貢献度

専門演習(環境保全論)

担当者：村上 公久

開講期：春学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週2回 単位数：2単位

講義概要

1.内容

この演習では先ず、システム“人間 環境”系の考察を中心に環境史を概観して、環境問題をめぐる理念の変遷を資料により学び、古代から近代まで(地中海文明から近代合理主義まで)の環境論の変遷を辿る。次に、人口の急増と共に急速に生命の環境が劣化した産業革命以降今日の環境問題を考え、その解決に貢献した先駆者達の歩みを振り返り、特に事例研究のテーマに「北米の森林史における森林保護思想と実践」を選び、自然保護と環境保全という立場の違いの検討を手がかりに21世紀の人類の課題 Sustainable Development 保続的(持続的)開発(地球サミットUNCEDの決議『アジェンダ21』)の可能性を探る。

2.学びの意義と目標

環境問題の事例研究を通じて、解決への実際的な方途について学び、環境問題にみられるような複雑な問題と取り組み問題解決に挑む模擬経験を積む。

準備学習(予習)

総合科目「環境学」、専門科目「環境保全論」、キリスト教科目「聖書の中の環境問題」、特にこの演習の前提である「環境保全論」を、準備として予め復習しておくこと。演習開始以降の予習については、各回に指示する。

準備学習(復習)

各回のゼミ内容について、関係する情報・資料を探して参考にし、講義を受けて自分で考えたことを含めてゼミ記録を作成する。

授業計画

- 1.地球環境の劣化の現状(1)
- 2.地球環境の劣化の現状(2)
- 3.地球環境の劣化の現状(3) レポート
- 4.地球環境の劣化の現状(4) 討論
- 5.生態学におけるいくつかの重要な概念について(1)
- 6.生態学におけるいくつかの重要な概念について(2)
- 7.生態学におけるいくつかの重要な概念について(3) 討論
- 8.環境問題をめぐる理念の変遷(1)
- 9.環境問題をめぐる理念の変遷(2)
- 10.環境問題をめぐる理念の変遷(3)
- 11.環境問題をめぐる理念の変遷(4) レポート1
- 12.環境問題をめぐる理念の変遷(5) レポート2
- 13.環境問題をめぐる理念の変遷(6) レポート3
- 14.環境問題をめぐる理念の変遷(7) 討論
- 15.自然保護運動の先駆者たち G.Catlin, H.Thoreau
- 16.保護から保全への道程 G.Pinchot, T.Roosevelt
- 17.エコロジーの誕生 R.Carson, R.Nader, G.Snyder
- 18.新しい環境保全運動 R.Nash, L.Brown, J.Adams
- 19.処方箋『アジェンダ21』とその背景の検討(1) UNCEDの経緯
- 20.処方箋『アジェンダ21』とその背景の検討(2) UNCEDの検証
- 21.処方箋『アジェンダ21』とその背景の検討(3) アジェンダ21の検証
- 22.処方箋『アジェンダ21』とその背景の検討(4) 討論
- 23.『アジェンダ21』に基づく環境保全戦略(1)
- 24.『アジェンダ21』に基づく環境保全戦略(2)
- 25.『アジェンダ21』に基づく環境保全戦略 まとめ
- 26.パワーポイント発表(1)
- 27.パワーポイント発表(1)の討論
- 28.パワーポイント発表(2)
- 29.パワーポイント発表(2)の討論
- 30.まとめ

教科書

授業の中で指示する

評価方法

(1)出席:40% (2)プレゼンテーションと討論:60%

専門演習(企業経済論)

担当者：柴田 武男

開講期：秋学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週2回 単位数：2単位

講義概要

1.内容

専門演習(企業経済論)では、できるだけゼミ生の問題意識に沿って講義を行いたい。同時に現在何が起きているのかをまず一緒に学習したい。金融市場は日々大きく変化している。ギリシャの国債問題からユーロ危機へ、日本の国債市場はどうなるのか、また、オリンパスをはじめとする日本企業の不祥事はどうなっているのかなど、それら現代的課題をテーマとする。具体的には、新聞・経済雑誌から関心のある記事コピーを用意して、その内容について教員・ゼミ生で議論していく。さらにそこから生ずる問題を担当者がレポートしていくという形式で行う。『週刊エコノミスト』『週刊東洋経済』『週刊ダイヤモンド』などの有力経済誌の特集テーマを取り上げたい。近年では、「格付け制度」「海外投資」「年金制度」「インターネット取引」「電子マネー」などがテーマとして取り上げられた。また専門演習は卒業研究レポートに結びつくものであるからテーマに対する問題意識の涵養を目標とする。

2.学びの意義と目標

膨大な情報が掲載されている経済誌などから、テーマに沿った必要な情報を得る知的作業の経験とそれを発表するスキルを養成する。

準備学習(予習)

ゼミの出席は無遅刻・無欠席をお願いしたい。また、できるだけ政治経済学科主催の講演会および公開講義、AH等のシンポジウムにも積極的に参加できる学生の受講を期待する。

準備学習(復習)

ゼミでの発表に対し追加的な課題設定を行う。

授業計画

1. 教員によるゼミの進め方を解説
2. ゼミ生が関心のあるトピックをレポートおよびゼミ生全員で議論1
3. ゼミ生が関心のあるトピックをレポートおよびゼミ生全員で議論2
4. ゼミ生が関心のあるトピックをレポートおよびゼミ生全員で議論3
5. ゼミ生が関心のあるトピックをレポートおよびゼミ生全員で議論4
6. ゼミ生が関心のあるトピックをレポートおよびゼミ生全員で議論5
7. ゼミ生が関心のあるトピックをレポートおよびゼミ生全員で議論6
8. ゼミ生が関心のあるトピックをレポートおよびゼミ生全員で議論7
9. ゼミ生が関心のあるトピックをレポートおよびゼミ生全員で議論8
10. ゼミ生が関心のあるトピックをレポートおよびゼミ生全員で議論9
11. ゼミ生が関心のあるトピックをレポートおよびゼミ生全員で議論10
12. ゼミ生が関心のあるトピックをレポートおよびゼミ生全員で議論11
13. ゼミ生が関心のあるトピックをレポートおよびゼミ生全員で議論12
14. ゼミ生が関心のあるトピックをレポートおよびゼミ生全員で議論13
15. ゼミ生が関心のあるトピックをレポートおよびゼミ生全員で議論14
16. ゼミ生が関心のあるトピックをレポートおよびゼミ生全員で議論15
17. ゼミ生が関心のあるトピックをレポートおよびゼミ生全員で議論16
18. ゼミ生が関心のあるトピックをレポートおよびゼミ生全員で議論17
19. ゼミ生が関心のあるトピックをレポートおよびゼミ生全員で議論18
20. ゼミ生が関心のあるトピックをレポートおよびゼミ生全員で議論19
21. ゼミ生が関心のあるトピックをレポートおよびゼミ生全員で議論20
22. ゼミ生が関心のあるトピックをレポートおよびゼミ生全員で議論21
23. ゼミ生が関心のあるトピックをレポートおよびゼミ生全員で議論22
24. 問題意識の確定とレポートの作成1
25. 問題意識の確定とレポートの作成2
26. 問題意識の確定とレポートの作成3
27. レポートの評価と指導1
28. レポートの評価と指導2
29. レポートの評価と指導3
30. レポートの評価と指導4

教科書

授業の中で指示する
日本経済新聞
各種経済雑誌など。

評価方法

(1)出席点:50% (2)レポート:50%

専門演習(経営管理)

担当者：後藤 兼一

開講期：春学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週2回 単位数：2単位

講義概要

1.内容

グループ学習を主体に進める。前半はグループごとに『より良い会社とはどんな会社か』について、問題と課題を分析し把握し、マネジメント的又は経営管理的に討議する。後半は松下幸之助の『道をひらく』をグループに分かれて読み、ディスカッションを行う。輪講形式でマネジメント的又は経営管理的に討議する。

2.学びの意義と目標

マネジメント又は経営管理で学習した内容をさらに発展させることが本演習の目的です。マネジメント及び経営管理に関心のある人、将来、会社を起業したいと思っている人、親の会社を継ぐかも知れないと思っている人を対象とします。講義では自分の目で見、自分の頭で考え、自分の体で行動するという態度を大切にします。そして、マネジメント及び経営管理の必要性を実感することを演習の目標とします。

準備学習(予習)

毎回グループごとにディスカッションが行われます。ディスカッションに必要な資料を整理しておくこと。

準備学習(復習)

ディスカッションしたり、発表した内容を整理しておくこと。

授業計画

1. ガイダンス
2. (前半)『より良い会社とはどんな会社か』について
講義1:B S法とK J法など
3. 講義2:問題と課題など
4. 講義3:分析と統合など
5. 実習1:問題課題出し
6. 実習2:K Jカード化
7. 実習3:カードグルーピング
8. 実習4:表札付け
9. 実習5:模造紙貼り付け
10. 実習6:発表準備
11. 実習7:発表
12. (後半)『道をひらく』を読む
道など
13. 手さぐりの人生など
14. 真剣勝負など
15. 病を味わうなど
16. 視野を広くなど
17. 雨が降ればなど
18. 花のようになど
19. 縁あってなど
20. 長所と短所など
21. 責任を知るなど
22. 世間を知らずなど
23. 命を下すなど
24. 眼前の小利など
25. カンを働かすなど
26. 根気よくなど
27. 時を待つ心など
28. 世間というものなど
29. 転んでもなど
30. 絶対の確信など

教科書

松下幸之助『道をひらく』(PHP研究所)

評価方法

(1)出席:50% (2)レポート:50%

専門演習(政治過程論)

担当者：高橋 愛子

開講期：春学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週2回 単位数：2単位

講義概要

1.内容

今日の政治社会が直面するさまざまな問題を理解するためには二つのアプローチが必要とされる。すなわち、政治過程の具体的なダイナミズムについて実証的な認識をもつこと、および、現実政治を理解する際に必要とされる理念的・思想的な次元における自分なりの認識のための座標軸をもつことである。

以上の基本的な考え方に立ち、本年は、「民主主義社会におけるメディア」を一つの切り口としながら、共通のテキストを輪読しつつ学び議論をしてゆく。一学期間を通して学んだことを「学期末レポート」として提出することが求められる。

<カリキュラム上の位置づけ> 3年次春学期に位置づけられた必修の演習科目の一つである。

2.学びの意義と目標

基本的なテキストの読解力を得ること（著者の主張の要点を把握し、発表用のレジュメを作成し、プレゼンを行う）、政治的な課題についての議論の作法を学ぶこと、また、政治にかかわる独自の研究テーマを見出すこと。

準備学習(予習)

リアルタイムな政治現象に関心を持ち新聞を読む事に加え、各回に予定されるテキストを精読すること。

準備学習(復習)

ゼミで議論になったポイントについての理解を深めるためのレポート作成。

授業計画

1. 導入:講義計画の説明、担当についての分担
2. どのような観点からテーマを位置づけるか
3. テキストの輪読・各自のプレゼン
4. テキストの輪読・各自のプレゼン
5. テキストの輪読・各自のプレゼン
6. テキストの輪読・各自のプレゼン
7. テキストの輪読・各自のプレゼン
8. テキストの輪読・各自のプレゼン
9. テキストの輪読・各自のプレゼン
10. テキストの輪読・各自のプレゼン
11. テキストの輪読・各自のプレゼン
12. テキストの輪読・各自のプレゼン
13. テキストの輪読・各自のプレゼン
14. テキストの輪読・各自のプレゼン
15. テキストの輪読・各自のプレゼン
16. テキストの輪読・各自のプレゼン
17. テキストの輪読・各自のプレゼン
18. テキストの輪読・各自のプレゼン
19. テキストの輪読・各自のプレゼン
20. テキストの輪読・各自のプレゼン
21. テキストの輪読・各自のプレゼン
22. テキストの輪読・各自のプレゼン
23. テキストの輪読・各自のプレゼン
24. テキストの輪読・各自のプレゼン
25. テキストの輪読・各自のプレゼン
26. テキストの輪読・各自のプレゼン
27. テキストの輪読・各自のプレゼン
28. テキストの輪読・各自のプレゼン
29. テキストの輪読・各自のプレゼン
30. 一学期間のまとめ

教科書

授業の中で指示する

評価方法

(1)出席:40% (2)プレゼン:30% (3)学期末レポート:30%

専門演習(政治哲学)

担当者：森分 大輔

開講期：春学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週2回 単位数：2単位

講義概要

1.内容

<内容> 政治哲学の専門演習として、今回は特に洋の東西にまたがる近・現代の政治理論家のテキストを読み込むことを主眼とする。また、それに関連する議論をおこなうことで参加者の政治学的素養を深める。同時に各参加者独自の関心からテーマを選択し、それぞれの関心を深める作業を並行しておこなう。

<カリキュラム上の位置づけ> これまでに身に付けてきた、様々な社会科学的教養を前提として、三年生向けの専門演習として、政治哲学に興味、関心を持つ学生諸君の問題意識を深めることを手助けすることを目的としている。

2.学びの意義と目標

これまでに身に付けてきた、様々な社会科学的教養を前提として、三年生向けの専門演習として、政治哲学に興味、関心を持つ学生諸君の問題意識を深めることを手助けすることを目的としている。

準備学習(予習)

現実の政治現象に関心を持つだけでなくその理解に必要な政治哲学的観点への関心をもつこと。

準備学習(復習)

発表、討論内容について自身の考えを整理することが必要とされる。

授業計画

1. 導入:講義計画の説明、担当についての分担
2. 政治理論と現代政治に関する導入
3. テキストの輪読・各自のプレゼン・議論
4. テキストの輪読・各自のプレゼン・議論
5. テキストの輪読・各自のプレゼン・議論
6. テキストの輪読・各自のプレゼン・議論
7. テキストの輪読・各自のプレゼン・議論
8. テキストの輪読・各自のプレゼン・議論
9. テキストの輪読・各自のプレゼン・議論
10. テキストの輪読・各自のプレゼン・議論
11. テキストの輪読・各自のプレゼン・議論
12. テキストの輪読・各自のプレゼン・議論
13. テキストの輪読・各自のプレゼン・議論
14. テキストの輪読・各自のプレゼン・議論
15. テキストの輪読・各自のプレゼン・議論
16. テキストの輪読・各自のプレゼン・議論
17. テキストの輪読・各自のプレゼン・議論
18. テキストの輪読・各自のプレゼン・議論
19. テキストの輪読・各自のプレゼン・議論
20. テキストの輪読・各自のプレゼン・議論
21. テキストの輪読・各自のプレゼン・議論
22. テキストの輪読・各自のプレゼン・議論
23. テキストの輪読・各自のプレゼン・議論
24. テキストの輪読・各自のプレゼン・議論
25. テキストの輪読・各自のプレゼン・議論
26. テキストの輪読・各自のプレゼン・議論
27. テキストの輪読・各自のプレゼン・議論
28. テキストの輪読・各自のプレゼン・議論
29. テキストの輪読・各自のプレゼン・議論
30. まとめ

教科書

授業の中で指示する

評価方法

(1)出席:40% (2)プレゼンテーション:30% (3)学期末レポート:30%

専門演習(地域圏研究ロシア)

担当者：飯島 康夫

開講期：春学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週2回 単位数：2単位

講義概要

1.内容

巨大な隣国ロシア、そしてロシアやウクライナなどを育んだ悠久のユーラシアの大地と文化について考察する機会とする.詳細は、学生との相談による。.

2.学びの意義と目標

意義は、ロシアの統治機構や統治の原則の基本を理解することである。目標は、文献を元に現代ロシアの抱える問題を発見し、議論できることである。

準備学習(予習)

新聞やテレビでユーラシア各地で起こっているニュースに慣れ親しむこと
基本文献を指示するので通読すること。事前に文献に目を通すこと。

準備学習(復習)

その都度、前回の議論のまとめを最初にしてもらうこと。

授業計画

- 1.ロシアの論理 輪読1
- 2.同 2
- 3.同 3
- 4.同 4
- 5.同 5
- 6.同 6
- 7.同 7
- 8.菜の花の沖 観賞1
- 9.同 2
- 10.同 3
- 11.同 4
- 12.同 5
- 13.同 6
- 14.同 7
- 15.おろしや国酔夢たん 鑑賞1
- 16.同 2
- 17.同 3
- 18.同 4
- 19.同 5
- 20.同 6
- 21.戦争と平和 1
- 22.同 2
- 23.同 3
- 24.ゼミレポートの提出
- 25.添削、修正
- 26.レジュメの作成
- 27.坂の上の雲と日露関係
- 28.ゴルバチョフのペレストロイカ
- 29.エリツインの市場経済移行
- 30.プーチンとメドベージェフの体制

教科書

武田善憲 『ロシアの論理』(中央公論社)

評価方法

(1)出席:70% (2)レポート・発表:30%

専門演習(日本政治思想史)

担当者：吉田 博司

開講期：春学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週2回 単位数：2単位

講義概要

1.内容

近代日本の政治家及び思想家の研究を紹介しますが、後半は学生諸君にテーマを設定させ、報告・討論となります。

2.学びの意義と目標

近代日本の政治家及び思想家の研究をとおり、政治の本質を学び、現代政治を批判的に洞察する力を養う。

準備学習(予習)

講義ポイントを配布するので予習しておく。学生報告は予めレジメを提出させ、予習の参考にする。

準備学習(復習)

報告作成のための参考文献も逐次挙げるので授業中のアドバイスを復習しながら、論文作成に役立てる。

授業計画

1. 明治維新期の政治家
2. 同
3. 同
4. 同
5. 同
6. 同
7. 明治期の政治家
8. 同
9. 同
10. 同
11. 大正・昭和期の政治家
12. 同
13. 同
14. 以降、学生報告と討論
15. 同
16. 同
17. 同
18. 同
19. 同
20. 同
21. 同
22. 同
23. 同
24. 同
25. 同
26. 同
27. 同
28. 同
29. 同
30. 同

教科書

授業の中で指示する

評価方法

(1)報告:70% (2)質問:30%
報告にいかにか力を入れたかが成績を左右する。

専門演習(比較憲法)

担当者：石川 裕一郎

開講期：春学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週2回 単位数：2単位

講義概要

1.内容

憲法に関連する話題の中から受講者各自がテーマを設定し、調査・発表・討論を重ねつつ、最終的に4,000字程度のレポートにまとめることを目標とします。テーマは、法律に関することならば基本的に受講者各自の自由ですが、受講者には以下のことが厳しく求められます。

* 本をたくさん読む。若者に限らず、とにかく現代日本人は本を読まなさ過ぎ。そのため、知識量が圧倒的に少ない状態で議論をし、なんとなく自分の意見(らしきもの)を決めているのが現状です。人間には、活字情報を活用することによって異質な他者を知る・追体験する能力が備わっています。この演習ではその能力を十分に磨いてもらいます。

* 現場を多く見る。若者に限らず、とにかく現代日本人は現場を知らなさ過ぎ。そのため、現実を知らない状態で議論をし、なんとなく自分の意見(らしきもの)を決めているのが現状です。人間には、直接その目と耳で触れることによって異質な他者を理解する・共感する能力が備わっています。この演習ではその能力を十分に磨いてもらいます。

2.学びの意義と目標

具体的な意義と目標は、法律上は「成年」であるところの各受講者のモチベーションに依拠しますが、とにかく事実を観察し、ひたすら読書をし、公権力や社会的権力から一方的に搾取されない賢い市民=国民=労働者となることを目指します。

準備学習(予習)

演習科目なので、とりわけプレゼンの準備には各受講者の自発的かつ継続的な相応の分量の予習が求められます。

準備学習(復習)

プレゼン後においても、卒業研究に向けて相応の分量の復習が求められます。

授業計画

1. 導入:演習の進め方に関する討議及び決定
2. テキスト輪読・発表・議論
3. テキスト輪読・発表・議論
4. テキスト輪読・発表・議論
5. テキスト輪読・発表・議論
6. テキスト輪読・発表・議論
7. テキスト輪読・発表・議論
8. テキスト輪読・発表・議論
9. テキスト輪読・発表・議論
10. テキスト輪読・発表・議論
11. テキスト輪読・発表・議論
12. テキスト輪読・発表・議論
13. テキスト輪読・発表・議論
14. テキスト輪読・発表・議論
15. テキスト輪読・発表・議論
16. テキスト輪読・発表・議論
17. テキスト輪読・発表・議論
18. テキスト輪読・発表・議論
19. テキスト輪読・発表・議論
20. テキスト輪読・発表・議論
21. テキスト輪読・発表・議論
22. テキスト輪読・発表・議論
23. テキスト輪読・発表・議論
24. テキスト輪読・発表・議論
25. テキスト輪読・発表・議論
26. テキスト輪読・発表・議論
27. テキスト輪読・発表・議論
28. テキスト輪読・発表・議論
29. テキスト輪読・発表・議論
30. まとめ

教科書

授業の中で指示する

評価方法

(1)平常点:80%:プレゼンテーションの内容と討議への参加状況から評価します。(2)期末レポート:20%

単なる出席(物理的に教室内に存在すること)だけでは何ら評価の対象となりません。

専門演習(比較政治学)

担当者：松尾 秀哉

開講期：春学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週2回 単位数：2単位

講義概要

1.内容

内容)我々は物事を考えるとき、おおよそ頭の中で「比較」をしている。比較政治学とは、単に各国を比べるのではなく、比較の分析枠組みを作る学問でもある。本演習では、受講者の関心のある事例を「比較政治学」的に考える訓練をする。グループワークによって担当諸国を調べ、レポートを作成し報告する。

2.学びの意義と目標

難解な文献を自力で読解する(調べながら読む)力を身につける。また、議論を通じて分析的に考える力を身につける。それぞれの関心のある国の政治状況を調べ発信、議論する。時には外国語文献も取り上げる。

準備学習(予習)

最初から高いレベルは要求しませんが、報告に際して受講者、教員からの質問に答えられるよう十分な下調べが必要。他の報告の際も同様。進め方は初回に指示する。

準備学習(復習)

議論でわからない点は、WEBを用いて議論を継続する。

授業計画

- 1.導入:授業の進め方
- 2.比較政治の基礎(1) 比較政治とは?
- 3.比較政治の基礎(2) レジューメ作成方法
- 4.関心の報告(1)
- 5.関心の報告(2)
- 6.関心の報告(3)
- 7.関心の報告(4)
- 8.関心報告(1)
- 9.関心報告(2)
- 10.関心報告(3)
- 11.関心報告(4)
- 12.指定文献報告(1)
- 13.指定文献報告(2)
- 14.指定文献報告(3)
- 15.指定文献報告(4)
- 16.研究計画について
- 17.研究計画報告(1)
- 18.研究計画報告(2)
- 19.研究計画報告(3)
- 20.研究計画報告(4)
- 21.報告と議論(1)
- 22.報告と議論(2)
- 23.報告と議論(3)
- 24.報告と議論(4)
- 25.報告と議論(5)
- 26.報告と議論(6)
- 27.報告と議論(7)
- 28.報告と議論(8)
- 29.報告と議論(9)
- 30.報告と議論(10)

教科書

白井・松尾 『紛争と和解の政治学』(ナカニシヤ書店)

評価方法

(1)平常点:50% (2)報告:50%

専門演習(法思想史)

担当者：加藤 恵司

開講期：春学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週2回 単位数：2単位

講義概要

1.内容

「法思想史」の講義を基礎として、その内容を更に深める。本年度の主たるテーマとして、法制度の源流に焦点をあて、そこから流れ出す法思想を学んでみたい。

津田市正『法の理念と法律の理想』及び加藤恵司『法・思想・歴史』（ジーオー企画出版、2008年）をテキストにして、法思想史の発展ないし革命に寄与した法制、人物、学説を検証する。特に、講義で充分に出来なかった箇所に重点をおいて進めていく。思想は、政治、経済、社会、文化、歴史などさまざまな角度から形成され、また、把握されなければならない。法思想史は、法制度に目を据えて考察しようとするが、法的規範を設けざるを得なかった理由とか、時代的制約なども整理していく。

2.学びの意義と目標

読解力を身につける。自分の意見を他人に伝えるコミュニケーション能力を身につける。

準備学習(予習)

テキストを要約してレポートする。

準備学習(復習)

自分の興味を抱いたところを書き記して、進級論文に備えたい。

授業計画

1. テキスト購読・要約
2. テキスト購読・要約
3. テキスト購読・要約
4. テキスト購読・要約
5. テキスト購読・要約
6. テキスト購読・要約
7. テキスト購読・要約
8. テキスト購読・要約
9. テキスト購読・要約
10. テキスト購読・要約
11. テキスト購読・要約
12. テキスト購読・要約
13. テキスト購読・要約
14. テキスト購読・要約
15. テキスト購読・要約
16. テキスト購読・要約
17. テキスト購読・要約
18. テキスト購読・要約
19. テキスト購読・要約
20. テキスト購読・要約
21. テキスト購読・要約
22. テキスト購読・要約
23. テキスト購読・要約
24. テキスト購読・要約
25. テキスト購読・要約
26. テキスト購読・要約
27. テキスト購読・要約
28. テキスト購読・要約
29. テキスト購読・要約
30. テキスト購読・要約

教科書

加藤 恵司 『法・思想・歴史 Legal History』（ジーオー企画出版）

評価方法

(1)出席:80% (2)授業態度:20%

専門演習(理論社会学)

担当者：土方 透

開講期：春学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週2回 単位数：2単位

講義概要

1.内容

本ゼミナールは、社会現象および社会そのものの相対的把握をめざす、諸アプローチを多角的・多面的に研究する。

- 1 社会の解明に際して用いられる諸意味体系
(主体、時間、宗教、世界、歴史等)
 - 2 社会的コミュニケーションを可能とする諸メディア
(正義、貨幣、愛、信仰、真理等)
 - 3 思想ないし方法論そのものの検討
(M.フーコー、P.ブルデュー、N.ルーマン、ポランニー、ガダマー、J.ハーバーマス、あるいはポスト構造主義、ポスト・モダンと呼ばれる思想家等)
- 上記三視点を念頭に、ゼミ員との討議のなかで、テーマを絞っていく。

2.学びの意義と目標

少人数による徹底的な議論である。読み、考え、書き、述べ、さらに考える力を養う。

準備学習(予習)

テキストをきちんと読んでくること。必ずレジユメを用意してくること。

準備学習(復習)

課題をこなすこと

授業計画

1. 授業開始時に受講者の目的と希望にあわせて計画をたてる
2. 文献の持ち寄りとオリエンテーション
3. 文献講読
4. 同上
5. 同上
6. 同上
7. 同上
8. 参考文献の検討
9. 総括
10. 文献の選択
11. 文献講読
12. 同上
13. 同上
14. 同上
15. 同上
16. 参考文献の検討
17. 総括
18. 文献の選択
19. 文献講読
20. 同上
21. 同上
22. 同上
23. 同上
24. 参考文献の検討
25. 総括
26. 発展的文献の検討
27. 同上
28. 同上
29. 討論
30. 総括

教科書

授業の中で指示する
多岐かつ多数にわたる。

評価方法

(1)出席:50% (2)プレゼンテーション:50%

専門演習 A(アイデンティティの社会学)

担当者：横山 寿世理

開講期：春学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週1回 単位数：1単位

講義概要

1.内容

1.内容

自己アイデンティティについての社会的意識を中心に扱う。より具体的には、その社会的意識についての課題文をわかりやすくまとめ直して、他の学生の前で報告して、質問を受け、回答するというゼミ形式で進める。

ただし、あまりアイデンティティという概念に固執することなく、社会学を広く概観できるような文献を課題に指定する予定である。

2.カリキュラム上の位置づけ

本演習は、政治経済学科112P生必修の専門演習である。

2.学びの意義と目標

この演習では、自己アイデンティティに関する社会意識について社会的に考察することを目標とする。アイデンティティという概念と、これらの概念が社会的にどのように扱われるかを理解することとは異なる。このゼミでは、アイデンティティ概念が社会においてどのように評価され、位置づけられるかを明らかにすることを目指したい。

準備学習(予習)

指定された専門書を購入して、課題となった箇所は必ず事前に読んで、質問を用意して参加することを勧める。

準備学習(復習)

その日のゼミで行われた討論や、その結論がどのようなものであったかを、自分で整理しておいて欲しい。

授業計画

- 1.オリエンテーションと課題提示
- 2.評論文の講読と討論との練習
- 3.評論文のまとめとゼミ報告グループ分け
- 4.グループ別ゼミ報告・討論(1)
- 5.グループ別ゼミ報告・討論(2)
- 6.グループ別ゼミ報告・討論(3)
- 7.グループ別ゼミ報告・討論(4)
- 8.グループ別ゼミ報告・討論(5)
- 9.グループ別ゼミ報告・討論(6)
- 10.報告者順ゼミ報告・討論(1)
- 11.報告者順ゼミ報告・討論(2)
- 12.報告者順ゼミ報告・討論(3)
- 13.報告者順ゼミ報告・討論(4)
- 14.報告者順ゼミ報告・討論(5)
- 15.報告者順ゼミ報告・討論(6)とまとめ

教科書

矢田部 圭介、山下 玲子『アイデンティティと社会意識 私の中の社会/社会の中の私(叢書現代の社会学とメディア研究)』(北嶺出版)

評価方法

(1)報告への取り組み:50% (2)質疑応答:50%

専門演習 A (環境保全論)

担当者：村上 公久

開講期：春学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週1回 単位数：1単位

講義概要

1.内容

この演習では先ず、システム“人間 環境”系の考察を中心に環境史を概観して、環境問題をめぐる理念の変遷を資料により学び、古代から近代まで(地中海文明から近代合理主義まで)の環境論の変遷を辿る。次に、人口の急増と共に急速に生命の環境が劣化した産業革命以降今日までの環境問題を考え、その解決に貢献した先駆者達の歩みを振り返り、21世紀の人類の課題 Sustainable Development 保続的(持続的)開発(地球サミットUNCEDの決議『アジェンダ21』)の可能性を探る。

2.学びの意義と目標

環境問題の事例研究を通じて、解決への実際的な方途について学び、環境問題にみられるような複雑な問題と取り組み問題解決に挑む模擬経験を積む。

準備学習(予習)

総合科目「環境学」、専門科目「環境保全論」、キリスト教科目「聖書の中の環境問題」、特にこの演習の前提である「環境保全論」を、準備として予め復習しておくこと。演習開始以降の予習については、各回に指示する。

準備学習(復習)

各回のゼミ内容について、関係する情報・資料を探して参考にし、講義を受けて自分で考えたことを含めてゼミ記録を作成する。

授業計画

- 1.地球環境の劣化の現状(1)
- 2.地球環境の劣化の現状(2)
- 3.地球環境の劣化の現状(3) レポート
- 4.地球環境の劣化の現状(4) 討論
- 5.生態学におけるいくつかの重要な概念について(1)
- 6.生態学におけるいくつかの重要な概念について(2)
- 7.生態学におけるいくつかの重要な概念について(3) 討論
- 8.環境問題をめぐる理念の変遷(1)
- 9.環境問題をめぐる理念の変遷(2)
- 10.環境問題をめぐる理念の変遷(3)
- 11.環境問題をめぐる理念の変遷(4) レポート1
- 12.環境問題をめぐる理念の変遷(5) レポート2
- 13.環境問題をめぐる理念の変遷(6) レポート3
- 14.環境問題をめぐる理念の変遷(7) 討論
- 15.環境問題をめぐる理念の変遷(8) 討論2

教科書

授業の中で指示する

評価方法

(1)出席:40% (2)プレゼンテーションと討論:60%

専門演習 A(企業経済論)

担当者：柴田 武男

開講期：秋学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週1回 単位数：1単位

講義概要

1.内容

専門演習 A(企業経済論)では、経済情報のアクセス方法とその活用方法を教授する。中心的な情報源は日本経済新聞である。特に日本経済新聞電子版を用いて、インターネット時代に即して情報収集・活用の方法を指示していく。また、ゼミの教材としては『週刊ダイヤモンド』『週刊東洋経済』『週刊エコノミスト』という三大経済誌を活用し、その中から企業経済論に相応しい題材を提供し、議論していく。また、受講者からもこれらの情報媒体から題材提供を指示し、議論していく。

本ゼミは、現在日本経済を中心として何が起きているのか、日々起きている現実の経済問題と取り組むことを目的として、日々報道される経済記事の内容が理解でき、他人に解説できる能力を養成することである。

2.学びの意義と目標

本ゼミの目的は、現在日本経済を中心として何が起きているのか、日々起きている現実の問題と取り組むことである。また、日々報道される経済記事の内容が理解でき、他人に解説できる能力を養成することである。

準備学習(予習)

ゼミの出席は無遅刻・無欠席をお願いしたい。また、できるだけ政治経済学科主催の講演会および公開講義、AH等のシンポジウムにも積極的に参加できる学生の受講を期待する。

準備学習(復習)

講義で取り上げたテーマについて、質疑応答で生じた疑問点についてレポートを復習課題とする。

授業計画

1. 教員によるゼミの進め方を解説
2. ゼミ生が関心のあるトピックをレポートおよびゼミ生全員で議論1
3. ゼミ生が関心のあるトピックをレポートおよびゼミ生全員で議論2
4. ゼミ生が関心のあるトピックをレポートおよびゼミ生全員で議論3
5. ゼミ生が関心のあるトピックをレポートおよびゼミ生全員で議論4
6. ゼミ生が関心のあるトピックをレポートおよびゼミ生全員で議論5
7. ゼミ生が関心のあるトピックをレポートおよびゼミ生全員で議論6
8. ゼミ生が関心のあるトピックをレポートおよびゼミ生全員で議論7
9. ゼミ生が関心のあるトピックをレポートおよびゼミ生全員で議論8
10. ゼミ生が関心のあるトピックをレポートおよびゼミ生全員で議論9
11. ゼミ生が関心のあるトピックをレポートおよびゼミ生全員で議論10
12. ゼミ生が関心のあるトピックをレポートおよびゼミ生全員で議論11
13. ゼミ生が関心のあるトピックをレポートおよびゼミ生全員で議論12
14. ゼミ生が関心のあるトピックをレポートおよびゼミ生全員で議論13
15. ゼミ生が関心のあるトピックをレポートおよびゼミ生全員で議論14

教科書

授業の中で指示する

評価方法

(1)出席点:50% (2)レポート:50%

専門演習 A (金融論)

担当者：鈴木 真実哉

開講期：春学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週1回 単位数：1単位

講義概要

1.内容

「金融論」に関するテキストを選定し、発表担当者の報告とゼミ員全員による討論という形式をとる。テキストの性格にもよるが、なるべく毎回1～2のテーマに絞って議論をすすめる予定である。テキストの選定は、こちらがいくつかの候補を挙げ、ゼミのメンバーが決定した際に、その中から話し合いによって行う。

2.学びの意義と目標

テーマの選択、調べ、まとめ、発表を体験的に学ぶ。資料の作成も大切な学びである。
この学びが卒業後の社会人としての実力に結びつくことになる。

準備学習(予習)

配布用レジュメはを1枚につけること。
俳諧準備すべき内容が異なるので、2週間前の演習を最後に指示する。

準備学習(復習)

発表者は他のゼミメンバーよりの感想や質問、指導教員からのコメントをふまえて、提出できるようにまとめておくこと。受講者は、配布されたレジュメ資料を基にまとめて提出できるようにしておくこと。

授業計画

1. 共通テーマの発表（基礎）
2. 個別テーマの発表（基礎）
3. 共通テーマの発表（発展）
4. 個別テーマの発表（発展）
5. 討論大会
6. 金融関連施設見学
7. 金融関連施設見学
8. 見学レポート発表
9. 見学レポート発表
10. 共通テーマの発表（応用）
11. 個別テーマの発表（応用）
12. 討論大会
13. ゲストによるレクチャー
14. ゲストによるレクチャー
15. まとめ

教科書

授業の中で指示する

評価方法

(1)発表:50% (2)感想・質問:30% (3)出席状況:20%
全員への共通レポートを課することもある。

専門演習 A (経営管理)

担当者：八木 規子

開講期：春学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週1回 単位数：1単位

講義概要

1. 内容

経営とはなにか？という問いについて、日本の実業界、ビジネスマンの中で広く読まれている、ドラッカーの『マネジメント：基本と原則【エッセンシャル版】』を読みながら、考えていく。日本では著名なドラッカーであるが、米国のビジネススクールではほとんど取り上げられていないのが現状である。どうしてこのような違いが生じるのか、について触れることは、「経営を科学することは可能か？」というもうひとつの問いにつながる。本演習では、この二つの問いに関して、ゼミ生と共に考えを深めていきたい。

2. 学びの意義と目標

経営とは、会社の経営者や管理職だけが理解すればよい、というものではない。むしろ、組織の成員のひとりひとり、また、いわゆる会社組織に属さない人間、たとえば家庭人となることを選んだ個人にも重要なことがらである。むしろ、経営というものがより良い方向に向かっていくためには、組織の上層の人間だけでなく、すべての社会の成員が、経営的なものの考え方に慣れ親しんでいくことが重要である。経営とは何かを学ぶに際し、日本で広く読まれているドラッカーの書籍を読み通すことは、就職活動において、実業界のひとびとと同じ言語で経営を語ることもつながる。また、就職活動を待たずとも、サークル活動やアルバイト先での経験にも経営の考え方は役に立つ。本演習は、さまざまな場に援用できる「基本と原則」としての経営の考え方を学ぶことを目標とする。

準備学習(予習)

教科書の該当箇所および追加で配布する資料を読んでおくこと。事前に出される宿題について、自分の考えをA4版1ページ程度に打ち出して持参すること。

準備学習(復習)

授業中に取ったノートを整理しておく。

授業計画

1. はじめに。マネジメントの役割
2. 企業の成果
3. 公的機関の成果
4. 仕事と人間
5. 社会的責任
6. Part 1まとめ
7. マネジャー
8. マネジメントの技能
9. マネジメントの組織
10. Part 2まとめ
11. トップマネジメント
12. マネジメントの戦略
13. Part 3まとめ
14. マネジメントのパラダイムは変わったか？
15. 全体まとめ

教科書

ピーター・F・ドラッカー, 上田 博生 『マネジメント[エッセンシャル版]-基本と原則』(ダイヤモンド社)

評価方法

(1)宿題:70%:7%×10回 (2)期末レポート:30%

専門演習 A (政治過程論)

担当者：高橋 愛子

開講期：春学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週1回 単位数：1単位

講義概要

1.内容

今日の政治社会が直面するさまざまな問題を理解するためには二つのアプローチが必要とされる。すなわち、政治過程の具体的なダイナミズムについて実証的な認識をもつこと、および、現実政治を理解する際に必要とされる理念的思想的な次元における自分なりの認識のための座標軸をもつことである。

以上の基本的な考え方に立ち、本年は、「民主主義社会におけるメディア」を一つの切り口としながら、共通のテキストを輪読しつつ学び議論をしてゆく。一学期間を通して学んだことを「学期末レポート」として提出することが求められる。

2.学びの意義と目標

基本的なテキストの読解力を得ること（著者の主張の要点を把握し、発表用のレジュメを作成し、プレゼンを行う）、政治的な課題についての議論の作法を学ぶこと、また、政治にかかわる独自の研究テーマを見出すこと。

準備学習(予習)

リアルタイムな政治現象に関心を持ち新聞を読む事に加え、各回に予定されるテキストを精読すること。

準備学習(復習)

ゼミで議論になったポイントについての理解を深めるためのレポート作成。

授業計画

1. 導入:一学期間の進め方のオリエンテーション、分担の決定
2. 共通テキストの講読、プレゼン、議論
3. 共通テキストの講読、プレゼン、議論
4. 共通テキストの講読、プレゼン、議論
5. 共通テキストの講読、プレゼン、議論
6. 共通テキストの講読、プレゼン、議論
7. 共通テキストの講読、プレゼン、議論
8. 共通テキストの講読、プレゼン、議論
9. 共通テキストの講読、プレゼン、議論
10. 共通テキストの講読、プレゼン、議論
11. 共通テキストの講読、プレゼン、議論
12. 共通テキストの講読、プレゼン、議論
13. 共通テキストの講読、プレゼン、議論
14. 共通テキストの講読、プレゼン、議論
15. 一学期間のまとめ

教科書

授業の中で指示する

評価方法

(1)出席:40% (2)プレゼン:30% (3)学期末レポート:30%

専門演習 A (政治哲学)

担当者：森分 大輔

開講期：春学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週1回 単位数：1単位

講義概要

1.内容

政治哲学の専門演習として、洋の東西にまたがる近・現代の政治理論家のテキストを読み込むことを主眼とする。また、それに関連する議論をおこなうことで参加者の政治学的素養を深める。

2.学びの意義と目標

これまでに身に付けてきた、様々な社会科学的教養を前提として、政治哲学に興味、関心を持つ学生諸君の問題意識を深めることを目的としている。

準備学習(予習)

現実の政治現象に関心を持つだけでなくその理解に必要な政治哲学的観点への関心をもつこと。

準備学習(復習)

発表、討論内容について自身の考えを整理することが必要とされる。

授業計画

1. 導入:講義計画の説明、担当についての分担
2. 政治理論と現代政治に関する導入
3. テキストの輪読・各自のプレゼン・議論
4. テキストの輪読・各自のプレゼン・議論
5. テキストの輪読・各自のプレゼン・議論
6. テキストの輪読・各自のプレゼン・議論
7. テキストの輪読・各自のプレゼン・議論
8. テキストの輪読・各自のプレゼン・議論
9. テキストの輪読・各自のプレゼン・議論
10. テキストの輪読・各自のプレゼン・議論
11. テキストの輪読・各自のプレゼン・議論
12. テキストの輪読・各自のプレゼン・議論
13. テキストの輪読・各自のプレゼン・議論
14. テキストの輪読・各自のプレゼン・議論
15. まとめ

教科書

授業の中で指示する

評価方法

(1)出席:40% (2)プレゼンテーション:30% (3)学期末レポート:30%

専門演習 A (地域圏研究ロシア)

担当者：飯島 康夫

開講期：春学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週1回 単位数：1単位

講義概要

1.内容

巨大な隣国ロシア、そしてロシアやウクライナなどを育んだ悠久のユーラシアの大地と文化について考察する機会とする。詳細は、学生との相談による。

2.学びの意義と目標

意義は、ロシアの統治機構や統治の原則の基本を理解することである。目標は、文献を元に現代ロシアの抱える問題を発見し、議論できることである。

準備学習(予習)

新聞やテレビでユーラシア各地で起こっているニュースに慣れ親しむこと
基本文献を指示するので通読すること。事前に文献に目を通すこと。

準備学習(復習)

その都度、前回の議論のまとめを最初にしてもらうこと。

授業計画

- 1.ロシアの見方
- 2.ゲームのルール
- 3.内政 - プーチンの権力と憲法
- 4.オガルヒ
- 5.大統領府
- 6.政策決定過程と安全保障会議
- 7.メドヴェージェフの存在
- 8.多極主義の外交
- 9.近い外国
- 10.米国
- 11.欧州
- 12.アジアとロシアの関係
- 13.レポート添削、発表
- 14.天然資源とロシアの復活
- 15.まとめ

教科書

武田 善憲 『ロシアの論理 復活した大国は何を目指すか (中公新書)』 (中央公論新社)

評価方法

(1)出席:70% (2)レポート・発表:30%

専門演習 A (日本政治思想史)

担当者：吉田 博司

開講期：春学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週1回 単位数：1単位

講義概要

1.内容

近代日本の政治家及び思想家の研究を紹介しますが、後半は学生諸君にテーマを設定させ、報告・討論となります。

2.学びの意義と目標

近代日本の政治家及び思想家の研究をとおして、政治の本質を学び、現代政治を批判的に洞察する力を養う。

準備学習(予習)

自分の報告をまとめるばかりでなく、他の学生のテーマに関してしつもんできるように準備すること。

準備学習(復習)

報告にはアドバイス、質問がかかるので、それを下に修正すること。

授業計画

1. 明治維新期の政治家
2. 同
3. 同
4. 同
5. 明治期の政治家
6. 同
7. 同
8. 大正昭和期の政治家
9. 同
10. 同
11. 同
12. 学生報告と討論
13. 同
14. 同
15. 同

教科書

プリントを配布する

評価方法

(1)報告:70% (2)質問:30%
報告を重視する。

専門演習 A(比較憲法)

担当者：石川 裕一郎

開講期：春学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週1回 単位数：1単位

講義概要

1.内容

憲法に関連する話題の中から受講者各自がテーマを設定し、調査・発表・討論を重ねつつ、最終的に2,000字程度のレポートにまとめることを目標とします。テーマは、法律に関することならば基本的に受講者各自の自由ですが、受講者には以下のことが厳しく求められます。

* 本をたくさん読む。若者に限らず、とにかく現代日本人は本を読まなさ過ぎ。そのため、知識量が圧倒的に少ない状態で議論をし、なんとなく自分の意見(らしきもの)を決めているのが現状です。人間には、活字情報を活用することによって異質な他者を知る・追体験する能力が備わっています。この演習ではその能力を十分に磨いてもらいます。

* 現場を多く見る。若者に限らず、とにかく現代日本人は現場を知らなさ過ぎ。そのため、現実を知らない状態で議論をし、なんとなく自分の意見(らしきもの)を決めているのが現状です。人間には、直接その目と耳で触れることによって異質な他者を理解する・共感する能力が備わっています。この演習ではその能力を十分に磨いてもらいます。

2.学びの意義と目標

具体的な意義と目標は、各受講者のモチベーションに依拠しますが、とにかく事実を観察し、ひたすら読書をし、公権力や社会的権力から一方的に搾取されない賢い市民=国民=労働者となることを目指します。

準備学習(予習)

演習科目なので、とりわけプレゼンの準備には各受講者の自発的かつ継続的な相応の分量の予習が求められます。

準備学習(復習)

プレゼン後においても、卒業研究に向けて相応の分量の復習が求められます。

授業計画

1. 導入:演習の進め方に関する討議及び決定
2. テキスト輪読・発表・議論
3. テキスト輪読・発表・議論
4. テキスト輪読・発表・議論
5. テキスト輪読・発表・議論
6. テキスト輪読・発表・議論
7. テキスト輪読・発表・議論
8. テキスト輪読・発表・議論
9. テキスト輪読・発表・議論
10. テキスト輪読・発表・議論
11. テキスト輪読・発表・議論
12. テキスト輪読・発表・議論
13. テキスト輪読・発表・議論
14. テキスト輪読・発表・議論
15. テキスト輪読・発表・議論

教科書

授業の中で指示する

評価方法

(1)平常点:80%:プレゼンテーションの内容と討議への参加状況から評価します。(2)期末レポート:20%

単なる出席(物理的に教室内に存在すること)だけでは何ら評価の対象となりません。

専門演習 A (比較政治学)

担当者：松尾 秀哉

開講期：春学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週1回 単位数：1単位

講義概要

1.内容

内容)本演習では、受講者個々のテーマを設定し、その報告と参加者の議論、指導を行なう。白紙の段階から研究計画を立て、調査を進め報告することを通じて、社会科学的発想を身につける。

2.学びの意義と目標

先行研究の批判、さらに他者との討論を通じて、批判的思考力を高める。また、資料収集とその整理を通じて、客観的な分析力を身につける。

準備学習(予習)

進め方は受講者と相談する。自身の研究テーマの準備は日常的に必要な。また他者の報告についても討論できるよう、文献を事前に読み込むなど毎回準備することが必要とされる。

準備学習(復習)

質問があつて十分にこたえられなかった点はWEBにて次回までにフォローする必要がある。

授業計画

1. 導入 授業の進め方
2. 報告方法について
3. 関心の報告(1)
4. 関心の報告(2)
5. 関心の報告(3)
6. 関心の報告(4)
7. 関心の報告(2-1)
8. 関心の報告(2-2)
9. 関心の報告(2-3)
10. 関心の報告(2-4)
11. 研究計画について
12. 研究計画(1)
13. 研究計画(2)
14. 研究計画(3)
15. 研究計画(4)

教科書

授業の中で指示する

評価方法

(1)平常点:30% (2)報告:50% (3)レポート:20%
平常点とは質疑などへの積極的参加による

専門演習 A (法思想史)

担当者：加藤 恵司

開講期：春学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週1回 単位数：1単位

講義概要

1.内容

「法思想史」の講義を基礎として、その内容を更に深める。本年度の主たるテーマとして、法制度の源流に焦点をあて、そこから流れ出す法思想を学んでみたい。

2.学びの意義と目標

書物、論文を読むことを目標とする。また、与えられた課題を深く追求する。

準備学習(予習)

テキストを要約してレポートする。

準備学習(復習)

話題になった事柄を調べる。

授業計画

1. テキスト購読・要約
2. テキスト購読・要約
3. テキスト購読・要約
4. テキスト購読・要約
5. テキスト購読・要約
6. テキスト購読・要約
7. テキスト購読・要約
8. テキスト購読・要約
9. テキスト購読・要約
10. テキスト購読・要約
11. テキスト購読・要約
12. テキスト購読・要約
13. テキスト購読・要約
14. テキスト購読・要約
15. テキスト購読・要約

教科書

加藤 恵司 『法・思想・歴史 Legal History』(ジーオー企画出版)

評価方法

(1)出席:60% (2)授業態度:40%

専門演習 A (理論社会学)

担当者：土方 透

開講期：春学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週1回 単位数：1単位

講義概要

1. 内容

本ゼミナールは、社会現象および社会そのものの相対的把握をめざす、諸アプローチを多角的・多面的に研究する。

- 1 社会の解明に際して用いられる諸意味体系
(主体、時間、宗教、世界、歴史等)
 - 2 社会的コミュニケーションを可能とする諸メディア
(正義、貨幣、愛、信仰、真理等)
 - 3 思想ないし方法論そのものの検討
(M.フーコー、P.ブルデュー、N.ルーマン、ポランニー、ガダマー、J.ハーバーマス、あるいはポスト構造主義、ポスト・モダンと呼ばれる思想家等)
- 上記三視点を念頭に、ゼミ員との討議のなかで、テーマを絞っていく。

2. 学びの意義と目標

少人数による徹底的な議論である。読み、考え、書き、述べ、さらに考える力を養う。

準備学習(予習)

テキストをきちんと読んでくること。必ずレジユメを用意してくること。

準備学習(復習)

課題をこなすこと

授業計画

1. 授業開始時に受講者の目的と希望にあわせて計画をたてる
2. 文献の持ち寄りとオリエンテーション
3. 文献講読
4. 同上
5. 同上
6. 同上
7. 同上
8. 総括
9. 文献の選択
10. 文献講読
11. 同上
12. 同上
13. 同上
14. 同上
15. 総括

教科書

授業の中で指示する
多岐かつ多数にわたる。

評価方法

(1)出席:50% (2)プレゼンテーション:50%

専門演習 B (アイデンティティの社会学)

担当者：横山 寿世理

開講期：秋学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週1回 単位数：1単位

講義概要

1.内容

1.内容

自己アイデンティティについての社会的意識を中心に扱う。より具体的には、その社会的意識についての課題文をわかりやすくまとめ直して、他の学生の前で報告して、質問を受け、回答するというゼミ形式で進める。

ただし、あまりアイデンティティという概念に固執することなく、社会学を広く概観できるような文献を課題に指定する予定である。

2.カリキュラム上の位置づけ

政治経済学科112P生必修の専門演習（ゼミ）である。

2.学びの意義と目標

この演習では、自己アイデンティティに関する社会的意識について社会的に考察することを目標とする。アイデンティティという概念と、これらの概念が社会や人びとのどのような考え方から形成されるのかについて理解することとは異なるので、後者が現代的アイデンティティが現代社会や社会意識を理解するための一つの指標となり得ることに気付いて欲しい。

準備学習(予習)

指定された専門書を購入して、課題となった箇所は必ず事前に読んで、質問を用意して参加することを勧める。

準備学習(復習)

その日のゼミで行われた討論や、その結論がどのようなものであったかを、自分で整理しておいて欲しい。

授業計画

1. オリエンテーションとグループ分け
2. グループ別ゼミ報告・討論（1）
3. グループ別ゼミ報告・討論（2）
4. グループ別ゼミ報告・討論（3）
5. グループ別ゼミ報告・討論（4）
6. グループ別ゼミ報告・討論（5）
7. グループ別ゼミ報告・討論（6）
8. グループ別ゼミ報告・討論（7）
9. 報告者順ゼミ報告・討論（1）
10. 報告者順ゼミ報告・討論（2）
11. 報告者順ゼミ報告・討論（3）
12. 報告者順ゼミ報告・討論（4）
13. 報告者順ゼミ報告・討論（5）
14. 報告者順ゼミ報告・討論（6）
15. 報告者順ゼミ報告・討論（7）とまとめ

教科書

小川 伸彦, 山 泰幸 『現代文化の社会学入門 テーマと出会う、問いを深める』(ミネルヴァ書房)

評価方法

(1)報告への取り組み:50% (2)質疑応答:50%

専門演習 B (環境保全論)

担当者：村上 公久

開講期：秋学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週1回 単位数：1単位

講義概要

1.内容

始めに全員で地球環境問題を扱った英文の報告書（5つの英文報告書）を学び、その中から各自がテーマを選んで、レポートをまとめる。この演習ではまず、システム“人間 環境”系の考察を中心に環境史を概観する。次に、人口の急増と共に急速に生命の環境が劣化した産業革命以降今日までの環境問題を考え、その解決に貢献した先駆者達の歩みを振り返り、自然保護と環境保全という立場の違いの検討を手がかりに21世紀の人類の課題 Sustainable Development 保続的(持続的)開発(地球サミットUNCEDの決議『アジェンダ21』)の可能性を探る。次に複数のグループに分かれてグループ毎に地球環境問題に関わる課題を設定し、解決への提言をまとめる。

2.学びの意義と目標

専門科目「環境保全論」、専門演習A(環境保全論)で得た知見を、グループで提言にまとめ発表する能力の獲得。環境問題の事例研究を通じて、解決への実際的な方途について学び、環境問題にみられるような複雑な問題と取り組み問題解決に挑む模擬経験を積む。

準備学習(予習)

総合科目「環境学」、専門科目「環境保全論」、キリスト教科目「聖書の中の環境問題」、特にこの演習の前提である「環境保全論」を、準備として予め復習しておくこと。演習開始以降の予習については、各回に指示する。

準備学習(復習)

各回のゼミ内容について、関係する情報・資料を探して参考にし、講義を受けて自分で考えたことを含めてゼミ記録を作成する。

授業計画

1. The Club Of Rome : Agenda For The End Of The Century ('84)
2. The Club Of Rome : Agenda For The End Of The Century ('84) -2
3. The Global 2000 Report (1)
4. The Global 2000 Report (2)
5. The Global 2000 Report (3)
6. Our Common Future (1)
7. Our Common Future (2)
8. Our Common Future (3)
9. State Of The World, World Watch Institute
10. World Resources Report (1)
11. World Resources Report (2)
12. World Resources Report (3)
13. テーマを設定してレポートを作成 (1)
14. テーマを設定してレポートを作成 (2)
15. テーマを設定してレポートを作成 (3)

教科書

授業の中で指示する

評価方法

(1)出席:40% (2)プレゼンテーションと討論:60%
欠席回数が講義回数の3分の1を超える者には、単位を認定しない。
資料の探索と資料の理解、プレゼンテーション等のための加工、複数回の個人・チームによるプレゼンテーション、討論、ゼミ参加態度、ゼミへの熱意と貢献等を総合的に評価する。

専門演習 B (企業経済論)

担当者：柴田 武男

開講期：秋学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週1回 単位数：1単位

講義概要

1.内容

専門演習B(企業経済論)では、経済情報のアクセス方法とその活用方法を教授する。中心的な情報源は日本経済新聞である。特に日本経済新聞電子版を用いて、インターネット時代に即して情報収集・活用の方法を指示していく。また、ゼミの教材としては『週刊ダイヤモンド』『週刊東洋経済』『週刊エコノミスト』という三大経済誌を活用し、その中から企業経済論に相応しい題材を提供し、議論していく。また、受講者からもこれらの情報媒体から題材提供を指示し、議論していく。

本ゼミは、現在日本経済を中心として何が起きているのか、日々起きている現実の経済問題と取り組むことを目的として、日々報道される経済記事の内容が理解でき、他人に解説できる能力を養成することである。

2.学びの意義と目標

本ゼミの目的は、現在日本経済を中心として何が起きているのか、日々起きている現実の問題と取り組むことである。また、日々報道される経済記事の内容が理解でき、他人に解説できる能力を養成することである。

準備学習(予習)

ゼミの出席は無遅刻・無欠席をお願いしたい。また、できるだけ政治経済学科主催の講演会および公開講義、AH等のシンポジウムにも積極的に参加できる学生の受講を期待する。

準備学習(復習)

ゼミの質疑応答で生じた疑問点をレポート課題として提出させる。

授業計画

1. 教員によるゼミの進め方を解説
2. ゼミ生が関心のあるトピックをレポートおよびゼミ生全員で議論1
3. ゼミ生が関心のあるトピックをレポートおよびゼミ生全員で議論2
4. ゼミ生が関心のあるトピックをレポートおよびゼミ生全員で議論3
5. ゼミ生が関心のあるトピックをレポートおよびゼミ生全員で議論4
6. ゼミ生が関心のあるトピックをレポートおよびゼミ生全員で議論5
7. ゼミ生が関心のあるトピックをレポートおよびゼミ生全員で議論6
8. ゼミ生が関心のあるトピックをレポートおよびゼミ生全員で議論7
9. ゼミ生が関心のあるトピックをレポートおよびゼミ生全員で議論8
10. ゼミ生が関心のあるトピックをレポートおよびゼミ生全員で議論9
11. ゼミ生が関心のあるトピックをレポートおよびゼミ生全員で議論10
12. ゼミ生が関心のあるトピックをレポートおよびゼミ生全員で議論11
13. ゼミ生が関心のあるトピックをレポートおよびゼミ生全員で議論12
14. ゼミ生が関心のあるトピックをレポートおよびゼミ生全員で議論13
15. ゼミ生が関心のあるトピックをレポートおよびゼミ生全員で議論14

教科書

授業の中で指示する

評価方法

(1)出席点:50% (2)レポート:50%

専門演習 B (金融論)

担当者：鈴木 真実哉

開講期：秋学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週1回 単位数：1単位

講義概要

1.内容

専門演習I(金融論)をうけて、テーマの設定のし方、資料の検索を調べ、調べたものをまとめる、発表する等の能力を向上させることに目標をおく。

毎回、必ず発表の機会がある。その発表についての質疑応答も発表のうちである。

2.学びの意義と目標

テーマの選択、調べ、まとめ、発表を体験的に学ぶことになる。資料の作成も大切な学びである。

これらの学びが、卒業後の社会人としての実力に結びつくことになる。

準備学習(予習)

レジュメは、全体のまとめを1枚につけること。発表後は修正したものを提出すること。

毎回、準備すべきないヨガ異なるので2週間前の演習の最後に指示する。

準備学習(復習)

発表者は、他のゼミメンバーよりの感想や質問、指導教員からのコメントをふまえて、提出できるようにしておくこと。

授業計画

1. 第1回～第5回 個別発表
2. 第1回～第5回 個別発表
3. 第1回～第5回 個別発表
4. 第1回～第5回 個別発表
5. 第1回～第5回 個別発表
6. 第6回～第7回 グループ(2～3名)共同発表
7. 第6回～第7回 グループ(2～3名)共同発表
8. 第8回～第10回 個別発表
9. 第8回～第10回 個別発表
10. 第8回～第10回 個別発表
11. 第11回 2グループに分かれての全体ディスカッション
12. 第12回～ 個別発表と共同発表
13. 専門演習レポート発表
14. 専門演習レポート発表
15. まとめ

教科書

授業の中で指示する

評価方法

(1)発表:50% (2)感想・質問:30% (3)出席状況:20%
全員への共通レポートを課することもある。

専門演習 B (政治過程論)

担当者：高橋 愛子

開講期：秋学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週1回 単位数：1単位

講義概要

1.内容

基本的に、学期の前半は「民主主義社会におけるメディア」に関する共通のテキストを読み、後半は順次、各自が自らの関心に即して選んだテーマについての個別発表とし、各自の研究課題についての進捗状況を報告、議論する。報告と議論を重ねて次年度以降に取り組む「卒業論文」の土台・骨格の形成を図る。学期末に「学期末レポート」の提出が求められる。

2.学びの意義と目標

基本的なテキストの読解力を得ること（要点を把握し、レジюмеを作成し、プレゼンする）、政治的な課題についての議論の作法を学ぶこと、また、独自の研究テーマへの問題意識を深めること。

準備学習(予習)

リアルタイムな政治現象に関心を持ち新聞を読む事に加え、各回に予定されるテキストを精読すること。

準備学習(復習)

ゼミで議論になったポイントについてのレポート作成。

授業計画

1. オリエンテーション
2. 共通テキストの講読、議論
3. 共通テキストの講読、議論
4. 共通テキストの講読、議論
5. 共通テキストの講読、議論
6. 共通テキストの講読、議論
7. 共通テキストの講読、議論
8. 共通テキストの講読、議論
9. 各自の研究課題のプレゼン、議論
10. 各自の研究課題のプレゼン、議論
11. 各自の研究課題のプレゼン、議論
12. 各自の研究課題のプレゼン、議論
13. 各自の研究課題のプレゼン、議論
14. 各自の研究課題のプレゼン、議論
15. 一学期間のまとめ

教科書

授業の中で指示する

評価方法

(1)出席:40% (2)プレゼン:30% (3)学期末レポート:30%

専門演習 B (政治哲学)

担当者：森分 大輔

開講期：秋学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週1回 単位数：1単位

講義概要

1.内容

政治哲学の専門演習として、各人の問題意識にあわせた議論を行うことを主眼に置く。同時に関連する議論をおこなうことで参加者の政治学的素養を深める。

2.学びの意義と目標

これまでに身に付けてきた、様々な社会科学的教養を前提として、政治哲学に興味、関心を持つ学生諸君の問題意識を深めることを目的としている。

準備学習(予習)

現実の政治現象に関心を持つだけでなくその理解に必要な政治哲学的観点への関心をもつこと。

準備学習(復習)

発表、討論内容について自身の考えを整理することが必要とされる。

授業計画

1. 導入:講義計画の説明、担当についての分担
2. 各自の関心のあるテーマの選択
3. 各自のプレゼン・議論
4. 各自のプレゼン・議論
5. 各自のプレゼン・議論
6. 各自のプレゼン・議論
7. 各自のプレゼン・議論
8. 各自のプレゼン・議論
9. 各自のプレゼン・議論
10. 各自のプレゼン・議論
11. 各自のプレゼン・議論
12. 各自のプレゼン・議論
13. 各自のプレゼン・議論
14. 各自のプレゼン・議論
15. まとめ

教科書

授業の中で指示する

評価方法

(1)出席:40% (2)プレゼンテーション:30% (3)学期末レポート:30%

専門演習 B (地域圏研究ロシア)

担当者：飯島 康夫

開講期：秋学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週1回 単位数：1単位

講義概要

1.内容

476年、西ローマ帝国が滅んだ後、ローマ教会は800年頃から、東の教会から離れ始める。この結果、1054年、東と西の教会は分裂。さて、東ローマ帝国は1453年まで存続。ローマ・カトリック教会を柱とする西欧とギリシア正教会を擁するロシアという対立図式が出来上がる。ルネサンス以降、西欧は目覚しく発展し、やがてロシアは西欧に習い、近代化を進めようとするが、その一方で、もう一つのキリスト教をいただく国としての自負、西欧に劣るはずがないという自信も保ち続ける。西欧より後れているという意識と西欧に優るという意識 - - これら矛盾した二つの意識がロシア思想史の全体を貫いている。これらを紹介すること。

2.学びの意義と目標

意義は、ロシアの文化・宗教・習慣について、卒業研究論文の基礎となる論文を提出、加筆、修正の後、一定の推準の理解に深めること。そして、北東アジアの隣国の歴史、宗教、文化について、幅広く理解できるように工夫していることで重なる。とくに、目標としては指示する文献を通じて隣国ロシアの宗教・文化・思想に深く解れて理解すること。

準備学習(予習)

他人の書いた文章を正確に理解し、自分の考えを明快な言葉で表現するのはとても難しい。参加者には、辛抱強く取り組むよう期待する。基本文献を指示するのであらかじめ通読すること。

準備学習(復習)

ゼミごとに前回の議論のまとめをすること。

授業計画

1. アジア系遊牧民族の西方への移動
2. モンゴルのくびき
3. ロシアの特異性
4. シベリア・極東地域
5. 北東アジアの中でのロシア
6. カムチャッカ半島
7. ロシアの東進の動機
8. 毛皮貿易
9. 中国とロシア
10. 露米会社と北米
11. 参考文献の提示、テーマの掘り下げ
12. レポート作成
13. 添削、指導
14. 発表
15. まとめ

教科書

司馬 遼太郎 『ロシアについて 北方の原形(文春文庫)』(文藝春秋)

評価方法

(1)出席:70% (2)レポート・発表:30%

専門演習 B (日本政治思想史)

担当者：吉田 博司

開講期：秋学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週1回 単位数：1単位

講義概要

1.内容

近代日本の思想家・政治家について自らテーマを設定し報告するとともに積極的に他の発表に質問をすること。

2.学びの意義と目標

近代日本の政治家及び思想家の研究をとおして、政治の本質を学び、現代政治を批判的に洞察する力を養う。

準備学習(予習)

自分の報告作成ばかりでなく、他学生のテーマについても良い質問ができるよう調べておく。

準備学習(復習)

報告にはアドバイス、質問があるので、それらを参考に修正をすること。

授業計画

1. 学生の報告・討論
2. 同
3. 同
4. 同
5. 同
6. 同
7. 同
8. 同
9. 同
10. 同
11. 同
12. 同
13. 同
14. 同
15. 同

教科書

プリントを配布する

評価方法

(1)報告:70% (2)質問:30%
報告を重視する。

専門演習 B (比較憲法)

担当者：石川 裕一郎

開講期：秋学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週1回 単位数：1単位

講義概要

1.内容

春学期に引き続き、憲法に関連する話題の中から受講者各自がテーマを設定し、調査・発表・討論を重ねつつ、最終的に2,000字程度のレポートにまとめることを目標とします。テーマは、法律に関することならば基本的に受講者各自の自由ですが、受講者には以下のことが厳しく求められます。

* 本をたくさん読む。若者に限らず、とにかく現代日本人は本を読まなさ過ぎ。そのため、知識量が圧倒的に少ない状態で議論をし、なんとなく自分の意見(らしきもの)を決めているのが現状です。人間には、活字情報を活用することによって異質な他者を知る・追体験する能力が備わっています。この演習ではその能力を十分に磨いてもらいます。

* 現場を多く見る。若者に限らず、とにかく現代日本人は現場を知らなさ過ぎ。そのため、現実を知らない状態で議論をし、なんとなく自分の意見(らしきもの)を決めているのが現状です。人間には、直接その目と耳で触れることによって異質な他者を理解する・共感する能力が備わっています。この演習ではその能力を十分に磨いてもらいます。

2.学びの意義と目標

具体的な意義と目標は、各受講者のモチベーションに依拠しますが、とにかく事実を観察し、ひたすら読書をし、公権力や社会的権力から一方的に搾取されない賢い市民=国民=労働者となることを目指します。

準備学習(予習)

演習科目なので、とりわけプレゼンの準備には各受講者の自発的かつ継続的な相応の分量の予習が求められます。

準備学習(復習)

プレゼン後においても、卒業研究に向けて相応の分量の復習が求められます。

授業計画

1. 導入:演習の進め方に関する討議及び決定
2. テキスト輪読・発表・議論
3. テキスト輪読・発表・議論
4. テキスト輪読・発表・議論
5. テキスト輪読・発表・議論
6. テキスト輪読・発表・議論
7. テキスト輪読・発表・議論
8. テキスト輪読・発表・議論
9. テキスト輪読・発表・議論
10. テキスト輪読・発表・議論
11. テキスト輪読・発表・議論
12. テキスト輪読・発表・議論
13. テキスト輪読・発表・議論
14. テキスト輪読・発表・議論
15. テキスト輪読・発表・議論

教科書

授業の中で指示する

評価方法

(1)平常点:80%:プレゼンテーションの内容と討議への参加状況から評価します。(2)期末レポート:20%

単なる出席(物理的に教室内に存在すること)だけでは何ら評価の対象となりません。

専門演習 B (比較政治学)

担当者：松尾 秀哉

開講期：秋学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週1回 単位数：1単位

講義概要

1.内容

内容)本演習では、受講者個々のテーマを設定し、その報告と参加者の議論、指導を行なう。白紙の段階から研究計画を立て、調査を進め報告することを通じて、社会科学的発想を身につける。

2.学びの意義と目標

先行研究の批判、さらに他者との議論を通じて、批判的思考力を高める。また、資料収集とその整理を通じて、客観的な分析力を身につける。

準備学習(予習)

進め方は受講者と相談する。自身の研究テーマの準備は日常的に必要となる。また他者の報告についても議論できるよう、文献を事前に読み込むなど毎回準備することが必要とされる。

準備学習(復習)

質問があつて十分にこたえられなかった点はWEBにて次回までにフォローする必要がある。

授業計画

1. 導入 授業の進め方
2. 報告方法について
3. 指定文献報告(1)
4. 指定文献報告(2)
5. 指定文献報告(3)
6. 指定文献報告(4)
7. 文献報告(2-1)
8. 文献報告(2-2)
9. 文献報告(2-3)
10. 文献報告(2-4)
11. 研究計画について
12. 研究計画(1)
13. 研究計画(2)
14. 研究計画(3)
15. 研究計画(4)

教科書

白井・松尾 『紛争と和解の政治学』(ナカニシヤ出版)

評価方法

(1)平常点:30% (2)報告:50% (3)レポート:20%
平常点とは質疑などへの積極的参加による

専門演習 B (法思想史)

担当者：加藤 恵司

開講期：秋学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週1回 単位数：1単位

講義概要

1.内容

法思想史の中で、暗黒といわれる西欧の中世から近代の黎明までに焦点をあてる。

2.学びの意義と目標

書物、論文を読むことを目標とする。また、与えられた課題を深く追求する。

準備学習(予習)

テキストを要約してレポートする。特に、復習は求めない。

準備学習(復習)

話題になった事柄を調べる。

授業計画

1. テキスト購読・要約
2. テキスト購読・要約
3. テキスト購読・要約
4. テキスト購読・要約
5. テキスト購読・要約
6. テキスト購読・要約
7. テキスト購読・要約
8. テキスト購読・要約
9. テキスト購読・要約
10. テキスト購読・要約
11. テキスト購読・要約
12. テキスト購読・要約
13. テキスト購読・要約
14. テキスト購読・要約
15. テキスト購読・要約

教科書

加藤 恵司 『法・思想・歴史 Legal History』(ジューオー企画出版)

評価方法

(1)出席:60% (2)授業態度:40%

専門演習 B (理論社会学)

担当者：土方 透

開講期：秋学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週1回 単位数：1単位

講義概要

1. 内容

専門演習 A に引き続き、社会現象および社会そのものの相対的把握をめざす、諸アプローチを多角的・多面的に研究する。

- 1 社会の解明に際して用いられる諸意味体系
(主体、時間、宗教、世界、歴史等)
- 2 社会的コミュニケーションを可能とする諸メディア
(正義、貨幣、愛、信仰、真理等)
- 3 思想ないし方法論そのものの検討
(M.フーコー、P.ブルデュー、N.ルーマン、ポランニー、ガダマー、J.ハーバーマス、あるいはポスト構造主義、ポスト・モダンと呼ばれる思想家等)
上記三視点を念頭に、ゼミ員との討議のなかで、テーマを絞っていく。

2. 学びの意義と目標

少人数による徹底的な議論である。読み、考え、書き、述べ、さらに考える力を養う。

準備学習(予習)

テキストをきちんと読んでくること。必ずレジユメを用意してくること。

準備学習(復習)

課題をこなすこと

授業計画

1. Aの成果をふまえ、計画をたてる
2. 文献の持ち寄りとオリエンテーション
3. 文献講読
4. 同上
5. 同上
6. 同上
7. 同上
8. 総括
9. 文献の選択
10. 文献講読
11. 同上
12. 同上
13. 同上
14. 同上
15. 総括

教科書

授業の中で指示する
多岐かつ多数にわたる。

評価方法

(1)出席:50% (2)プレゼンテーション:50%

卒業研究(アイデンティティの社会学)

担当者：横山 寿世理

開講期：秋学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週2回 単位数：2単位

講義概要

1.内容

1.内容

テキストを読み込み社会学の基本を理解することと、社会調査によって社会現象を理解することの2つの課題によってゼミを進める。

テキスト講読中心のゼミは、2年生と合同で行う。取り扱う内容は、自己アイデンティティについての社会意識を中心とする。より具体的には、その社会的意識についての課題文をレジュメにわかりやすくまとめ直して、他の学生の前で報告して、質問を受け、回答するというゼミ形式で進める。

2つ目の課題である社会調査を行うゼミは、3年生のみで行う。受講生が、自ら社会調査の企画、調査票の設計、実査、集計、そして分析、調査結果の報告を実践する。

2.カリキュラム上の位置づけ

111P生以上政治経済学科3年次秋学期開講の演習科目である。111P生以上は、専門演習(アイデンティティの社会学)を修得していないと、この演習は履修できない。さらに、この演習を修得しないと、このゼミで卒業論文を執筆することはできない。

2.学びの意義と目標

この演習では、自己アイデンティティに関する社会意識について社会的に考察することを目標とする。アイデンティティという概念と、これらの概念が社会的にどのように扱われるかを理解することは異なる。このゼミでは、アイデンティティ概念が社会においてどのように評価され、位置づけられるかを明らかにすることを目指す。そして、その評価や位置づけを予想するためにテキスト講読を行い、その予想を検証するために、社会調査を実施する。

準備学習(予習)

ゼミ生が自ら、いつまでに何を終わらせておく必要があるのかを全体のスケジュールから考えて、自らの進度も勘案しながら、ゼミ時間外でも取り組む必要がある。

準備学習(復習)

スケジュールに遅れている場合は、課題を期日に提出できるようにゼミ以外に課題を進めることが必要である。

授業計画

- 1.オリエンテーションとグループ分け
- 2.調査依頼状の作成(実習)
- 3.グループ別ゼミ報告・討論(1)
- 4.実査手順の確認と調査票の印刷(実習)
- 5.グループ別ゼミ報告・討論(2)
- 6.エディティングとコーディング(グループ実習)
- 7.グループ別ゼミ報告・討論(3)
- 8.集計(グループ実習)
- 9.グループ別ゼミ報告・討論(4)
- 10.集計(グループ実習)
- 11.グループ別ゼミ報告・討論(5)
- 12.単純集計
- 13.グループ別ゼミ報告・討論(6)
- 14.クロス集計とグラフ作成
- 15.グループ別ゼミ報告・討論(7)
- 16.クロス集計とグラフ作成
- 17.報告者順ゼミ報告・討論(1)
- 18.報告書の作成
- 19.報告者順ゼミ報告・討論(2)
- 20.報告書の作成
- 21.報告者順ゼミ報告・討論(3)
- 22.報告書の作成
- 23.報告者順ゼミ報告・討論(4)
- 24.報告書の作成
- 25.報告者順ゼミ報告・討論(5)
- 26.報告書の印刷
- 27.報告者順ゼミ報告・討論(6)
- 28.報告書の製本
- 29.報告者順ゼミ報告・討論(7)
- 30.調査結果の報告会

教科書

小川伸彦,山泰幸『現代文化の社会学入門 テーマと出会う、問いを深める』(ミネルヴァ書房)

評価方法

(1)報告への取り組み:50% (2)質疑応答:50%

卒業研究(環境保全論)

担当者：村上 公久

開講期：秋学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週2回 単位数：2単位

講義概要

1.内容

始めに全員で地球環境問題を扱った英文の報告書(6つの英文報告書)を学び、その中から各自がテーマを選んで、レポートをまとめる。この演習ではまず、システム“人間 環境”系の考察を中心に環境史を概観する。次に、人口の急増と共に急速に生命の環境が劣化した産業革命以降今日までの環境問題を考え、その解決に貢献した先駆者達の歩みを振り返り、自然保護と環境保全という立場の違いの検討を手がかりに21世紀の人類の課題 Sustainable Development 保続的(持続的)開発(地球サミットUNCEDの決議『アジェンダ21』)の可能性を探る。次に複数のグループに分かれてグループ毎に地球環境問題に関わる課題を設定し、解決への提言をまとめる。

2.学びの意義と目標

専門科目「環境保全論」、専門演習(環境保全論)で得た知見を、グループで提言にまとめ発表する能力の獲得。環境問題の事例研究を通じて、解決への実際的な方途について学び、環境問題にみられるような複雑な問題と取り組み問題解決に挑む模擬経験を積む。

準備学習(予習)

総合科目「環境学」、専門科目「環境保全論」、キリスト教科目「聖書の中の環境問題」、特にこの演習の前提である「環境保全論」を、準備として予め復習しておくこと。演習開始以降の予習については、各回に指示する。

準備学習(復習)

各回のゼミ内容について、関係する情報・資料を探して参考にし、講義を受けて自分で考えたことを含めてゼミ記録を作成する。

授業計画

1. The Club Of Rome : Agenda For The End Of The Century ('84)
2. The Club Of Rome : Agenda For The End Of The Century ('84) -2
3. The Global 2000 Report (1)
4. The Global 2000 Report (2)
5. The Global 2000 Report (3)
6. Our Common Future (1)
7. Our Common Future (2)
8. Our Common Future (3)
9. State Of The World, World Watch Institute
10. World Resources Report (1)
11. World Resources Report (2)
12. World Resources Report (3)
13. Agenda 21,UNCD (1)
14. Agenda 21,UNCD (2)
15. Agenda 21,UNCD (3)
16. Agenda 21,UNCD (4)
17. テーマを設定してレポートを作成 (1)
18. テーマを設定してレポートを作成 (2)
19. テーマを設定してレポートを作成 (3)
20. テーマを設定してレポートを作成 (4)
21. テーマを設定してレポートを作成 (5)
22. 地球環境問題について 解決への提言 (1)
23. 地球環境問題について 解決への提言 (2)
24. 地球環境問題について 解決への提言 (3)
25. 解決への提言をパワー・ポイント発表 (1)
26. 解決への提言をパワー・ポイント発表 (2)
27. 「卒業研究」レポート作成の準備 テーマと構成
28. 「卒業研究」レポート作成の準備 資料
29. 「卒業研究」レポート作成 (1)
30. 「卒業研究」レポート作成 (1)

教科書

授業の中で指示する

評価方法

(1)出席:40% (2)プレゼンテーションと討論:60%
資料の探索と資料の理解、プレゼンテーション等のための加工、複数回の個人・チームによるプレゼンテーション、討論、ゼミ参加態度、ゼミへの熱意と貢献などを総合的に評価する。

卒業研究(企業経済論)

担当者：柴田 武男

開講期：秋学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週2回 単位数：2単位

講義概要

1.内容

「卒業研究（企業経済論）」では、金融市場に関する論文作成の指導を行う。まず、関連する論文の読解から初めて、専門論文を読みとる方法を学んで、次に、基本的なテーマの選定、論文の書き方を指導する。原則として、担当教員の金融市場論講義・専門演習を受けた上で選択して欲しい。金融市場というテーマ自体が幅広く、大きいので、銀行とか証券だけがテーマだと選択を狭くするつもりはない。幅広く受講生の関心のあるテーマで自発的に取り組んで欲しい。

ただし、日頃新聞の経済記事を読み、日本の企業を取り巻く経営環境についてある程度の知識を有していないと、論文作成は困難であることは留意して欲しい。株式・社債、派遣法など様々な問題に日頃関心を持っている受講者であれば、大歓迎である。

2.学びの意義と目標

卒業研究はレポート作成を単位認定条件とするので、そのためのテーマ決定、情報収集、作文能力などが育成される。レポート作成記述を身につけることが目標となる。

準備学習(予習)

無断欠席は認められない。病欠等仕方ないが、必ず連絡をお願いする。主に三年次選択科目となるので、就職活動に関するアドバイスも行うので、就職意識の強い学生を期待する。

準備学習(復習)

発表したテーマに関して追加的な課題を設定する。

授業計画

1. 最初の数回は、論文読解のコツを教える。
2. 次に、論文のレポート方法を教える。
3. さらに、論文のテーマ選定方法を教える。
4. 最終的に、選定したテーマで論文作成の方法を教える。
5. 確定したテーマでレポートを作成する。
6. 卒業研究レポートの中間報告1
7. 卒業研究レポートの中間報告2
8. 卒業研究レポートの中間報告3
9. 卒業研究レポートの中間報告4
10. 卒業研究レポートの中間報告5
11. 卒業研究レポートの中間報告6
12. 卒業研究レポートの中間報告7
13. 卒業研究レポートの中間報告8
14. 卒業研究レポートの中間報告9
15. 卒業研究レポートの中間報告10
16. 卒業研究レポートの中間報告11
17. 卒業研究レポートの中間報告12
18. 卒業研究レポートの中間報告13
19. 卒業研究レポートの中間報告14
20. 卒業研究レポートの中間報告15
21. 卒業研究レポートの中間報告16
22. 卒業研究レポートの中間報告17
23. 卒業研究レポートの中間報告18
24. 卒業研究レポートの中間報告19
25. 卒業研究レポートの中間報告20
26. 卒業研究レポートの中間報告21
27. 卒業研究レポートの評価・指導1
28. 卒業研究レポートの評価・指導2
29. 卒業研究レポートの評価・指導3
30. 卒業研究レポートの評価・指導4

教科書

授業の中で指示する

評価方法

(1)出席点:50% (2)レポート:50%

卒業研究(経営管理)

担当者：後藤 兼一

開講期：秋学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週2回 単位数：2単位

講義概要

1.内容

演習で行う内容は大方次の通りです。まず何を研究したいのか(課題)、何故そのことを研究したいのか(動機)を明らかにします。次に、何を調べたのか(文献調査と現地調査)、何がどうなっているのか(実態と実体)、何がどういう仕組みになっているのか(構造と機能)、さらに何を細分化したのか(分析と解析)、そして何が分かったのか(本質と結論)を整理します。以上を詰めることによって、研究することの意味や価値を実感することを演習の目標とします。

2.学びの意義と目標

経営管理に関する一連の講義及び実習、さらに専門演習で学習した内容をもとに自分で決めた課題に付いて実際に調査し研究することによって経営管理の考え方を自分なりに集大成することが本演習の目的です。

準備学習(予習)

各自が発表する内容を項目に従って、事前に簡単に文章化しておくこと。

準備学習(復習)

発表した内容に対するコメント・アドバイスをもちに項目ごとに文章を完成させる。

授業計画

1. ガイダンス
2. 研究の方法について(1)
3. 研究の方法について(2)
4. 研究課題と研究動機の発表と確認(1)
5. 研究課題と研究動機の発表と確認(2)
6. 研究課題と研究動機の発表と確認(3)
7. 研究課題と研究動機の発表と確認(4)
8. 比較研究と掘下研究の発表と確認(1)
9. 比較研究と掘下研究の発表と確認(2)
10. 比較研究と掘下研究の発表と確認(3)
11. 比較研究と掘下研究の発表と確認(4)
12. 構造研究と機能研究の発表と確認(1)
13. 構造研究と機能研究の発表と確認(2)
14. 構造研究と機能研究の発表と確認(3)
15. 構造研究と機能研究の発表と確認(4)
16. 実態と実体の発表と確認(1)
17. 実態と実体の発表と確認(2)
18. 実態と実体の発表と確認(3)
19. 実態と実体の発表と確認(4)
20. 結論と残された課題の発表と確認(1)
21. 結論と残された課題の発表と確認(2)
22. 結論と残された課題の発表と確認(3)
23. 結論と残された課題の発表と確認(4)
24. 小論文の発表と研究(1)
25. 小論文の発表と研究(2)
26. 小論文の発表と研究(3)
27. 小論文の発表と研究(4)
28. まとめ(1)
29. まとめ(2)
30. まとめ(3)

教科書

プリントを配布する

評価方法

(1)出席:50% (2)レポート:50%

卒業研究(政治過程論)

担当者：高橋 愛子

開講期：秋学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週2回 単位数：2単位

講義概要

1.内容

本来は春学期開講の「専門演習（政治過程論）」の延長線上に位置づけられており、本演習希望者は、春学期開講の上記「専門演習」を必修とする（但し特別の理由・事情のある場合、相談に応じる）。基本的に、学期の前半は共通のテキストを読み、後半は順次、各自が自らの関心に即して選んだテーマについての個別発表とし、各自の研究課題についての進捗状況を報告、議論する。報告と議論を重ねて次年度に取り組む「卒業論文」の土台・骨格の形成を図る。学期末に「小論文」の提出が求められる。
<カリキュラム上の位置づけ> 3年次秋学期に位置づけられた必修の演習科目の一つである。

2.学びの意義と目標

基本的なテキストの読解力を得ること（要点を把握し、レジュメを作成し、プレゼンする）、政治的な課題についての議論の作法を学ぶこと、また、独自の研究テーマへの理解を深めること。

準備学習(予習)

リアルタイムな政治現象に関心を持ち新聞を読む事に加え、各回に予定されるテキストを精読すること。

準備学習(復習)

ゼミで議論になったポイントについてのレポート作成。

授業計画

1. オリエンテーション
2. オリエンテーション
3. 共通テキストの講読、議論
4. 共通テキストの講読、議論
5. 共通テキストの講読、議論
6. 共通テキストの講読、議論
7. 共通テキストの講読、議論
8. 共通テキストの講読、議論
9. 共通テキストの講読、議論
10. 共通テキストの講読、議論
11. 共通テキストの講読、議論
12. 共通テキストの講読、議論
13. 共通テキストの講読、議論
14. 共通テキストの講読、議論
15. 共通テキストの講読、議論
16. 共通テキストの講読、議論
17. 各自の研究課題のプレゼン、議論
18. 各自の研究課題のプレゼン、議論
19. 各自の研究課題のプレゼン、議論
20. 各自の研究課題のプレゼン、議論
21. 各自の研究課題のプレゼン、議論
22. 各自の研究課題のプレゼン、議論
23. 各自の研究課題のプレゼン、議論
24. 各自の研究課題のプレゼン、議論
25. 各自の研究課題のプレゼン、議論
26. 各自の研究課題のプレゼン、議論
27. 各自の研究課題のプレゼン、議論
28. 各自の研究課題のプレゼン、議論
29. 1学期間の総括
30. 1学期間の総括

教科書

授業の中で指示する

評価方法

(1)出席:40% (2)プレゼン:30% (3)小論文:30%

卒業研究(政治経済学)

担当者：吉田 博司,小松崎 利明

開講期：春学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週2回 単位数：2単位

講義概要

1.内容

本卒業研究で扱う具体的なテーマは、受講生との相談の上で決定する。

2.学びの意義と目標

受講生には一定の読書課題や調査課題が与えられるため、主体的な参加が求められる。文献の講読、報告、討議という一連の作業を経て、既存の社会システムを相対的・批判的に再検討できるようになることを目標とする。

準備学習(予習)

課題文献を読み、要点をまとめておく。

準備学習(復習)

クラスでの議論を自らの提出課題・報告課題に反映させてまとめておく。

授業計画

1. イントロダクション(1)
2. イントロダクション(2)
3. 文献講読の技法(1)
4. 文献講読の技法(2)
5. 文献講読の技法(3)
6. 文献講読の技法(4)
7. 文献講読、レジュメの作成技法(1)
8. 文献講読、レジュメの作成技法(2)
9. 文献講読、レジュメの作成技法(3)
10. 文献講読、レジュメの作成技法(4)
11. 文献講読、レジュメの作成技法(5)
12. 文献講読、レジュメの作成技法(6)
13. 文献講読、プレゼンテーションの技法(1)
14. 文献講読、プレゼンテーションの技法(2)
15. 文献講読、プレゼンテーションの技法(3)
16. 文献講読、プレゼンテーションの技法(4)
17. 文献講読、プレゼンテーションの技法(5)
18. 文献講読、プレゼンテーションの技法(6)
19. 課題研究・準備(1)
20. 課題研究・準備(2)
21. 課題研究・調査(1)
22. 課題研究・調査(2)
23. 課題研究・調査(3)
24. 課題研究・調査(4)
25. 課題研究・調査(5)
26. 課題研究・調査(6)
27. 課題研究報告(1)
28. 課題研究報告(2)
29. 総括(1)
30. 総括(2)

教科書

授業の中で指示する

評価方法

(1)平常点:50% (2)課題提出:50%

卒業研究(政治哲学)

担当者：森分 大輔

開講期：秋学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週2回 単位数：2単位

講義概要

1.内容

<内容>春学期開講の「専門演習（政治哲学）」の延長線上に位置づけられており、本演習履修者は「専門演習」を必修とする。春学期における学習を前提として、新たなテキストの講読と議論を行う。基本的に、学期の前半は共通のテキストを読み、後半は順次、各自が自らの関心に即して選んだテーマについての個別発表とし、各自の進捗状況を報告、議論する。

2.学びの意義と目標

基本的なテキストの読解力を得ること（読む、書く、話すという社会科学の必要な基本スキルの習得）、政治学的な関心を深めること、独自の研究テーマへの理解を深めることの三点である。

準備学習(予習)

政治に関する積極的な関心を持つのみならず、理論的な視点、継続的に文献に取りかかることのできる忍耐力、自己の思考を提示することへの興味をもち、必要な学習をすることが必要である。

準備学習(復習)

自身のテーマとの関連をゼミの議論を振り返り反省すること、そしてそれらをまとめることが求められる。あわせて関連書籍の購読することが望ましい。

授業計画

1. イントロダクション
2. 共通のテキストの講読・議論
3. 共通のテキストの講読・議論
4. 共通のテキストの講読・議論
5. 共通のテキストの講読・議論
6. 共通のテキストの講読・議論
7. 共通のテキストの講読・議論
8. 共通のテキストの講読・議論
9. 共通のテキストの講読・議論
10. 共通のテキストの講読・議論
11. 共通のテキストの講読・議論
12. 共通のテキストの講読・議論
13. 共通のテキストの講読・議論
14. 共通のテキストの講読・議論
15. 共通のテキストの講読・議論
16. 各自の個別テーマのプレゼン・議論
17. 各自の個別テーマのプレゼン・議論
18. 各自の個別テーマのプレゼン・議論
19. 各自の個別テーマのプレゼン・議論
20. 各自の個別テーマのプレゼン・議論
21. 各自の個別テーマのプレゼン・議論
22. 各自の個別テーマのプレゼン・議論
23. 各自の個別テーマのプレゼン・議論
24. 各自の個別テーマのプレゼン・議論
25. 各自の個別テーマのプレゼン・議論
26. 各自の個別テーマのプレゼン・議論
27. 各自の個別テーマのプレゼン・議論
28. 各自の個別テーマのプレゼン・議論
29. 各自の個別テーマのプレゼン・議論
30. 1学期間のまとめ

教科書

授業の中で指示する

評価方法

(1)出席:40% (2)プレゼンテーション:30% (3)期末レポート:30%

卒業研究(地域圏研究ロシア)

担当者：飯島 康夫

開講期：秋学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週2回 単位数：2単位

講義概要

1.内容

476年、西ローマ帝国が滅んだ後、ローマ教会は800年頃から、東の教会から離れ始める。この結果、1054年、東と西の教会は分裂。さて、東ローマ帝国は1453年まで存続。ローマ・カトリック教会を柱とする西欧とギリシア正教会を擁するロシアという対立図式が出来上がる。ルネサンス以降、西欧は目覚しく発展し、やがてロシアは西欧に習い、近代化を進めようとするが、その一方で、もう一つのキリスト教をいただく国としての自負、西欧に劣るはずがないという自信も保ち続ける。西欧より後れているという意識と西欧に優るという意識 - これら矛盾した二つの意識がロシア思想史の全体を貫いている。これらを紹介すること。

2.学びの意義と目標

意義は、ロシアの文化・宗教・習慣について、卒業研究論文の基礎となる論文を提出、加筆、修正の後、一定の推準の理解に深めること。そして、北東アジアの隣国の歴史、宗教、文化について、幅広く理解できるように工夫していることで重なる。とくに、目標としては指示する文献を通じて隣国ロシアの宗教・文化・思想に深く解れて理解すること。

準備学習(予習)

他人の書いた文章を正確に理解し、自分の考えを明快な言葉で表現するのはとても難しい。参加者には、辛抱強く取り組むよう期待する。基本文献を指示するので通読すること。

準備学習(復習)

ゼミごとに前回の議論のまとめをすること。

授業計画

- 1.ロシアの特異性について 1
- 2.同 2
- 3.同 3
- 4.同 4
- 5.シベリア・極東1
- 6.同 2
- 7.同 3
- 8.同 4
- 9.同 5
- 10.同 6
- 11.同 7
- 12.カムチャッカ 1
- 13.同 2
- 14.同 3
- 15.同 4
- 16.同 5
- 17.同 6
- 18.同 7
- 19.ゼミレポートの作成要領
- 20.中間仮題の提出
- 21.モンゴル・ロシア 1
- 22.同 2
- 23.同 3
- 24.ゼミレポートの提出
- 25.レジュメ作り・添削修正
- 26.発表とレポートの提出
- 27.ロシアの政治と宗教 1
- 28.同 2
- 29.同 3
- 30.卒業研究の総まとめ

教科書

司馬遼太郎『ロシアについて』(文春文庫)

評価方法

(1)出席:70% (2)レポート・発表:30%

卒業研究(日本政治思想史)

担当者：吉田 博司

開講期：秋学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週2回 単位数：2単位

講義概要

1.内容

近代日本の政治家及び思想家の研究指導をします。学生のテーマ設定、報告、討論の時間です。

2.学びの意義と目標

歴史に興味をもち、人間への深い洞察を養って下さい。

準備学習(予習)

学生報告のプリントを用意させ、事前に調査研究事項を割り当てる。授業後、他からのコメントを照らし合わせる。

準備学習(復習)

報告のあと、戸津門、アドバイスを参考に修正する。

授業計画

1. テーマ設定
2. 同
3. 同
4. 資料収集指導
5. 同
6. 以下、学生報告と討論
7. 同
8. 同
9. 同
10. 同
11. 同
12. 同
13. 同
14. 同
15. 同
16. 同
17. 同
18. 同
19. 同
20. 同
21. 同
22. 同
23. 同
24. 同
25. 同
26. 同
27. 同
28. 同
29. 同
30. 同

教科書

授業の中で指示する

評価方法

(1)報告:70% (2)質問:30%

卒業研究(比較憲法)

担当者：石川 裕一郎

開講期：秋学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週2回 単位数：2単位

講義概要

1.内容

春期の「専門演習（比較憲法）」を踏まえ、受講者各々が各自のテーマを設定し、調査・研究・発表・討論を重ねることによって完成度の高い論文を仕上げます。

2.学びの意義と目標

具体的な意義と目標は、法律上は「成年」であるところの各受講者のモチベーションに依拠しますが、とにかく事実を観察し、ひたすら読書をし、公権力や社会的権力から一方的に搾取されない賢い市民＝国民＝労働者となることを目指します。

準備学習(予習)

演習科目なので、とりわけプレゼンの準備には各受講者の自発的かつ継続的な相応の分量の予習が求められます。

準備学習(復習)

プレゼン後においても、卒業研究に向けて相応の分量の復習が求められます。

授業計画

1. 導入:担当の決定
2. 各自の個別テーマの発表・議論
3. 各自の個別テーマの発表・議論
4. 各自の個別テーマの発表・議論
5. 各自の個別テーマの発表・議論
6. 各自の個別テーマの発表・議論
7. 各自の個別テーマの発表・議論
8. 各自の個別テーマの発表・議論
9. 各自の個別テーマの発表・議論
10. 各自の個別テーマの発表・議論
11. 各自の個別テーマの発表・議論
12. 各自の個別テーマの発表・議論
13. 各自の個別テーマの発表・議論
14. 各自の個別テーマの発表・議論
15. 各自の個別テーマの発表・議論
16. 各自の個別テーマの発表・議論
17. 各自の個別テーマの発表・議論
18. 各自の個別テーマの発表・議論
19. 各自の個別テーマの発表・議論
20. 各自の個別テーマの発表・議論
21. 各自の個別テーマの発表・議論
22. 各自の個別テーマの発表・議論
23. 各自の個別テーマの発表・議論
24. 各自の個別テーマの発表・議論
25. 各自の個別テーマの発表・議論
26. 各自の個別テーマの発表・議論
27. 各自の個別テーマの発表・議論
28. 各自の個別テーマの発表・議論
29. 各自の個別テーマの発表・議論
30. まとめ

教科書

授業の中で指示する

評価方法

(1)平常点:80%:プレゼンテーションの内容と討議への参加状況から評価します。(2)期末レポート:20%
単なる出席（物理的に教室内に存在すること）だけでは何ら評価の対象となりません。

卒業研究(比較政治学)

担当者：松尾 秀哉

開講期：秋学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週2回 単位数：2単位

講義概要

1.内容

内容)本演習では、受講者個々のテーマを設定し、その報告と参加者の議論、指導を行なう。白紙の段階から研究計画を立て、調査を進め報告することを通じて、社会科学的発想を身につける。

2.学びの意義と目標

先行研究の批判、さらに他者との議論を通じて、批判的思考力を高める。また、資料収集とその整理を通じて、客観的な分析力を身につける。

準備学習(予習)

進め方は受講者と相談する。自身の研究テーマの準備は日常的に必要となる。また他者の報告についても討論できるよう、文献を事前に読み込むなど毎回準備することが必要とされる。

準備学習(復習)

質問があつて十分にこたえられなかった点はWEBにて次回までにフォローする必要がある。

授業計画

1. 導入 授業の進め方
2. 報告方法について
3. 研究計画の立案(1)
4. 研究計画の立案(2)
5. 研究計画の立案(3)
6. 研究計画の立案(4)
7. 報告準備(1)
8. 報告準備(2)
9. 報告と討論(1)
10. 報告と討論(2)
11. 報告と討論(3)
12. 報告と討論(4)
13. 報告と討論(5)
14. 報告と討論(6)
15. 報告と討論(7)
16. 報告と討論(8)
17. 報告と討論(9)
18. 報告と討論(10)
19. 報告と討論(11)
20. 報告と討論(12)
21. 報告と討論(13)
22. 報告と討論(14)
23. 報告と討論(15)
24. 報告と討論(16)
25. 報告と討論(17)
26. 報告と討論(18)
27. 小論発表(1)
28. 小論発表(2)
29. 小論発表(3)
30. 総括

教科書

授業の中で指示する

評価方法

(1)平常点:30% (2)報告:50% (3)レポート:20%
平常点とは質疑などへの積極的参加による

卒業研究(法思想史)

担当者：加藤 恵司

開講期：秋学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週2回 単位数：2単位

講義概要

1.内容

各自与えられたテーマに従って、進級論文を作成し、提出する。卒業論文に向けて訓練し、指導する。

2.学びの意義と目標

文章を書くことを目標にし、問題意識、問題の所在を明らかにする。

準備学習(予習)

自学自習の態度を養うこと。

準備学習(復習)

自分の発表したことを整理する。

授業計画

1. 各自の研究発表
2. 各自の研究発表
3. 各自の研究発表
4. 各自の研究発表
5. 各自の研究発表
6. 各自の研究発表
7. 各自の研究発表
8. 各自の研究発表
9. 各自の研究発表
10. 各自の研究発表
11. 各自の研究発表
12. 各自の研究発表
13. 各自の研究発表
14. 各自の研究発表
15. 各自の研究発表
16. 各自の研究発表
17. 各自の研究発表
18. 各自の研究発表
19. 各自の研究発表
20. 各自の研究発表
21. 各自の研究発表
22. 各自の研究発表
23. 各自の研究発表
24. 各自の研究発表
25. 各自の研究発表
26. 各自の研究発表
27. 各自の研究発表
28. 各自の研究発表
29. 各自の研究発表
30. 各自の研究発表

教科書

加藤 恵司 『法・思想・歴史 Legal History』(ジーオー企画出版)

評価方法

(1)出席:80% (2)授業態度:20%

卒業研究(理論社会学)

担当者：土方 透

開講期：秋学期 必修・選択：選択必修科目 授業回数：週2回 単位数：2単位

講義概要

1.内容

専門演習（理論社会学）の成果をふまえ、卒論の完成へ向けて指導を行う。

2.学びの意義と目標

卒論を仕上げるという作業は、多くの学生にとって最初で最後の論文作成となる。学士号取得にふさわしい能力を身につけたことの証である。

準備学習(予習)

ただひたすら勤勉であることを要求する。

準備学習(復習)

毎回、前回は指摘された点の進捗状況を報告できるように、作業を進めてくること。

授業計画

1. 各自、論文作成へ向けてテーマの選定
2. テーマの検討と文献の選択
3. 文献講読とプレゼンテーション
4. 同上
5. 同上
6. 同上
7. 文献の検討
8. 文献講読とプレゼンテーション
9. 同上
10. 同上
11. 討論
12. 文献講読とプレゼンテーション
13. 同上
14. 同上
15. 同上
16. 文献の検討
17. 文献講読とプレゼンテーション
18. 同上
19. 同上
20. 同上
21. 中間総括
22. 文献講読とプレゼンテーション
23. 同上
24. 同上
25. 同上
26. 文献の検討
27. 報告と質疑
28. 同上
29. 同上
30. 総括

教科書

授業の中で指示する

評価方法

(1)毎回の報告:20% (2)卒論:80%

地域経済論

担当者：瀬名 浩一

開講期：秋学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

<内容>

国内では東日本大震災後の被災地域復興、国外では環太平洋パートナーシップ協定（TPP）への関わりが注目される。日本で生産年齢人口が半減する時代、巨大複合災害に有効な地域政策手段はどのようなものか。立ち上がるための地域経済協力の先例、ヨーロッパ連合（EU）では1990年代、すでに局所から超国家に渡る様々のレベルで地域問題に取り組む姿勢の転換が起こったが、現在は政府債務問題で、存続の危機にさえさらされている。

初めに日本の首都圏と地方圏間の地域格差、第2に、中国、インドなどアジア新興国の消費市場の取り込み、第3に「英国病」を克服し国際競争力を取り戻した英国と日本における地域の雇用、所得、成長率、失業率、格差を正策を比較日本経済の復興政策を探る。最後にEUで起きている地域連合、権限委譲を参考にTPPの可能性と限界を探る。

2.学びの意義と目標

地域社会の経済統計数字の見方、グラフの読み方を学び、地域格差が生まれる理由を経済理論を使って考え、最後に経済格差を長引かせないための地域政策の歴史、手段、効果などについて理解できるようにする。

準備学習(予習)

講義の終わりに次回のテーマを指示するので、授業前1時間の予習をして授業に臨むこと。

準備学習(復習)

授業3回に1回授業内試験を行うので、授業後1時間の復習を毎回欠かさぬこと

授業計画

1. 生産年齢人口半減時代に遭遇した東日本大震災
2. 東日本大震災は日本の各種制度疲労を断ち切るきっかけとなるか
3. 大都市でも地方でも所得と消費が、同時に沈んでいる
4. 最近18年間で中小企業数が、日本では100万社減少、英国では130万社増加
5. 日本の金融業は不況業種といわれるが、社会金融分野で活況である
6. 平成の大合併を避けた首都圏の市町村の財政力指数は今後低下せざるを得ない
7. 就業者の加齢・減少が日本の景気を失速させる
8. 成長する中国・インドの消費市場に向けた日本の企業戦略
9. 新興國小売市場の成長と中国における日系小売企業
10. アジア新興国のサービス需要拡大への戦略
11. ジャパンブランドで戦う
12. 地域経済と一国経済の違いは、地域間交易と地域間所得移転を行う政府の役割
13. 地域の生産と雇用を決定する要因は？
14. なぜ、一人当たりの地域所得に差があるのか？
15. 地域的特化と地域間交易を決定する要因は？
16. 経済的要因は地域間人口移動をどの程度説明できるか？
17. 地域失業格差はなぜ持続するのか？
18. 相対的貧困率の国際比較
19. 日本の地域政策の歴史
20. 広域地方計画
21. 地方分権・地域主権
22. 地域産業基盤整備
23. 地域活性化
24. 東日本大震災関連
25. 英国の地域政策の歴史
26. 英国の1980年代の地域政策
27. 英国のコミュニティ経済開発
28. 地域政策の選択
29. 地域固有の発展
30. 地域政策の評価

教科書

授業の中で指示する

評価方法

- (1)授業理解度:40%:授業3回に1回の割合で授業内テストを合計10回行う
- (2)期末テスト:30% (3)出席:30%

地域圏研究(アジア A)

担当者：江藤 名保子

開講期：春学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

本授業では、日中関係や国際関係に言及しながら、中華人民共和国建国（1949年）以降の現代中国の歩みを考察する。

多くの日本人の対中認識は、三国志や伝統文化・世界遺産などに代表される古典的中国のイメージ、あるいは目覚ましい経済発展を遂げている地域大国としての中国である。しかし、現在の中国の政治・社会状況は、社会主義国家として建国した時からの制度的連続性を持ち、日本とは著しく異なる政治システムや考え方に基づいている。こうした中国の現状を理解するためには、これまでの政治過程を具体的に理解する必要がある。

中国との国際協力も国際ビジネスも、対象となる地域・人を理解することから始まる。そのためには中国政治や歴史に対する基礎知識を備えねばならない。この授業ではその知識の一部を蓄えてもらいたい。

2.学びの意義と目標

第1に、講義への参加をきっかけに中国への関心を高め、正しい知識を獲得し、対中理解を深めることを目標とする。

第2に、中国の政治・外交を事例として社会現象を理解するための情報分析、評価の訓練を行う。特に東アジア地域においては、領土問題など現実には「解答のない問題」が存在する。こうした事例を扱いながら、異なる主張・論点を考察し、そのなかから自分なりの結論を得るための論理的思考を育成する。

準備学習(予習)

授業計画を参照し、トピックに関連する情報を集めること。事前に参考資料が指定された場合は読んでおくこと。

準備学習(復習)

配布プリントを再読し、各項目を説明できるようにしておくこと。

授業計画

1. イントロダクション：授業説明と中国時事問題
2. 政治構造（1）：社会主義と市場経済
3. 政治構造（2）：党、国家、社会
4. 政治構造（3）：中国は民主化するのか
5. 歴史（1）：「抗日戦争」
6. 歴史（2）：社会主義の選択
7. 歴史（3）：社会主義改造
8. 歴史（4）：反右派闘争と大躍進
9. 歴史（5）：文化大革命
10. 歴史（6）：文化大革命
11. 歴史（7）：改革開放とは
12. 歴史（8）：天安門事件
13. 歴史（9）：江沢民・朱鎔基体制
14. 歴史（10）：胡錦濤・温家宝体制
15. 社会（1）：経済格差と社会保障
16. 社会（2）：社会の諸問題
17. 社会（3）：政治思想・文化
18. 社会（4）：ナショナリズム
19. 外交（1）：内政と外交の連動性
20. 外交（2）：台湾問題
21. 外交（3）：冷戦下の外交戦略
22. 外交（4）：ポスト冷戦における外交戦略
23. 外交（5）：日中歴史問題
24. 外交（6）：領土問題
25. 国際関係（1）：中国とアメリカ
26. 国際関係（2）：中国と東アジア
27. 国際関係（3）：中国と東南アジア
28. 国際関係（4）：中国と中央アジア
29. 国際関係（5）：中国の国際的地位
30. まとめ

教科書

授業の中で指示する

評価方法

- (1)平常点:30%:出席を加味する。(2)小テスト:20%:授業内に行う。
- (3)試験:50%

地域圏研究(アジアB)

担当者：小松崎 利明

開講期：秋学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

第一に、南アジアおよび東南アジア地域について、いくつかの国を取りあげてその社会・歴史・文化などを学びます。第二に、取りあげた国々および周辺地域における（国家間・民族間・政治的）紛争とその解決について学修します。以上と関連して、第三に、他地域（特にヨーロッパ）との比較において、アジアとは何かといった問題について考えます。

2.学びの意義と目標

南アジアや東南アジア地域に対する知見を広め、より深い理解を得ること、そしてアジアとは何かについて考えることがこの授業の目標・意義です。

準備学習(予習)

配布資料を読んでおく。

準備学習(復習)

課題文献・資料を読み、レポートの形にまとめる。

授業計画

1. 講義概要説明
2. 地域圏研究とは
3. アジアという概念（1）
4. アジアという概念（2）
5. 国家間・民族間紛争とその解決（1）
6. 国家間・民族間紛争とその解決（2）
7. インドの社会・歴史・文化（1）
8. インドの社会・歴史・文化（2）
9. パキスタンとバングラデシュの社会・歴史・文化（1）
10. パキスタンとバングラデシュの社会・歴史・文化（2）
11. インド独立とパキスタン・バングラデシュの分離独立（1）
12. インド独立とパキスタン・バングラデシュの分離独立（2）
13. カシミール紛争（1）
14. カシミール紛争（2）
15. スリランカの社会・歴史・文化（1）
16. スリランカの社会・歴史・文化（2）
17. スリランカ内戦（1）
18. スリランカ内戦（2）
19. 東ティモールの社会・歴史・文化（1）
20. 東ティモールの社会・歴史・文化（2）
21. 東ティモールの独立（1）
22. 東ティモールの独立（2）
23. カンボジアの社会・歴史・文化（1）
24. カンボジアの社会・歴史・文化（2）
25. カンボジア内戦と思想対立（1）
26. カンボジア内戦と思想対立（2）
27. 世界のなかのアジア（1）
28. 世界のなかのアジア（2）
29. アジアにおける紛争と和解（1）
30. アジアにおける紛争と和解（2）

教科書

プリントを配布する

評価方法

(1)平常点:20% (2)ブック・レポート:40% (3)期末レポート:40%

地域圏研究(アメリカ)

担当者：小島 かおる

開講期：秋学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

現代国際社会において、アメリカ合衆国は超大国として絶大な影響力を持っています。また、わが国にとっても、政治、経済、社会、文化の広範な領域において決定的に重要な国といえます。この講義では、まず、アメリカの歴史を概観しながら、国家や社会の仕組みを学びます。また、二つの世界大戦や冷戦期、冷戦後のアメリカ外交の特徴を解説し、国際社会におけるアメリカの役割を考えてみます。さらに、移民、宗教、銃規制、女性、社会保障などの観点から現代アメリカ社会の諸相を見ていきましょう。

2.学びの意義と目標

アメリカに関する情報は書籍・テレビ・新聞・雑誌・インターネットなどいたるところに溢れています。「アメリカのことなら大体知っている」という人も多いと思います。しかし、日本とアメリカでは、国の成立の経緯も政治や社会の仕組みも非常に異なっており、「アメリカとは何か」をより正確に理解するためにはそうした基礎知識の習得が重要になります。この講義では、アメリカに関する基礎知識を習得すること、そして習得した基礎知識をもとに「アメリカとは何か」を考察することを目標とします。

準備学習(予習)

参考図書（授業の中で指示）などを使って、次回テーマについての概要を調べておくこと。

準備学習(復習)

講義や配布プリントを使って、「よいノート」を作ること。

授業計画

1. アメリカの自然、地理、気候
2. 植民地時代
3. 独立と建国
4. アメリカ合衆国憲法： 統治のしくみ
5. 領土の拡大/ 明白な運命/ 先住民
6. 黒人奴隷制度
7. 南北戦争
8. 産業の発展
9. ポピュリズム/ 黒人差別制度
10. 革新主義の時代
11. 第一次世界大戦
12. 旧体制の崩壊： 大恐慌とニューディール
13. 第二次世界大戦
14. 冷戦の開幕
15. まとめ
16. フェアディール/ ニューリパブリカニズム/ ニューフロンティア
17. 冷戦の軍事化
18. 南部の変革
19. ヴェトナム戦争と偉大な社会
20. アメリカ経済の停滞
21. デタントから新冷戦へ
22. 保守化
23. 冷戦の終焉
24. リベラルと保守
25. 移民の国
26. 宗教国家
27. 銃規制
28. アポーション / ERA
29. 福祉/ 医療
30. 試験とその解説

教科書

プリントを配布する

評価方法

(1)試験:70% (2)レポート:30%

担当者：倉西 雅子

開講期：秋学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

本講義では、政経両分野におけるヨーロッパの歴史を振り返りながら、現在のEUについて考えてゆきます。EUを、政治面における分立的な国民国家体系と、経済面における広域的な市場との調和形態として捉えることで、人類史におけるEUの意義を問うてゆきます。

2.学びの意義と目標

学生諸君が、EUを深く理解するとともに、政治と経済との交差についても知的関心を寄せる契機となることが、本講義の学びの意義と目標です。

準備学習(予習)

日頃より、ヨーロッパ関連の本を多く読むように心がけると共に、新聞、テレビ、インターネット、雑誌等でも、EUについての情報に触れるようにしてください。

準備学習(復習)

本講義では、時間の流れを掴む必要がありますので、講義後は、配布されたプリントの内容を必ず確認し、次回の講義に備えてください。

授業計画

1. ガイダンス
2. ウェストファリア体制からユトレヒト体制へ
3. ロシアとプロイセンの台頭と外交革命
4. ナポレオン体制の成立とその崩壊
5. ウィーン体制の成立とその崩壊
6. 統一国家の誕生とビスマルク体制
7. トルコ帝国と東方問題
8. 第一次世界大戦
9. 戦間期のヨーロッパ
10. 第二次世界大戦
11. 中世の経済とヨーロッパ貿易圏
12. 大航海時代と貿易の拡大
13. イギリスの自由貿易主義
14. 植民地政策とブロック経済
15. 戦後の混乱期
16. ヨーロッパの安全保障体制の再構築
17. デタントの時代
18. 冷戦の終焉
19. 戦後の自由貿易体制の成立
20. EECの成立
21. プレトン・ウッズ体制の崩壊とEC
22. 市場のグローバル化とEC
23. ユーロの誕生
24. EUの誕生
25. EUの深化と拡大
26. 外交・安全保障・防衛分野の発展
27. 警察・法務協力の展開
28. 財政危機に揺れたEU
29. ヨーロッパとは何か
30. 理解度の確認

教科書

プリントを配布する
毎回配布するプリントには、その日の講義内容が纏めてあります。

評価方法

(1)出席:50%:点数化 (2)レポート:50%
本講義では、パワーポイントのスライドを使用して説明しているため、出席に対する評価を高めめに設定しています。

地域圏研究(ロシア・東欧)

担当者：飯島 康夫

開講期：秋学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

20世紀初めの反スラヴ主義的動向や20世紀後半の東西冷戦を思い起こせば明らかなように、つい最近まで「ロシア」は、ヨーロッパ各国にとっての、ひいては世界にとっての選択肢の一つであった。親ロシアか否かという問いは、20世紀には大変な重みを持っていたのである。ソ連崩壊以後、しばらくの間ロシアの存在感は希薄になっていたが、昨今では再び大国として力を誇示し始めている。21世紀においても、ロシアを知っていることが無駄になることはまずないであろう。日露交流の歴史を、遡って、詳しく見ていく。

2.学びの意義と目標

まずは、隣国である大国の歴史の概略を知ることが重要である。
また、その意義は、ロシアに関する基本的な知識を獲得してもらうことにある。取り上げられる分野は、歴史、宗教、政治、思想、文学、芸術など、広範囲にわたる。
目標は昔のロシアから現代のロシアに至るまでの概略をつかんでもらう事である。

準備学習(予習)

試験では授業で触れたことの中から出題するため、積極的な聴講が必要である。
基本文献を指示するので通読すること。

準備学習(復習)

基本文献を部分ごとに読み、理解すること。

授業計画

- 1.1) 歴史:ロシア史の概略
- 2.2) 宗教:ロシア正教を紹介する(6回)。
- 3.3) 思想:西欧主義とスラヴ派との確執等について解説する(6)
- 4.4) 文学:ドストエフスキー、トルストイ、チェーホフなど
- 5.5) その他:時事問題、現代文化、言語などについて。
- 6.ロシアの地理的拡大
- 7.ロシアの起源
- 8.キエフ、ノヴゴロド
- 9.モンゴルのくびき
- 10.モスクワ公国
- 11.ピョートルとペテルブルク帝国
- 12.エカチェリーナ二世と啓蒙
- 13.アレクサンドル一世と専制
- 14.ニコライ一世の専制体制と農奴
- 15.クリミア戦争とアレクサンドル二世
- 16.敗戦と改革
- 17.十九世紀末のロシア・ルネサンス
- 18.アレクサンドル三世と反改革志向
- 19.ニコライ二世
- 20.日露戦争と第一次ロシア革命
- 21.第一次大戦とロシア革命
- 22.帝政ロシアの地政学
- 23.レーニンからスターリン
- 24.第二次大戦とスターリン体制
- 25.冷戦とフルシチョフ
- 26.ブレジネフから
- 27.ゴルバチョフ
- 28.旧ソ連の崩壊と市場経済移行、エリツィン政権
- 29.プーチンの新生ロシアの浮上
- 30.メドベージェフ、プーチンと北方領土

教科書

横手慎二『日露戦争史』(中央公論社)

評価方法

(1)出席:50% (2)レポート・テスト:30% (3)発表:20%

地誌学概説 A

担当者：秋山 秀一

開講期：春学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週1回 単位数：2単位

講義概要

1.内容

世界の各地ではいろいろな人々がそれぞれに、その土地に根ざした暮らしをしています。この授業では世界の各地、とくにアジア諸国と太平洋の島々における人々の暮らしの様子、自然、風土等を、具体的に取り上げながら、地域の今を学んでいきます。

2.学びの意義と目標

卒業後どのような仕事に就こうと、国際理解を高めることは意義があり、大切なことです。実際に海外でのフィールドワークを通して得た映像、資料、それに、書籍、雑誌、テレビ・ラジオ等のメディアとのかかわりの中から、具体的な話をしていきます。これにより、より理解度を高めることに大きく寄与します。

準備学習(予習)

授業内容に関する復習の小レポート、テキストの次回の授業に関する項目を予習し、関連する情報を集めておくこと。

準備学習(復習)

配布プリント、テキストの中で授業中に解説したところを再読し、各トピックについて次回までに説明できるようにすること。

授業計画

1. 導入
2. 現代社会と交通
3. 地図を読む
4. アジアの中の日本
5. 韓国
6. ベトナム
7. ミャンマー
8. マレーシア
9. 香港・マカオ
10. 中国・台湾
11. タイ
12. ラオス、カンボジア
13. フィジーと太平洋の島々
14. オーストラリア、ニュージーランド
15. まとめ

教科書

秋山 秀一 『フィールドワークのススメ アジア観光・文化の旅』(学文社)

評価方法

- (1)日頃の授業への貢献度:30% (2)出席状況:30%
(3)小レポート、それにまとめとしてのレポート:40%

地誌学概説 B

担当者：秋山 秀一

開講期：秋学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週1回 単位数：2単位

講義概要

1.内容

世界の各地ではいろいろな人々がそれぞれに、その土地に根ざした暮らしをしています。この授業では世界の各地、とくにヨーロッパ諸国並びにアメリカ、そして、日本の各地、における人々の暮らしの様子、自然、風土等を、具体的に上げながら、地域の今を学び、街歩きの楽しさも修得していきます。

2.学びの意義と目標

卒業後どのような仕事に就こうと、国際理解を高めることは意義があり、大切なことです。実際に海外でのフィールドワークを通して得た映像、資料、それに、書籍、雑誌、テレビ・ラジオ等のメディアとのかかわりの中から、具体的な話をしていきます。これにより、より理解度を高めることに大きく寄与します。

準備学習(予習)

授業内容に関する復習の小レポート、テキストの次回の授業に関する項目を予習し、関連する情報を集めておくこと。

準備学習(復習)

配布プリント、テキストの中で授業中に解説したところを再読し、各トピックについて次回までに説明できるようにすること。

授業計画

1. 導入
2. メンタルマップ
3. 東京はアフリカだ
4. 国際化の中の日本
5. 日本
6. 日本
7. 日本
8. アメリカ
9. アメリカ
10. ヨーロッパ
11. イギリス
12. ロンドン
13. フランス
14. イタリア
15. まとめ

教科書

秋山秀一 『おとなの街歩き』(新典社)

評価方法

- (1)日頃の授業への貢献度:30% (2)出席状況:30%
(3)小レポート、それにまとめとしてのレポート:40%

地方財政

担当者：谷 達彦

開講期：秋学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

教育、福祉、道路、上下水道、ゴミ収集など、住民の生活を支える身近な公的サービスは地方自治体によって提供されている。地方財政は日々の暮らしに密接に関わっているが、財源不足や財政力の地域間格差など多くの問題に直面していることも事実である。また、中央集権的な財政システムを分権的な財政システムへと転換するために地方分権改革が求められている。

本講義では、地方財政についての基礎的な理論と制度、制度運営の実態を学習する。具体的には、国と地方の財政関係、地方自治体の予算、地方歳出、地方収入（地方税、地方交付税、国庫補助負担金、地方債）、地方財政危機、地方自治体の財政収支分析などについて学ぶ。日本の地方財政の現状と課題を理解し、自治を支える地方財政のあり方について考えていく。

2.学びの意義と目標

本講義では、地方財政の基礎的な理論や制度について知り、日本の地方財政が直面している課題や今後のあり方について自分なりに考えられるようになることを目標としている。

地方財政のあり方は住民の暮らしに深く関わっている。誰もが地域社会を支える住民の1人であり、地方自治体の行財政に住民参加が求められている今日において、地方財政の制度やその基礎にある考え方について学ぶことは重要である。

準備学習(予習)

新聞等を読み地方財政に関心を持つこと

準備学習(復習)

配布プリントの重要項目について説明できるようにすること

授業計画

1. ガイダンス
2. 地方財政の役割
3. 国と地方の財政関係(1)
4. 国と地方の財政関係(2)
5. 地方自治体の予算
6. 地方支出の構造
7. 地方税の体系
8. 固定資産税
9. 個人住民税
10. その他地方税
11. 地方交付税
12. 国庫補助負担金
13. 地方債
14. 地方公営企業
15. 戦後日本の地方財政
16. 中間まとめ
17. 大都市財政
18. 過疎地域の財政
19. 市町村合併と地方財政
20. 公共投資と地方財政
21. 少子高齢化と地方財政(1)
22. 少子高齢化と地方財政(2)
23. 少子高齢化と地方財政(3)
24. 教育と地方財政
25. 地方財政の危機と債券
26. 自治体財政の分析
27. 地方分権改革(1)
28. 地方分権改革(2)
29. 地方財政の国際比較
30. まとめ

教科書

プリントを配布する

評価方法

- (1)出席及びコメントペーパーの内容:40%:コメントペーパーは毎回記入する
- (2)試験:60%

中小企業論

担当者：酒井 俊行

開講期：秋学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

わが国では企業数の99.7%が中小企業であり、そうした中小規模の事業所に勤める従業者は全体の76.2%にも及んでいます。これらの比率に見られるように、学生の皆さんは卒業後中小企業に勤務することが多く、また大企業に勤めたとしても色々な局面で中小企業と関係を持たざるをえないということです。したがって想像以上に皆さんにとって、中小企業は身近な存在であるわけです。ところがこのように身近な存在でありながら、中小企業についてどれくらい知っているのでしょうか？

この講義は四部構成になっています。第一部（第2回～4回）では本論に入る前の準備を行います。第二部（第5回～13回）では、教科書として指定する統計書に従って、中小企業の構造と動向を学びます。第三部（第14回～22回）では、中小企業白書に従って、わが国中小企業のトピカルな話題を探ります。第四部（第23回～29回）では、第二部～三部での理解を下に理論的な整理を行います。

授業計画だけ見ると何かとても大変な気がするかもしれませんが、基本的なスタンスとして分かり易さを心がけるつもりですので、安心して受講して下さい。

2.学びの意義と目標

上述したように、わが国における企業数の99.7%は中小企業です。このように企業の数だけ見ても、中小企業は身近な存在であるはずなのに、意外に「中小企業WHAT?」というのが実態だと思います。

この授業を受ける第一の意義は、そうした「WHAT?」をなくすることです。中小企業の在り様を正確に理解し、そのわが国における地位・貢献度を理解してもらうことによって、少しでも「WHAT?」をなくすることが私の期待するところです。

第二に、わが国従業者の76.2%が中小事業所に勤めているということです。ということは、皆さんもそうした中小企業に勤めるチャンスが大きいということです。就活に際して業界研究は必須ですが、業界研究に止まらない中小企業研究も極めて大事になるわけです。

以上ここでは2つに限定してこの講義の意義を挙げましたが、この講義はわが国経済の真実を明らかにするためにも重要ということが出来ます。

準備学習(予習)

特に必要ありませんが、出来れば経済学の基本的な知識を有することが望ましいでしょう。

準備学習(復習)

毎回30分～1時間程度の復習により、知識ベースを確実なものにして下さい。理解度を確認するために抜き打ちで確認テストをすることも考えています。

授業計画

1. オリエンテーション
2. 中小企業論をなぜ学ぶのか(1)?
3. 中小企業論をなぜ学ぶのか(2)?
4. 中小企業の定義を知ろう
5. 統計で中小企業の何が分かるか?
6. 統計から理解中小企業を理解しよう(1)
7. 統計から理解中小企業を理解しよう(2)
8. 統計から理解中小企業を理解しよう(3)
9. 統計から理解中小企業を理解しよう(4)
10. 統計から理解中小企業を理解しよう(5)
11. 統計から理解中小企業を理解しよう(6)
12. 統計から理解中小企業を理解しよう(7)
13. 統計から理解中小企業を理解しよう(8)
14. 中小企業白書とは?
15. 中小企業白書を読み解こう(1)
16. 中小企業白書を読み解こう(2)
17. 中小企業白書を読み解こう(3)
18. 中小企業白書を読み解こう(4)
19. 中小企業白書を読み解こう(5)
20. 中小企業白書を読み解こう(6)
21. 中小企業白書を読み解こう(7)
22. 中小企業白書を読み解こう(8)
23. 中小企業問題の歴史～二重構造問題を中心に
24. 中小企業と大企業及び下請問題
25. 中小企業と地域経済
26. グローバル経済下の中小企業
27. 中小企業の金融問題
28. 中小企業政策の方向性
29. 時代の転換と中小企業
30. まとめ

教科書

商工総合研究所 『図説日本の中小企業2013』(一般財団法人商工総合研究所)

評価方法

- (1)試験とレポート:60%:2～3回のレポート提出と期末試験で評価
- (2)授業への貢献:40%:出席状況等授業への貢献度を評価

哲学概論

担当者：大賀 祐樹

開講期：春学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週1回 単位数：2単位

講義概要

1.内容

狭い意味での「哲学」とは「真理」の探求や人間が世界を認識する在り方、言語や論理の厳密な正しさの追求等を意味するが、本講義ではそれだけに限らず、隣接する政治哲学、倫理学、法哲学等に関連するテーマも含め、広く概論する。特に現在私たちが生きている自由で民主的で権利が平等に保障された社会の在り方が何故望ましいかというテーマを中心に据える。

カリキュラム上の位置づけ

この講義科目は、中学校社会科教諭および高等学校地理・歴史教諭免許取得単位認定の科目である。すなわち、この講義は、教諭となることを目指す者のための講義である

2.学びの意義と目標

哲学において大切なことは答えを出すことよりも、問いを立てることである。様々な哲学者がどのような試行錯誤をして問いを立てたのかという道筋を追うことによって、日常社会の生活においても浮上する問題に対して自分なりの問いを立てる力を養うことを目標とする。

準備学習(予習)

特別な予習は必須としないが、講義中に聞いた話題で自分が特に興味を持った点については、配布する資料や授業中に紹介する参考書等で詳しく調べることが望ましい。

準備学習(復習)

毎回プリントを配布する予定なので、興味を持った話題があればその点を掘り下げて、自分なりの問題意識やそれに対する答えを考えておく。

授業計画

1. 英米の哲学とヨーロッパの現代思想
2. 愛と真理について(プラトン)
3. 正義ということばの意味(プラトン、アリストテレス)
4. 自由についてI(カント)
5. 自由についてII(ホブズ、ロック)
6. 自由についてIII(ミル、バーリン)
7. 功利主義(ベンサム、ミル)
8. 公正としての正義(ロールズ)
9. リバタリアニズム(ノージック)
10. コミュニタリアニズム(サンデル、テイラー)
11. ポストモダンと社会(フーコー、デリダ)
12. 自由な社会の根拠(ロールズ)
13. プラグマティズム(ローティ)
14. 権利について
15. まとめ

教科書

プリントを配布する

参考書

『リチャード・ローティ 1931-2007

リベラル・アイロニストの思想』大賀祐樹、藤原書店

『集中講義！アメリカ現代思想』仲正昌樹、NHKブックス

評価方法

(1)試験:60%:期末に実施 (2)レポート:30%:中間に実施 (3)出席:10%

東洋史概説 A

担当者：赤坂 恒明

開講期：春学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週1回 単位数：2単位

講義概要

1.内容

近代以前のアジア各地域の歴史を取り上げる．特に東アジアについては，国際秩序としての「冊封体制」について具体的に詳論する．また，東洋史をも含む歴史全般に興味を持つ受講者に，自主的にさらに関心を深めていくことができるように，歴史研究の基礎ならびに方法論についても簡単に紹介する．

この授業のカリキュラム上の位置づけは，東洋史に関する入門的な位置づけであり，基礎的な講義である．日本史を学ぼうとする学生にも適している．

2.学びの意義と目標

アジアの多様性を理解すると同時に，歴史事象を正確に把握できるようになる．そして，主観的・独断的な判断をすることなく，それらの歴史の意味を解釈する歴史的思考法を持つことができるようになること．

準備学習(予習)

講義中に指示した内容を、資料・参考文献等によって確認する．漢字を読めない留学生には履修が困難である．世界地図帳と世界史資料集（高校で用いたものでよい）を持参すること．

準備学習(復習)

復習では、授業中に指示された地理や年代等を確認すること．各自の自主的な復習を期待する．

授業計画

1. 序
2. アジアとヨーロッパ
3. 「東洋」という概念
4. 歴史編纂をめぐる諸問題
5. 中華思想
6. 冊封体制論
7. 志賀島出土の金印をめぐる諸問題
8. 倭の五王
9. 遣隋使(1) 隋の煬帝は激怒したのか？
10. 遣隋使(2) 国書紛失事件について
11. 古朝鮮
12. 高句麗
13. 渤海
14. 古代チベット
15. まとめ

教科書

プリントを配布する

評価方法

(1)出席点:10% (2)平常点:20% (3)試験（小テストを含む）:70%

東洋史概説 B

担当者：赤坂 恒明

開講期：秋学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週1回 単位数：2単位

講義概要

1.内容

東アジアの一地域としての日本が他の諸地域といかなる関係にあったか、という問題を中心に、主に近現代の歴史のなかから関連するいくつかの事例をとりあげ、個別に論じる。「日本史」の立場からはしばしば看過される問題を積極的に取り上げ、近代的な国民歴史学によって体系化された「一國史」の枠組についても批判的に分析する。

この授業のカリキュラム上の位置づけは、入門的な位置づけの基礎的な講義であり、日本史を学ぼうとする学生にも適している。

2.学びの意義と目標

「日本史」の枠にとらわれることなく、日本列島の歴史を、より広い視野から見るができるようになること。近現代の東アジアにおいて日本が関わった具体的な歴史事象を正確に把握するのみならず、体系化された歴史の枠組がいかに我々の同時代的な状況と密接な関係にあるかについても、理解できるようになること。

準備学習(予習)

講義中に指示した内容を、資料・参考文献等によって確認する。
漢字を読めない留学生には履修が困難である。世界地図帳と世界史資料集(高校で用いたものでよい)を持参すること。

準備学習(復習)

復習では、授業中に指示された地理や年代等を確認すること。各自の自主的な復習を期待する。

授業計画

1. 序
2. 「オホーツク文化」
3. 「もうひとつの蒙古襲来」
4. 山丹交易
5. 千島・樺太の先住諸民族と近代日本
6. 琉球王国
7. 「琉球処分」をめぐる日清関係
8. 韓国併合
9. 日本による朝鮮半島の植民地支配(1) 第一期
10. 日本による朝鮮半島の植民地支配(2) 第二期と第三期
11. 「戦争抛棄二関スル条約」と満洲事変
12. 日本の進出と、内蒙古東南部地域におけるモンゴル人
13. 熱河作戦
14. 「支那事変」:盧溝橋事件から「南京大虐殺」へ
15. まとめ

教科書

プリントを配布する

評価方法

(1)出席点:10% (2)平常点:20% (3)試験(小テストを含む):70%

担当者：飯島 康夫

開講期：秋学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週1回 単位数：2単位

講義概要**1.内容**

この講義は近代に入ってから顕著となっている都市化と人々の暮らしの関係を考え、身近な近隣住区にフィールドを置いて、住みよい街とはどんなものかを考察するものである。

ある程度、基礎的な政治経済、社会の学びを前提とする。

2.学びの意義と目標

都市は太古に農耕文明の革命が起きてから、各種の城塞型都市が現れてきた。

都市研究では、主に都市の歴史を概観し、現代のわれわれが住むとしにおいて、一市民として自分の街を住みよくするため、気づき、行動するため、知識と歴史上の経験を学ぶことを旨とする

準備学習(予習)

出席を重視します。また、自らの言葉で表現する力、授業への貢献を重視します。

基本文献を指示するので、基礎知識を養うこと。

準備学習(復習)

前回の講義のノートを見ながら、簡潔に学んだことをまとめてもらいます。

授業計画

1. 導入
2. 都市とは？
3. 欧米先進国の都市化 古代
4. 同上 中世世界と都市同盟
5. 同上 近世と絶対主義
6. 産業革命以降の都市化の歴史
7. 現代世界の都市化
8. 情報化と都市化
9. 経済のサービス化と都市化
10. 都市化と外国人労働者
11. 途上諸国の都市化の特徴
12. 中国の経済発展と都市化の歴史
13. 旧共産圏(旧ソ連・東欧圏)の都市化と市民社会
14. 北東アジア圏と日本の都市化
15. 現地調査方法論

教科書

水内不二雄 『経済・社会の地理学』(有斐閣)

評価方法

(1)出席:50% (2)レポート・小テスト:30% (3)発表:20%

日本経済史

担当者：高橋 聡

開講期：秋学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

この講義では、次の二つのことを並行して学ぶ。
第一は、明治以降のわが国の経済の歴史を学ぶことである。歴史という、人名・出来事・年号の暗記に終始することであるかに見える。ここではもっと掘り下げて、なぜそれがおきたのか？なぜそのような結果になったのか？なぜ人（または政府や企業）はそのように行動したのか？というところまで学ぶ。そのために有効な学習方法は、経済学をつかって考えることである。そこでこの講義では、経済学を学びつつ受講者が歴史的知見を広げられる内容とする。

第二は、経済の基本用語(市場、政府、企業、消費者、競争)に関するさまざまな問題を歴史的な視座から学ぶことである。ミクロ・マクロ経済学の学習では、基本用語の概念を知るだけで終わり、現実社会において今日どのような問題があるのかまでを考えることはない。そこでこの講義では、経済の基本用語の内実を、歴史的・具体的問題に即して考える内容とする。

2.学びの意義と目標

経済学を用いて歴史的な事象を学ぶ。 歴史的な事象を通じて経済の基本問題を考える力をつける。

準備学習(予習)

テキストの該当ページを読むこと。 新聞・ニュースに関心を持つこと。

準備学習(復習)

配布するプリントの問題を解いてみる。 授業中に紹介する本(新書)を読むこと。

授業計画

1. 日本経済への視角
2. 経済発展と成長会計 - なぜ豊かな国とそうではない国があるのか？
3. 戦前の経済発展 - 明治期と戦前の経済発展
4. 企業とビジネス
5. 戦時の統制経済 - 「1940年体制」が今も続いている？
6. 企業とビジネス
7. 戦後占領期 - 傾斜生産方式は成功したのか？
8. 社会的企業
9. ドッジ・ラインーIMF型ショック療法の原型？
10. 社会的企業
11. 高度経済成長 - 新古典派成長モデルと全要素生産性
12. 組織と仕事
13. 高度経済成長 - 産業政策は有効だったのか？
14. 組織と仕事
15. 1970年代の日本経済 - なぜケインジアン理論は破綻したのか？
16. 競争と格差
17. 1980年代の日本経済 - なぜ「小さな政府」論が登場したのか？
18. 競争と格差
19. 日米経済摩擦 - 貿易黒字は善、赤字は悪か？
20. 消費者主権
21. バブル崩壊以後の日本経済 - なぜ「失われた20年」になったのか？
22. 消費者主権
23. 日本の産業 産業構造・企業間関係・市場構造
24. 食と安全
25. 日本の企業経営 「日本的経営」とコーポレートガバナンス
26. 食と安全
27. 日本の雇用と職場 雇用戦略と労使関係
28. 企業と国家
29. 日本の財政と社会保障
30. 企業と国家

教科書

伊藤修 『日本の経済 - 歴史・現状・論点』(中央公論新社)
佐藤方宣 『ビジネス倫理の論じ方』(ナカニシヤ出版)

評価方法

(1)レポート:40% (2)試験:60%

日本経済論

担当者：大森 達也

開講期：秋学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

本講義では、1990年代の日本経済は、まさに過去の成功の故に、制度的に疲弊し、矛盾を露呈するにいたったと理解し、サブプライム問題以降、混迷する世界経済において日本経済は今後どのような方向に進んでいくか、あるいは、どのように変化するか、戦後の歴史等を踏まえて考えていくこととする。

2.学びの意義と目標

本講義では、戦後の日本経済の成立、その発展の軌跡、経済政策あるいは体制上の特徴などについての講義を通じ、日本経済の現状と将来的な展望を得ることを目的とする。

準備学習(予習)

内容的に、盛りだくさんなので、事前に文献等を読んでおくこと。

準備学習(復習)

試験は、講義内容をもとに行われるので、ノートをしっかりと作っておくこと。

授業計画

- 1.はじめに
- 2.経済体制とは
- 3.古典的資本主義と古典的社会主義
- 4.現代混合資本主義
- 5.経済体制としての日本型資本主義（歴史的背景）
- 6.経済体制としての日本型資本主義（目的、課題）
- 7.経済体制としての日本型資本主義（モデルとして）
- 8.戦後日本経済の発展過程（戦後復興期）
- 9.戦後日本経済の発展過程（高度経済成長期）
- 10.戦後日本経済の発展過程（低経済成長期）
- 11.戦後日本経済の発展過程（バブル経済へ-1）
- 12.戦後日本経済の発展過程（バブル経済へ-2）
- 13.戦後日本経済の発展過程（まとめ）
- 14.前半講義のまとめ
- 15.中間試験14～17
- 16.戦後日本経済の発展過程のおさらい
- 17.戦後日本経済の成長の仕組み（設備投資競争について）
- 18.戦後日本経済の成長の仕組み（その他の企業競争）
- 19.産業構造の変化
- 20.産業構造の変化（課題）
- 21.日本の金融・財政政策（経済政策とは）
- 22.日本の金融・財政政策（政策手段に見る日本の特徴）
- 23.日本の金融・財政政策（課題）
- 24.日本の貿易構造（貿易の意味）
- 25.日本の貿易構造（貿易摩擦から経済摩擦へ）
- 26.日本の貿易構造（課題）
- 27.日本経済:21世紀における課題
- 28.日本経済:21世紀における課題
- 29.後半講義まとめ
- 30.期末試験16～29

教科書

橋本寿朗、他『現代日本経済論（第3版）』（有斐閣アルマ）

評価方法

(1)中間試験:35% (2)期末試験:35%
(3)ブックレポート:30%:1,200文字程度
3回×10%

日本史概説 A

担当者：東島 誠

開講期：春学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週1回 単位数：2単位

講義概要

1. 内容

「日本」という国はいつ誕生したのか。おそらく諸君は「縄文時代の日本」や「日本における稲作の始まり」といった表現に、何の違和感もなく慣れ親しんできたことであろう。だが、縄文時代や弥生時代には、まだ「日本」という名の国家は存在しなかった。まずはそのあたりから、諸君の常識、既成の歴史像に、心地よい揺さぶりをかけていきたい。

なお、概説 A では中世前期までの歴史を扱う。概説 A・B に挟まれた中世後期の歴史については、2年次以降、「日本史の研究（中世史特論）」で深く掘り下げて学ぶことができる。

2. 学びの意義と目標

結論は一つではない。この講義では時に、対立する学説を諸君に投げかけることがある。どちらがより説得的か？それを判断するのは君たち自身だ。大学の歴史の講義とはじつは、論理的思考力を鍛錬する場なのである。

なお、当科目は、日本文化学科の選択必修科目であると同時に、政治経済学部社会科学教職科目でもある。限られた時間数ではあるが、高校までの知識重視の歴史とはひと味違う、「考える歴史」を体験することで、将来教壇に立つ諸君の歴史像が、興行き豊かなものとなることを願う。

準備学習(予習)

毎回の授業で扱う基礎用語については、前週のプリントで指示する。事前に調べて予備知識を得たうえで講義に出席すること。

準備学習(復習)

A 4 ファイルを用意し、配布プリントを整理した上で、毎回持参すること。各回冒頭に、質問への応答、学生カードの紹介等の復習を行なうほか、折に触れて以前のプリントを参照することがある。

授業計画

1. ガイダンス: 「日本」? の歴史
2. 邪馬台国連合と 王の身体
3. 継体王朝はどう位置づけられたか
4. 推古朝と天武・持統朝 古代国家を考える
5. 「託宣」と「歌謡」 奈良時代末期に歌われた皇統革命
6. 「唐風」志向と日本の政治原理
7. 浮浪人とはなにか
8. (峠で一服) 心の闇に映じたもの 頼光物『土蜘蛛草紙』を読み解く
9. 院政期社会をどうとらえるか
10. 頼朝と義仲 その分岐点はなにか
11. 義経の結婚
12. 「泰時の徳政」と人身売買法 寛喜の飢饉と鎌倉幕府
13. 中世遊女の世界 後朝の別れの物語
14. 蒙古襲来と得宗専制
15. 悪党の14世紀 中世後期世界への展望

教科書

授業の中で指示する

評価方法

(1) 学期末試験: 55% (2) 授業内での提出カード: 45%: 提出カードの優秀者には、別途加点を行なう。

日本史概説 B

担当者：東島 誠

開講期：秋学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週1回 単位数：2単位

講義概要

1. 内容

概説 B では、近世以降の歴史を扱うが、わずか十数回では、もちろんすべてをカバーすることはできないし、カバーしようとする高校の授業と大差ない、駆け足のものとなりかねない。いきおいテーマは「考える歴史」が体験できるテーマを、精選して提供していきたい。

なお、概説 A・B に挟まれた中世後期の歴史については、2年次以降、「日本史の研究（中世史特論）」で深く掘り下げて学ぶことができる。

2. 学びの意義と目標

結論は一つではない この講義では時に、対立する学説を諸君に投げかけることがある。どちらがより説得的か？それを判断するのは君たち自身だ。大学の歴史の講義とはじつは、論理的思考力を鍛錬する場なのである。

なお、当科目は、日本文化学科の選択必修科目であると同時に、政治経済学部の社会科学教職科目でもある。限られた時間数ではあるが、高校までの知識重視の歴史とはひと味違う、「考える歴史」を体験することで、将来教壇に立つ諸君の歴史像が、興行き豊かなものとなることを願う。

準備学習(予習)

毎回の授業で扱う基礎用語については、前週のプリントで指示する。事前に調べて予備知識を得たうえで講義に出席すること。

準備学習(復習)

A 4 ファイルを用意し、配布プリントを整理した上で、毎回持参すること。各回冒頭に、質問への応答、学生カードの紹介等の復習を行なうほか、折に触れて以前のプリントを参照することがある。

授業計画

1. ガイダンス： 中世後期世界から近世・近代へ
2. 中世世界を破壊したのは、信長・秀吉のいずれか？
3. 家康の神格化と江戸時代の天皇
4. 赤穂事件から見た武士の 近世
5. 災害復興から見た幕政と藩政 明暦江戸大火と宝永富士山噴火
6. 田沼意次か松平定信か
7. 国芳げに良し 化政文化から天保改革期の江戸社会
8. 鯨絵は、なぜいかにして生まれたか？
9. 幕末の情報世界 風説留からみた新選組像
10. 「新聞錦絵」と欲望する近代
11. 自由民権運動と土佐出身者たち
12. 日清・日露戦争と鉄道の 近代
13. 関東大震災の影と光と
14. 治安維持法をめぐる人びと
15. 総力戦から敗戦へ 社会変容のなかの思想的強度

教科書

授業の中で指示する

評価方法

(1)学期末試験:55% (2)授業内での提出カード:45%:提出カードの優秀者には、別途加点を行なう。

日本政治史

担当者：吉田 博司

開講期：秋学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

明治、大正、昭和戦前期の政治史をふりかえります。明治維新はなぜ起きたのか。明治憲法はどのような背景で成立したのか。日本の議会政治はどのように発展し、挫折したのか。こうした内容を近代日本の政党政治発展というテーマを根底にすえてみていきます。人物論もおり込み、生きた政治史理解をめざします。政治学系の専門科目ですので、かなり詳細な歴史探求となります。

2.学びの意義と目標

現代政治の理解は歴史的考察をふまえることで深められるでしょう。歴史は現代なのです。

準備学習(予習)

講義ポイントを配布するので予習しておく。

準備学習(復習)

5回の講義後、小テストを含めた復習授業をしますので5回分の講義ノートも中心に復習しておく。

授業計画

1. 明治維新と公議輿論
2. 同
3. 同
4. 同
5. 同
6. 同
7. 同
8. 明治憲法のできるまで
9. 同
10. 同
11. 明治憲法の特徴
12. 同
13. 初期議会と超然主義
14. 同
15. 同
16. 同
17. 政友会の成立
18. 桂園時代
19. 同
20. 大正の政変
21. 政党政治化状況
22. 同
23. 同
24. 二大政党時代
25. 同
26. 同
27. 昭和維新
28. 同
29. 同
30. 同

教科書

授業の中で指示する

評価方法

(1)平常点:60%: (2)小テスト:40%
平常点が重視されます。

日本政治思想史

担当者：吉田 博司

開講期：春学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

近代日本の政治思想史ですが、思想と時代との関わりを重視しますので、日本近代史と重なる部分があります。また、精神史的考察という立場から心理 - 歴史的な思想史を目指します。具体的には、福澤諭吉の開かれた精神にはじまり、上杉慎吉の閉じた精神（同体思想）、大正デモクラシーの開かれた政治思想（吉野作造）、昭和期における閉じた精神の復活（昭和維新）、近代日本と社会主義思想（山路愛山）、軍国主義下での自由主義の精神（馬場恒吉）、学生の社会運動（新人会）を検討していきます。
この科目は政治学系の理論的専門科目ですので、かなり深いレベルの歴史探求となります。

2.学びの意義と目標

思想史は結局、人間精神の探求です。時代と格闘する人間の根底を見つめましょう。

準備学習(予習)

講義ポイントを配布するので予習しておく。

準備学習(復習)

5回の講義後、小テストを含めた復習授業をしますので、5回分の講義ノートを中心に復習しておく。

授業計画

1. 福沢諭吉
2. 同
3. 同
4. 同
5. 自由民権
6. 同
7. 同
8. 国体思想
9. 同
10. 同
11. 同
12. 明治社会主義
13. 同
14. 大正デモクラシー
15. 同
16. 同
17. 日本の学生社会運動
18. 同
19. 昭和維新
20. 同
21. 国体明徴運動
22. 同
23. コモンセンスの自由主義
24. 同
25. 予備
26. 同
27. 同
28. 同
29. 同
30. 同

教科書

吉田 博司 『近代日本の政治精神』(芦書房)

評価方法

(1)平常点:60% (2)小テスト:40%
平常点が重視されます。

日本政治論

担当者：吉田 博司

開講期：春学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

日本の政治を制度、文化、人物、外交、内政の総合的視座から検討する。

2.学びの意義と目標

日本の政治を制度面で知るだけでなく総合的視座からとらえる。

準備学習(予習)

講義ポイントを配布するので調べておく。

準備学習(復習)

5回の講義後、小テストを含めた復習授業をしますので、5回分の講義ノートで復習をしておくこと。

授業計画

1. 日本の政治制度
2. 同(憲法)
3. 同(議会)
4. 同(内閣)
5. 同(選挙)
6. 同(官僚)
7. 日本の政治文化
8. 同(派閥)
9. 同(地盤)
- 10.同(利権)
- 11.同(風土)
- 12.日本の政治家
- 13.同(伊藤博文)
- 14.同(原敬)
- 15.同(吉田茂)
- 16.同(池田勇人と佐藤栄作)
- 17.同(田中角栄と中曽根康弘)
- 18.日本の外交
- 19.同(明治)
- 20.同(明治)
- 21.同(大正)
- 22.同(昭和)
- 23.同(戦後)
- 24.同(戦後)
- 25.同(戦後)
- 26.現代内閣史
- 27.同(岸から田中まで)
- 28.同(三木から中曽根まで)
- 29.同(55年体制崩壊以降)
- 30.同(同)

教科書

授業の中で指示する

評価方法

(1)平常点:60% (2)小テスト:40%
平常点が重視されます。

比較憲法

担当者：松村 芳明

開講期：春学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

憲法とは何かに関する基本知識と日本の憲法の概要を学んだ後、西洋諸国を中心に世界各国の憲法を、主として歴史、憲法保障構造、統治構造、人権保障の各側面から比較的に学ぶ講義である。

2.学びの意義と目標

世界各国の憲法を比較的に学ぶことにより、より幅広く、奥の深い憲法知識を身につけることができる。加えて、国際社会で生きて行くために極めて有意義な、世界各国の歴史や社会のあり方についての社会科学の教養を獲得することもできる。

準備学習(予習)

テキストや高校のときの社会科の教科書などを読むことで予備知識を得ておくこと。

準備学習(復習)

授業のプリントや憲法条文、テキストなどを読み返して授業で得た知識を整理すること。

授業計画

- 1.はじめに:比較憲法学の意義と目的
- 2.比較憲法学の対象と方法(比較の視座)
- 3.憲法とは何か(1)立憲主義
- 4.憲法とは何か(2)人権保障の構造
- 5.憲法とは何か(3)統治機構
- 6.憲法とは何か(4)憲法保障
- 7.各国の憲法(1)日本
- 8.各国の憲法(2)日本
- 9.各国の憲法(3)日本
- 10.各国の憲法(4)日本
- 11.各国の憲法(5)アメリカ
- 12.各国の憲法(6)アメリカ
- 13.各国の憲法(7)イギリス
- 14.各国の憲法(8)フランス
- 15.各国の憲法(9)ドイツ
- 16.各国の憲法(10)ドイツ
- 17.各国の憲法(11)EU
- 18.各国の憲法(12)カナダ・中国・韓国・南ア
- 19.憲法保障システムの比較的考察(1)憲法改正
- 20.憲法保障システムの比較的考察(2)違憲審査制
- 21.統治構造の比較的考察(1)国民主権・立法・政党・選挙制度
- 22.統治構造の比較的考察(2)行政・執行
- 23.統治構造の比較的考察(3)裁判所
- 24.人権保障の比較的考察(1)人権保障の基本構造
- 25.人権保障の比較的考察(2)新しい人権
- 26.人権保障の比較的考察(3)平等原則
- 27.人権保障の比較的考察(4)精神的自由権
- 28.人権保障の比較的考察(5)社会権
- 29.人権保障の比較的考察(6)参政権
- 30.人権保障の比較的考察(7)家族・子どもの権利

教科書

初宿正典・辻村みよ子『新解説 世界憲法集 第2版』(三省堂)

評価方法

(1)レポート:100%

比較政治学

担当者：松尾 秀哉

開講期：秋学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

内容)比較政治学の主要成果、手法を紹介し(講義形式)つつ、後半ではグループワーク(任意の国の政治を実際に比較分析し、レジュメを作成し、発表する)を行う。

カリキュラム上の位置づけ)「政治学」の受講を前提とする。「比較」に要求される高度な専門性(分析力と批判力)を養う

2.学びの意義と目標

「比較」するためには「批判」できる精神と能力、客観的な分析力が必要とされる。自らテキストを読み、要約、事例分析することによって、この力を獲得する。

準備学習(予習)

グループワーク、報告(レジュメの作成)に加え、毎回の授業で各受講者に意見を求めるため、事前学習に相当の時間が必要となる。

準備学習(復習)

前半はしっかり復習し、Webにてその日の講義のまとめを送ること。

授業計画

1. 導入 授業の進め方
2. 比較政治の方法 総論(1)なぜ・なにを比較するか
3. 比較政治学の方法 総論(2)どのように比較するか(1)
4. 比較政比較政治学の方法 総論(3)どのように比較するか(2)
5. 比較政治学の方法(1)政治体制論
6. 比較政治学の方法(2)政治文化論
7. 比較政治学の方法(3)政治社会論
8. 比較政治学の方法(4)政治発展論
9. 比較政治学の方法(5)政治社会論(政党システム論)
10. 比較政治学の方法(6)政治発展論
11. 比較政治学の方法(7)政治変動論
12. 比較政治学の方法(8)新制度論
13. 小テスト
14. グループワークの手引き
15. グループワーク(1)
16. グループワーク(2)
17. グループワーク(3)
18. グループワーク(4)
19. グループワーク(5)
20. グループワーク(6)
21. 成果報告準備(1)
22. 成果報告準備(2)
23. 成果報告(1)
24. 成果報告(2)
25. 成果報告(3)
26. 成果報告(4)
27. 成果報告(5)
28. フィードバック
29. レポート作成指導
30. 総括

教科書

授業の中で指示する
キング・コヘイン・パーバ他『社会科学のリサーチ・デザイン』

評価方法

(1)リアクションペーパー:20%(2)復習レポート:10%(3)小テスト:20%(4)成果報告:40%(5)平常点:10%
平常点は、グループワークへの積極的参加をさす

秘書学概論

担当者：森 久子

開講期：秋学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

秘書として必要な知識を学びながら、上司のためだけでなく、組織の一員として自分がどのように行動すればよいか学びます。概論ですが、具体的な業務と結びつけるために、適宜、演習も行い、特に11月の秘書検定試験までは、検定対策となるような事例を多く取り上げます。

2.学びの意義と目標

秘書の仕事を学ぶことで、組織内外の人間関係を理解し、直ぐに実務に役立つ知識や技能を身につけ、学校から社会へとスムーズに移行する手助けとなる授業です。従って、秘書業務の基礎知識を身につけるだけでなく、社会人として行動できるようになることを目標とします。

準備学習(予習)

授業計画を参照し、テキストの該当箇所の解らない漢字や意味を調べてください。

準備学習(復習)

知識の確認のために、主に演習問題を宿題とします。

授業計画

- 1.オリエンテーション
- 2.秘書とは(秘書の歴史・秘書の専門分化)
- 3.秘書と急変する企業環境
- 4.秘書と会社組織1(会社とは・会社の種類・組織と役割・重要な会議)
- 5.秘書と会社組織2(秘書の業務形態)
- 6.秘書の職務内容
- 7.秘書の補佐機能
- 8.社会人基礎力
- 9.ビジネス・マナー
- 10.慶弔の知識
- 11.秘書に求められる能力
- 12.秘書に求められる資質
- 13.秘書の資質を高める努力
- 14.前半の復習とまとめ
- 15.秘書と人間関係1(コミュニケーションの基本概念)
- 16.秘書と人間関係2(バーバル・コミュニケーションとノンバーバル・コミュニケーション)
- 17.言葉づかい(敬語)
- 18.秘書と人間関係3(秘書と上司・周囲の人との人間関係)
- 19.秘書と情報管理
- 20.文書業務
- 21.レコード・マネジメント
- 22.秘書とキャリア1(キャリアとは・主要なキャリア理論)
- 23.秘書とキャリア2(秘書のキャリアパス・秘書のキャリアデザイン)
- 24.これからの企業
- 25.秘書と異文化理解
- 26.プロトコールとホスピタリティ
- 27.これからの秘書
- 28.知っておきたい労働基準法の基礎知識
- 29.知っておきたい社会保険の基礎知識・財務会計の基礎知識
- 30.まとめ

教科書

高橋眞知子・北垣日出子監修 『秘書概論』(樹村房)

評価方法

(1)試験:50% (2)レポート:20% (3)出席:30%

ファイナンス

担当者：小林 一之

開講期：春学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

ファイナンスは企業や官公庁などにとって資金計画を立て、必要な投資を行い、実行するという機能を有効に果たす為のものです。本科目では企業経営を軸としてその経済的価値をどう高めていくかを目的として、投資を効果的に行う手法、その結果どれだけの価値が創造されたのかを評価し、その結果をフィードバックする事等を学びます。その基礎として株価の分析、会計のしくみ、経営分析の手法、企業運営のポイントなどを伝えます。

2.学びの意義と目標

企業で財務担当役員や財務管理担当者は勿論、CEOと呼ばれる最高経営者、にとって必須の領域であり、一般の経営管理者・マネジメントスタッフにとっても大切な知識となります。この基礎を理解し将来のマネジメントに生かす事。

準備学習(予習)

- ・ 授業の中で参考書を紹介します。出来る限り目を通す事
- ・ テキストとしてのプリント以外に参考資料を配布します。次の授業までに読んでおくこと。

準備学習(復習)

学習内容は多岐にわたり、それぞれが関連しあっています。予習は不要ですが、講義ごとに配布したプリント等を良く読み返し、次の授業に備え理解しておくこと。

授業計画

1. 財務管理の目的と意義
2. 金銭の時間的価値
3. 演習 1
4. 演習 2
5. 会計の仕組み
6. 貸借対照表、損益計算書のしくみ
7. 演習 1
8. 演習 2
9. キャッシュフロー
10. 企業価値
11. 株価の変動とリスク
12. 投資や資金調達の伴うリスク
13. 資本コスト(1)
14. 資本コスト(2)
15. ポートフォリオ理論(1)
16. ポートフォリオ理論(2)
17. 企業評価
18. 資金調達、配当、財務管理
19. 経営管理プロセス
20. 予算管理(1)
21. 予算管理(2)
22. 損益分岐点分析
23. 原価計算
24. 経営分析(1)
25. 経営分析(2)
26. 特殊原価計算
27. 投資評価(1)
28. 投資評価(2)
29. 意思決定の方法
30. 補足、まとめ

教科書

プリントを配布する

評価方法

(1)出席点:20% (2)理解力:80%:それぞれの項目の基礎概念など

担当者：I. トルフアシュ

開講期：秋学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要**1. 内容**

男性から女性に贈られたバラは彼の愛情のシンボル、秤は正義や公平のシンボルであるなどと日常言われている。また、日本国憲法は天皇を日本国民の象徴（シンボル）と宣言している。一方、太陽は神のシンボルであり、樹は世界のシンボルであるなどと述べる伝統的文献は数多い。ボードレールは以下のように語る。「自然 はひとつの神殿、/その生命ある柱は、時おり、曖昧な言葉を洩らす。/その中を歩む人間は、象徴の森を過り、/森は親しい眼差しで人間を見る。」

このような「シンボルの森」、たとえば自然物（光、色、音、水、火、山、動物、植物、星など）や言葉、身振り、感情、数字、文字、日常生活道具（ろくろ、梯子、傘など）、幾何学図形（正方形、輪、螺旋など）、さらには平和、貧困、旅などのシンボルの中で、伝統的・宗教的シンボルをどのように位置づけることができるであろうか。本講義では広範な時代と空間にわたって、さまざまな伝統における言葉（聖なる書、神秘家、哲学者、文学者、民話などの言葉）による表現およびイメージなどにより形成されたシンボルを紹介し、それぞれの意味を解明することにより、文化や思想における伝統的・宗教的シンボルの豊かさや重要性を明らかにすることを試みたい。それに達するため、講義の前半は主として様々な伝統に共通してよく見られるシンボル、後半は特定の伝統に固有のシンボルを挙げ、考察する。

2. 学びの意義と目標

本講義の目標は主として伝統的・宗教的シンボルへの理解を深めることである。そのためには、宗教的伝統の如何を問わず、まずはできるだけたくさんの実例（言葉やイメージなど）を紹介しその意味内容を探ることとする。次いで特定のシンボルの構造を明確にし、それによって受講者が、同構造を持つ他のシンボル（本講義においては扱わないシンボル）をも理解できるようになることを期待する。本講義を通してシンボルについて身につける知識は社会において直接使用できるようなものではないかも知れないが、それは大きな意義を持つものと確信している。

その意義とはすなわち、（1）このような知識は受講者を精神的により豊かにすること、（2）世界中どこであっても、伝統的・宗教的シンボルに出会う可能性（建築物や祭り、文学作品や昔話、日常生活においてさえも、あらゆる形で）はきわめて高く、それらの理解は、受講者の知的好奇心を大いに刺激するであろうこと、（3）古くから伝わってきた文化や思想における一つの遺産とも言えるシンボルを、過度に専門的になった現代社会において受け継いでいくために、シンボルの理解は欠かせないものであるということ、（4）シンボルを通じた他文化理解は、世界の平和を保つための一つの手段にもなり得るということにあると思われる。

準備学習(予習)

受講者が授業の資料を準備することは必須である。

準備学習(復習)

時には提示された資料を再読し、それに関する質問、感想などを書いて提出すること。

授業計画

1. オリエンテーション 伝統的・宗教的シンボルの意義
2. 円周と中心のシンボリズム
3. 世界の中心のシンボリズム
4. 世界の軸のシンボリズム
5. プラトンの洞窟のシンボリズム
6. 蜘蛛のシンボリズム
7. 「まんじ」のシンボリズム
8. 迷宮のシンボリズム
9. 劇と操り人形のシンボリズム
10. 漢字「王」のシンボリズム
11. 黄金分割のシンボリズム
12. 砂時計とひょうたんのシンボリズム
13. シンボルと割符の関係
14. シンボルの伝播の問題
15. まとめ
16. 初期キリスト教におけるイエス・キリストのシンボル
17. キリスト教聖堂のシンボリズム
18. ゴシック式の大聖堂のシンボリズムとステンドグラス
19. 神秘思想とその象徴的表現（1）（ルーミー）
20. 踊りのシンボリズム（旋舞教団）（テキストとDVD）
21. サンチアゴ・デ・コンポステラの巡礼（テキストとCD）
22. 中世スペインにおける三つの文化（テキストとCD）
23. イコンの世界と聖骸布の物語（DVD）
24. クリスマスのイコンとクリスマス・キャロル（テキストとCD）
25. 象徴的物語（スーフィズム）
26. 象徴的詩（ウマル・ハイヤーム）
27. 神秘思想とその象徴的表現（2）（シレージウス）
28. キリスト教における宗教的音楽（ビザンチン・ロシア）（CD）
29. インド音楽のシンボリズム（テキストとCD）
30. まとめ

教科書

授業の中で指示する
授業に必要な資料（文書、白・黒およびカラー図版・写真など）をまず授業中に提示する。次いでこの資料は当方があらかじめアップロードし、受講者がダウンロードする（ダウンロードの方法を最初の授業に教えることにする）。

評価方法

- (1)レポート:50%
- (2)平常点評価:30%:授業への積極的な参加態度
- (3)出席:20%:授業の目標に達するために、出席も重視する。

平和学

担当者：小松崎 利明

開講期：秋学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

これまで蓄積されてきた平和研究の学問的成果を基礎に、われわれが生きる社会に生起する問題を通して、「平和」について考える。ただし、この平和ということば／概念自体が多義的・論争的であり、またその平和を実現するための手段や方法も、人や文化、また時代によってもさまざまに異なり、さらには、平和に関する研究があらゆる学問分野を含むがゆえに、包括的に学習することは困難である。したがってこの授業では、「平和とは何か」「平和はどのようにすれば実現できるのか」といった問いへの「唯一の答え」を「提示する」のではなく、基本知識の習得と映像資料の視聴をもとにしたディスカッションを通じて、学生ひとりひとりが自ら平和について考えることを目的とする。

2.学びの意義と目標

まずは、社会科学の領域において蓄積されてきた平和研究の学問的成果を学ぶ。それをもとに、自分自身、そして他者との対話を通じて、現代世界における「平和」について多様な視点から考察する技術を習得する。

準備学習(予習)

毎回事前に配布される資料(20頁程度)を読んでおく。

準備学習(復習)

期末レポートの作成準備を含め、配布資料や参考文献を読み、自らの考えをまとめる。

授業計画

- 1.講義概要の説明
- 2.平和学を学ぶとは
- 3.現代日本の「平和」について考える(1) 日本国憲法の平和主義
- 4.現代日本の「平和」について考える(2) 自衛隊
- 5.現代日本の「平和」について考える(3) 『映画日本国憲法』
- 6.現代日本の「平和」について考える(4) ディスカッション
- 7.現代世界の戦争について考える(1) 9・11と「対テロ戦争」
- 8.現代世界の戦争について考える(2) アメリカの「平和」
- 9.現代世界の戦争について考える(3) 『華氏911』
- 10.現代世界の戦争について考える(4) ディスカッション
- 11.現代世界の戦争について考える(5) テロリズム
- 12.現代世界の戦争について考える(6) 「新しい戦争」
- 13.軍事力について考える(1) 戦争違法化の歴史
- 14.軍事力について考える(2) 国連と平和維持
- 15.軍事力について考える(3) 『ホテル・ルワンダ』
- 16.軍事力について考える(4) ディスカッション
- 17.軍事力について考える(5) 人道的介入と「保護する責任」
- 18.軍事力について考える(6) 「人間の安全保障」
- 19.紛争の解決について考える(1) 紛争解決の諸類型
- 20.紛争の解決について考える(2) 国際刑事裁判と住民間和解
- 21.紛争の解決について考える(3) 『カルラのリスト』
- 22.紛争の解決について考える(4) ディスカッション
- 23.暴力について考える(1) 構造的暴力
- 24.暴力について考える(2) 人権の保障
- 25.暴力について考える(3) 『キリング・フィールド』
- 26.暴力について考える(4) ディスカッション
- 27.暴力について考える(5) 平和思想
- 28.暴力について考える(6) 非暴力主義
- 29.暴力について考える(7) 『ガンジー』
- 30.暴力について考える(8) ディスカッション

教科書

プリントを配布する

評価方法

- (1)平常点:50%:グループ・ディスカッションへの参加を含めた授業内での発言、準備学習への取り組み
- (2)中間レポート:20%
- (3)期末レポート:30%

法学

担当者：石川 裕一郎

開講期：春学期 必修・選択：必修科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

日常生活に関わる法律問題やテレビ・新聞等で出くわす法律についての素朴な疑問といった実例から出発して、現代日本の法の実態を丁寧にみてゆきたいと思います。

また、法制度全体を網羅的に取り上げるのではなく、なるべく最近の具体的な事件を様々な角度から掘り下げるといったスタイルにしたいと考えています。

取り上げる内容としては、法の一般原則に始まり、民法、社会法、民事裁判、刑事法、刑事裁判、行政法、生命倫理法の順に各法分野を予定しています。

なお、できるだけアクチュアルな問題を取り上げたいので、内容は多少変更される可能性があります。また、法学に関わる講演会または映像作品の鑑賞も2～3回ほど実施する予定です。

2.学びの意義と目標

現代における政治・経済・社会・文化の様々な事象を、法的視点から考察できるようになることをめざします。

政治経済学部の学生にとっては、とりわけ政治学・経済学の理解を深めるためにも法学の知識は必須です。

人文学部および人間福祉学部の学生にとっても、法の論理に親しむことを通じて様々な領域の学問を深めることができると考えます。

準備学習(予習)

原則として事前にレジュメを配布するので、必ず目を通しておくことを求めます。毎回かなりの分量なので、ある程度の時間と集中力を必要とします。

準備学習(復習)

毎回の講義の後で、習得した知識の確認と講義への主体的な取り組み姿勢を評価することを目的としたリアクションペーパーの作成および提出を課しますので、それを踏まえて次回までに講義内容の理解を定着させることを求めます。

授業計画

1. 法とは何か(1)
2. 法とは何か(2)
3. 法の一般原則(1)
4. 法の一般原則(2)
5. 民法の基本原則(1)
6. 民法の基本原則(2)
7. 家族・ジェンダーと法(1)
8. 家族・ジェンダーと法(2)
9. 家族・ジェンダーと法(3)
10. 経済活動と法(1)
11. 経済活動と法(2)
12. 労働・社会保障と法(1)
13. 労働・社会保障と法(2)
14. 労働・社会保障と法(3)
15. 民事裁判(1)
16. 民事裁判(2)
17. 民事裁判(3)
18. 刑事法の基本原則(1)
19. 刑事法の基本原則(2)
20. 刑事裁判(1)
21. 刑事裁判(2)
22. 刑事裁判(3)
23. 少年法と児童福祉法
24. 行政と法(1)
25. 行政と法(2)
26. 行政と法(3)
27. 生命倫理・環境と法(1)
28. 生命倫理・環境と法(2)
29. 予備
30. まとめ

教科書

プリントを配布する

評価方法

単なる出席（物理的に教室内に存在すること）だけでは何ら評価の対象となりません。

法学

担当者：加藤 恵司

開講期：春学期 必修・選択：必修科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

法学は、いわゆる法文の解釈や判例研究、学説などの詳細について覚えこむことだと考えるものがある。初学者が法学を学ぶにあたって重要なことは、法律的な物の見方、考え方、すなわち、legal mindを身につけることにある。そこで、本講義は、法的思考の核心となる法の基礎理論を付与することを目的とする。

法的思考は、健全な常識を基礎として、合理的、科学的な観点から法の原理、法の本質を理解することである。現代社会に目を向ける時、市民の常識的な正義や公平感覚と合致しないために矛盾を感じたり、ひとたび法律が制定されてしまうと強制的に服従させられるようになり、割り切れない気持ちになることがある。その結果、法律はその専門家の所与のものと考えたり、法にある種の不信感を抱くことすらある。このような諦観は、学問をする立場からは禁物である。正義、自由、平等、人権、愛などを基礎にした説得力ある提言、論評、意見こそ法的思考の視座となるのである。

さて、裁判員制度が設けられるようになって、この法的思考を養うために判例を中心とした日常的な事例を解きながら講義をすすめていく予定である。

2.学びの意義と目標

六法、判例などを用いて、模擬判決を授業の中で行う。自分で考える力を養う。法が社会生活の中で機能していることを学ぶ。

準備学習(予習)

教科書欄にある六法については、下記の中から1冊を用意すればよい。講義時に指示する教科書を読むこと。

準備学習(復習)

ノートと教科書を再読して、文章で表現できるように自分で訓練する。

授業計画

- はじめに
- 法と法律と法学、法の常識
- 社会と法、国家と法律
- 社会規範と法I
- 社会規範と法II（道徳を中心として）
- 法の成立と発展I
- 近代実定法
- 法の精神
- 法の目的と法概念
- 法の構造
- 法存在の基礎
- 法の淵源・成文法I（憲法）
- 法の淵源・成文法I（法律）
- 法の淵源・成文法II（命令、規則）
- 法の淵源・成文法III（条例、条約など）
- 法の淵源・不文法I（慣習法）
- 法の淵源・不文法II（判例法など）
- 法の分類（固有法・継受法、普通法・特別法）
- 法の分類（実体法・手続法、強行法・任意法）
- 法の分類（公法・私法・社会法、国際法・国内法）
- 法の効力I
- 法の効力II（法の変更、廃止）
- 法の適用
- 法の適用と法の解釈
- 法の解釈（学理解釈）
- 法の解釈（論理解釈）
- 権利義務とその主体
- 法律関係I（権利）
- 法律関係II（義務）
- おわりに

教科書

授業の中で指示する

六法

- 西田 典之、高橋 宏志、能見 善久 『ポケット六法 平成25年版』（有斐閣）
- 鎌田 薫 『デイリー六法2013 平成25年版』（三省堂）
- 笠井 正俊 ほか 『岩波 セレクト六法 平成25(2013)年版』（岩波書店）

評価方法

(1)試験:90% (2)出席:10%

法学

担当者：齋藤 美沙

開講期：秋学期 必修・選択：必修科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

本講義では、様々な法規範の中から、おもに憲法、民法及び刑法を扱います。身近な問題を手がかりに、法あるいは法律の基本的理論や知識を確認していきます。

2.学びの意義と目標

社会では、法的視点が必要とされる場面が多くあります。本講義では、基本的な法的思考・知識を身につけることを目標とします。

準備学習(予習)

前週に指示します。

準備学習(復習)

配布プリントを再読して下さい。必要に応じて参考文献を紹介します。

授業計画

1. ガイダンス
2. 法を学ぶことについて
3. 法とは何か
4. 法の分類
5. 憲法（国民主権）
6. 憲法（平和主義）
7. 憲法（基本的人権の原理）
8. 憲法（平等原則）
9. 憲法（精神的自由）
10. 憲法（政教分離）
11. 憲法（経済的自由・人身の自由）
12. 憲法（生存権・労働基本権）
13. 憲法（国会・内閣・裁判所）
14. 憲法（違憲審査制）
15. 比較法（諸外国の法）
16. 民法（総則）
17. 民法（総則）
18. 民法（物権）
19. 民法（債権）
20. 民法（親族）（婚姻・親子・親権）
21. 民法（相続）（相続人・遺言）
22. 民事訴訟，裁判によらない紛争解決
23. 刑法（総則）
24. 刑法（総則）
25. 刑法（罪）
26. 刑法（死刑制度，少年法）
27. 刑事訴訟，裁判員制度
28. 法と社会のかかわり
29. 法・道徳・正義
30. まとめ

教科書

プリントを配布する

評価方法

(1)試験:70% (2)平常点:30%
試験の成績をもとに、出席やリアクションペーパー等を考慮し、総合的に評価します。

法学

担当者：尋木 真也

開講期：春学期 必修・選択：必修科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

(1) 授業内容

法律というと、弁護士や裁判官が扱うものと思われるかもしれませんが。しかし、実際には、私たちはさまざまな法律のうえで日常生活を送っています。たとえば、買物をするとき、大学で勉強するとき、アルバイトをするとき、さらにはただ道を歩いているだけでも法律が関係しています。

また、新聞を開いてみると、政治面でも経済面でも国際面でも社会面でも、法律の話がよく出てきます。この講義では、このような日常に係る法律を素材にしつつ、法的な考え方や重要な法律について勉強していきます。

法学のなかでもとくに重要なのが、憲法、民法、刑法です。そのため、この授業ではこれら3つの法を中心に取り上げますが、そのほかにも、みなさんの生活に係る法について随時勉強していきます。

(2) カリキュラム上の位置づけ

政治・経済・教育・宗教など、どのような学問を行ううえでも（より大きく言えば人生を送るうえで）、法的な考え方をもっていると物事の理解が深まりますし、また主張に説得力が増します。そのため、法学の基礎の勉強は、他のさまざまな授業を受ける前提として位置づけることができます。

2.学びの意義と目標

法律というと、堅苦しいイメージをもつ人が多いのではないかと思います。確かに、六法を見ると難しい文書で書かれた条文が並んでいます。しかし、そこに書かれている内容の多くは、実際にはそれほど難しいことを言っているわけではありません。この授業では、法律をより身近なものに感じてもらうため、一見難しい法律をできるだけわかりやすく解説します。

この講義は、法的な考え方（リーガル・マインド）の修得を目標として行います。そのため、細かい法律内容を暗記することは求めません。この授業で勉強したことをもとにして、ニュースを見たときなどに法的な視点から問題を考えられるようになってもらいたいと思っています。

準備学習(予習)

テレビでも新聞でもインターネットでもよいので、普段から社会問題に目を向け、そのなかで法律がいかなる役割を果たしているのかについて考えてみてください。そのなかで疑問点や気になる点があれば、授業時や授業の前後にぜひ話してほしいと思います。

準備学習(復習)

まず授業中に、口頭で言ったことや疑問点などを、配布資料やノートにメモするようにしておいてください。そのメモをもとに、本やインターネット等を通じてさらに理解を深め、それでも分からない場合には相談していただければと思います。

授業計画

1. ガイダンス
2. 時事：東日本大震災と法
3. 法一般：社会における法
4. 法一般：法の役割
5. 法一般：六法全書
6. 法一般：成年と未成年
7. 憲法：憲法とは
8. 憲法：憲法の基本原理
9. 憲法：自衛隊と在日米軍
10. 憲法：基本的人権
11. 憲法：犯罪者の処遇
12. 中間試験
13. 刑法：刑法とは
14. 刑法：死刑制度
15. 刑法：冤罪
16. 刑法：裁判員制度（講義）
17. 刑法：裁判員制度（演習）
18. 刑法：交通事故
19. 民法：民法とは
20. 民法：交通事故
21. 民法：契約、クーリングオフ
22. 民法：借金と保証人
23. 民法：結婚
24. 労働法：仕事、アルバイト
25. 国際法：国際法とは
26. 国際法：戦争
27. 国際法：国連
28. 国際法：竹島、尖閣諸島、北方領土
29. まとめ
30. 期末試験

教科書

プリントを配布する
毎回レジュメと資料を配布します。

評価方法

(1)期末試験:50% (2)中間試験:25% (3)平常点:25%
受講生の人数や要望に応じて、小テストやレポートを実施し、評価基準に変更を加える可能性があります。その際は、みなさんに事前に相談します。

法学

担当者：宮澤 弘

開講期：春学期 必修・選択：必修科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

この授業では法的なものの見方や考え方について学んでいきます。法的なものの見方や考え方には様々な理解がありますが、この授業では次に挙げる二つの側面を念頭において問題の解決策を検討するもの、として説明をしていきます。二つの側面とは「問題解決の理由付けや説明がどれも整合していること」、すなわち論理的に矛盾せず説得力を持っていること、そして得ようとしている問題解決の結論について「私たちが信じている道徳や倫理に照らして受け入れられると判断できること」、すなわちその結論が良い結論だと納得できること、の二つを指しています。授業では具体的な裁判例を多数取り上げて説明をしていきますが、法学における理論的な事柄、特に原理や理念についても適宜解説をしていきます。

この授業は、今後の専門科目の学習において必要な知識を習得する役割を担うものとの位置づけから、基礎的でありかつ入門的な授業となります。

2.学びの意義と目標

一見複雑に見える出来事でも法的な思考法に基づいて整理することにより、当該出来事において重要と思われるものを明瞭に捉えることができます。授業の目標として、物事についてある視点を軸に整理して考える態度、そして自己の見解を何らかの根拠に基づいて説明をする能力、この二つを身につけることを目標としています。社会では価値観や考え方の様々に異なった人々が共存しています。このような社会の中で紛争が生じたときに、唯一最上の、あるいは絶対的基準による解決方法というものを探し出すことは非常に困難です。しかし法学を学ぶことによって、問題を分析する能力、そして問題解決策を考案する能力を高めることができ、その結果そうした困難な問題への対応力も向上していくのです。社会が複雑化し価値観が多様化している現在、このような法的思考が果たす役割は大きくなっています。

準備学習(予習)

事前に配布した資料は必ず読んできて下さい。それから講義期間中すべてにわたって言えることですが、社会の様々な問題に日常から関心を持つように心がけてください。

準備学習(復習)

配布したレジュメは必ず読み返してください。それから授業の中で適宜関連する著書(新書や文庫程度のもの)を紹介しますので、積極的に読み進めてください。関心のあるものを一つでもよいので自ら取り組んで下さい。

授業計画

- 1.法へのアプローチ(法学ことはじめ)
- 2.どのような法があるか1(法源)
- 3.どのような法があるか2(判例というもの)
- 4.どのような法があるか3(法領域の種類)
- 5.法の機能(法の規範的機能と社会的機能)
- 6.日本における近代法の継受
- 7.日本人の法意識と法文化
- 8.法と道徳(社会規範としての法)
- 9.自己決定権とパターナリズム1(基本編)
- 10.自己決定権とパターナリズム2(事例問題)
- 11.自己決定権とパターナリズム3(応用編)
- 12.犯罪と刑罰1(刑事法の基礎)
- 13.犯罪と刑罰2(刑事法の基礎)
- 14.犯罪と刑罰3(裁判員裁判と国民の司法参加)
- 15.不法行為と過失1(民事法の基礎)
- 16.不法行為と過失2(民事法の基礎)
- 17.不法行為と過失3(民事法の基礎)
- 18.法と正義1(法的安定性)
- 19.法と正義2(正義の四類型・事例問題～分配的正義を題材に)
- 20.日本の裁判所(裁判所の組織)
- 21.裁判手続1(刑事法)
- 22.裁判手続2(民事法)
- 23.現代型訴訟(現代社会において司法が担う役割とは何か)
- 24.裁判外紛争処理1(基本編)
- 25.裁判外紛争処理2(事例問題1)
- 26.裁判外紛争処理3(事例問題2)
- 27.法の解釈1(法的三段論法)
- 28.法の解釈2(解釈の目的と技法)
- 29.法律における理屈と人情(論理と倫理の融合的解決)
- 30.まとめ

教科書

プリントを配布する

評価方法

(1)試験:60% (2)平常点:40%:出席点とは異なります。授業中あるいは次の授業時まで提出する課題のことを指します。

法学特論(ジェンダー法) A

担当者：武藤 健一

開講期：春学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週1回 単位数：2単位

講義概要

1.内容

下記にあるような現代の状況を踏まえ春学期は、労働に見られる構造と、最近特に若い人達に増えてきた派遣労働について、統計資料を使いながら、そしてその法制度についての検討を、ジェンダーの観点から講義をします。そして、その内容を踏まえて、各人で意見を持てるように、受講者の皆さんでディスカッションをしてもらいます(予定)。

2.学びの意義と目標

最近増加し、全体の3分の1以上を占めるパートや派遣などの非正規雇用が不安定な状況におかれています。これは、昨今いわれている「格差社会」をもたらす原因でもありますが、この不安定な状況におかれている非正規労働者で報道されたりしているのは、ほとんど男性です。しかしながら、非正規労働の今までの流れを見ると、その代表的存在である派遣もパートも、元々多かったのは女性の方です。言い換えれば、日本の社会の中で前から格差社会が存在し、その中で生きてきたのは女性であるとも言えるのです。更に言えば、最近の非正規化の流れで若い世代の人が正社員として就職できないということも由々しき事態です。

そこで、この労働の場面をジェンダーという側面から検討することで、昨今いわれている非正規労働論や格差社会論が落としてきた側面を理解し、法制度がどうなっているかを学んでいくのが、この授業の内容です。労働におけるジェンダー問題を法学というフィルターを通して考えることをこの講義の目的とします。

ただし、法学科目であるにもかかわらず、ジェンダー法学の前提となる社会学の成果を大いに取り入れて、春学期と秋学期に分けて授業を進めることになります(特に統計資料を大いに利用します)。

準備学習(予習)

授業内容が最新のものを扱うので、事前に学生が調べたりする予習は不可能ですが、プリント(レジュメ)にあるもので、知らない言葉があれば、事前に調べておくこと。

準備学習(復習)

リアクション=ペーパーの内容について、授業での解説を踏まえて復習しておくこと。

授業計画

- 1.(0) ガイダンス
- 2.(1) 労働の基本構造
- 3.(1) 労働の基本構造
- 4.(1) 労働の基本構造
- 5.(1) 労働の基本構造
- 6.(1) 労働の基本構造
- 7.(1) ディスカッション
- 8.(2) 派遣労働
- 9.(2) 派遣労働
- 10.(2) 派遣労働
- 11.(2) 派遣労働
- 12.(2) 派遣労働
- 13.(2) 派遣労働
- 14.(2) ディスカッション
- 15.(3) 試験とその解説

教科書

プリントを配布する

評価方法

- (1)授業:67%:リアクション=ペーパーとディスカッションの評価による
- (2)学期末試験:33%:ディスカッション試験の予定

法学特論(ジェンダー法) B

担当者：武藤 健一

開講期：秋学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週1回 単位数：2単位

講義概要

1.内容

下記にあるような現代の状況を踏まえ秋学期は、育児休業と、最近更に増えてきたパート労働について、統計資料を使いながら、そしてその法制度についての検討を、ジェンダーの観点から講義をします。そして、その内容を踏まえて、各人で意見を持てるように、受講者の皆さんでディスカッションをしてもらいます(予定)。

2.学びの意義と目標

最近増加し、全体の3分の1以上を占めるパートや派遣などの非正規雇用が不安定な状況におかれています。これは、昨今いわれている「格差社会」をもたらす原因でもあります。この不安定な状況におかれている非正規労働者で報道されたりしているのは、ほとんど男性です。しかしながら、非正規労働の今までの流れを見ると、その代表的存在である派遣もパートも、元々多かったのは女性の方です。言い換えれば、日本の社会の中で前から格差社会が存在し、その中で生きてきたのは女性であるとも言えるのです。更に言えば、最近の非正規化の流れで若い世代の人が正社員として就職できないということも由々しき事態です。

そこで、この労働の場面をジェンダーという側面から検討することで、昨今いわれている非正規労働論や格差社会論が落としてきた側面を理解し、法制度がどうなっているかを学んでいくのが、この授業の内容です。労働におけるジェンダー問題を法学というフィルターを通して考えることをこの講義の目的とします。

ただし、法学科目であるにもかかわらず、ジェンダー法学の前提となる社会学の成果を大いに取り入れて、春学期と秋学期に分けて授業を進めることになります(特に統計資料を大いに利用します)。

授業計画

- 1.(0) ガイダンス
- 2.(1) パート労働
- 3.(1) パート労働
- 4.(1) パート労働
- 5.(1) パート労働
- 6.(1) パート労働
- 7.(1) パート労働
- 8.(1) パート労働
- 9.(1) ディスカッション
- 10.(2) 育児休業
- 11.(2) 育児休業
- 12.(2) 育児休業
- 13.(2) 育児休業
- 14.(2) ディスカッション
- 15.(3) 試験とその解説

準備学習(予習)

授業内容が最新のものを扱うので、事前に学生が調べたりする予習は不可能ですが、プリント(レジュメ)にあるもので、知らない言葉があれば、事前に調べておくこと。

教科書

プリントを配布する

準備学習(復習)

リアクション=ペーパーの内容について、授業での解説を踏まえて復習しておくこと。

評価方法

- (1)授業:67%:リアクション=ペーパーとディスカッションの評価による
- (2)学期末試験:33%:ディスカッション試験の予定

法思想史

担当者：加藤 恵司

開講期：秋学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

法思想史は、法とは何か、法の拘束力は必要なのか、正義とは、人権とは、という法理論を内包しながら、政治、経済、社会などに目を向けた幅広い学問である。

わが国の近代化は、近代西欧の影響を決定的に受けており、法制度についても同様である。にもかかわらず、西欧の精神的所産に十分な理解をしているとは言いがたい。そこで、本講義は西欧の法思想に限定する。古代では、オリエントにおける法思想を中心に語り、ギリシャ・ローマの法思想へと展開する。中世では、ローマ法を継承したゲルマン法、教会法に焦点を当てる。現代の法思想の原理的なルーツを探求しながら、将来にどのような法制度が必要であるかを考えてみたい。

2.学びの意義と目標

法は生活と切り離すことができない。古代から現代にいたる法と思想を講義する。疑問を抱いて学んでほしい。

準備学習(予習)

テキストを読んでくること。歴史的連続性を保持するためにもノートを取り、積極的に質問、疑問を抱くようにして教室で発表されたい。

準備学習(復習)

質問、疑問点をまとめて、小レポートとして書き残して、提出されたい。

授業計画

- 1.法思想史とはどんな学問か
- 2.法・思想・歴史（歴史観）
- 3.社会あるところに法あり（先史の法）
- 4.古代オリエントの法思想
- 5.ハムラビ法典
- 6.古代イスラエルの法思想I（イスラエル民族）
- 7.古代イスラエルの法思想II（旧約時代の法生活）
- 8.古代イスラエルの法思想III（イエスと原始教会）
- 9.古代ギリシャの法思想I（ソクラテス）
- 10.プラトンの法思想
- 11.アリストテレスの法思想
- 12.ローマの法思想I（十二表法を中心として）
- 13.ローマの法思想II（万民法を中心として）
- 14.ローマの法思想III（法典編纂）
- 15.ゲルマン封建制I（ゲルマン人の移動）
- 16.ゲルマン封建制II（ローマ法の受容）
- 17.教会法の成立I（アウグスチヌス）
- 18.教会法の成立II（トマス・アクイナス）
- 19.近代法の足音（ルネッサンス）
- 20.宗教改革と法思想
- 21.市民革命と人権
- 22.近代自然法思想
- 23.法の支配と法治主義I（イギリス・アメリカ）
- 24.法の支配と法治主義II（法治主義との比較）
- 25.観念法の法思想I（カント）
- 26.観念法の法思想II（ヘーゲル）
- 27.法実証主義の法思想I（歴史法学を中心に）
- 28.法実証主義の法思想II（自然法の夢はのみつくされた）
- 29.自然法の回復時代
- 30.おわりに

教科書

加藤 恵司 『法・思想・歴史 Legal History』（ジューオー企画出版）

評価方法

(1)出席:50% (2)小レポート:50%

法と裁判

担当者：伊藤 泰

開講期：秋学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

2009年5月に裁判員制度というものが始まって以来、「裁判」は我々にとってより身近なものとなってきているが、ではそもそも「裁判」とはいったい何なのだろう。この授業ではこのことをさまざまな角度から考えてみることにしたい。

なお、都合の良い日時に何度か実際の裁判の傍聴に行ってみたいと考えている。そのため、下記の授業計画はおおよそのものである。

2.学びの意義と目標

裁判というものを知っておくことは社会の一員として非常に重要なことである。また裁判を知ることは、法律の現実の姿を知ることにもなるだろう。

準備学習(予習)

教科書を読む

準備学習(復習)

関連書籍を読む

授業計画

1. 裁判はなぜ理解されないのか(1)
2. 裁判はなぜ理解されないのか(2)
3. 紛争と裁判(1)
4. 紛争と裁判(2)
5. カリスマ的裁判(1)
6. カリスマ的裁判(2)
7. 伝統的裁判(1)
8. 伝統的裁判(2)
9. 形式的・合理的裁判(1)
10. 形式的・合理的裁判(2)
11. 法の解釈(1)
12. 法の解釈(2)
13. 新しい社会現象と法の解釈(1)
14. 新しい社会現象と法の解釈(2)
15. 裁判の変化1:戦前の公害と裁判(1)
16. 裁判の変化1:戦前の公害と裁判(2)
17. 裁判の変化2:戦後の公害と裁判(1)
18. 裁判の変化2:戦後の公害と裁判(2)
19. 裁判官による価値の選択(1)
20. 裁判官による価値の選択(2)
21. 「事実」とは何か、狂った「事実認定」(1)
22. 「事実」とは何か、狂った「事実認定」(2)
23. 「自由の国」での「魔女審問」(1)
24. 「自由の国」での「魔女審問」(2)
25. 誤判:誤った事実認定とその原因(1)
26. 誤判:誤った事実認定とその原因(2)
27. 誤判:誤った事実認定とその原因(3)
28. 誤判:誤った事実認定とその原因(4)
29. 誤判:誤った事実認定とその原因(5)
30. 誤判:誤った事実認定とその原因(6)

教科書

大野 正男 『社会のなかの裁判』(有斐閣)

評価方法

(1)試験:80% (2)受講態度:20%

簿記（初級）

担当者：澤村 孝夫

開講期：春学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

企業は手元にある資金を利用して商品売買などの事業を展開し利益を獲得するための活動を行っています。こうした活動を正しく理解するためには、一定の方法で計算・記録・整理するための<道具>が必要になります。それが<簿記>です。また、簿記は、一定期間の取引活動の状況を取引先、出資者、銀行等の利害関係者に報告する役割も担っています。

本講義では、簿記による記帳方法の原理及び記帳プロセスを体系的に学習し、基礎的な経理知識の習得を目指しています。また、日本商工会議所主催の簿記検定試験3級を受験することができます。

2.学びの意義と目標

企業の経営活動の状況を反映させるために必須とされる簿記の必要性を認識すること。簿記のスキルを身につけることによって過去・現在、そして将来の経営活動状況の良し悪しを知ることができるようにする。

準備学習(予習)

企業の取引活動を計算・記録・整理することが必要になるので、計算機が必要になります。従って、講義時には必ず計算機を持参すること。

準備学習(復習)

問題の反復練習

授業計画

1. 簿記の役割とその種類
2. 資産、負債、純資産、収益、費用の内容
3. 簿記上の取引と仕訳
4. 仕訳帳、総勘定元帳、試算表の作成
5. 現金・預金の処理
6. 小口現金出納帳とインプレストシステム
7. 商品売買と3文法
8. 仕入帳、売上帳、商品有高帳の作成
9. 人名勘定と売掛金・買掛金元帳
10. 手形の種類とその記入方法
11. 手形の割引と裏書譲渡
12. 受取手形記入帳と支払手形記入帳
13. 有価証券の取得と売却
14. その他の債権・債務の処理（Ⅰ）
15. その他の債権・債務の処理（Ⅱ）
16. 貸倒れと貸倒引当金の処理
17. 固定資産の取得と売却
18. 減価償却費の計算とその処理
19. 資本金・引出金の処理
20. 税金の種類とその処理
21. 合計残高試算表の作成
22. 決算整理・収益及び費用の繰延
23. 決算整理・収益及び費用の見越
24. 精算表の作成（Ⅰ）
25. 精算表の作成（Ⅱ）
26. 損益計算書・貸借対照表の作成
27. 伝票の種類とその作成
28. 総合問題練習（Ⅰ）
29. 総合問題練習（Ⅱ）
30. 総合問題練習（Ⅲ）

教科書

渡辺正直 『最新式段階式 日商簿記検定問題集3級』(実教出版)

評価方法

- (1)定期試験:60% (2)レポート第1回:5% (3)レポート第2回:5% (4)レポート第3回:5% (5)出席:25%

簿記（初級）

担当者：山田 ひとみ

開講期：春学期/秋学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

会計に関する知識はビジネスパーソンにとって必須といわれています。
企業が公表する会計情報は複式簿記にもとづいて作成されており、複式簿記の原理は世界共通です。講義では毎回テーマについて例題を用いて説明した後、練習問題を解答してもらいます。簿記の学習で重要なのは予習よりも復習です。
復習と自習のチェックを兼ねて、適宜、ミニテストを行います。

2.学びの意義と目標

勘定の仕組みを理解して取引を仕訳し、決算の手続きを経て貸借対照表と損益計算書の作成に至るまでの、簿記一巡の手続きを理解することができる（日商簿記3級程度）。「簿記（中級）」を履修するための知識を身につけることができる。また、会計学・経営学関連科目を学ぶ上でも必要な基礎知識が身に付きます。

準備学習(予習)

講義中に指示します。

準備学習(復習)

講義中に指示された演習問題を次回までに解答しましょう。

授業計画

1. ガイダンス（授業の進め方、採点方法）
2. 仕訳（1）
3. 仕訳（2）
4. 転記
5. 試算表（1）
6. 現金・預金
7. 商品売買
8. 小口現金・約束手形
9. 為替手形
10. 手形の裏書・割引
11. その他の期中取引（1）
12. その他の期中取引（2）
13. 有価証券
14. 資本金・税金
15. 試算表（2）
16. 補助簿
17. 決算整理仕訳（1）
18. 決算整理仕訳（2）
19. 決算整理仕訳（3）
20. 決算整理仕訳（4）
21. 決算整理仕訳（5）
22. 決算整理仕訳（6）
23. 8桁精算表（1）
24. 8桁精算表（2）
25. 貸借対照表・損益計算書の作成
26. 伝票・訂正仕訳
27. 総合問題演習（1）
28. 総合問題演習（2）
29. 総合問題演習（3）
30. まとめ

教科書

評価方法

(1)ミニテスト:20% (2)定期試験:30% (3)出席:50%

簿記（中級）

担当者：山田 ひとみ

開講期：春学期/秋学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

中級程度の商業簿記と、初歩的な原価計算を含む工業簿記について学習する。商業簿記では、株式会社を前提とした取引の記帳方法を学び、工業簿記では製造業における生産活動の記録方法を学ぶ。講義では毎回テーマについて例題を用いて説明した後、練習問題を解答してもらいます。予習、復習、自習のチェックを兼ねて、適宜、ミニテストを行います。

2.学びの意義と目標

株式会社が作成する財務諸表を読む力がつき、経営状態を把握できるようになる（日商簿記2級程度）。また、会計学・経営学関連科目を学ぶ上で十分な基礎知識が身に付きます。

準備学習(予習)

日商簿記検定3級の過去問題集を継続的に使用して基礎力をキープする。

準備学習(復習)

講義中に指示された演習問題を次回までに解答しましょう。

授業計画

1. 商業簿記の一巡
2. 現金・預金
3. 手形
4. 有価証券
5. 債権・債務
6. 引当金
7. 商品売買
8. 特殊商品売買
9. 株式会社会計（1）株式の発行、税金
10. 株式会社会計（2）社債
11. 株式会社会計（3）剰余金の配当・処分
12. 株式会社会計（4）繰延資産
13. 決算
14. 本支店会計
15. 帳簿組織
16. 工業簿記の一巡
17. 材料費
18. 労務費
19. 経費
20. 個別原価計算
21. 部門別個別原価計算
22. 総合原価計算（1）基礎
23. 総合原価計算（2）月初仕掛品
24. 総合原価計算（3）減損
25. 標準原価計算（1）基礎
26. 標準原価計算（2）差異分析
27. 直接原価計算（1）基礎
28. 直接原価計算（2）CVP分析、固変分解
29. 総合問題（1）
30. 総合問題（2）

教科書

授業の中で指示する
第1回目の講義でテキストを指定します。

評価方法

(1)ミニテスト:30% (2)定期試験:40% (3)出席:30%

マクロ経済学

担当者：由川 稔

開講期：春学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

概論的な経済学からまた一歩進んで、世の中の経済現象をより理論的に考えてみましょう。特に経済を「マクロ的に」(=巨視的に)捉えるのが「マクロ経済学」です。金融や、財政や、国際経済の動向等についても、理論に根差した理解に挑戦しましょう。

2.学びの意義と目標

理論面では、「基礎レベルの習熟」に目標を置きたいと思います。そしてそれを踏まえて、或る経済現象をどう捉えるべきか、自分の頭で、しかし独り善がりでない考え方で当たっていけるようにする、それがこの授業の意義と目標です。

準備学習(予習)

範囲や課題等、授業中に指示します。

準備学習(復習)

範囲や課題等、授業中に指示します。

授業計画

1. マクロ経済学とは何か(1)
2. マクロ経済学とは何か(2)
3. GDPについて(1)
4. GDPについて(2)
5. 三面等価の原則
6. 名目と実質
7. 財市場の分析(1)
8. 財市場の分析(2)
9. 有効需要の原理(1)
10. 有効需要の原理(2)
11. 乗数理論(1)
12. 乗数理論(2)
13. 乗数理論(3)
14. 乗数理論(4)
15. 貨幣市場の分析(1)
16. 貨幣市場の分析(2)
17. 貨幣市場の分析(3)
18. 貨幣市場の分析(4)
19. IS-LM分析(1)
20. IS-LM分析(2)
21. IS-LM分析(3)
22. IS-LM分析(4)
23. 所得と物価水準(1)
24. 所得と物価水準(2)
25. 財政政策と金融政策(1)
26. 財政政策と金融政策(2)
27. インフレとデフレ(1)
28. インフレとデフレ(2)
29. まとめと復習(1)
30. まとめと復習(2)

教科書

中谷巖 『マクロ経済学入門』(日本経済新聞出版社)

評価方法

- (1)定期試験:60% (2)受講態度:20%:出席状況や授業内提出物。
(3)レポート等:20%:ノートの写しを見せてもらうこともあります。

マスコミュニケーション論

担当者：竹田 香織

開講期：春学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

本講義では、マスコミュニケーション、マスメディアに関する概念や歴史、現状について理解を整理し、社会における役割や影響、可能性について考察する。

2.学びの意義と目標

- ・マスコミュニケーションおよびマスメディアと社会、個人との関わりについて理解を深める。
- ・情報社会を生きる上で、もはや必要不可欠といえる様々なメディアとの接し方について考えることができるようになる。
- ・情報を批判的あるいは建設的に吟味する姿勢を身につける。

準備学習(予習)

- ・新聞を読み、ニュースに日々触れること。

準備学習(復習)

- ・ノートや配布プリント等を見返し、授業の中で案内する文献を手に取り、授業のポイントが何であったかをおさえておくこと。

授業計画

1. 情報とは何か
2. コミュニケーションとは
3. メディアとは
4. マスメディアの影響
5. メディアの歴史と現状(1)
6. メディアの歴史と現状(2)
7. 広告とメディアミックス
8. メディアリテラシー
9. ジャーナリズム
10. メディア倫理
11. ニュース
12. 災害と報道
13. 事故と報道
14. 事件と報道
15. インターネット
16. ソーシャルメディア
17. 表現の自由と知る権利、プライバシー
18. 民主主義と情報
19. 公共性
20. 世論(1)
21. 世論(2)
22. 世論調査
23. 政治と情報(1)
24. 政治と情報(2)
25. インターネットと政治(1)
26. インターネットと政治(2)
27. メディアとジェンダー
28. メディアとナショナリズム
29. メディアと戦争
30. 総括

教科書

授業の中で指示する

評価方法

- (1)平常点:30%:毎回授業後にコメントペーパーを提出してもらう。
- (2)期末試験:70%

ミクロ経済学

担当者：中野 宏

開講期：春学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

ミクロ経済学の基礎および応用理論を学習する。消費者がモノを買う、企業がモノを作る、市場でモノの価格が決まる、政府が課税や規制を行う、など日常的に行われている様々な経済活動の行動法則や決定原理を明らかにすることで、いかなる経済の状態が社会的に最も望ましいのか、またそれを実現するためにはどうすればよいかを探っていく。その過程において、近年の世界的な潮流である規制緩和や公的企業の民営化、自由貿易の推進といった競争促進政策の意義と問題点が明らかにされるであろう。

経済学という学問の性質上、少なからず数学を用いるが、必要最小限のものについては折に触れて説明する。

専門科目「経済学」を履修した上で受講すること。

2.学びの意義と目標

将来学生諸君がどのような職業に就こうと、社会に出れば「経済」と付き合わずに済ますことは出来ない。景気の動向や、金利・物価・為替レートの動きなどから必要なことを読み取り、あるいはそれらの動きを予想し、仕事に反映させていくことになる。また、少子高齢化・人口減少社会に突入した我が国においては、これまでのような年金に依存した老後は期待すべきもなく、諸君は投資により自らの手腕において老後のための資産形成を行っていかなければならない。今後必要となるのは、テレビや新聞、ネットなどのマスコミ報道を鵜呑みにするのではなく、自分の目で見て自分の考えで決定を行えるような知性と分析道具である。それらを身に付けるために本講義が少しでも役に立てばと願う。

準備学習(予習)

指示された項目につき各自で調べてくること。

準備学習(復習)

経済学の講義は積み重ねで進んでいくため、一度わからなくなるとその後が続かなくなる恐れがある。毎回講義の復習プリントを配布するので、次の講義日までに各自仕上げてください。

授業計画

1. イントロダクション
2. 資源配分と市場メカニズム (1)
3. 資源配分と市場メカニズム (2)
4. 需要と供給 (1)
5. 需要と供給 (2)
6. 需要と供給 (3)
7. 限界分析と需要曲線 (1)
8. 限界分析と需要曲線 (2)
9. 限界分析と供給曲線 (1)
10. 限界分析と供給曲線 (2)
11. 厚生経済学の基本定理 (1)
12. 厚生経済学の基本定理 (2)
13. 厚生経済学の基本定理 (3)
14. 不完全競争の分析 (1)
15. 不完全競争の分析 (2)
16. 不完全競争の分析 (3)
17. 政府の市場介入 (1)
18. 政府の市場介入 (2)
19. 政府の市場介入 (3)
20. 政府の市場介入 (4)
21. 政府の市場介入 (5)
22. 市場の失敗 (1)
23. 市場の失敗 (2)
24. 市場の失敗 (3)
25. 市場の失敗 (4)
26. 市場の失敗 (5)
27. ゲームの理論 (1)
28. ゲームの理論 (2)
29. ゲームの理論 (3)
30. 講義のまとめ

教科書

プリントを配布する

評価方法

(1)出席:30% (2)レポート:30%:講義機関半ばに1回課題を出す。
(3)期末試験:40%
上記評価のほか、質問等授業に積極的に参加しようとする態度や意欲は加点対象となる。自分の存在をアピールして欲しい。

民法 A (総則・物権)

担当者：松谷 秀祐

開講期：春学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

民法は、私人間の法的関係を規律している法律である。本科目は民法の中で第1編総則（第1条から第174条の2）と第2編物権（第175条から第398条の22）を講義の対象とする。しかし、それら全ての条文について説明し、その内容を覚えてもらうことが講義の目的では決してない。まずは基本的な枠組みを把握することを目標として、現在の取引社会において特に必要不可欠な制度・条文について、売買契約を中心とした具体的な事例問題を用いて説明する。

2.学びの意義と目標

無人島で自給自足生活をしようとする者以外、民法・消費者法と関わりを持たなくてもよい者はいない。自分（たち）が民法・消費者法によって規律されている世界に生きていることを実感し、将来、身の回りに法的な問題が生じたときに、何となくでもよいので、自身で解決の糸口を見出せる能力を身に付けることを目標とする。

準備学習(予習)

翌週分のレジュメも事前に配布するので予めレジュメに目を通した上で講義にのぞむこと。

準備学習(復習)

教科書を読み返す、講義ノートをまとめる。

授業計画

1. 民法の役割、民法の構造、民法を学ぶ意義
2. 民法総則（1）:民法の基本原則
3. 民法総則（2）:自然人と法人
4. 民法総則（3）:自然人（1）
5. 民法総則（4）:自然人（2）
6. 民法総則（5）:自然人（3）
7. 民法総則（6）:法律行為とは、公序良俗
8. 民法総則（7）:心裡留保、通謀虚偽表示
9. 民法総則（8）:錯誤
10. 民法総則（9）:詐欺、強迫
11. 民法総則（10）:代理（1） 代理とは
12. 民法総則（11）:代理（2） 表見代理、無権代理
13. 民法総則（12）:条件・期限、時効総説
14. 民法総則（13）:消滅時効
15. 民法総則（14）:一般条項（1）
16. 民法総則（15）:一般条項（2）、中間試験
17. 民法総則（16）:民法総則のまとめ
18. 物権法（1）:「物」とは、物権とは
19. 物権法（2）:物権的請求権
20. 物権法（3）:不動産物権変動（1）
21. 物権法（4）:不動産物権変動（2）
22. 物権法（5）:不動産物権変動（3）
23. 物権法（6）:動産物権変動
24. 物権法（7）:占有権、取得時効
25. 物権法（8）:所有権、用益物権
26. 物権法（9）:担保物権総説
27. 物権法（10）:抵当権
28. 物権法（11）:質権、留置権、先取特権
29. 物権法（12）:非典型担保
30. 物権法（13）:物権法のまとめ

教科書

円谷峻 『民法』（（財）放送大学教育振興会）

評価方法

(1)中間試験:30% (2)最終試験:70%

民法B(債権)

担当者：松谷 秀祐

開講期：秋学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

民法は、私人間の法的関係を規律している法律である。本科目は、民法の中で第3編債権（第399条から第724条）を講義の対象とする。しかし、それら全ての条文について説明し、その内容を覚えてもらうことが講義の目的では決していない。まずは、基本的な枠組みを把握することを目標として、現在の取引社会において特に必要不可欠な制度・条文について、売買契約を中心とした具体的な事例問題を用いて説明する。

2.学びの意義と目標

無人島で自給自足生活をしようとする者以外、民法・消費者法と関わりを持たなくてもよい者はいない。自分（たち）が民法・消費者法によって規律されている世界に生きていることを実感し、将来、身の回りに法的な問題が生じたときに、何となくでもよいので、自身で解決の糸口を見出せる能力を身に付けることを目標とする。

準備学習(予習)

翌週分のレジュメも事前に配布するので予めレジュメに目を通した上で講義にのぞむこと。

準備学習(復習)

教科書を読み返す、講義ノートをまとめる、配布された知識確認問題を解く。

授業計画

1. 「法学」とは、民法とは、債権法とは
2. 債権各論（1）:契約自由の原則、契約拘束力の原則と例外
3. 債権各論（2）:契約の分類（1）
4. 債権各論（3）:契約の分類（2）
5. 債権各論（4）:贈与契約
6. 債権各論（5）:売買契約（1）
7. 債権各論（6）:売買契約（2）
8. 債権各論（7）:賃貸借契約（1）
9. 債権各論（8）:賃貸借契約（2）
10. 債権各論（9）:使用貸借契約
11. 債権各論（10）:消費貸借契約
12. 債権各論（11）:請負契約
13. 債権各論（12）:委任契約
14. 債権各論（13）:その他の典型契約（1）
15. 債権各論（14）:その他の典型契約（2）
16. 債権各論（15）:契約法のまとめ、中間試験
17. 債権各論（16）:不法行為（1）
18. 債権各論（17）:不法行為（2）
19. 債権各論（18）:不法行為（3）
20. 債権総論（1）:債権の目的（1）
21. 債権総論（2）:債権の目的（2）
22. 債権総論（3）:債務不履行（1）
23. 債権総論（4）:債務不履行（2）
24. 債権総論（5）:多数当事者の債権関係（1）
25. 債権総論（6）:多数当事者の債権関係（2）
26. 債権総論（7）:債権譲渡
27. 債権総論（8）:弁済
28. 債権総論（9）:相殺
29. 債権総論（10）:債権総論のまとめ
30. 債権法のまとめ

教科書

円谷峻 『民法』（財）放送大学教育振興会

評価方法

(1)中間試験:30% (2)最終試験:70%

民法C(親族・相続)

担当者：加藤 恵司

開講期：春学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

本講座は、民法の家族法に関する講義である。人は両親によって生を受け、家族と生活し、家族に看取られつつ亡くなっていく。家族は最も基本的、自然的な社会集団である。

わが国の民法典には、旧民法といわれる法典があり、戸主を中心とする家族制度、家督相続制度があった。もう一つは、敗戦後の新憲法に基づいて、夫婦中心の家族制度、遺産相続制度がある。本講座は後者であるが、旧民法をも意識して学習する。

近年の家族形態には、核家族、高齢家族、晩婚・非婚化、少子化の傾向が家族観に変化をもたらしている。「法律は家庭に入らず」という法諺があるが、法律と家族関係は無関係でよいのだろうか。たしかに「夫婦は愛し合うべきである」とか、「子どもを大切に育てよ」とか、「親を敬え」というような道徳観だけでは支えきれずに崩壊していく。裁判によって破綻を決定的にする家族が多く見られる。このような意識を抱きながら講義する。

民法では、結婚、離婚など夫婦関係、親子関係を取り扱った「親族編」、相続、遺言などを取り扱った「相続編」をあわせた部分を家族法と称している。法律と現実を見つめ、判例など具体例を挙げながら現代の家族事情を分析してみたい。

2.学びの意義と目標

人生で出会うであろう出来事について民法に従って学ぶ。判例などを用いて身近に民法を知ることを目指す。

準備学習(予習)

予習レポートを書き、提出する。また、項目ごとに問題点のレポートを書き、提出する。

準備学習(復習)

六法の条文を開いて、講義の内容を思い起こす。

授業計画

1. 家族とは(民法と家族法)
2. 近代家族法の理念
3. 親族の意義
4. 親等について
5. 婚姻の制度と日本国憲法
6. 婚姻の成立
7. 婚姻の効果
8. 現代の婚姻事情
9. 離婚(婚姻の解消)
10. 離婚の法的効果と問題点
11. 現代の離婚の実態
12. 親子法の理念
13. 親子の種類(実子、養子)、
14. 親子の種類(特例実子)
15. 未成年者の保護
16. 親権と親の責任
17. 後見と保佐
18. 現代親子の諸問題(赤ちゃんポスト、人工授精)
19. 現代少子化について
20. 高齢社会と扶養
21. 現代の扶養制度と政策
22. 相続の理念
23. 法定相続と相続人
24. 相続の効力と相続の放棄
25. 相続人の不存在と相続回復請求権
26. 遺産分割をめぐる諸問題
27. 遺言の意義とその方法
28. 遺言の効力と遺留分
29. 相続遺言の現代の諸問題
30. 家族とは何か

教科書

西田 典之, 高橋 宏志, 能見 善久 『ポケット六法 平成25年版』(有斐閣)
鎌田 薫 『デイリー六法2013 平成25年版』(三省堂)
笠井 正俊, 潮見 佳男, 洲崎 博史, 高山 佳奈子, 土井 真一, 中川 丈久 『岩波セレクト六法 平成25(2013)年版』(岩波書店)

評価方法

(1)出席:20% (2)レポート:80%

予備演習

担当者：新井 尚子

開講期：秋学期 必修・選択：必修科目 授業回数：週1回 単位数：1単位

講義概要

1.内容

基礎教育入門（書き方）などで学んだことを踏まえ、「読む」「書く」「話す」「聴く」の総合的なコミュニケーション能力の向上を目指します。

具体的には、学生自らがテーマを選び、レポート等の課題作成とプレゼンテーションを実施し、講義担当者によるフィードバックを行います。この過程を通して、代表的なプレゼンテーションソフトの使い方、効果的な発表の方法等を学習します。

さらに、社会人に求められる漢字の基礎力育成も行います。

2.学びの意義と目標

日本語を用いた様々な表現スキルを身に付けることを目標とします。これらのスキルは大学での学びだけでなく、将来の社会人生活でも役立ちます。

準備学習(予習)

前授業時に行われる指示に従い、課題を作成します。そのための資料収集、スライド作成等を行う必要もあります。

また、漢字小テストのための学習も求められます。

準備学習(復習)

授業時に行ったプレゼンテーションについての学生の評価及び教員の指導を参照し、よりよい発表が行えるよう工夫を加える作業を行います。

授業計画

1. ガイダンス
2. プレゼンテーションとは何か
3. 伝える技術と聴く技術
4. レジユメの作り方
5. プレゼンテーション1・・・レジユメを使った発表1
6. プレゼンテーション2・・・レジユメを使った発表2
7. プレゼンテーションソフトの利用法
8. プレゼンテーション内容の作成1
9. プレゼンテーション内容の作成2
10. プレゼンテーション3
11. プレゼンテーション4
12. プレゼンテーション5（グループワーク）- 1
13. プレゼンテーション5（グループワーク）- 2
14. プレゼンテーション5（グループワーク）- 3
15. まとめ

教科書

授業の中で指示する

評価方法

(1)出席:40% (2)課題:40% (3)授業態度:20%

予備演習 A

担当者：加藤 恵司, 飯島 康夫, 横山 寿世理, 高橋 愛子, 村上 公久, 土方 透

開講期：春学期 必修・選択：必修科目 授業回数：週1回 単位数：1単位

講義概要

1.内容

1年時のキャンパス生活の中で授業を効果的に受講するためのガイダンス的授業を行います。各担当者が各授業内容を企画・実行します。共通メニューとして(1)2年時からの専門演習選択のための担当者による紹介授業、(2)アッセンブリーアワーを活用する授業を行います。

2.学びの意義と目標

大学での学びに躓かないように、高校とは違う学習方法・姿勢等を体得し、学習意識や意欲を高めることをめざします。

準備学習(予習)

毎回の授業時に次回までの課題を指示します。

準備学習(復習)

授業後に復習内容を指示します。

授業計画

1. 授業についてのガイダンス:授業計画の発表
2. 政治経済学科カリキュラムへの導入1
3. 政治経済学科カリキュラムへの導入2
4. 政治経済学科カリキュラムへの導入3
5. 政治経済学科カリキュラムへの導入4
6. 政治経済学科カリキュラムへの導入5
7. 政治経済学科カリキュラムへの導入6
8. 政治経済学科カリキュラムへの導入7
9. 政治経済学科カリキュラムへの導入8
10. 政治経済学科カリキュラムへの導入9
11. 政治経済学科カリキュラムへの導入10
12. 政治経済学科カリキュラムへの導入11
13. 政治経済学科カリキュラムへの導入12
14. 政治経済学科カリキュラムへの導入13
15. 授業総括

教科書

授業の中で指示する

評価方法

(1)平常点:100%: 授業中に指示される様々な課題をこなすこと。
単なる出席(物理的に教室内に存在すること)だけでは何ら評価の対象となりません。

予備演習 B

担当者：石川 裕一郎, 柴田 武男, 鈴木 真実哉, 松尾 秀哉, 森分 大輔, 未定

開講期：秋学期 必修・選択：必修科目 授業回数：週1回 単位数：1単位

講義概要

1.内容

2年次以降における専門教育を効果的に行うためのガイダンス的授業を行います。各担当者が各授業内容を企画・実行します。共通メニューとして(1)2年時からの「演習」選択のために必要な予備学習を行うと共に、ゼミ開講の担当者のゼミ紹介授業、(2)アッセンブリーアワーを活用する授業を行います。

2.学びの意義と目標

「専門科目」受講および2年次から履修する専門的な「演習」選択のためのガイダンスを行い、学習意識や意欲を高めることをめざします。

準備学習(予習)

毎回の授業時に次回までの課題を指示します。

準備学習(復習)

授業後に復習内容を指示します。

授業計画

1. 授業についてのガイダンス:授業計画の発表
2. 政治経済学科カリキュラムへの導入1
3. 政治経済学科カリキュラムへの導入2
4. 政治経済学科カリキュラムへの導入3
5. 政治経済学科カリキュラムへの導入4
6. 政治経済学科カリキュラムへの導入5
7. 政治経済学科カリキュラムへの導入6
8. 政治経済学科カリキュラムへの導入7
9. 政治経済学科カリキュラムへの導入8
10. 政治経済学科カリキュラムへの導入9
11. 政治経済学科カリキュラムへの導入10
12. 政治経済学科カリキュラムへの導入11
13. 政治経済学科カリキュラムへの導入12
14. 政治経済学科カリキュラムへの導入13
15. 授業総括

教科書

授業の中で指示する

評価方法

(1)平常点:100%: 授業中に指示される様々な課題をこなすこと。
単なる出席(物理的に教室内に存在すること)だけでは何ら評価の対象となりません。

予備演習 C

担当者：新井 尚子

開講期：秋学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週1回 単位数：1単位

講義概要

1.内容

基礎教育入門（書き方）などで学んだことを踏まえ、「読む」「書く」「話す」「聴く」の総合的なコミュニケーション能力の向上を目指します。

具体的には、学生自らがテーマを選び、レポート等の課題作成とプレゼンテーションを実施し、講義担当者によるフィードバックを行います。この過程を通して、代表的なプレゼンテーションソフトの使い方、効果的な発表の方法等を学習します。

さらに、社会人に求められる漢字の基礎力育成も行います。

2.学びの意義と目標

日本語を用いた様々な表現スキルを身に付けることを目標とします。これらのスキルは大学での学びだけでなく、将来の社会人生活でも役立ちます。

準備学習(予習)

前授業時に行われる指示に従い、課題を作成します。そのための資料収集、スライド作成等を行う必要もあります。

また、漢字小テストのための学習も求められます。

準備学習(復習)

授業時に行ったプレゼンテーションについての学生の評価及び教員の指導を参照し、よりよい発表が行えるよう工夫を加える作業を行います。

授業計画

1. ガイダンス
2. プレゼンテーションとは何か
3. 伝える技術と聴く技術
4. レジユメの作り方
5. プレゼンテーション1・・・レジユメを使った発表1
6. プレゼンテーション2・・・レジユメを使った発表2
7. プレゼンテーションソフトの利用法
8. プレゼンテーション内容の作成1
9. プレゼンテーション内容の作成2
10. プレゼンテーション3
11. プレゼンテーション4
12. プレゼンテーション5（グループワーク）- 1
13. プレゼンテーション5（グループワーク）- 2
14. プレゼンテーション5（グループワーク）- 3
15. まとめ

教科書

授業の中で指示する

評価方法

(1)出席:40% (2)課題:40% (3)授業態度:20%

担当者：土方 透

開講期：春学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要**1.内容**

本講義では、現代の社会学理論が到達した学問的境位を、人間の知の展開として位置づけることを目的とする。

講義では、まず人類の思想の歴史的展開を概観する。そのことにより、はじめて最新の理論と呼ばれるものの「新しさ」が明らかになる。すなわち、思想史上の連続的側面と非連続的側面から、現代の理論というものが理解可能となるわけである。そうした作業を経たうえで、現代社会において、所与のものとして市民権を得た諸思想ならびに諸価値の限界を指摘しつつ、いま考えられる可能な選択肢を提示したい。

2.学びの意義と目標

大学での勉学で「役に立つ」ことを学ぼうとするのであれば、他の科目を履修することが望ましい。そのような「想定内」の問題に答える叡智は、大学での学問とは関係がない。想定外の問題がこれまで指摘されている現代社会にあって、必要なことは、過去の人類の知的な蓄積を学ぶことで、自己の確かな推理力・判断力を養うことである。それが学びの意義であり、それをどのように獲得し、我がものとするかは、各受講者にゆだねる。

準備学習(予習)

なお、講義に際しては、毎回レジメを配布するほか、具体的な時事問題にも触れながら、各トピックスを扱っていく。レジメに目を通した上で参加し、終了後に配布された資料と併せて再読すること。

準備学習(復習)

前回の議論を、そのつど確認してそのつどの講義に臨んで欲しい。

授業計画

1. 科学の危機：イントロダクション
2. 科学の危機：概要
3. 主観 / 客観
4. 20世紀初頭の諸科学の危機とパラダイム転換
5. 自然科学における転換
6. 人文科学における転換
7. 社会科学における転換
8. 現代思想の境位
9. 小括
10. 古典的科学観
11. 近代の科学観と社会科学の成立
12. マルクスの科学観
13. ヴェーバーの科学観
14. 社会科学における客観性
15. 客観性問題：存在と当為
16. 規範科学と事実科学
17. 文献解題 1
18. 文献解題
19. 小括
20. 脱構築
21. コスモスと複雑性
22. 部分と全体
23. 客観性と客観化可能性
24. 規範と構造
25. 小括
26. 自己言及性
27. 脱 - パラドクス化
28. 自己塑性的社会システム
29. 総括 1
30. 総括 2

教科書

土方 透 『法という現象』(ミネルヴァ書房)

評価方法

(1)出席:30% (2)試験:40% (3)レポート:30%
議論が毎回積み上げられていくので、出席をすることがすべての評価の前提となる。

倫理学概論

担当者：谷口 隆一郎

開講期：春学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週1回 単位数：2単位

講義概要

1.内容

倫理学を知っておくとどんなときに役立つのだろうか？生きていればだれでも一度や二度は人生上の大小の壁にぶち当たるはずだ。そんなとき倫理学が役に立つ。どうにもこうにもならなくなった状況、そのような壁の前にたたずむしかないような状況から脱出するには、自分の考え方を換え、状況を違う角度から捉えなおすことが必要だ。倫理学の考え方を身に着ければ、それができるようになる。そのためには、まず自分をしっかり見つめることができなければいけない。自己を見つめるということは、自己の内面に引きこもることではない。自分の心の扉を開くということだ。わたしたちがお互いなんとかうまくやっていけるのは、行動を規制するルールや倫理道徳が存在するからだ。しかし現代社会には法や常識で割り切れない倫理道徳上の難題（アポリア）が多く存在する。それらのアポリアからいくつかを選んで、それらについてじっくり考えてみる。そのことを通して、君が目の前のアポリアに直面し、他者が納得いくように、君の決断と行為について君なりに説明できる力を伸ばそう、これがこの講義の最大にして最終目標だ。

2.学びの意義と目標

とにもかくにも考える力を伸ばすことに力点を置いた授業をめざす。この科目は、社会科の教職科目でもある。公共哲学の基礎となる科目でもある。

準備学習(予習)

テキストの各章を読んで予習する。授業内レポート（BRC：授業内で書き上げる簡単な論述400字程度．BRCについては、オリエンテーションで説明する）の作成を通して予習する。オリエンテーションで、BRCについての別紙シラバスを配布する。

準備学習(復習)

BRCを再読する。授業内予習時間に書き残した未完成のBRCを授業後に完成させる。それにより、授業後の理解を深める。また、作成者は配布したBRCへの質疑応答を行う。

授業計画

1. オリエンテーション/イントロダクション
2. 幸福に 真 の幸福というものはあるのか？：プラトンとアリストテレス
3. そもそも人はみな自分の幸福を求めているか？
4. 正義規範はどのようにしてできたか？：社会契約説
5. 実際、社会契約は可能なのか？
6. 人はどこまで自由（利己的）でいられるか？：ルソーとカント
7. 利己主義はいつ如何なる場合でも実戦可能か？
8. 社会正義は功利主義でどこまで説明できるか？：ベンサムとミル
9. 功利主義から利己主義へ？
10. ニーチェとキリスト教道徳：「ニーチェの、ニーチェのための、ニーチェによるキリスト教道徳批判」の批判
11. メタ倫理学と正義論：現代倫理学の最新理論への招待
12. これらの議論のいったいどこがまずいのか？
13. 「道徳的であるべき」とはどういうことか？
14. 「語りえぬことについては黙ってやらざるをえない」のか？
15. まとめと結論

教科書

永井 均 『倫理とは何かー猫のインジヒトの挑戦』(筑摩書房)

評価方法

(1)BRC:50%:BRCについてはオリエンテーションで説明する
(2)期末試験:40%:論述試験（問題は予告する）
(3)授業貢献度:10%:どのように応答・議論したか
受講者が少数である場合は、ゼミ形式で授業を行うことがありうる。

労使関係論

担当者：金子 良事

開講期：秋学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週2回 単位数：4単位

講義概要

1.内容

本講義では「労使関係」を法学、経済学、社会学等の先行研究を概観しながら、学んでいきます。特に、労働組合について学ぶことが出来ます。労働組合への関心は20世紀後半、下降してきましたが、景気停滞等の影響でユニオンが活躍する中で、少し世間の関心を集めてきました。これから景気が良くなると、こういう問題は忘れ去られていきます。しかし、労使関係は君たちが生きていく上で、決して関係ないものではありません。個人の労働と労働組合の関係は？なぜ、労働組合は政治に関与するのか？などを考えていきましょう。

2.学びの意義と目標

「労働」はどうしても実際に働くようになってみないと分からないことが沢山あると思います。今、すべてを理解することは出来ないかもしれませんが、講義は社会に出て働く君たちの将来と関係があります。内容そのものよりも、どういう領域があって、どういう勉強方法があるかを覚え、将来、必要になったら何度でも勉強し直してください。

準備学習(予習)

予習は求めません。自分の求めるだけやってください。勉強方法の相談があれば、講義の後で質問したり、メールなどを利用してください。

準備学習(復習)

復習は求めません。予習と同じ理由です。

授業計画

1. イントロダクション
2. 個別労使関係と集団的労使関係
3. 労働三法と労働契約法(1)
4. 労働三法と労働契約法(2)
5. 労働争議
6. 団体交渉と労使協議
7. 労働協約(1)
8. 労働協約(2)
9. 日本的労使関係(1)
10. 日本的労使関係(2)
11. 女性と労働組合(1)
12. 女性と労働組合(2)
13. 非正規労働(1)
14. 非正規労働(2)
15. 労働組合と政府(1)
16. 労働組合と政府(2)
17. 労働組合と政府(3)
18. 国際労働運動
19. 労働組合の歴史(1)
20. 労働組合の歴史(2)
21. 労働組合の歴史(3)
22. 労働組合の歴史(4)
23. 労働経済白書を読む(1)
24. 労働経済白書を読む(2)
25. まとめと復習
26. まとめと復習
27. 問題演習
28. 問題演習
29. 予備
30. 試験とその解説

教科書

プリントを配布する

評価方法

(1)テスト:100%
期末にテストを一回やります。ただし、その前の週に必ず問題演習をやります。

Japanese view of Nature & Landscape Architect

担当者：村上 公久

開講期：春学期 必修・選択：選択科目 授業回数：週1回 単位数：2単位

講義概要

1.内容

Course Description/ Objectives

Gardens are a reflection of people's view of nature and view of life. When we appreciate gardens, we may come close to the view of nature or the sense of values behind the gardens layout derived from those values.

Furthermore, we may learn religious perspective from certain types of gardens as in the case of the asymmetrical rock gardens of Zen Buddhism in Japan, which are quite different from the symmetrical flower gardens of the West.

2.学びの意義と目標

Gardens well represent the relationship between man and nature. We may learn a variety of views of nature among the racial, ethnic, religious groups from the study of the gardens of the world. Then we may discover a new perspective for the comparative study of those groups through garden study. And we may approach to the better and more profound understanding of Japan through the study of her unique gardens.

授業計画

1. Nature of the Japanese Archipelago
2. The Japanese View of Nature
3. Landscape Architecture
4. History of Gardens
5. Gardens in the world
6. Gardens in the world -2
7. Garden Layout as a Representation of a Natural View
8. Garden Layout as a Representation of a Natural View -2
9. Garden Layout as a Semantic Expression of a Religious View
10. Garden Layout as a Semantic Expression of a Religious View 2
11. Excursion : visiting gardens in Kyoto
12. Excursion : visiting gardens in Kyoto -2
13. Excursion : visiting gardens in Kyoto -3
14. Landscape Gardening in Japan
15. Future of the Japanese Garden

準備学習(予習)

Visiting Japanese Gardens before taking this course is recommended. A list of typical Japanese Gardens in the metropolitan area and its vicinity is provided at the instructor's office Rm. #8605 (6th.floor, Bld.8).

教科書

プリントを配布する

No textbook: reading lists, handouts, and visual aids are provided throughout the course

準備学習(復習)

reading assignments, including reviewing audio-visual materials on Japanese gardens

評価方法

(1)class contribution through discussion:40% (2)reading assignments, performance, term papers:30% (3)end-of semester final closed-book exam:30%

Graded mainly by class contribution through discussion, and then by reading assignments, performance, term papers (critical article